埼玉県立史跡の博物館紀要
第4号

Contents

埼玉丸墓山古墳と大里甲山古墳
—武蔵国造家内紛と大型円墳—　中村倉司

サキタマ王権論へのプレリュード
—埼玉稲荷山古墳と高崎八幡観音塚古墳の関係性をめぐって—
利根川章彦

埼玉古墳群周辺の範囲確認調査
西口正純・佐藤康二

奥の山古墳の地中レーダー探査実験について
佐藤源之・渡邉　学・井上尚明

史跡整備と考古学 I
—埼玉古墳群の整備が目指すもの—　井上尚明

財貨としての「儀礼的交換用石斧」
—ニューギニア島ダニ族の Je Stones について—　栗島義明

出土板碑からみた製作工程の復元
加藤光男

埼玉県内における宝篋印塔・五輪塔の特徴と分布域
栗岡眞理子

平成二十一年度企画展
「秩父平氏　畠山重忠とその時代」の試みについて
若松良一

コラム『さきたま思い出写真館』①・②・③
堀内紀明

はじめに

「さきたま」・「嵐山」の二つの「史跡の博物館」は、より質の高いサービスと効率的な運営を目指した再編整備によってスタートしてから、４年の際月が過ぎました。

「さきたま」は埼玉古墳群、「嵐山」は菅谷館跡を擁する埼玉を代表する国指定史跡を背景にして、過去の実績も踏まえながら、新たな博物館づくりをめざして様々な事業を展開しております。

本年度も「さきたま」においては企画展示や最新出土品展「地中からのメッセージ」等の展示事業、埼玉古墳群の保存整備、さきたま体験工房の運営や県民に対する体験学習事業・さきたま講座等々、「嵐山」においては企画展「坂東平氏　畠山重忠とその時代」、特別講演会「畠山重忠一代記―芸能と講演―」・シンポジウム・歴史講座等の事業を実施し、県民の皆様の御要望や御期待に添うよう積極的に活動してまいりました。また、県内の遺跡・史跡を訪ねる「史跡探訪」は、両館の共同事業として実施しております。これらの運営には、多くのボランティアの方々の御協力をいただいております。

本誌は、職員が日ごろの調査研究活動を踏まえ、自己研鑽を努めた成果を発表したものです。本書が各地の博物館・図書館等で広く活用され、皆様が史跡や考古・歴史資料に関する理解を深めていただく一助となれば幸いです。

最後になりましたが、調査や執筆にあたり御協力いただいた方々に対し深く感謝を申し上げると共に、今後ともより一層の御支援・御鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

平成22年３月

埼玉県立史跡の博物館長

藤　野　龍　宏

埼玉県立史跡の博物館紀要
第　4　号

目　　次

埼玉丸墓山古墳と大里甲山古墳
—武蔵国造家内紛と大型円墳—……中村倉司　(1)

コラム「さきたま思い出写真館」①……堀内紀明　(18)

サキタマ王権論へのプレリュード
—埼玉稲荷山古墳と高崎市八幡観音塚古墳の関係性をめぐって—……利根川章彦　(19)

コラム「さきたま思い出写真館」②……堀内紀明　(32)

埼玉古墳群周辺の範囲確認調査……西口正純・佐藤康二　(33)

奥の山古墳の地中レーダー探査実験について　……佐藤源之・渡邉　学・井上尚明　(41)

コラム「さきたま思い出写真館」③……堀内紀明　(50)

史跡整備と考古学Ⅰ
—埼玉古墳群の整備が目指すもの—……井上尚明　(51)

財貨としての「儀礼的交換用石斧」
—ニューギニア島ダニ族の Je Stones について—……栗島義明　(61)

出土板碑からみた製作工程の復元……加藤光男　(85)

埼玉県内おける宝篋印塔・五輪塔の特徴と分布域　……栗岡眞理子　(99)

平成二十一年度企画展
「秩父平氏　畠山重忠とその時代」の試みについて　……若松良一　(126)

埼玉丸墓山古墳と大里甲山古墳

── 武蔵国造家内紛と大型円墳 ──

中村倉司

はじめに

534年、武蔵国造職を巡って笠原直家で内紛が勃発した。小杵は上毛野君小熊、使主は畿内大王安閑天皇に応援を要請した。その結果、小杵は殺害され、使主は勝者となり国造職を得た。

埼玉古墳群は、武蔵国造家の墓と言われているが、事実だとすれば使主の墓はどの古墳に比定することができるであろうか。時期的に整合するのは、日本最大の円墳である丸墓山古墳が相当する。一方小杵の墓は、何処に求めたらよいのであろうか。丸墓山古墳群から西へ約10㎞、荒川の対岸に丸墓山古墳にも見劣りのしない大円墳の甲山古墳がある。近接する二つの大円墳は、何を語るのであろうか。

1　丸墓山古墳と甲山古墳

(1) 丸墓山古墳

行田市埼玉に所在する埼玉古墳群内の一古墳である。当古墳群は、5世紀後半から7世紀中頃まで継続し、大型前方後円墳8基・大型円墳2基・大型方墳1基などで構成されている。丸墓山古墳は、日本最大の規模を誇る円墳である。

○形と規模

径105m・高さ18.2mを計る。墳高は、全長200m級の大型前方後円墳に匹敵し、東日本では最も高い墳丘を有する古墳である。「古代の中国では、身分の差を造墓にあらわすのは古墳の平面的な大きさ（たとえば墳丘の長さや径）ではなく、“墳高”が重視されていた」（森1990）という。我が国でも『筑後風土記』には、「有筑紫君磐井之墓墳　高七丈　周六十丈」と高さを先に記している。

なお、前方後円墳や帆立貝式古墳とも推定された時期も存在したが、現在では円墳であることが確認されている。

○時期[1]（第1表）

丸墓山古墳は、前期型の前方後円墳と考えられていたために埼玉古墳群最古と捉えられていた（甘粕1970）。その後、円墳と判明した丸墓山古墳は、近在の円墳八幡山古墳との関連から一転最新の時期が与えられた（増田1982）。次いで杉崎茂樹は、埴輪の検討から稲荷山古墳→丸墓山古墳→二子山古墳の編年を導き出した（杉崎1988）。現在は稲荷山古墳→二子山古墳→丸墓山古墳の順序が与えられている。この根拠は、榛名山二ツ岳を出現させた噴火による火山灰（FA）の出土状況による。つまり、FAが稲荷山古墳と二子山古墳では周壕内、丸墓山古墳では墳丘下から確認されたことによる（田中1994）。稲荷山古墳では、周壕覆土の褐色土層中にFAと思われる「灰白色の粘土層をはさむ」とある。このFAが褐色土層のどのような位置に堆積したいたのかは不明である。二子山古墳では、FAと思われる層がほぼ壕底に堆積している[2]。但し、二子山古墳と丸墓山古墳出土埴輪の時期については、検討を要する資料も存在するが両者の前後関係は概ね容認できる。なお、丸墓山古墳の「FAは旧表土の最上層にはなく、降下後ある一定の時間をおいて築造されたことが予想され、二子山古

	甘粕	金井塚	増田	斉藤	石野	増田	杉崎	増田	田中	甘粕	坂本	岡本	増田	太田	城倉
	1970	1979	1982	1984	1985	1987	1988	1991	1994	1995	1996	1997	1999	2007	2009
5c後	**丸墓山**	**丸墓山**	稲荷山	稲荷山	稲荷山・**丸墓山**	稲荷山	稲荷山	稲荷山	稲荷山	稲荷山	稲荷山	稲荷山	稲荷山	稲荷山	稲荷山
6c前	稲荷山	稲荷山	二子山・愛宕山	梅塚	二子山	二子山・愛宕山	**丸墓山**	**丸墓山**	二子山	**丸墓山**	二子山	二子山	二子山・**丸墓山**・稲荷山・礫槨	二子山	二子山
	二子山	二子山		二子山・愛宕山	鉄砲山・奥の山		二子山	二子山・愛宕山	**丸墓山**	二子山	**丸墓山**・愛宕山	**丸墓山**	鉄砲山・愛宕山	**丸墓山**	瓦塚・天祥正寺裏・奥の山
6c後	鉄砲山	鉄砲山	瓦塚	鉄砲山・瓦塚・中の山	瓦塚・中の山	鉄砲山・瓦塚		鉄砲山・奥の山		鉄砲山	瓦塚	愛宕山・瓦塚・奥の山	瓦塚	瓦塚	鉄砲山・奥の山
		奥の山	鉄砲山	**丸墓山**・奥の山		奥の山		瓦塚			奥の山	鉄砲山	将軍山	将軍山	将軍山・愛宕山
	将軍山	瓦塚	奥の山	将軍山	将軍山	将軍山		将軍山		将軍山	鉄砲山	将軍山	奥の山	愛宕山	
								中の山			中の山	中の山	中の山	鉄砲山	中の山
7c前	(真観寺)	中の山	(**丸墓山**)								将軍山		浅間塚	中の山	
			将軍山								浅間塚		戸場口山	浅間塚	
	(若王子)	将軍山									戸場口山			戸場口山	

※各古墳の年代は大凡の目安であり、筆者が勘案したものもある。

第１表　埼玉古墳群における各古墳の想定時期の推移

墳との時期差は比較的大きなものと考えられる」(田中1994)という。FA の降下時期は、520年～525年頃とも言われている。

○被葬者

杉山晋作は、稲荷山古墳に続く二子山古墳と丸墓山古墳をそれぞれ使主と小杵に関わる墓と考えた。小杵は、国造争乱で敗れたために前方後円墳を築造することが適わなかったとした(杉山1992)。坂本和俊も同様の見解を示している（坂本2001)。

(2) 甲山古墳

熊谷市冑塚に所在する古墳である。本古墳が所在する旧大里村内には、６世紀前半の前方後円墳である楓山古墳・東山古墳や同後半のとうかん山古墳・伊勢塚古墳がある。

○形と規模

本古墳は、三段築成の円墳で径90m、高さ11.5mを計る。県内では、丸墓山古墳に次ぐ規模を有する。なお墳形は、八幡神社築造によって造成されたためか帆立貝式古墳にも見えるが、円墳であることは間違いないであろう。

○時期

若松良一は６世紀中葉（若松1987)、橋本博文は６世紀第３四半期（橋本1987）と捉えている。

○被葬者

『大日本國誌　武蔵國』(内務省地理局編）に「无邪志国造兄多毛比命ノ墓」と見える。しかし、それ以前に編まれた『武蔵志』、『武蔵志稿』(3) には、被葬者についての記載がない。兄多毛比命とは、『国造本紀』に无邪志国造の初祖として紹介された人物である。

2　武蔵国造の争乱の検討

「武蔵国造笠原直使主與同族小杵、相争国造、使主・小杵、皆名也。経年難決也。小杵性阻有逆。心高無順。密就求援於上毛野君小熊。而謀殺使主。使主覚之走出。詣京言状。朝廷臨断、以使主

為国造。而誅小杵。国造使主、悚喜交懐、不能黙己。謹為国家、奉置横渟・橘花・多氷・倉樔、四処屯倉、是年也、太歳甲寅。」『日本書紀』巻一八、安閑天皇元年（534）の条。

①「武蔵国造笠原直使主與同族小杵、相争国造使主・小杵、皆名也。」

この争乱を経て使主は国造に就任するのであるが、それを知る後世の編者が使主を国造と記したとされる。武蔵国造は笠原直にかかるもので、これは既に笠原直が国造家としての地位を世襲していることを表現しているものと見たい。

「同族」ということから、これは埼玉古墳群出現に係わる争乱（埼玉古墳群と他集団）ではなく、同古墳群の展開中の出来事と捉えるのが適当である。

②「経年難決也」

両者の争いは、話し合いでも武力でも解決しなかったのだろう。そこで、小杵は次なる行動、つまり上毛野君への応援を要請したのである。それまでの経過が「経年」を要したと言うことになる。雨宮龍太郎は、「経年」を父祖以来の世代を越えた長期間と捉える（雨宮2006）。しかし「代々」である場合、銘文鉄剣では「世々」と表現されていることから、雨宮説[4]は当たらないだろう。両者のいがみ合いの期間が単年ではなかったことを記しているにすぎない。

③「小杵性阻有逆。心高無順」

小杵は、反逆者として歴史に名を残さなければならなかった。筑紫君磐井も「豪強暴虐」との評価に甘んじている。しかし、それは為政者側からの評価である。

④「密就求援於上毛野君小熊。而謀殺使主」

小杵が上毛野に援軍を求めたということは、小熊の応援を得て使主を誅すれば小杵は国造になれたと言うことを意味する。国造職は、畿内大王の任命を受けるのが形式であろうが、「当国の幹了しき者を取りて、其の国郡の首長を任けよ」（『日本書紀』成務天皇四年二月朔条）とあるように、在地豪族としての強大な権力があれば任命せざるを得ないような状態であったのである。

使主は、杖刀人首を輩出した乎獲居臣の系譜に属する本宗家だったのであろう。しかし、大王家とのパイプを持たない小杵は、上毛野に援を求めざるを得なかったのである。

なお小熊は、「上毛野君小熊」として記されていることから、「国造」であったかは不明である。

⑤「使主覚之走出。詣京言状。朝廷臨断、以使主為国造。」

「経年難決」のいざこざは、小杵の勝利かと思われた。使主は、畿内に敗走したのである。本貫地を離れなければならない逼迫した状況に追い込まれた。しかし、朝廷に謁見を果たした使主は、この形勢を逆転した。使主はこの時国造になったのであるが、笠原氏は先々代の稲荷山古墳主から既に国造に認証されていたと考えられる。

⑥「而誅小杵」

小杵は殺害された。誰が、殺害したのであろうか。「磐井の乱」と同様に朝廷軍が東国まで派兵されたのであろうか。しかし、その記載がないところを見ると派兵は為されなかったと見るべきである。小杵を全面支援することに危機を感じた小熊が朝廷側に寝返ったことも考えられる。小熊も当然、磐井の乱の結末については知っていたであろう。朝廷に反旗を翻したにもかかわらず、懲罰が下されないのは不思議である。しかし翌年には、緑野屯倉を献上することになる。これが、史実だとすれば大和王権と上毛野政権との力関係は歴然としたものであったと推察される。

なお、筑紫君磐井の独立戦争は、朝廷側が勝利するまで約１年半を要した。しかし、先の状況を

考えると武蔵国造の争乱は、比較的短期間で決着を見たのではないだろうか。

⑦「国造使主、悚喜交懐、不能黙己。謹為国家、奉置横渟・橘花・多氷・倉樔、四処屯倉」

屯倉の設置は、国策であり「以使主為国造」の条件であった。南武蔵の橘花・多氷・倉樔の三処は、武蔵国造家にとっては遠隔地である。それに対し横渟屯倉は、武蔵国造家の本貫地とは元荒川を挟んだ至近距離に位置する。

屯倉を敗者小杵の本貫地とすると、南武蔵か横見郡がその候補地になるが、同族であることを考えると後者に比定することが妥当と考えられる。

⑧「是年也、太歳甲寅」

「是年」とは、使主の朝廷謁見、国造職就任、小杵誅殺、屯倉献上の年と言うことになる。しかし、これら一連の事象が滞りなく行われたという保証はない。確定的なのは、屯倉献上がこの年に行われたということである。争乱の始まりは「経年難決也」とあることから、継体期に遡ることになる。

3　武蔵国造争乱の疑義

この争乱を全くの虚構であると考える研究者は少ない。しかし、原島礼二は、「争乱物語」（原島1987）と表現し、利根川章彦は「考古学的に見る限り、『武蔵国造の乱』は虚構である」と捉える（利根川2003）。武蔵国造争乱の7年前に勃発した「磐井の乱」と磐井の墓について、その真偽を疑う研究者は少ない。

(1) 時　期

本稿では、この争乱記事の時期や内容を史実と考えている。しかしその時期については、疑義が提出されている。若松良一は、より新しい時期の争乱と考えた。埼玉古墳群は、6世紀末頃から近在の古墳が本古墳の規模を凌駕する。つまり、本系の将軍山古墳に対して、近在の真名板高山古墳・栢山天王山塚古墳などが出現するのである。これは「武蔵国造と拮抗しうる勢力の登場として評価しうる」（若松1987）とした。そして屯倉設置を欽明・推古期とする原島説を採用して、この事象と合致するとしている。滝沢規朗も同様な見解である（滝沢1992）。

一方、原島礼二や雨宮龍太郎は、より古い時期の争乱と考えた。原島は上野東部と南武蔵で5世紀後半に大型古墳が衰退するが、これを争乱の結果と考えた。つまり「事実は五世紀の後半におきた事件を、安閑期の物語のひとつの素材にした」（原島1987）とした。また雨宮は、比企丘陵北部を小杵、同南部を使主の領域とし、争乱に勝利して埼玉に居と墳墓を移したとした（雨宮2006）。つまりこの争乱を5世紀後半の埼玉古墳群出現の契機と捉えた。

(2) 内　容

津田左右吉が「氏族制度時代に於いてかういふ紛争を朝廷で裁断せられてとは信じ難い」（津田1955）と指摘して以来、文献史学家を中心にしてこの事件の信憑性に疑義を示す研究者は多い。その理由は、武蔵国・国造制・屯倉が該期には成立ないし設置されていないというのが論旨である（原島1979）。それに対し考古学関係者は、一定の史実として理解している傾向にある。

○武蔵国（无邪志国）の成立

渡辺貞幸は、該期に「武蔵国」が成立していたのかが証明できない（渡辺1978）という。飯塚卓二は、5世紀代において北武蔵は毛野地域政権の政治圏に属する（飯塚1988）とした[5]。しかし国造本紀には、成務天皇期に「无邪志国造・胸刺国造・知知夫国造」が記載されている。安閑期（第28

代）よりも遙かに遡る第13代期に「ムサシ」が記載であることは意識して良い。なお、胸刺国造は无邪志国造の註を誤記したものである（太田1963）という見解を容認できるとすれば、无邪志国は、武蔵国の秩父郡を除く領域を无邪志国造が治めた[6]ということになる。

また尾崎喜左雄によれば、関東地方は第１段階として「けぬ・むさ・ひた・ふさ」の４国に分かれていたという。第２段階になると各国は、上下に分国された。例えば「けぬ」は「かみつけぬ・しもつけぬ」、「むさ」は「むさかみ・むさしも」と呼ばれるようになった。第３段階の「国造の国」期には、「かみつけぬ」は上毛野、「しもつけぬ」は下毛野[7]と記された。また、「むさかみ」は「さがみ」と呼ばれ師長・相武、更に「むさしも」は「むさし」と呼ばれ无邪志・知々夫に分国された。第４段階の「国司の国」期には、上野・下野・武蔵・相模・常陸・上総・下総などの国が成立する（尾崎1970）とした。注意したいのは第２段階、「むさかみ・むさしも」の「かみ」と「しも」である。この「上下の分轄は近畿地方の文化や勢力の影響に定められた」（尾崎1972）ものである。つまり、自然発生的な「クニ」ではなく、ヤマト政権の行政区分としての「国」の存在を窺わせる。つまり、古墳時代の比較的早い段階に「无邪志国」は成立していたと見たい。

該期における武蔵国の成立に疑問を呈する見解があることは承知している。勿論「国」の概念規定にもよるが、それでは魏志倭人伝に記された邪馬台国や北九州の国々の存在も認めないのであろうか。これについては、魏の役人が記した表現であることは言うまでもないことではある。

○国造制の成立

関東地方では、６世紀代に大型前方後円墳が築造される。この理由について白石太一郎は「後期大型前方後円墳の被葬者は、領域支配者としての地域首長であるとともに、畿内王権がこの地域に数多く設置した名代・子代などの部や舎人の現地管掌者としての性格を合わせもつ」（白石1992）と捉えた。そして熊谷公男は、「近年では、国造制の成立は、六世紀前半と見るのが通説になりつつある」とし、５世紀代の江田船山古墳の无利弖や稲荷山古墳の乎獲居に官名が記されていないのは、該期には未だ「地方官自体が、まだ設けられていなかった」（熊谷2001）とした。それでも「典曹人」・「杖刀人」の存在は、「伴造制度につながる豪族による世襲的な職務の分担制度（人制）の存在を指摘できる」（仁藤2004）としている。

更に、魏志倭人伝を想起していただきたい。卑弥呼は、伊都国に一大率を派遣し、北九州沿岸地域の諸国を検察させている。諸国には主官と副官が存在している。主官は、国造に通じる国の統治者である。名称の統一性に欠けるのは、諸国王を採用しているため（宮本1989）であろう。しかし、副官：卑奴母離[8]は、邪馬台国が派遣した辺境防備隊であり、名称も統一されている。確かに、主官は邪馬台国から派遣された行政官ではないかも知れないが、これは旧国造も同じである。また副官は、防備隊の兵員を動員できた役人として、大きな力を有していたことが想像される。

つまり、武蔵国造争乱の300年前の邪馬台国の統治形態を勘案すれば、武蔵国の成立や国造制に類する統治方法は確立していたと考えられる。

○屯倉の設置

原島礼二は、推古朝のこととしている。金井塚良一は、横渟屯倉を管掌したのは壬生吉志であり、それは胴張りのある横穴式石室をもつ古墳の存在に顕現していると考えた（金井塚1978）。つまり原島説と同じ600年前後の事であり、国造争乱とは無縁と考えた。屯倉の管掌に壬生氏が関わっていたとしても何故該期に横渟屯倉が設定されたのか、他の三処の屯倉も含めてその理由が明らかでない。

近年、屯倉の設置時期は、早まって捉えられるようになっている。舘野和己は、磐井の乱後に設置された糟屋屯倉が最古（６世紀前半）の例と捉える（舘野2004）。

武蔵国・国造制・屯倉の成立について検討したが、該期にこれらの制度が成立していたか否かではなく、実態として存在していたか否かである。舘野和己によれば、「国造制や部民制は五世紀末ないし六世紀以降に開始されたものであった。したがってそれらに伴うミヤケの設置も、その頃から本格化した」とし、さらに「五世紀代の大型の倉庫群が、ミヤケの先駆的形態であった可能性ある」（舘野2004）と指摘している。

4　稲荷山古墳と杖刀人首

⑴ 稲荷山古墳の故地

稲荷山古墳は、北武蔵の地に突如出現すると捉えられている。その出自を明らかにすることは、埼玉古墳群の性格を語る必須の要件である[9]。

稲荷山古墳の故地について増田逸郎は「長方形周溝[10]・南北主軸・埴輪・比企型坏の分布などの諸事象を加味すれば、その本貫地を比企に求めることができる」とした。しかし前三者は、比企の特徴とは言い切れない。更に雷電山古墳を乎獲居の祖父半弖比の墓に比定した（増田1999）。更に稲荷山古墳の追葬者の埋葬主体は、礫槨や粘土槨などの在地性の施設であることから、少なくとも畿内豪族ではないだろうとした。また雨宮龍太郎は、比企丘陵北部を小杵、同南部を使主の領域とし、争乱に勝利して埼玉の地に居を移したとした。両者は、何れも稲荷山古墳の故地を比企地方に求めた。

金井塚良一も同様に比企説である。氏は、野本将軍塚古墳を５世紀第３四半期とし、埼玉稲荷山古墳の直前に位置づけた。本古墳は①後円部に比して前方部が低い。②埴輪が存在しない。③埋葬施設が粘土槨か礫槨の可能性がある④台地の縁辺に立地しているなどの特徴を有している。主に①・②は４世紀代、③・④は４・５世紀代の特徴である。つまり、本古墳は４世紀代の可能性が高い。

金井塚氏の主張を紹介しておこう。まず①については、土取りの結果あるとした。本来は前方部の高さは４m程高くなり、墳長もより長くなるという。しかし前方部の表土を剝ぐように土取りするとは考えられない。また、地形的な制約から前方部先端も土取りされたとも考えられない。つまり現存墳形は、大幅な改変を受けていないと見たい。甘粕健も同様な見解である（甘粕1976）。②について氏は最も腐心した。埴輪が存在しない理由については、埴輪を施設するのが慣習になっている時期にも係わらず、太田鶴山古墳のように埴輪を持たない大型前方後円墳が存在することから、本古墳の５世紀代説を否定する根拠にはならないとした（金井塚2008）。しかし、太田鶴山古墳は例外中の例外であり野本将軍塚古墳も同様であるという保証は全くない。③については、ボーリング調査によって得られた所見であるので恐らく事実であろうが、時期決定の根拠にはならない。④については、５世紀代の特徴とも言える。何故なら４世紀代の古墳は、低地を見下ろすような台地の先端に位置するからである。しかし総体的に見るならば、４世紀代と見るべきであり、稲荷山古墳の前史を飾る古墳とは成り得ないだろう。同古墳の故地を比企地方に求めるのは、無理があるかも知れない[11]。

それでは、稲荷山古墳の故地を何処に求めればよいのであろうか。注目したいのは、稲荷山古墳

を擁する埼玉古墳群周辺の荒川左岸地域である。同地域には、稲荷山古墳と同時期と考えられる熊谷市横塚山古墳・同鎧塚古墳・行田市とやま古墳・同大日塚古墳・同大稲荷1号墳・鴻巣市新屋敷60号墳がある。これらの古墳の中には、稲荷山古墳に先行する古墳が存在する可能性もある。また、埼玉古墳群の各古墳に継続的に採用された二重周壕を有する熊谷市女塚古墳（寺社下1983）の存在が注目される。更に県北部の大里郡は、児玉郡と同様に県内各地に先駆けて5世紀第3四半期に竈を導入した多くの集落が存在する地域でもある。これらの先進文化を取り入れた集落の生産性を背景にして稲荷山古墳は、出現したものと理解したい。

ところで、各地域に展開している大型古墳は、それぞれの地域で突然出現したかのように見える。その背景には、政治的要因が関わるのか、あるいは自然的発展に起因するのか、それを識別することは難しい。実際には、この両者が関って大型古墳は出現するのであろう。斎藤国夫は稲荷山古墳出現の背景について「埼玉周辺の在地勢力が、畿内政権と結びつくことにより、急速に強大化した」（斎藤1984）とし、在地勢力の台頭を一義的な要因だと想定している。本稿でも、斉藤説を支持したい。稲荷山古墳は、先述した埼玉古墳群周辺の同期の古墳主に共立されて出現したものと理解したい。

⑵ 杖刀人首と国造への道

鉄剣銘文によれば、乎獲居臣[12]（稲荷山古墳礫槨主と仮定）は、杖刀人首として大王を補佐したと記されている。そしてそれは乎獲居のみではなく、「世々」上番していたという。「世々」とは、実在と考えられる先代加差披余、ないしは先々代半弖比の代からであろうか。しかし上番の当初は、杖刀人の一人として出仕していたのであろう。増田逸郎は、条件付きながらも比企の雷電山古墳主を半弖比に比定している（増田1999）が、時期の整合性に問題がある。半弖比の墓を何処に求めるか不明であるが、この頃は未だ杖刀人であろう。しかし、先代の加差披余の墓を稲荷山古墳主とすることができれば、この時期に杖刀人は「首」となったものと理解したい。

稲荷山古墳出現の背景には、大和王権の毛野政権対策の一環と捉える考えがある。真偽はともかく、これに関連して稲荷山古墳主加差披余は国造に任命[13]された可能性がある。この時、彼の児乎獲居は杖刀人首に昇格したのではないだろうか。

杖刀人首にまで昇格した乎獲居は何故、自らの墳墓を築けなかったのか。それを説明することは難しいが、次の様に想定することはできないだろうか。埼玉古墳群では、大型墳とそれよりも規模の小さい中型墳が存在する。中型墳は、大型墳（盟主墳）を補佐する人物の墓と考えられる。関連する盟主墳と中形墳の組み合わせは諸説がある。その一説を挙げると、二子山古墳と瓦塚古墳、丸墓山古墳と奥の山古墳、鉄砲山古墳と愛宕山古墳、将軍山古墳と中の山古墳となる。つまり稲荷山古墳には、同時期の小円墳は存在するが、中型の前方後円墳は存在しないのである。稲荷山古墳主を補佐した乎獲居は、自らの古墳を築造しないで主墳に追葬されたのである。その後は、副官クラスも自らの古墳を築造するようになったのである。なお、上番者が盟主となったのか、補佐役であったのかは今後の検討課題であるが、後述するように八幡山古墳主との説もある物部兄麻呂は、舎人として上番した後に国造に任命されたようである。

⑶ 国造家の世襲

『国造本紀』によれば无邪志国造の祖は兄多毛比命であるが、彼が実在するのか本貫地は何処なのかは不明である。大型古墳の動態から見れば、南武蔵か比企が有力な候補地となろう。稲荷山古墳

主の国造就任の経緯は不明であるが、その後は埼玉古墳群の盟主墳が国造職を世襲したことが定説化している。

銘文鉄剣製作の約60年後の丸墓山古墳当時の国造は笠原直であった。稲荷山古墳当時に氏姓制度が成立しているとすれば、笠原直であった可能性が高い。とすると、乎獲居臣は、笠原直乎獲居ということになる。

笠原直家の初代武蔵国造は稲荷山古墳主であり、二代は二子山古墳主である。そして、三代目をめぐる時期には、稲荷山古墳主近親者も財力を蓄え勢力を有するようになった。こうして使主と小杵の争乱が勃発した。この時期、埼玉古墳群では盟主墳が継続して築造されている。つまり、この争乱に勝利した使主の墓は、本家を継承した人物であり、それは丸墓山古墳と言うことになる。その後、盟主墳である将軍山古墳主、鉄砲山古墳主が国造職を歴任した。しかし6世紀末には、傍系家の埼玉古墳群周辺の真名板高山古墳(栢山天王山塚古墳)、小見真観寺古墳、八幡山古墳の各古墳主などに国造職が継がれていったようである。

『聖徳太子伝暦』によれば、633年に物部連兄麻呂が国造に就任した。兄麻呂は聖徳太子の舎人となって功を上げ国造に任命されたようだ(森田1988)。兄麻呂の墓は、八幡山古墳の被葬者とする説がある。事実だとすれば、争乱後100年を経ても埼玉古墳群の家系は国造職を世襲していることが想像される。

なお、平安初期に足立郡に本貫地を移動した丈部直不破麻呂に至まで、武蔵国造家は出雲系氏族とうい意味で同族が世襲している。

5 使主と小杵の墓

(1) 使主の墓

二子山古墳を使主の墓に比定したのは、甘粕健（甘粕1970）と杉山晋作（1992）である。また、雨宮龍太郎は、「奥の山古墳・鉄砲山古墳・瓦塚古墳のいずれかになる」とした。しかし、それ以前の稲荷山古墳・二子山古墳・丸墓山古墳が巨大であることから、既に「无邪志」は統一されており、「経年」対立していたとは考えられないとした。さらに、使主の墓が縮小しているのは理解できないことから「書紀の紀年は信頼できない」とした。そこでこの争乱を5世紀後半のこととし、これに勝利した使主の墳墓を稲荷山古墳とした(雨宮2006)。また森田悌も稲荷山古墳を使主の墓としている。森田は、争乱記事が遡り稲荷山古墳の築造年代に近づく可能性があることから両者の関連を指摘した（森田2006)。

なお本稿では、武蔵国造の墓である埼玉古墳群で争乱記事と時期の一致することから丸墓山古墳を使主の墓と考える。

(2) 小杵の墓

それでは、小杵の墓は何処にあるのだろうか。丸墓山古墳を小杵の墓に比定したのは杉山晋作(杉山1992）と坂本和俊（坂本2001）である。一方、増田逸郎は「丸墓山古墳の被葬者を小杵とする考えは毛頭無い」（増田1991）と否定している。

また、古墳を特定しての比定ではないが、甘粕健は南武蔵(甘粕1958)、金井塚良一(金井塚1979)・雨宮龍太郎（雨宮2006）は比企地域、増田逸郎は児玉郡域（増田1991）に小杵の墓を求めている。

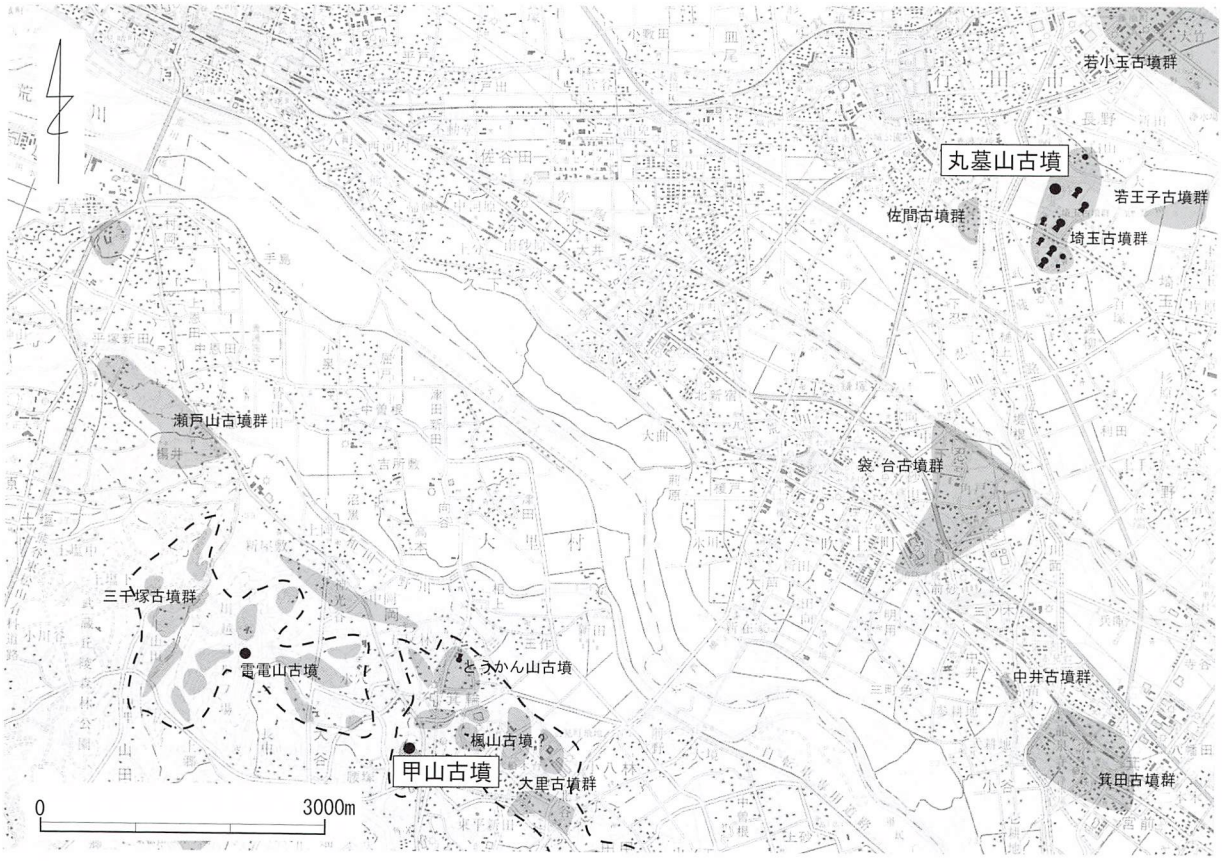
まず埼玉古墳群は、国造職を得た勝者使主一族の墓であることは前提したい。そして、敗者小杵

が国造職を争うまでに成長するには、使主の支配領域とは異なる地域で生産活動を一定の期間行う必要があったと考えられるからである。つまり、仮に使主の墓を丸墓山古墳に比定できるとすれば小杵の墓を埼玉古墳群内の古墳に求めることはできない。

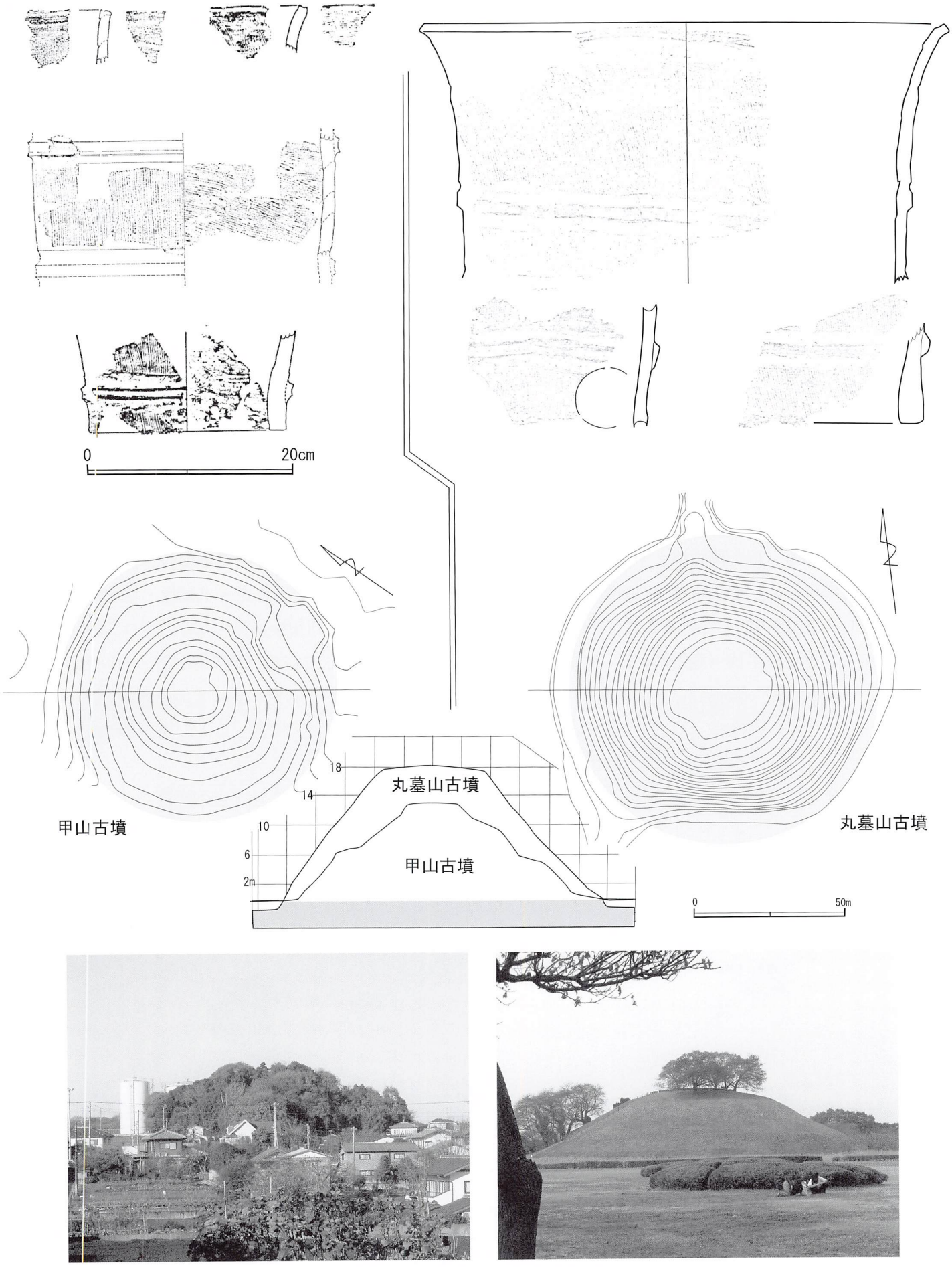
同族である小杵は、埼玉古墳群成立（稲荷山古墳）以降に分家した可能性がある。もちろんそれ以前の分家を否定するものではない。もし稲荷山古墳→二子山古墳→丸墓山古墳の系譜をそれぞれ親子関係にあるとすれば、小杵は稲荷山古墳主の二代後、二子山古墳主の次代の人物となる。丸墓山古墳主使主と同世代の小杵にとって、稲荷山古墳主は祖父、二子山古墳主は親か伯父ということになり、使主とは従兄弟か再従兄弟の関係になる。

次いで小杵は、本宗家からいつ分家したかを検討することにする。分家先は、同族であることから埼玉古墳群周辺（近在）とする。磐井の乱の結末と同様に誅殺された小杵本人やその一族が没落しないとすれば[14]、それに見合う盟主墳を有するのは、大里甲山古墳のみである。ここは「横渟屯倉」比定地にも近接している。よって丸墓山古墳の規模にも匹敵する甲山古墳を小杵の墓に比定することにする。小杵の死後もとうかん山古墳（前方後円墳74m）が築造されるなどしており、一族が没落することはなかった。

なお、小杵の分家を一代前（二子山古墳の段階）と考えると、甲山古墳に先行する古墳が存在する可能性がある。その候補は、当古墳と指呼の位置にあり、前方後円墳と思われる楓山古墳[15]と東山古墳である。但し両古墳とも今は消滅しており、その真偽を検証することはできない。前者は、『埼玉縣史』に「楓山古墳よりは銅鏡・石製鏡・勾玉・石小刀・鈴環・須恵壺・土製鈴・埴輪馬等を出し」（稲村1951）と紹介されている。塩野博は、出土遺物（鏡・石製模造品・環鈴）から5世紀末から6世紀前半代（塩野2004）、金井塚良一は6世紀前半に比定している（金井塚1979ｃ）。東山



第１図　埼玉丸墓山古墳と大里甲山古墳



第２図　甲山古墳と丸墓山古墳

古墳に付いては、全く不明である。

小杵がその経済基盤を充実した背景には、三千塚古墳群を造墓した集団の協力があったと考えたい。三千塚古墳群は5世紀前半の雷電山古墳を祖とするが、古墳群が展開するのは6世紀以降であり、その間の古墳は確認されていない。しかし、増田逸郎が想定するように雷電山古墳主を埼玉稲荷山古墳礫槨埋葬者乎獲居の祖父半弖比である（増田1999）かは別として同族であるとすると、小杵は祖先の地に戻って勢力を蓄えていったのかも知れない。

なお若松良一は、甲山古墳を「武蔵国造と覇権を争った小杵の墳墓に補することができるであろうか」と自問した。そして、筑紫君磐井の墓である岩戸山古墳に見るように「武蔵国造家と覇権を争った有力首長の墳墓は、前方後円墳の被葬者以外に考えられない」とし、甲山古墳小杵墳墓説を退けた。

本稿では①同族であることから埼玉古墳と至近距離にあること。②横渟屯倉と近接すること。③最大級の円墳の背景には尋常でない事情が有りそうなことなどから本古墳を小杵の墓と推定する。この小杵の反乱は、三千塚古墳群を中心とした比企勢力を後ろ盾にして国造職奪取を目的とした比企の失地回復を目途したものである。

このように争乱の敗者となった三千塚古墳群の集団は、屯倉の設置によって埼玉古墳群を牽制する役割を負うことになる。それと同時にこのような状態の中で甘粕健は矛盾することはなく「三千塚の集団は埼玉の大首長に従属し、その軍事力の基盤をなした集団」（甘粕1976）と捉えた。

6　丸墓山古墳と甲山古墳は、なぜ円墳か

前方後円墳は、盟主墳として認識されていた墳形である[16]。その他の墳形は、陪塚に見るようにその下位に位置づけられることは間違いないであろう。しかし、陪塚には前方後円墳も存在する。しかしこれは「盟主墳」ではない。陪塚は円墳であることが多いが、大王墓の場合は方墳が採用される確立が高い。

帆立貝式古墳出現の背景について、小野山節は『畿内王権』の規制と捉えた（小野山1970）。つまり、大王権力が強大な時には、地方豪族は前方後円墳築造を許可されず、他の墳形にせざるを得なかったとした[17]。甘粕健は、これを「有力な地域政権」とその下位との関係でも成立するとした。さらに「畿内およびその周辺の地域で、首長墓が前方後円墳から帆立貝式前方後円墳に変わるのは、その首長が王権に対し、大王陵の陪塚に埋葬された大王周辺の近従的小首長と同一視されるような緊密な従属関係を結ぶにいたったためであろう」（甘粕1976）とした。つまり、従属の証として帆立貝式古墳は築造されと考えた。円墳や方墳も同様な意図で築造されたのであろう。

なお、北九州や北陸などでは、円墳が盟主墳であることが多い。これは、これらの地域が大陸・半島に近いために、その地域の盟主墳を模したと捉えられている（森1990）。

(1) 丸墓山古墳

円墳である理由について吉川國男は、『日本書紀』雄略天皇十一年冬十月条の鳥養部の設置説話と関連づけて捉えた。つまり、武蔵国直丁らは「今天皇由一鳥之故而鯨人面」した事を「悪行之主」と非難したが、それが天皇の知ることとなった。そのために武蔵直丁はペナルティーを受け、丸墓山古墳は円墳とならざるを得なかったと指摘した（吉川1988）。

坂本和俊は、この時期最大の古墳である今城塚古墳の後円部径が100mであり、それより大きな「円

墳を築く行為は、畿内政権の最高首長墓級の前方後円墳造る意志表示であり、畿内政権に対する反乱行為として受取られたのであろう」とし、「丸墓山古墳の築造者は、埼玉政権における首長の座を畿内政権から剝奪され」た結果、円墳とせざるを得なかったとした（坂本1996）。小杵の墓ということである。

また系譜について増田逸郎は、「五世紀代の大円墳群を存在する児玉郡域と関連づけるのが妥当のように思える」（増田1991）とした。坂本和俊も同様に丸墓山古墳は「群馬県地域の技術協力を得て築いた」（坂本1996）と捉えていたが、その後「群馬県や児玉郡周辺では、丸墓山古墳の時期から横穴式石室が導入されており、その地域との関係が希薄であったことが伺われる」（坂本1998）と修正している。坂本の指摘とおり埼玉古墳群では、稲荷山古墳・二子山古墳という巨大前方後円墳築造後の円墳丸墓山古墳であり、その関連性を求めるには無理がある。

(2) 甲山古墳

若松良一は、甲山古墳が円墳である理由を「柏崎・古凍古墳群内に比企の大首長墓が円墳として造営されていた6世紀前葉から中葉の延長線上に有る者」の墓と捉え、更にそれは「武蔵国造による造墓規制下にあったと推定される」とした。そして巨大古墳を築造できたのは、古利根川の治水に成功を治めたためとした（若松1987）。

円墳に造り出しを設けた古墳を帆立貝式古墳という。造り出しは祭祀空間と考えられている。日本最大の帆立貝式古墳は、宮崎県男狭穂塚古墳であり、円丘径は132mを計る。そういう意味では、丸墓山古墳は、日本最大の円墳とは形容しがたいかも知れない。何れにしろ、本稿で取り上げた二古墳が造り出しを持たない円墳であるのは興味ある問題である。

ま と め

本稿の主旨は、単純である。武蔵国造争乱を史実と見たのである。そして、そこに登場する人物の墓を想定したのである。武蔵国造家の墓を埼玉古墳群に求めることができるのであれば、争乱に勝利した使主の墓は、本古墳群中に存在することになる。争乱記事と時期が近接するのは、丸墓山古墳である。そして、敗者小杵の墓は、献上した横渟屯倉に近接する巨大円墳の甲山古墳に比定したのである。ただ、それだけである。

しかし、解決しなければ成らない問題がある。それは、なぜ円墳なのかと言うことである。本来、使主も先祖と同様に前方後円墳に葬られるべき首長であったのであろう。それが適わなかったのは、この争乱が起因しているように思われてならない。ところで争乱時に、彼の墓はどのような状態であったのであろうか。寿稜であるとしても完成には至っていなかったのだろうか。あの磐井が前方後円墳主に成り得たのは、戦死以前に墳丘が完成していたのがその理由かも知れない。あるいは死後に墳丘を完成させたとすると、死後でも一族の意志が尊重される状況であったことになる。

使主と小杵は共に前方後円墳を目指して築造を開始していた。先ずは、円丘部からである。争乱時には墳丘築造どころではなかったが、終結後には築造は再開される。しかしこの時は既に磐井の時とは異なり朝廷の意志が及ぶようになっていたのであろうか。小杵は懲罰として墳形を円墳にしなければならなかったのであろう。そして、更に朝廷が気を遣ったのが上毛野君小熊である。朝廷は、小熊の立場に一定の配慮をして勝者使主の墓までも前方後円墳の築造を許さなかったのかも知れない。あるいは服従の証として自ら前方後円墳の採用を放棄したことも考えられる。

武蔵国造の争乱が発生した7年前、北九州に独立戦争（山尾1985）が勃発した。筑紫君「磐井の乱」である。磐井は、朝廷が半島に6万の兵を侵攻させようとしたのを阻止したのである。筑紫軍は火や豊の国の援軍を得て、朝廷軍との間に大規模な戦争を展開した。約1年4ヶ月に及ぶ戦闘の末、磐井は戦死する。全長130mを誇る前方後円墳岩戸山古墳の主の最後である。その息子葛子によって糟屋屯倉が献上され反乱は一応終結するが、その後も屯倉は献上され続けた。しかし磐井の墓は破壊されることもなく、嫡子も抹殺されることはなかった。磐井一族の墓は、その後も築造され続ける[18]。朝廷は、屯倉の獲得によって財政基盤の確保と支配の強化ができればそれで良かったのである。

ところで、上野君小熊は小杵が応援を求めてきた時、また朝廷は使主が謁見を求めてきた時、それぞれどのような心情であったのであろうか。小熊は、7年前の「磐井の乱」の結末を知っていたであろう。東国で絶大な権力を有していた小熊は、小杵と謀り上毛野・武蔵連合の政権を目途したのであろうか。それとも、磐井の運命に我が身を重ねたのだろうか。一方、吉備や筑紫の反乱に勝利した朝廷は、西日本を支配下に組み込み自信を有していたに違いない。使主の謁見は、東国支配を目論んでいた朝廷には渡りに船だったのであろう。

なお、墓制に直接的な政治関係を求めることはできないことを確認しておきたい。それでも古墳の墳形・規模・副葬品などは、多分に政治的関係が反映されているのも事実であろう。日本最大の古墳は、「大王」の墓であろう。各地域最大の古墳は、「国造クラス」の墓であろう。大山古墳と墳形が似ている古墳は、それとの関連が想定されよう。同範型鏡を出土する古墳は、互いに何らかの関係を有するのであろう。 都出比呂志は、墳形の違いを江戸時代の大名に擬して前方後円墳は譜代大名、円墳は外様大名のようなものと便宜的に説明している。しかし、墓は文化遺産であり、精神文化の産物であり、政治的な産物ではない。墳形も規模も畿内政権の絶対的な規制を受けているとは考えられない。基本的には、造墓者の主体的な意志が反映されているものと理解したい。墳形[19]は祭祀や死生観を同じとするものであり、規模は金持ちが豪邸、庶民が「ウサギ小屋」に住むのと同じようなものである。造墓者は、財力の許す範囲内で可能な限り大きな古墳を築造したのである。地方豪族が畿内王権よりも大きな古墳を築けなかったのは、財力が相対的に無かったからである。なおこの古墳は、某天皇陵と同型だからその影響を受けていると説明されることがある。その様なこともあるかも知れないが、その墳形はその時代の流行であり、政治的意味合いのみでそれが決められる訳ではない。

おわりに

埼玉古墳群には4大特徴がある。それは①特異な長方形周壕を二重に配した兆域の大きな盟主墳が数代に亘り近接して築造された古墳群、②稲荷山古墳出土の115文字を刻した国宝辛亥銘鉄剣、③将軍山古墳出土の馬鎧・旗差物などの遺物群、④日本最大の円墳：丸墓山古墳の存在であろう。そして更に付け加えるならば、武蔵国造争乱を記した『日本書紀』の117文字の記事がある。そして鉄剣銘文には実在の人物と考えられる乎獲居・加差披余・半弖比、『日本書紀』には使主・小杵が登場する。彼らは何れも古墳の築造が想定される人物である。私は、可能であるならば、彼らの墓を特定してあげたい。これが本稿執筆の動機である。

そして、もう一つの理由がある。当館に着任し、丸墓山古墳が日本最大の円墳であることを知っ

た。東国、この埼玉古墳群になぜこのような古墳が存在するのであろうか。日本最大の円墳は、国宝鉄剣にも匹敵するほど重要な事象である。鉄剣については百家争鳴であるが、丸墓山古墳については、積極的に取り上げられることが少ないように思われる。当館職員として、日本最大の円墳が存在する理由を説明する必要があった。そこで思い立ったのが武蔵国造争乱との関係である。

この思いを畏友利根川章彦氏に伝えた。しかし納得してもらうことはできなかった。氏はこの争乱が虚構であることを主張していた。私の思い込みは、益々強くなった。そして氏に数々の質問を浴びせ、数々の文献の紹介をお願いした。氏は、あらゆる情報を提供してくれた。本稿を成稿できたのは、氏のおかげである。また、沼野勉・堀内紀明の両氏にも資料の提供やご教示を受けた。併せてお礼申し上げる次第である。

《註》

(1) 古墳の時期判定は難しい。『筑紫国風土記』に「生平之時　預造此墓」とあるように特に大形古墳は、寿陵であることがわかる。仮に墳丘や石室の完成まで5年を要したとしよう。しかし墓主が健在なら、そのままの状態で留め置かれた事になる。埴輪は、どの時点で樹立されたのだろうか。墳丘などの完成時、それとも埋葬時なのであろうか。破損した埴輪が存在した場合、追葬時など、再樹立することも考えておかなければならない。また追葬毎に祭祀は行われたことであろうし、既埋葬者についても一定期間毎の祭祀は行われたことが予想される。何れにしろ、特に墳丘外の遺物で年代を確定することは危険が伴う。そのため古墳の時期は、点で決められるものではない。

(2) 二子山古墳では、多くの場所で壕底に接して所謂FAと思われる「白色粘土・青白色粘土・灰色粘土・粘土質黒色腐蝕粘土」が堆積している。但し、昭和55年度西A調査区では、周堤立ち上がり箇所に所謂三角堆積があり、これを覆って所謂FA層が認められる(杉崎1988)。つまり、本古墳はFA直前に築造された古墳であることがわかる。

(3) 上記3書については、塩野博が紹介している『埼玉の古墳　大里』(塩野2004) から引用である。

(4) 雨宮龍太郎によれば東国では、北の上毛野君を中心とする上・下毛野連合と南の大和王権に協力的な南関東首長層との敵対関係が潜在的に存在しており、この武蔵国造争乱もその延長線上で考えるべきであると主張する。

(5) 飯塚は、「武蔵（无邪志・胸刺）という概念成立以前の北武蔵は、所謂毛野の一角であり、5世紀前半代の北武蔵に存在する円墳や帆立貝型古墳の被葬者は、官僚的性格を極めた毛野地域政権の構成員ではなかったろうか」そして「同様なことは、5世紀後葉から6世紀前半代についても言えよう」(飯塚1988) とした。ムサシ国の成立を遅く考えている。

(6) 无邪志国造と胸刺国造の二者を認める説がある。尾崎喜左雄は无邪志国を多摩川流域、胸刺国を荒川沿岸に比定した（尾崎1972)。雨宮龍太郎は无邪志国を武蔵国北部（埼玉古墳群など)、胸刺国を荒川下流右岸一帯と考えた（雨宮2006)。なお、川崎市影向寺から「无射志国荏原評」と刻された7世紀後半の平瓦が出土していることから、南武蔵も「无邪志国」である可能性がある。

(7) 『日本書紀』崇神紀に「以豊城命令治東、是上毛野君・下毛野君之始祖也」とある。『国造本紀』下毛野国造条「難波高穴（津）御世、元毛野国分為上下」とある。つまり、仁徳期以前に毛野国は成立していたことになる。

(8) 卑奴母離が派遣されたのは、邪馬台国の「北」に位置する6ヶ国のうち対馬国・一支国・奴国・不彌国の4ヶ国である。一大率の置かれたである伊都国や邪馬台国に近い投馬国には派遣されていない。卑奴母離は、邪馬台国が派遣した辺境防備官であることは間違いない（山尾1972)。

(9) 埼玉古墳群の出現は、南武蔵との政権交代(甘粕1970)、あるいは長方形周壕との関連から房総地域(坂本1998)へ比企地域（増田1999）との関連が指摘されたこともある。

(10) 比企地域は、当初前方後方墳を盟主墳の墳形に採択した地域である。この墳形の周壕は、長方形を呈する事

からこの型の周壕を採用した稲荷山古墳の故地とした。

(11) 上述した以外にも須恵器を採取したことを挙げているが、現在ではその所在が不明であり検証できない。なお野本将軍塚古墳には、二重の長方形周壕らしき痕跡が見える。これは後世の遺構である可能性が指摘されている(金井塚1979)。しかし、長方形周壕は埼玉古墳群の大きな特徴であり、これが事実だとすれば両者の類縁関係を想定することができる。

(12) 乎獲居臣の氏姓を持たない2代前までを実在と見るのが通説となっている。なお乎獲居臣の「臣」は、謙称で臣下を意味する(岸ほか1979)。なお、礫槨の被葬者乎獲居臣を稲荷山古墳主の子と仮定すると、同古墳主は加差披余となる。加差披余は、笠原に繋がる。そして安閑期には、笠原直を氏姓とし使主や小杵が歴史に名を残すことになった。

(13) 若松良一は、乎獲居臣を中央豪族と考え、武官として勤めた後に武蔵国に派遣されて在地豪族化したとした。そして、該期をもって国造制が成立したと捉えた(若松1987)。しかし、初代武蔵国兄多毛比を実在の人物と仮定するとより古くなる可能性がある。

(14) 古墳群の消長は、争乱の勝者と敗者の関連とは別次元の展開をする。筑紫の君磐井に見るように被葬者が朝廷の反逆者であっても、その墓を破壊することは無かった。墓は、政治的産物ではないのである。

(15) 楓山古墳は、10m前後の円丘が残存している。西側に低い高まりが認められる。これが、前方部とすれば前方後円墳となるが確証はない。なお、これを認めるにしても墳長は30～40m程度であろう。

(16) 小野山節は「権力者は対等に対立するものを許さない」というが、ある程度の規制・規範はあったにしても墳形・規格・規模の選択は、財力の許す範囲内で築造できたと考えたい。またそれが下賜された副葬品であったとしても、権力誇示のアイテムにはならないであろう。

(17) 小野山節によれば大王権力が強大な時、それは大豪族が失脚した時期と捉えた。しかし大王にとっても、それを補佐する豪族の失脚は痛手であったのではあるまいか。このような前方後円墳築造の規制は、5回行われたという。第1回目は5世紀前、2回目は5世紀後半で葛城氏、3回目は6世紀中葉で大伴氏、4回目が6世紀末～7世紀初頭で物部氏、5回目が7世紀中葉（薄葬令）の蘇我氏である。しかし、該期に帆立貝式古墳が構築されているかは、再度検討されなければならない。

(18) 屯倉の設置時期はともかくとして、磐井の乱の史実性を疑う研究者は少ない。何故、武蔵国造争乱には、疑惑がもたれるのであろうか。ところで、坂本和俊は、丸墓山古墳の「築造開始が、FA降下直前後（直後の誤りか）とすれば、安閑期の内容には、かなりの信憑性があることになる」とし、「丸墓山古墳の築造が争乱の発端であり、その後、愛宕山古墳などの中型前方後円墳が築造されるようになるのは、争乱を経て埼玉政権内部の組織が整備されたからであろう」（坂本1996）とした。

(19) 例えば墳丘を三段で築成することに何らかの意味を想定して種々論じられる。しかし段築造は、墳丘の崩壊防止のための土木工学的な技術要請に基づくものである。と同時に、墳丘構築及び埴輪施設や石敷き作業のためのものである。

《参考文献》

あ 青木　豊昭　1992 「越前」『前方後円墳集成 中部編』

甘粕　　健　1958 「第三章　古墳時代」『横浜市史』第1巻　横浜市

甘粕　　健　1970 「武蔵国造の反乱」『古代の日本7 関東』角川書店

甘粕　　健　1976 「三千塚古墳群に関する覚え書」『北武蔵考古学資料図鑑』校倉書房

甘粕　　健　1995 「『武蔵国造の反乱』再検討」『武蔵国造の乱』大田区立郷土資料館

雨宮龍太郎　2006 「无邪志国造と埼玉古墳群」『埼玉の考古学II』埼玉考古学会　六一書房

飯塚　卓二　1986 「埼玉古墳群の出現と毛野政権」『研究紀要』3　群馬県埋蔵文化財調査事業団

石野　博信　1985 「反乱伝承と古墳（2）」『季刊考古学』第12号　雄山閣

稲村　坦元　1951 『埼玉縣史』第1巻先史原始時代　埼玉縣

宇治市教育委員会　1995 『継体王朝の謎（うばわれた王権）』河出書房新社

今井　　堯　1982 『シンポジウム古代東国と大和政権』新人物往来社

岩崎　卓也　1990 『古墳の時代』歴史新書46　教育社

江口　尚史　1986「雷電山古墳」『埼玉県古式古墳調査報告書』埼玉県史編さん室
太田　　亮　1963『姓氏家系大辞典』第三巻　角川書店
大田区立郷土博物館　1995『武蔵国造の乱　―考古学で読む『日本書紀』―』東京美術
岡本　健一　1997「確認調査のまとめ」『将軍山古墳』埼玉県教育委員会
尾崎喜左雄　1970「あづまの国」『古代の日本７　関東』角川書店
尾崎喜左雄　1972「東国の国造」坂本太郎博士古希記念会編『続日本古代史論集』上巻　吉川弘文館
小野山　節　1970「五世紀における古墳の規制」『考古学研究』第16巻第３号　考古学研究会
か　金井塚良一　1978『吉見町史』上巻　吉見町
金井塚良一　1979ａ「野本将軍塚古墳の謎―武蔵国造の争乱と北武蔵最大の前方後円墳の築造時期―」『歴史読本』一九七九年五月号
金井塚良一　1979ｂ「稲荷山古墳と武蔵国造の争乱」『歴史と人物』中央公論社
金井塚良一　1979ｃ「比企地方の前方後円墳―北武蔵の前方後円墳の研究（1）―」『紀要』第１号　埼玉県立歴史資料館
金井塚良一　1980「埼玉古墳群の形成」『古代東国史の研究』埼玉新聞社
金井塚良一他　1982『シンポジウム古代東国と大和政権』新人物往来社
金井塚良一　1985『東松山市の歴史』上巻　東松山市
金井塚良一　1990『大里村史』通史編　大里村
金井塚良一　2008『馬冑の来た道―古代東国研究の新視点―』吉川弘文館
岸　俊男・田中　稔・狩野　久　1979『稲荷山古墳出土鉄剣金象嵌銘概報』埼玉県教育委員会
熊谷　公男　2001『大王から天皇へ』日本の歴史03　講談社
さ　斉藤　国夫　1984「埼玉古墳群をめぐる諸問題」『原始古代社会研究』６
坂本　和俊　1986「雷電山古墳」『埼玉県古式古墳調査報告書』埼玉県史編さん室
坂本　和俊　1996「埼玉古墳群と无邪志国造」『群馬考古学手帳６』群馬土器観会
坂本　和俊　1998「考古学から見た稲荷山古墳の出自」『稲荷山古墳の鉄剣研究20年の成果と課題』　大東文化大学エクステンションセンター
坂本　和俊　2001「考古学からみた稲荷山古墳の出自」『稲荷山古墳を見直す』学生社
塩野　　博　2004『埼玉の古墳［大里］』さきたま出版会
篠川　　賢　1992「『国造本紀』」の国造系譜」『国立歴史民俗博物館』研究報告第44集　国立歴史民俗博物館
白石太一郎　1992「関東の後期大型前方後円墳」『国立歴史民俗博物館』研究報告第44集　国立歴史民俗博物館
城倉　正祥　2009『埴輪生産と地域社会』学生社
杉崎　茂樹　1986『瓦塚古墳』埼玉古墳群発掘調査報告書 第四集　埼玉県教育委員会
杉崎　茂樹　1988『丸墓山古墳・埼玉１～７号墳・将軍山古墳』埼玉古墳群発掘調査報告書 第六集　埼玉県教育委員会
杉崎　茂樹　1991「古墳時代の北武蔵における有力首長層の動態」『古代探叢III』早稲田大学出版部
杉崎　茂樹　1992「武蔵における古墳時代後・終末期の諸様相」『国立歴史民俗博物館研究報告』第四四集　国立歴史博物館
清水　久夫　1995「『武蔵国造の乱』への招待」『武蔵国造の乱―考古学で読む『日本書紀』―』東京美術
杉山　晋作　1992「有銘鉄剣にみる東国豪族とヤマト政権」『新版 古代の日本⑧関東』角川書店
関　　和彦　1995「『武蔵国造』と多摩」『月刊　歴史手帖』第23巻第10号　名著出版
た　高橋　一夫　2005「鉄剣銘一一五文字の謎に迫る」シリース「遺跡を学ぶ」16　新泉社
滝沢　規朗　1992「武蔵における首長墓の変遷」『東京考古』10　東京考古談話会
舘野　和己　2004「ヤマト王権の列島支配」『日本史講座第１巻　東アジアにおける国家の形成』　東京大学出版会
田中　広明　1994「『国造』の経済圏と流通」『古代東国の民衆と社会』古代王権と交流２

田中　正夫　1994「古墳から検出された火山灰と埼玉古墳群」『新屋敷遺跡（A区）』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第140集　埼玉県埋蔵文化財調査事業団
津田左右吉　1950『日本古典の研究』下
利根川章彦　2003「『武蔵国造の乱』はあったのか」調査研究報告第16号　埼玉県立さきたま資料館
な 長井　正欣　2003「群馬県内の帆立貝式古墳」『帆立貝式古墳を考える』かみつけの里博物館
中村　倉司　1999『岡部条里・戸森前』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第217集　埼玉県埋蔵文化財調査事業団
西嶋　定生　1961「古墳と大和政権」『岡山史学』第10号
西嶋定生編　1964『日本国家の起源』現代のエスプリ第１巻第６号
仁藤　敦史　2004「ヤマト王権の成立」『日本史講座第１巻 東アジアにおける国家の形成』東京大学出版会
沼野　　勉　1980「七 武蔵国造の争乱」『鉄剣を出した国』学生社
は 橋本　博文　1987「関東地方の埴輪」『季刊考古学』第20号　雄山閣
原島　礼二　1977「考古資料と文献資料」『地方史と考古学』柏書房
原島　礼二　1979『古代の王者と国造』歴史新書16　教育社
原島　礼二　1987『新編埼玉県史　通史編１原始・古代』埼玉県
樋口　吉文　2009『平成21年度秋季特別展　仁徳陵古墳築造　―百舌鳥・古市の古墳群からさぐる―』堺市博物館
福田　健司　1995「武蔵国における古墳時代の問題点―武蔵国造の反乱―」『月刊　歴史手帖』第23巻第10号　名著出版
ま 増田　逸郎　1982「辛亥銘鉄剣出土古墳の概要と埼玉古墳群―首長権の変遷と性格―」『考古学ジャーナル』№201　ニューサイエンス社
増田　逸郎　1987「埼玉政権と埴輪」『埼玉の考古学』新人物往来社
増田　逸郎　1991「埼玉政権の法量的分析」『埼玉考古学論集―設立10周年記念論文集―』　埼玉県埋蔵文化財調査事業団
増田　逸郎　1999「辛亥銘鉄剣と武蔵国造」『國學院大學考古学資料館紀要』第一五輯　國學院大學考古資料館
宮本　義巳　1989「鬼道につかえた女王の実体」『最新 邪馬台国論』学習研究社
森　　浩一　1990「古墳から伽藍へ」図説日本の古代５　中央公論社
森　　浩一　1992「継体大王の古墳と磐井戦争」『大王陵と古代豪族の謎』学生社
森田　　悌　1988『古代の武蔵』稲荷山古墳の時代とその後　吉川弘文館
森田　　悌　2006「埼玉講座講演記録　古代史上の埼玉古墳群」『調査研究報告第19号』　埼玉県立さきたま資料館
や 柳田　敏司　1978『埼玉稲荷山古墳』埼玉県教育委員会
山尾　幸久　1972『魏志倭人伝』講談社現代新書　講談社
山尾　幸久　1985「文献から見た磐井の乱」『古代最大の内戦 磐井の乱』大和書房
吉川　國男　1988「雄略紀所載の武蔵国直丁と稲荷山鉄剣銘について」『調査研究報告 第11号』埼玉県立さきたま資料館
わ 若松　良一　1978「第３章 比企の大首長と武蔵国造―首長墓の変遷からみたその位置づけ―」『諏訪山33号墳の研究』
渡辺　貞幸　1978「辛亥銘鉄剣を出土した稲荷山古墳をめぐって」『考古学研究』第25巻第３号（99）　考古学研究会

コラム「さきたま思い出写真館」①

堀内紀明

埼玉県立さきたま史跡の博物館（以下、当館。）では、企画展示室を使用し、平成21年９月１日㈫から10月18日㈰の日程で、世界遺産登録推進関連企画展「さきたま思い出写真館ー変わりゆくもの・変わらざるものー」（以下、写真展と略す。）と題し、写真展を開催した。以下、この写真展で展示した写真を紙面の許す限り紹介してみたい。

写真１は、埼玉古墳群全体を写した航空写真である。撮影時期は昭和５年頃が考えられ、約80年前の埼玉古墳群の様子を伝える大変貴重な１枚である。またこの写真は、今回撮影時期が確認できた写真の中で、最も古い時期のものであり、この頃から埼玉古墳群も写真という媒体で記録されるようになる。

写真の内容について少々触れてみたい。中央左端、９時の方向に見える丸い高まりが、丸墓山古墳である。左右に延びる石田堤の痕跡は現在よりも明瞭である。その丸墓山古墳より右斜め上、10時の方向に見える高まりが、稲荷山古墳である。稲荷山古墳は、本来このような前方後円墳であった。この撮影から数年後、近隣地域の埋め立てのため土採りが行われ、稲荷山古墳の前方部は消滅した。この写真は、前方後円墳としての稲荷山古墳の形を伝える大変貴重な資料である。また、１時の方向に目を向けていただきたい。２つの高まりを確認することができる。若王子古墳群である。写真では、前方後円墳と円墳が確認できると思うが、この古墳群も稲荷山古墳前方部とほぼ同時期に土採りが行われ、その姿を消すこととなる。この後ご覧いただく写真２と比較していただくと、その変化がわかりやすいと思う（32頁につづく）。

写真１　埼玉古墳群全景（昭和５年当時）

サキタマ王権論へのプレリュード

── 埼玉稲荷山古墳と高崎市八幡観音塚古墳の関係性をめぐって ──

利根川章彦

1　はじめに

埼玉古墳群は、5世紀後半になって武蔵北東部の低台地地帯の中に突如として現れる。そのため、過去の研究においてはその出現の位置付けをめぐって、『日本書紀』安閑天皇紀元年閏十二月是月条に記述されている、いわゆる「武蔵国造の乱」との関係から考察しようとした研究者が多かった。たとえば、甘粕　健氏は、古墳時代前期から大型古墳の卓越する多摩川流域の勢力と埼玉県域の勢力の対抗の図式で理解し、埼玉古墳群を造った勢力をこの記事における「武蔵国造笠原直使主」、多摩川流域の勢力を「同族小杵」と考えた上で、古墳時代後期における勢力交替と大型古墳群の消長が符合することや、鈴鏡分布圏が東京から群馬まで及ぶことと「上毛野君小熊」―「小杵」の政治的関係を結び付けて理解しようとした(甘粕1970)。甘粕氏の研究が非常に示唆的で構想も大きな研究であったため、その後、類似した認識に立って関東地域に関する主要古墳動向を論じる研究者は多かった。このような研究傾向については現在もさほど大きく変わっているわけではないと思われる。

しかしながら、一方では、近藤義郎氏を中心にした大がかりな共同研究組織である前方後円墳研究会がまとめた『前方後円墳集成』によって全国の前方後円墳の悉皆調査が行われた記録が明らかとなり、さらにその後各地で結成されたローカルの前方後円墳研究会（東北・関東、中・四国、九州）の研究活動を通じて、主要前方後円墳の墳形や年代の見直しが進んだことによって、関東における大型前方後円墳の築造における最も大きな画期として、西暦5世紀後半頃から6世紀初頭前後頃のあたりの時期を考えた方がよい、という主張が多くの中堅・若年世代の研究者から出されるようになった。

私もそういう動向のはしくれに属するものとして、埼玉古墳群を中心とした埼玉・群馬の各小地域の大型古墳築造動向と年代論に触れた小論を二、三執筆し、小誌の前身である埼玉県立さきたま資料館の『調査研究報告』に掲載させていただいたことがある。この時の結論は埼玉古墳群を含む武蔵地域全体及び上野地域の双方とも西暦500年前後、600年前後に古墳築造史上の大きな画期があり、あくまでも大型古墳築造の視点からでしかないが、考古学的には「武蔵国造の乱」は虚構であるといわざるをえない、ということであった（利根川2002・2003)。

しかし、その時の作業を通じて痛感したのは、群馬地域の各古墳の情報を個別に収集しきれていなかったため、『前方後円墳集成　東北・関東編』（近藤1994）や東北・関東前方後円墳研究会作成の大会報告資料集等に頼らざるをえなかったことであった。

本来こういう研究を遂行するためには、各地域の地元で積み重ねられた各古墳に関する遺構・遺物に関する詳細な考古学的情報の収集と、それに基づく綿密な分析が必要不可欠である。

そこで、本稿で意図していることは何か、ということであるが、埼玉古墳群と深い関係があると考えてよい各地の主要古墳（群）に関して、より詳細な比較検討をし、埼玉古墳群の出現や推移に関する史的意義を考察する際の裏付けとなる事実を積み重ねたい、ということである。

ただし、今回に関しては限られた時間の中での分析とならざるをえないため、小稿のみでは十分

とはとてもいえないし、議論の対象も極めて限定的であり、内容としても少々的外れではないかというそしりも免れられるものではない。

それゆえ、今回は議論の足がかりに少しでもなればよい、との意識で書くことにする。あえて小稿のタイトルに「プレリュード（前奏曲）」という言葉を付した所以である。

2　八幡観音塚古墳とその周辺

まず、八幡観音塚古墳とその周辺を取り上げる理由について説明しておきたい。

埼玉稲荷山古墳の礫槨出土遺物は数多いが、他の古墳との類例を探ることができる主なものとしては、馬具の中では①ｆ字形鏡板付轡、②三鈴杏葉、③辻金具、装身具としては④龍文透彫帯金具、武器・武具では⑤挂甲などがあり、それなりに研究が重ねられている。何種類かの鉄鏃についても数少ない類例をあたる研究がある。しかし、これらの研究においては、直接的には今ひとつ大型古墳と大型古墳の相互関係に結び付けられる研究になってはいかないように思える。

もう１つ、取り上げることができるものに⑥画文帯環状乳神獣鏡がある。この鏡についても樋口隆康氏・川西宏幸氏らによる詳細な研究がある（樋口1980、川西2004）。

すでに、自明のことではあるが、稲荷山古墳と同型の鏡は５基の古墳から５面が出土している。群馬県高崎市八幡観音塚古墳出土鏡・千葉県大多喜町臺古墳出土鏡・三重県志摩市波切塚原古墳出土鏡・福岡県京都郡内古墳出土鏡・宮崎県新富町山ノ坊古墳出土鏡である。このうち古墳が特定されているのは八幡観音塚古墳と臺古墳だけである。

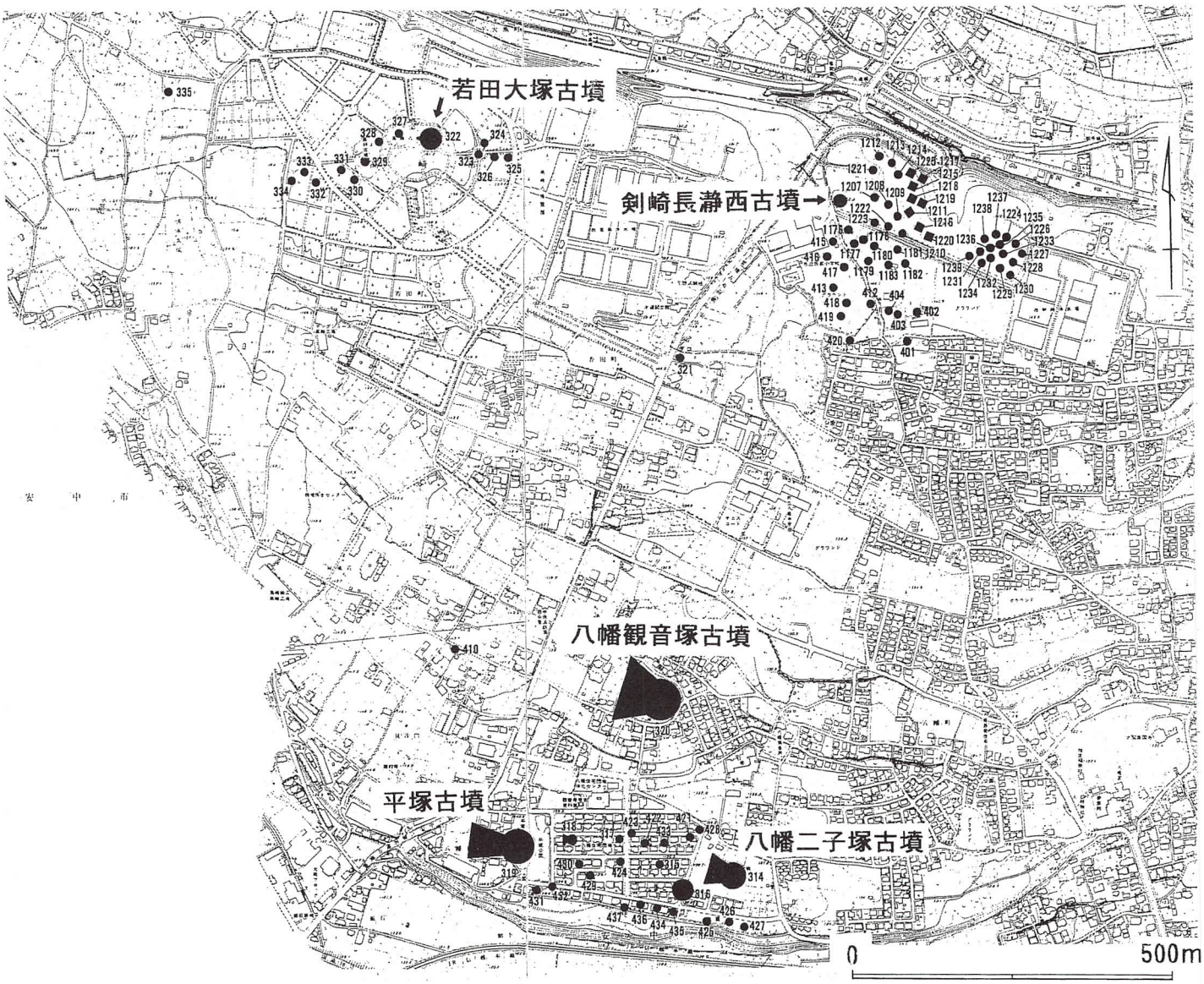
八幡観音塚古墳は６世紀末葉頃の築造と考えられている大型古墳である。稲荷山古墳被葬者との直接的交渉があった人物を葬った古墳ではないが、周囲に存在する古墳のあり方から考えれば、この古墳とその周辺を考えることによって、稲荷山古墳被葬者像を浮き彫りにすることができる材料を拾えるかもしれない。

そこで、まず本章で八幡観音塚古墳や周辺の古墳の内容について検討し、同型の画文帯神獣鏡を共有する関係となる２つの集団の関係性に迫ってみたい。

(1) 八幡観音塚古墳

八幡観音塚古墳は高崎市の西端で安中市板鼻に接する旧碓氷郡八幡村大字八幡の地にある。南方に碓氷川、北方に烏川が東・東南の方向にそれぞれ流れており、２つの川に挟まれた東西に細長い台地の地形を呈している中の浅い谷間に築造された古墳である。「八幡」の地名のもとになった上野一社八幡宮も「群馬八幡」駅から西北西約750ｍの位置にあるが、古墳群はさらに西２㎞程度の位置になる。平塚古墳・八幡二子塚古墳については後述するが、この２基の前方後円墳が先行して築造された後、八幡観音塚古墳が造られる。この３基の古墳群の北西約１㎞に若田古墳群、北北東約１㎞に剣崎長瀞西遺跡の２つの古墳群が所在している。いずれも観音塚古墳の所在する谷間の北側の台地上に立地している。

さて、八幡観音塚古墳の内容に逐次触れていきたい。まず、墳形であるが、前方部が大幅に発達した前方後円墳であり、前方部幅・前方部墳頂の高さは後円部を大きく超えている。墳丘の長さ96ｍ、後円部の径48ｍ・高さ12ｍ、前方部幅91ｍ・長さ49ｍ・高さ14ｍ、くびれ部幅76.4ｍである。古墳は前方部を西に向けており、後円部に南に開口する両袖型の横穴式石室をもつ。石室は自然石乱石積みで造られており、全長15.3ｍ、玄室長7.45ｍ、羨道長8.14ｍ、玄室の最大幅3.55ｍ・高さ



第１図　八幡観音塚古墳周辺の主要古墳

2.8m、羨道の最大幅1.95m・高さ2.30mを測る。「巨石巨室」の石室であり、玄門部と玄室中央に角閃石安山岩の梱石が設置されている。玄室を手前と奥に分割して複数回の埋葬に備えたものと考えられる。承台付銅鋺２種２点・通常の大型銅鋺２点、花形鏡板付轡と花形杏葉のセット、鹿角製鑣轡１・環状鏡板付轡３以上、鉄地金銅張雲珠３、鈴付金銅張雲珠と鈴付金銅張辻金具のセット、金銅製心葉形透彫杏葉４、鐙用の兵庫鎖２・吊金具３、銀装圭頭大刀２種２点、銀装鶏冠頭大刀１、銀装刀子装具１セット、鏡は４面あり、画文帯環状乳神獣鏡・獣形鏡・内行花文鏡・五鈴鏡、須恵器甕１・無蓋高坏１・提瓶１・脚付瑤１・脚付長頸壺１・長頸壺２・かえりのある蓋２等々多種多量の遺物が出土している(田島1981ａ)。古墳の年代は、須恵器の型式から見てTK43～TK209型式のカテゴリーで考えるべきであるが、大刀が圭頭大刀中心であり、１点には唐草文を透彫りした鞘金具が伴っているため、初葬期が６世紀後半でもやや新しい年代となり、２～３回分の追葬を考えるべきであろう。したがって、年代の下限は当然７世紀前半代のやや新しい段階まで幅をもって考えておきたい。

須恵器は「かえり蓋」以外はやや古手と見ることができるので、大半が初葬期の遺物、承台付銅

第２図　八幡観音塚古墳測量図
（縮尺１：1,000）

鋺や心葉形透彫杏葉等は７世紀に下りそうなので、追葬期の遺物と考えてよいであろう。馬具は花形鏡板・杏葉のセットを最新の追葬期と考えることができそうであるが、全体としては新しい時期に降りていきそうである。墳丘に円筒埴輪・形象埴輪が樹立されていたこともわかっているので、築造当初の時期が７世紀にまで下ることはないと思われる。ちなみに、前方後円墳研究会の共通編年（以下「共通編年」とのみ記述する）でも、この古墳は10期の後半に属するとされている（加部・橋本1996）。

問題の鏡であるが、６世紀末近い年代にまで製作されているものはないので、すべて伝世鏡であ

る。画文帯神獣鏡は5世紀以前、その他は6世紀代以前と考えてよさそうなので、最初に鏡を入手したのは八幡観音塚古墳に大幅に先行して築造された古墳の被葬者であるのは間違いないし、埼玉稲荷山古墳礫槨被葬者と直接的交渉をもった可能性があるのもそれらの被葬者であろう。

そのため、稲荷山古墳とこの古墳周辺の歴史的関係性に関しては、先行して築造された2基の大型前方後円墳、あるいは周辺の古墳群とのかかわりを追求しなくてはならないことになる。

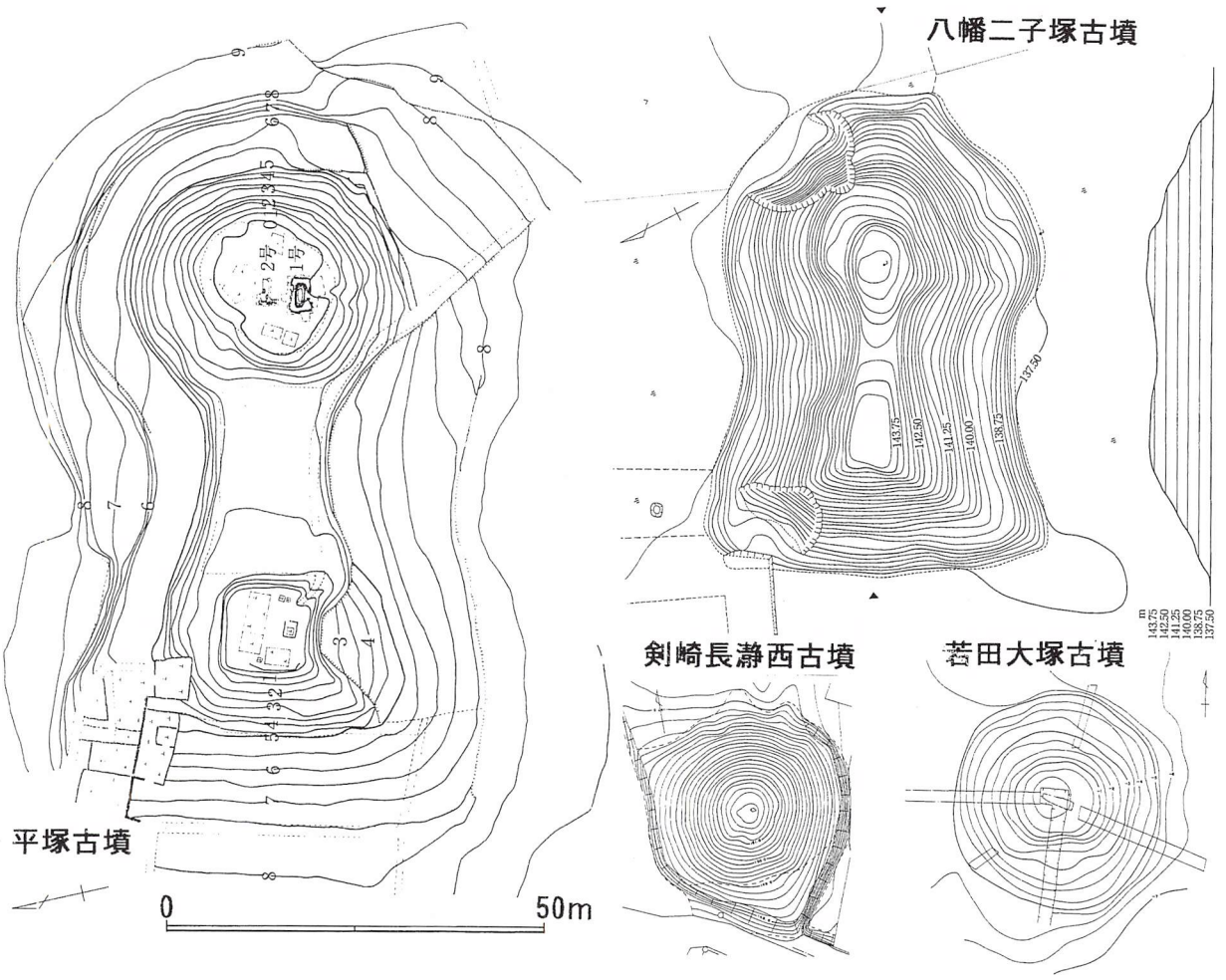
(2) 平塚古墳・八幡二子塚古墳

八幡観音塚古墳の近傍には平塚古墳・八幡二子塚古墳の2基の大型前方後円墳がある。常識的に考えれば、この3基で首長墓系列を形成しているということになるが、途中に大型古墳の空白期が生じる可能性がある。これを他地域の古墳を充当して考えるか、この3基の古墳の埋葬継続期、つまり「追葬期」として解決していくかは今後の課題となるだろう。

平塚古墳は観音塚古墳の南西約300mの位置に所在する。観音塚古墳が谷間に造られたのに対し、この古墳は台地の頂部に位置している。やはり前方部を西に向けている。墳長105m、後円部径66m・高さ9m・頂径36m、前方部幅56m・長さ47.5m・高さ7m、くびれ部の幅56.5mを測る。1957年に後円部墳頂を中心とした発掘調査が行われ、古墳の主軸方向とほぼ平行する方向の埋葬施設として舟形石棺2基が検出された。南側の1号石棺は凝灰岩製で、長さ2.54m、最大幅0.97mを測る。東西5.2m、南北3.4mの長方形の「掘りかた」の中央に置かれ、転石で石子詰になっていた。石棺の周囲は棺本体の曲面に合わせて入念な石組みになっており、棺本体から離れた位置は大小の石をやや雑然と詰め込んでいたという。蓋はなかった。棺身の小口にあたる東西両端部には2個ずつの縄掛突起がある。「掘りかた」底面に並べられた平石上に相当量の凝灰岩の削りかすが散布していたため、石棺安置後に現地で最終加工したらしい。2号石棺周辺は墓地となっていたため、十分な調査がされていないが、同様の埋葬施設の造成が行われていたと考えられている。石棺自体の大きさは長さ3.08m、幅0.9mを測る。こちらには蓋が残っていたが、蓋には人が出入りできそうな盗掘孔が開いていた。1・2号石棺とも盗掘が著しく、遺物は1号石棺周囲の石積みから挂甲小札が少量見つかったのみである。古墳の年代は5世紀第4四半期を想定されている。共通編年8期の後半に位置づけられている。ただし、埋葬施設2基ということになれば、埋葬時期の下限は6世紀前半とすべきかもしれない。なお、松本浩一氏は挂甲小札の出土を根拠に6世紀前半築造説をとっている（松本1981）。

八幡二子塚古墳は平塚古墳の東約300m、観音塚古墳の南東約300mの位置にある。やはり主軸を東西にとり、前方部を西に向けている。墳長66.5m、後円部径41m・高さ9m、前方部幅48m・長さ25.5m・高さ9m、くびれ部幅36mを測る。高崎市教育委員会の小規模調査が2回ほど行われており、円筒埴輪片、人物・馬形・器財埴輪片の出土、大甕を中心とした須恵器の一群19個体の出土が確認されたということであるが、近年刊行の『新修　高崎市史　資料編1　原始・古代1』（右島1999）にも概要の記述があるだけで、詳細情報はない。横穴式石室を埋葬施設とする可能性が指摘されており、加部二生・橋本博文両氏の見解（加部・橋本1996）では共通編年10期初頭頃の時期を想定されている。これだと6世紀後半代となり、平塚古墳との時間差が大きくなり、6世紀前半代の政治勢力の動揺を考慮すべきことになる。

なお、徳江秀夫氏はこの古墳の築造時期を6世紀前半と見ている（徳江2006）。この考え方をとると、逆に八幡観音塚古墳との時間差が50年以上になってしまう可能性が生じる。6世紀中葉前後の



第３図　八幡観音塚古墳周辺の主要古墳
（縮尺１：1,000）

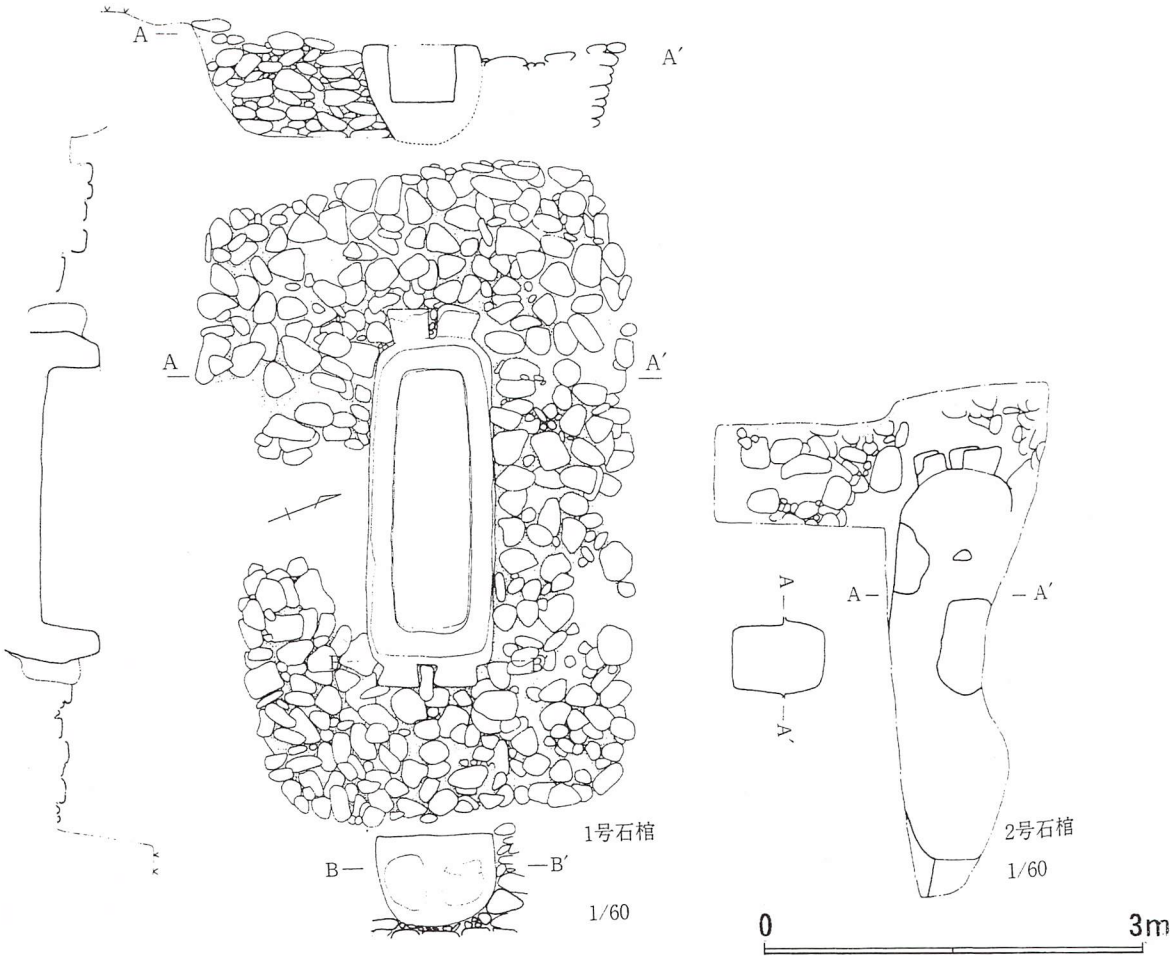
首長墓級古墳の空白の理由を説明することが必要となる。小稿では、加部・橋本説に従って行論することとする。

この２基の古墳では、平塚古墳が埼玉稲荷山古墳と同じ時間帯を共有する関係となり、より詳細な分析を必要とする。しかしながら、埼玉稲荷山古墳が礫槨―木棺を埋葬施設としていたのに対し、平塚古墳は石子詰―舟形石棺の埋葬施設である。上野西部地域でしかも山岳部に近い地域に５世紀後半代から６世紀初頭あたりの時期に集中的に構築された埋葬施設である、という特異な要素を持つ。この要素での比較はむずかしく、埼玉稲荷山古墳の礫槨がむしろ利根川水系のやや下った大泉町・太田市、埼玉県側では羽生市にある古墳と共通することとは好対照となる。相互比較の問題についてはさらに後述する。

(3) 周辺の古墳群と八幡観音塚古墳系譜首長層

平塚古墳・八幡二子塚古墳・八幡観音塚古墳の首長墓系列の古墳群が築造された位置の北側の台地上にある古墳群は、規模としては中小規模にすぎないが、内容においては触れないわけにいかないものが多いので、二・三述べておくことにする。

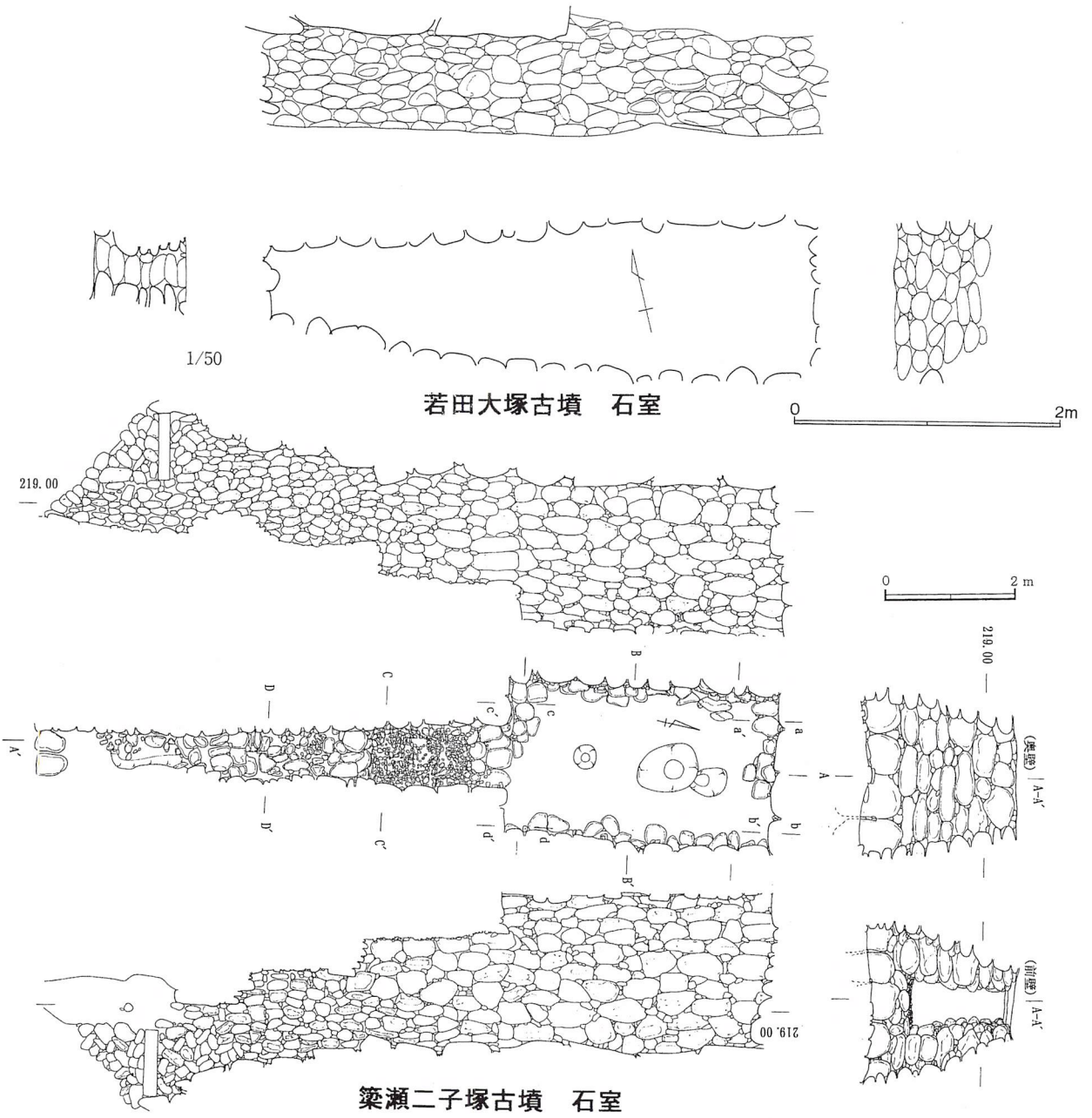
八幡観音塚古墳の北北東約１kmにある剣崎長瀞西遺跡は、５世紀後半以降の集落と群集墳がセットで確認されているが、近年円墳９基・方墳３基・方形積石墓５基・竪穴式小石槨２基の調査が行



第４図　平塚古墳の埋葬施設
（舟形石棺）

われている。古く1932年に開墾のために遺物の出土が確認された長瀞西古墳は『群馬県史　資料編３』（梅沢1981）に触れられている規模・墳形は径25mの円墳ということだが、右島和夫氏は径35.5mの円墳ないし帆立貝式古墳とされている（右島2006）。仿製捩文鏡１点、滑石製勾玉７点、石製模造品として鏡１・斧４・鎌３・刀子35・臼玉一括、三角板革綴短甲１点、鉄鋌・石突各１点、鉄鏃20点前後が出土した。埋葬施設は河原石使用の「竪穴式石室」ということらしい。梅沢重昭氏は５世紀後半に位置づけるが、加部・橋本説では共通編年６期（５世紀前半）に位置づけられている。また、近年高崎市教育委員会が調査した小方墳である長瀞西10号墳の墳頂中央付近からは金製垂飾付耳飾１点、韓式系土器の甑の破片が出土したが、これらは朝鮮半島製説もあるような優品である。周囲に確認された集落跡にも韓式系土器の破片が散見し、初期カマドも確認された。また、馬を埋葬した土坑も確認されたことから、この集団は馬匹生産・管理にも関与したと考えられている（黒田2000、右島2006）。これらから、長瀞西遺跡の居住者・古墳被葬者たちは渡来系集団であると認識されている。しかも、短甲出土古墳を含むことから、前方後円墳に準じた古墳を築けた集団とも考えられている。いずれにしても、平塚古墳被葬者の傘下にあって生産活動を行っていた渡来系集団と見ることができそうである。

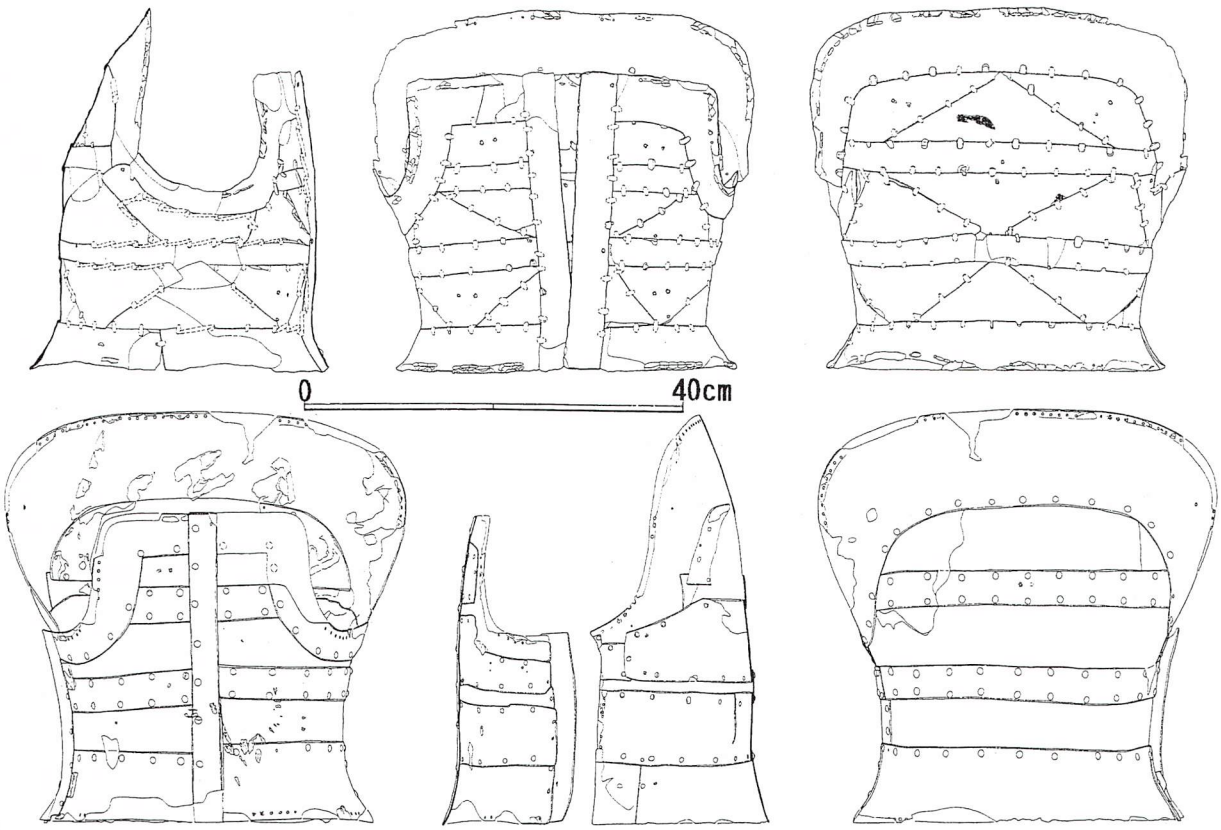
同じ剣崎の地には、まとまった量の石製模造品を副葬した中規模の円墳である、剣崎天神山古墳



第５図　若田大塚古墳「竪穴式石室」・
築瀬二子塚古墳横穴式石室

（円墳、径30m）が、長瀞西遺跡に先行して５世紀前半代のやや古い時期に築造されたことが知られている。

八幡観音塚古墳の北西約１㎞にある若田古墳群には、横穴式石室を埋葬施設とするやや大きめの円墳がいくつか内容が判明している。若田大塚古墳は径29.5m・高さ7.5mの円墳で、東西方向に主軸をとる「竪穴式石室」とされる埋葬施設を有していた。この埋葬施設は長さ4.25m・最大幅1.22m・高さ0.71mを測る。墳丘基底部（基壇）に構築され、墳頂部から石室底面までは5.76mを測る。高崎市教育委員会調査以前に横矧板鋲留短甲・鉄鉾が出土しており、高崎市調査でも鉄槍が出土している。この「竪穴式石室」は河原石で側壁を積んでいる。石積みの手法が安中市築瀬二子塚古墳・同市後閑３号墳の横穴式石室に類似しており、西側の短壁が狭く、全体の約半分になる東寄りの部



第６図　長瀞西古墳　　三角板革綴短甲（上段）・
若田大塚古墳　横矧板鋲留短甲（下段）

分が「玄室」のごとく幅広に造られている。西壁が入口になれば、初期横穴式石室とまったく同じ構造となるという。田島桂男氏も右島和夫氏もともに同様の見解をとっている。時期に関しても両氏とも６世紀初頭説である(田島1981ｂ、右島2006)。しかし、横矧板鋲留短甲は６世紀に年代の下るものはあまり多くはないと考えられるので、この古墳も５世紀末頃あたりに年代遡及できるかもしれない。古墳の規模は大きくないが、平塚古墳と八幡二子塚古墳をつなぐ時期に造られると考えることができれば大変示唆的である。

剣崎・若田の台地上の古墳群は、平塚古墳以降の首長墓系列に先行して造られる古墳も含みながら、大筋では並行して築造されている。まさにこの小地域の首長墓群の基盤となる集団が形成されたと考えることができる。その内容を見る限り、渡来系集団をも包摂するものであり、近隣地域である安中市域の簗瀬二子塚古墳のような初期横穴式石室を埋葬施設とした前方後円墳を築造した勢力にも通ずるのではないかと思う。

ところで、参考のため、安中市簗瀬二子塚古墳にも少しだけ触れておこう(右島2001)。八幡観音塚古墳の首長墓系列が所在する地域から碓氷川を遡って８㎞上流域の安中市簗瀬字八幡平にあり、やや離れているため、平塚古墳・八幡二子塚古墳には関係が薄いように見受けられるかもしれないが、この古墳が築造された地域には先行する古墳がほとんどなく、墳長80ｍのやや大型の古墳であるにもかかわらず、突如出現した印象のあるものである。後円部に輝石安山岩の転石を使用した、河原石乱石積みの横穴式石室を有する古墳であり、石室内部からMT15型式に相当する須恵器の一群を伴っていたことから６世紀第１四半期の時期の築造と考えられており、関東では最も古く造ら

れた横穴式石室と考えられている。先述したが、この石室の側壁石積み手法が若田大塚古墳の「竪穴式石室」と類似しており、築造時期が近接していることから、これらは関係が深いと考えてよいだろう。ただし、簗瀬二子塚古墳の横穴式石室の側壁内面には大量の赤色顔料が塗布されていたのに対し、若田大塚古墳の「竪穴式石室」は壁面への顔料塗布は確認されていなかった。若田大塚古墳が先行して初期横穴式石室的埋葬施設を構築した後、簗瀬二子塚古墳がやや遅れて本格的横穴式石室の構築に至った、と考えた方がよいのではなかろうか。

3　埼玉稲荷山古墳被葬者と八幡観音塚古墳系譜首長層

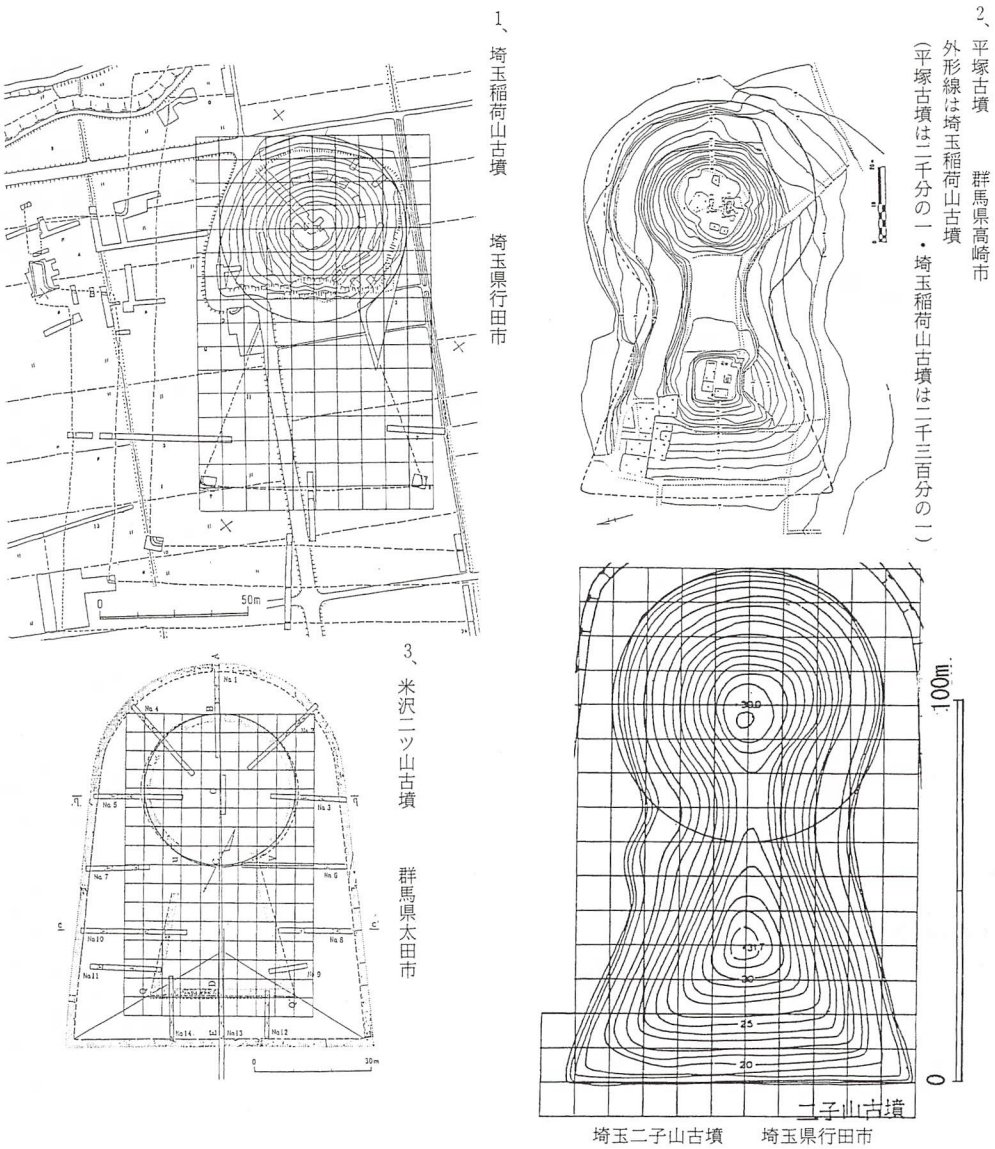
本節では埼玉稲荷山古墳の諸要素・諸属性と八幡観音塚古墳の首長墓系列を構成するいくつかの古墳に関して、若干触れてみたい。

まず、画文帯神獣鏡である。最近刊行された川西宏幸氏の分析（川西2004）によると、埼玉稲荷山古墳・八幡観音塚古墳に副葬された2面を含む合計6面の画文帯環状乳神獣鏡（画文帯環状乳神獣鏡B）は、文様の中の笵傷の共通や進行から埼玉稲荷山鏡・大多喜鏡は原鏡が同じで、残る4面はやはり原鏡が同じとなる。しかもこの2つの原鏡は同笵ということになるという。そうなると、この鏡群は、中国鏡説で考えれば、同時に入手したものかどうかはわからないにしても、ヤマト王権から配布された「威信財」（＝宝器？）と考えてよければ、ある一定の時期に集中的に入手（輸入）した一群と判断されることは許されるだろう。埼玉稲荷山古墳被葬者と八幡観音塚古墳系譜首長層の双方がほぼ同時期にヤマト王権の本拠地（シキの宮？）に上番し、大王や中央首長層の従者として活躍するに及んで、王権中枢から勤務評定の結果として賜与される財物の中にこの鏡が含まれていた、という解釈が可能となる。

次に、前方後円墳の設計企画論である。飯塚卓二氏は埼玉古墳群の成立過程を考察するのに、前方後円墳の設計企画論を中心に考察した（飯塚1986）。この時飯塚氏が依拠したのは石部正志・田中英夫・堀田啓一・宮川　徙の四氏の共同研究である、後円部径を8分割した長さを基本単位とし、前方部長をその単位の長さの何倍かで考える「区」の設定論であった。八幡観音塚古墳の首長墓系列のうち、平塚古墳は埼玉稲荷山古墳と同じ「7区型」であり、稲荷山古墳の「相似墳」である、という。また、同じ「7区型」には太田市米沢二ツ山古墳もある。飯塚氏は平塚古墳と埼玉稲荷山古墳の画文帯神獣鏡の「同型」（飯塚氏は「同笵」）であることに関して「同盟の証」と評価した。また、埼玉稲荷山古墳の地理的位置から、米沢二ツ山古墳以外の前方後円墳がないことにより「かつて太田天神山古墳の被葬者が直接の基盤としていたと推定される太田市街地付近から利根川にかけての肥沃な地域」を、「埼玉稲荷山古墳の同盟（同族）者」が掌握したことにより、「かつての毛野中枢部」を制圧し、新秩序を形成した、と考えた。「毛野地域政権」の解体とも表現している。

埼玉稲荷山古墳と平塚古墳が「相似墳」の可能性があり、画文帯神獣鏡という宝器の要素の共有についても関係するという点に関していえば、飯塚氏の見解は当たっているかもしれない。ただし、前述したように舟形石棺を埋葬施設とする大型古墳が上野西部に集中的に築造されることを一つの政治権力の形成に関連すると考える右島和夫氏の見解（右島2002）を尊重するならば、「毛野地域政権」の解体ではなく、上野西部地域を中心とした再編成と捉えた方がよいかもしれない。

私の見解としては、埼玉稲荷山古墳の出現は、上野地域の政治勢力の新たな結集に重要な契機を与えはしたが、すでに大型古墳を築くことができなくなった太田市付近の地域に関しては、「制圧」



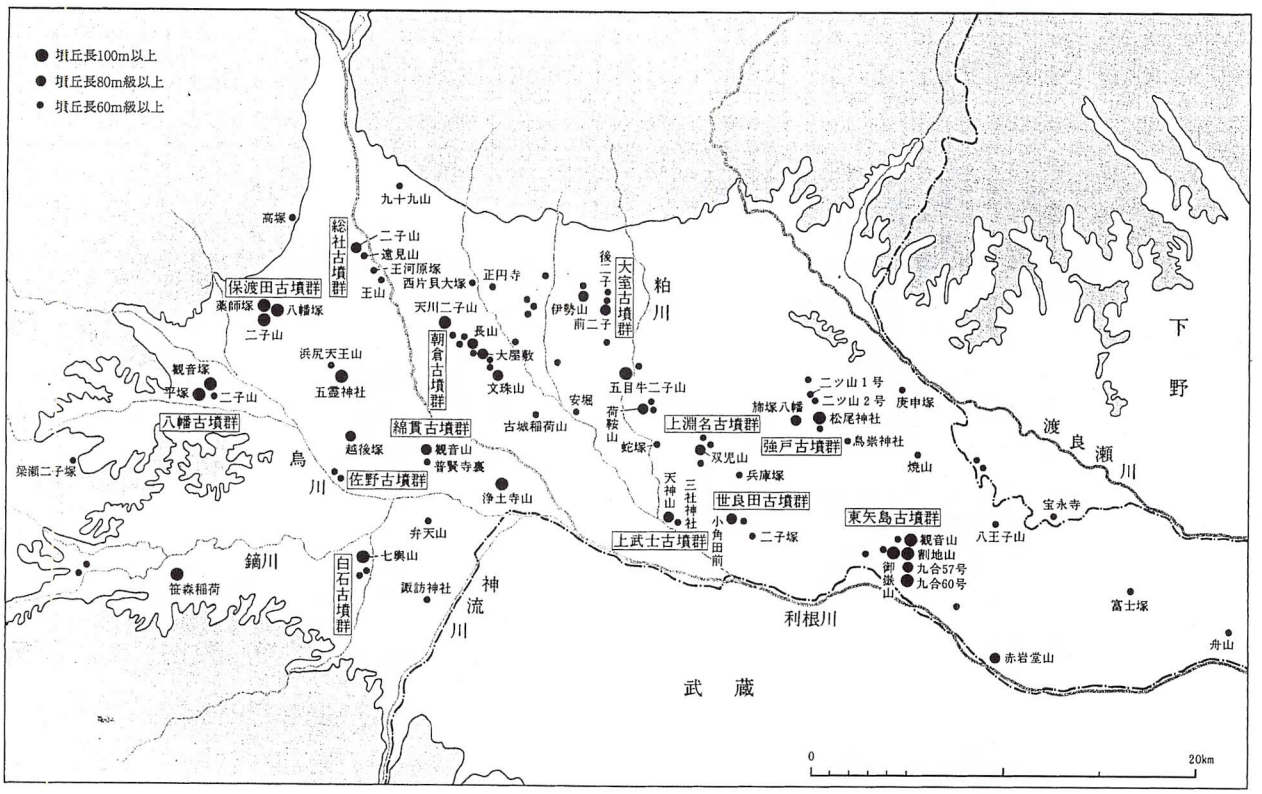
第７図　埼玉古墳群と群馬の「７区型」古墳
（飯塚1986から抜粋、縮尺不統一）

と言うほどではなく、共通する埋葬施設を築かせることにより、やや優位な立場に立つ「同盟」ないし「連合」の関係と考えるべきではないか、と思っている。

４　おわりに　―サキタマ王権の形成に関する一、二の問題―

以上、八幡観音塚古墳の首長墓系列とその周辺古墳群と埼玉稲荷山古墳との関係から見えてきたことの一端に触れてみた。

従来、埼玉古墳群の形成との関わりで述べられてきた群馬地域の大型古墳には、旧群馬町領域にある高崎市保渡田古墳群と、前橋市の東部地域の大室古墳群、藤岡市七輿山古墳等があげられる場合が多かったと思う。七輿山古墳については、『日本書紀』の緑野屯倉設置伝承と首長墓築造の結びつき、保渡田古墳群・大室古墳群は、埼玉古墳群と同様、それまで有力古墳群が形成されなかった地域への新たな造墓、という埼玉古墳群との共通点を歴史的に捉えようとしたのである。しかし、



第8図　群馬地域における後期大型前方後円墳の分布

古墳自体の属性や遺物に見られる共通性等を見る限り、これらの古墳群と埼玉古墳群の関係性が特別深いものであるとは思えない。むしろ、今回取り上げた八幡観音塚古墳系譜首長層と埼玉古墳群被葬者層の関係性にもう少し着目すべきだろう。また、飯塚氏が指摘（飯塚1986）するように、埼玉稲荷山古墳は、利根川水系の両岸に所在する属性を共通するいくつかの古墳との関係を考えることができるわけである。地理的位置から考えてもあまり上野西部地域のみから考えるのは正しくないかもしれない。しかし、太田市域周辺等では後期後半の東矢島古墳群が築造されるまでの間首長墓級大型古墳の空白期があるとされているため、埼玉稲荷山古墳出現に直接的なインパクトを与える古墳はなく、上野西部地域優位の時期の中で稲荷山古墳に直接的関係性を追求できるのは、やはり八幡観音塚古墳首長墓系列とならざるをえないのではないだろうか。

小稿は埼玉稲荷山古墳に関係性をもつ大型古墳を抽出することを目的としたものであり、中小規模の古墳についてはあえて等閑視した。剣崎・若田・八幡の台地上ではかなり多数の古墳が調査されているので、もっとそれらの分析をする必要があるのではないかとの批判があろうと思う。しかしながら、論文の冒頭に触れたように、大型古墳同士の関係性、つまり首長間交流・首長間交渉が証明されることを第一の目的としているのである。大型古墳と中小古墳の関係は直接的に可能であるかどうか、可能であるとすればそれを従属的な関係と見てよいか、という視点を媒介しなければ、集団間交流の史的位置付けを決めることはむずかしい。たとえば剣崎・若田の古墳群と埼玉稲荷山古墳の関係性を追求することは、わずか20m規模の古墳と100m級の大型古墳の関係ということになり、おのずから対等の関係と見ることはできない。そのため、「八幡観音塚古墳系譜首長層」とした平塚古墳や八幡二子塚古墳と、埼玉稲荷山古墳やそれ以後に築造された埼玉二子山古墳等の関係性

から、これら中小古墳群との関係を派生的に考えねばならない、ということになる。

なお、最後の挿図は白石太一郎氏が1999年に群馬県埋蔵文化財調査事業団20周年記念の公開講座で記念講演を行った時の資料中に掲載されていたものであるが(白石1999)、今回取り上げた古墳の地理的位置がわかりやすく表現されているので、小稿の主旨に直接関係あるわけではないが、参考のため掲げておく。

5世紀後半から6世紀という古墳時代東国史の大転換期を、大筋として新興勢力論を考えることによって解決しようと企てるのは、おそらく正しいし、重要であるかもしれないが、歴史の本質的転換を見極めるには、たとえ極めて細い「導きの糸」だったとしても、古墳自体の諸要素から確認される共通点を追求する方が、迂遠には見えても実は正解に近づく王道ではないか、と考えている。今回はあまり問題の掘り下げができなかったが、6世紀前半段階を中心とする時期の北関東諸地域及び南北武蔵地域の大型古墳築造動向を再検討することをひとまずの目標とし、小稿を閉じたいと思う。

《参考文献》

甘粕　健　1970「武蔵国造の反乱」『古代の日本　7　関東』(旧版)　角川書店

飯塚　卓二　1986「埼玉古墳群の出現と毛野地域政権」『研究紀要』3　群馬県埋蔵文化財調査事業団

梅沢　重昭　1981「長瀞西古墳」『群馬県史　資料編3　原始・古代3　古墳』群馬県

加部二生・橋本博文　1996「上野の前方後円墳」『第1回東北・関東前方後円墳研究会　東北・関東における前方後円墳の編年と画期　発表要旨資料』東北・関東前方後円墳研究会

川西　宏幸　2004「画文帯神獣鏡」『同型鏡とワカタケル―古墳時代国家論の再構築―』同成社

黒田　晃　2000「剣崎長瀞西遺跡と渡来人」『高崎市史研究』第12号　高崎市

近藤義郎編　1994『前方後円墳集成　東北・関東編』山川出版社

白石太一郎　1999「古墳から見たヤマト王権と東国」『創立20周年記念　公開考古学講座』(資料集)　群馬県埋蔵文化財調査事業団

田島　桂男　1981a「八幡観音塚古墳」『群馬県史　資料編3　原始・古代3　古墳』群馬県

田島　桂男　1981b「若田大塚古墳」『群馬県史　資料編3　原始・古代3　古墳』群馬県

利根川章彦　2002「稲荷山古墳の築造年代に関する覚書」『調査研究報告』第15号　埼玉県立さきたま資料館

利根川章彦　2003「『武蔵国造の乱』はあったか―6世紀前半以降の上野・武蔵地域の政治勢力の所在―」『調査研究報告』第16号　埼玉県立さきたま資料館

徳江　秀夫　2002「群馬県における前方後円墳の地域性」『第7回東北・関東前方後円墳研究大会《シンポジウム》前方後円墳の地域色　発表要旨資料』東北・関東前方後円墳研究会

徳江　秀夫　2006『観音塚古墳の世界―きらめく大刀、馬具、装身具―』(展示図録)　高崎市観音塚考古資料館

樋口　隆康　1980「埼玉稲荷山古墳出土鏡をめぐって」『考古学メモワール1980』京都大学考古学メモワール編集委員会編　学生社

松本　浩一　1981「平塚古墳」『群馬県史　資料編3　原始・古代3　古墳』群馬県

右島　和夫　1999「八幡二子塚古墳」『新修　高崎市史　資料編1　原始古代1』高崎市

右島　和夫　2001「簗瀬二子塚古墳」『安中市史　第四巻　原始古代中世資料編』安中市

右島　和夫　2002「古墳時代上野地域における東と西」『群馬県立歴史博物館紀要』第23号

右島　和夫　2006「6世紀関東の古墳文化と武器」『第7回古代武器研究会　資料集』

コラム「さきたま思い出写真館」②

堀内紀明

引き続き、写真展展示写真について紹介してみたい。

写真２は、昭和43年の稲荷山古墳発掘調査に際し、撮影された埼玉古墳群全景写真である。

写真１より少し南側からのアングルになっている。写真１と比較していただくとわかりやすいと思うが、９時の方向に見える丸い高まりが丸墓山古墳であり、その右斜め上、ちょうど10時の方向に見えるのが稲荷山古墳である。昭和５年当時、前方後円墳の形を整えていた稲荷山古墳は、昭和10年代の土採りの結果、後円部だけになってしまっている。また、写真１に見た若王子古墳群は、写真２において、その存在が全く確認できない。１時の方向に見えるのは、ただ平坦な耕作地のみである。この他にも写真２は、整備される前の埼玉古墳群の様子をよく伝えてくれる。昭和５年から40年後の、現在から40年前の埼玉古墳群の姿を知ることができる貴重な１枚である（50頁につづく）。

写真２　埼玉古墳群全景（昭和43年当時）

埼玉古墳群周辺の範囲確認調査

西口正純・佐藤康二

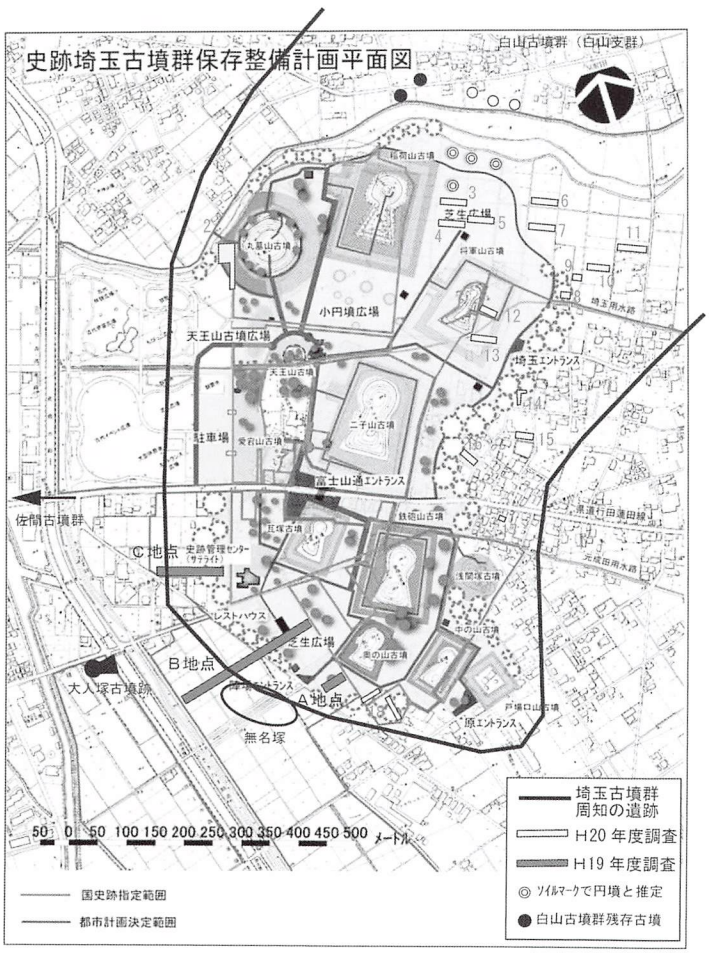
はじめに

史跡埼玉古墳群は、平成元年に追加指定を受け現在の指定面積は22.3haとなっている。しかし埼玉古墳群に捉えられる古墳とされながら、未指定の古墳や部分的な指定範囲の古墳があり、包括的な埼玉古墳群として十分な指定範囲にはなっていない。

そのため、古墳群の範囲を確定し指定範囲の拡大を検討するための基礎資料を得るために平成19年度に古墳群西側の範囲確認調査を行った(西口2009)。さらに平成20年度も行田市および行田市教育委員会の協力を得て、この調査を継続して丸墓山古墳周辺から稲荷山古墳、将軍山古墳と二子山古墳の東側、奥の山古墳南側にかけての民有地16地点について、地権者の承諾を得て試掘調査を行い、古墳の分布範囲の確認と周辺の地形調査を実施した。

平成19年度の範囲確認調査

平成19年度は、奥の山古墳から博物館西側にかけて３地点を調査した。いずれの地点においても低湿地であることが確認され、古墳群を乗せる台地には南側の陣場遺跡周辺を頭に旧忍川に向かって大きく谷地形が入り、西側の武蔵水路側において再度ローム台地が形成されていることが分かった。この武蔵水路側の台地上には、大人(うし)塚古墳を含む佐間古墳群が展開しているが、埼玉古墳群との間には大きな地形の変換点があるため、埼玉古墳群の西側への連続性はないことが判明した。これが平成19年度調査の大きな成果であった。

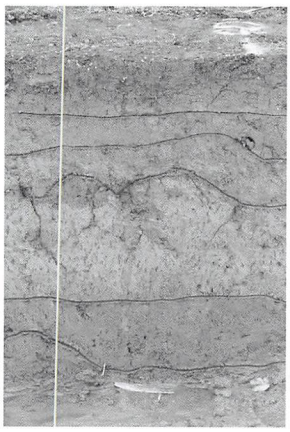


第１図　平成19・20年度調査トレンチ配置図

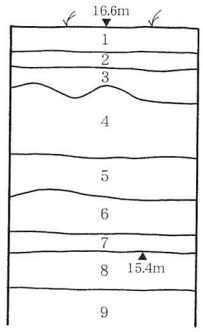
平成20年度の調査

平成21年２月２日から３月26日にかけて16地点の調査を実施したので、以下順次その内容について述べたい。

１地点は県有地化されている部分であるため、丸墓山古墳西側に広めの調査区を設定した。現状は、周堀の復原は行われていないが、平成11年に３本のトレンチと、平成15年に４本のトレンチ調査が行われている。このうち平成15年に調査



1トレンチ検出状況



1　灰褐色土
2　橙灰色土
3　黄褐色土　ロームブロックを主体に、灰褐色土を少量含む。やや粘性がありよくしまる。二次堆積土層。
4　灰褐色土　鉄斑粒子を多量に含む、粘性強くよくしまる。
5　橙灰色土　灰褐色土を基本に、鉄板を多量に含む。粘性が強くよくしまる。
6　黒灰色土　黒色粘土粒子を多量に含む、粘性が強くよくしまる。
7　灰白色土　黒灰色土粒子を少量含む、粘性強くよくしまる。
8　暗黄褐色土　均一で混じりがなく、堅くよくしまる。
9　橙褐色土　基本的に8層に同じだが、色調がやや灰色である。

第2図　1トレンチ土層断面図（1/40）

を行った第3トレンチでは、暗青灰色粘土層の下に若干の埴輪片と黒褐色土が検出され、堀底最下層の堆積土と判断しているが、今回の調査では再確認することができなかった（教育普及・調査研究担当2005）。今回の確認調査では、黒灰色土を10cmほど下げた面[1]での確認を行ったが、周堀の覆土およびプランは確認できなかった。土層観察の結果3層までが耕作土と耕地整理で動かされた土層で、4層以下が自然堆積土層である。5層以下は粘性が強く鉄斑を多く含んでいることから湿地性の土壌であることが分かる[2]。出土遺物は、埴輪細片が散発的に出土しているが、周堀プラン内での出土ではないことから、周堀は大半が旧忍川の氾濫等で消失したのではないかと想像している。

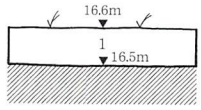
2地点は、諸事情により調査できなかった。

3地点は、稲荷山古墳の外堀の東約30mの地点にあたる。昭和44年撮影の航空写真によるソイルマークにより古墳と推定される箇所の約50m南である。幅1m長さ45mのトレンチを設定した、現況は最も低い水田面で標高が約16.7mである。表土下20cmでローム層を検出できるが、遺構・遺物は検出できていない。

4地点は、3地点の南で水田面が1段高くなっている。幅1m、長さ17mのトレンチを設定し地表から110cmでローム層が確認できるが、遺構・遺物は検出できていない。

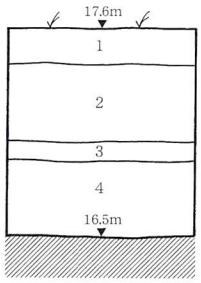
5地点は4地点の東に接して、幅1m、長さ22mのトレンチを設定したが、ほぼ4地点と同じく地表から115cmでローム層が検出される。遺構・遺物は検出されない。

6地点は、稲荷山古墳から200mほど東で、低い水田面である。幅1m、長さ23mの東西方向に長くトレンチを設定したところ、西から東へ



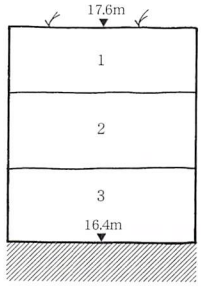
1　耕作土

第3図　3トレンチ土層断面図（1/40）



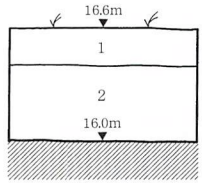
1　耕作土
2　暗茶褐色土　ローム粒子を僅かに含み、粘性がある。
3　灰褐色土　ローム粒子を多く含み、粘性がある。
4　暗黒褐色土　ローム粒子を少量含み、粘性がある。

第4図　4トレンチ土層断面図（1/40）



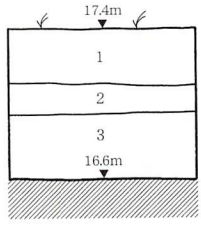
1　耕作土
2　灰褐色土　ローム粒子を多く含み、粘性がある。
3　黒褐色土　灰褐色土及びロームブロックを少量含み、粘性がある。

第5図　5トレンチ土層断面図（1/40）



1　耕作土
2　黒色土　腐食土層、しまりなく粘性がある。

第6図　6トレンチ土層断面図（1/40）



1　耕作土
2　暗茶褐色土　ローム粒子を僅かに含み、よくしまり堅い。

第7図　7トレンチ土層断面図（1/40）

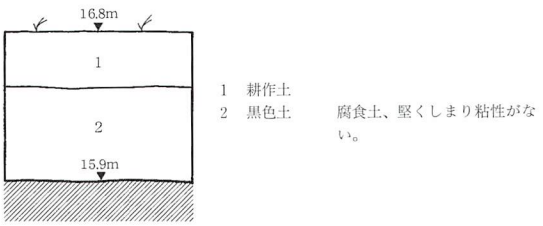
40cm低くローム層が傾斜した状況で確認された。遺構・遺物は検出されていない。

7地点は、幅1m、長さ22.5mのトレンチを設定した。地表下80cmでローム層を検出し、トレンチ西側で幅1m深さ55cmの南北に延びる溝を検出した。出土遺物は、陶磁器1片で遺物と覆土の状態から近世以降のものであると判断した。

8地点は、撹乱のため調査ができなかった。

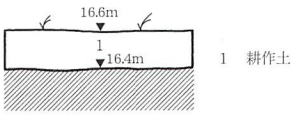
9地点は、幅1m、長さ11mの東西方向のトレンチで、西側は地表下36cmでローム層を検出したが、東側ではローム層の検出が地表下82cmとなり、ローム層上に黒色腐食土が堆積していた。このことから、西から東に地形の傾斜があることが推定できた。

また9トレンチの東に設定した10トレンチは、幅1m、長さ24mで、東側では地表下24cmでローム層を検出したのに対して、西側では47cmでローム層となり9トレンチ同様ローム層上に黒色腐食土が堆積していた。この状況から、9トレンチでは、東から西に向かって地形の傾斜が確認され、9トレンチと10トレンチの間に幅の狭い谷地形が埼玉地区を頭に旧忍川に向かって形成されていることが分かった。



第8図 9トレンチ土層断面図（1/40）

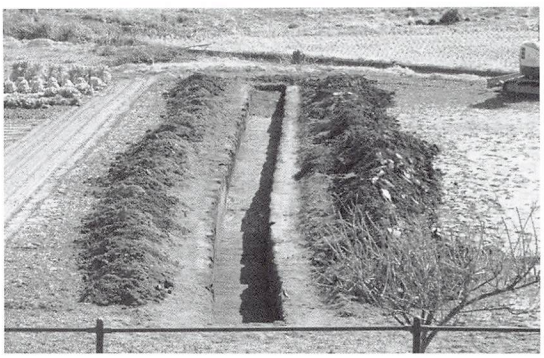
第9図 10トレンチ土層断面図（1/40）

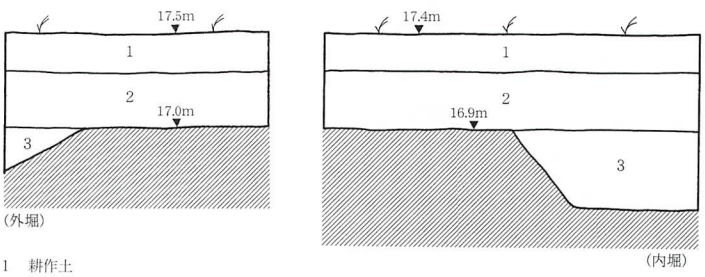


第10図 11トレンチ土層断面図（1/40）

11トレンチは、幅1m、長さ37m現地表下20cmでローム層を検出した。トレンチの東端に幅1.5m、深さ70cm断面U字形の溝がトレンチを横断する形で検出された。出土遺物はないが、覆土の状況から近世以降のものと判断される。ローム層上の標高は、16.36mで9トレンチの最低標高の15.97mに比べて高く、地形が上昇していることが推察できる。

12トレンチは、将軍山古墳のくびれ部付近東側に設定した。幅1m、長さ26mの東西方向のトレンチで、トレンチ西端から9mで内堀の中堤側の立ち上がりと23mで中堤から外堀への落ち込みを検出した。内堀の深さは、約40cmで、外堀は用水路に切られているために、堀底まで検出することはできなかった。中堤の幅は、14mである。将軍山古墳東側で検出されている周堀とほぼ対称の位置で検出された。掘り底の確認のため覆土の一部を調査し、円筒埴輪細片が出土している。将軍山古墳の史跡指定範囲は、古墳本体（一部）となっているため、東側の周堀が確認されたのは今後の指定範囲を検討するうえで意義が大きい。


12トレンチ検出状況

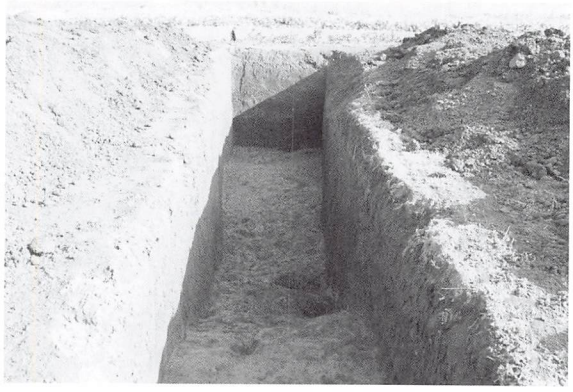


1 耕作土
2 暗茶褐色土 ロームブロック及びローム粒子を多量に含み、粘性がある。
3 黒色土 ロームブロックを多量に含む。

第11図 12トレンチ将軍山古墳内堀・外堀土層断面図（1/40）

13トレンチは、行田市教育委員会が排

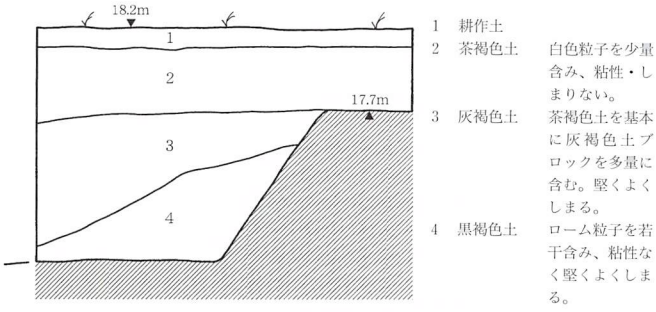
水溝工事に伴って調査を行った地点である。将軍山古墳の南東コーナー付近にあたり、かなりの削平を受けていたが内堀・外堀・中堤の一部を確認している[3]。



14トレンチ溝検出状況

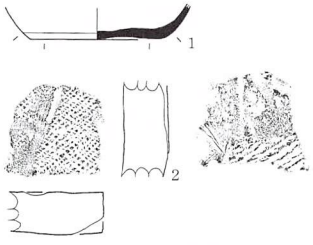
14トレンチは、「シャングリ山」と呼ばれ古墳跡と考えられていた地点である。民家となっているため、その南側にトレンチを設定した。古墳跡とされる箇所に近い場所で底面が平坦で最深部が約50cmの溝が検出された。古墳跡であることを予想して調査を行ったが、出土遺物には、鬼高の土師器坏小片が出土しているが、須恵器、布目瓦などが同時に出土していることから古墳の周堀ではなく８世紀以降の溝であると判断し、「シャングリ山」は古墳の可能性が低いと考えられる。出土遺物１は、須恵器坏で底径7.2cmである。底部は糸きりで、外縁にヘラケズリを行っている。白色の針状粒子を含む南比企産である。２は平瓦で、右側に端部の一部が残る。色調は橙色で酸化焼成である。このほかに溝に伴わないが、埴輪小片が２点出土している。

「シャングリ山」（山王山）については、「史蹟埼玉」（1936）では「山宮墳址」との記載があり、古墳跡との認識であった。その後「丸墓山古墳周辺の円墳分布状況」（1978）では、現白山愛宕山古墳が「シャングリ山古墳」とされており、今回「シャングリ山」としている箇所が「山宮古墳」と記載され、混乱がみられる。埼玉県古墳詳細分布調査報告書（1994）では、「山宮山古墳」として正式に古墳として扱われている。今回の試掘地点のすぐ南に所在する「鎌田氏館」を調査の際検出した溝の底面から須恵器が出土したことから、直径20mの「山宮南古墳」と仮称し、この北の「シャングリ山」を「山宮古墳」としている（斎藤国夫・門脇信一1999）。このように呼称が一定していないが、地元で「シャングリ山」とよばれていることと埼玉県古墳詳細分布調査報告書において「山宮山古墳」（シャングリ山古墳）と扱われていることから、試掘地点は「シャングリ山」と呼ぶこととした。



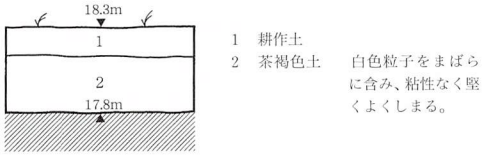
第12図　14トレンチ土層断面図（1/40）

15トレンチは、二子山古墳の約200m東で埼玉地区の中心にあたる部分に設定した。幅１m、長さ26mのトレンチである。地表下1.3mでローム層を確認したが以前宅地となっていた部分で、撹乱が多いため、正確な地山面の確認はできなかった。



第13図　14トレンチ溝出土遺物（1/4）

16トレンチは、二子山古墳の東100mの位置で、幅１m、長さ27.5mの調査を行った。地表下約60cmでローム層を確認し、溝３条を検出した。溝の覆土は、ロームブロックとローム粒子を多く含みしまりがない層であるため、近世以降のものと判断される。出土遺物はない。

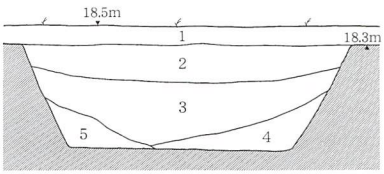


第14図　16トレンチ土層断面図（1/40）

17トレンチは、浅間神社（浅間塚古墳）北側にあたり、

現状は駐車場として使用されている。幅１m、長さ12mの調査を行った。地表下1.6mでローム層を確認しているが、ローム層上は、撹乱であった。

18トレンチは、奥の山古墳の前方部東方側と南方側の２箇所に設定した。18-１トレンチは、幅１m、長さ41.5m、18-２トレンチは、幅１m、長さ20mである。ともに耕作土下に幅３～４m、深さ約90㎝、断面U字形で底面が平坦の溝を検出した。遺構としてしっかりした溝であり、出土遺物に陶磁器があり近世以降の溝である。



1　耕作土
2　茶褐色土　白色粒子を若干含み、粘性なくよくしまる。
3　黄暗褐色土　茶褐色土を基本にローム粒子を多量に含む、粘性なくよくしまる。
4　暗茶褐色土　ローム粒子を多量、ロームブロックを少量含む。やや粘性がありよくしまる。
5　黄褐色土　ロームブロックを主体にローム粒子が少量混じる。粘性がありよくしまる。

第15図　18-２トレンチ土層断面図（1/80）

ま と め

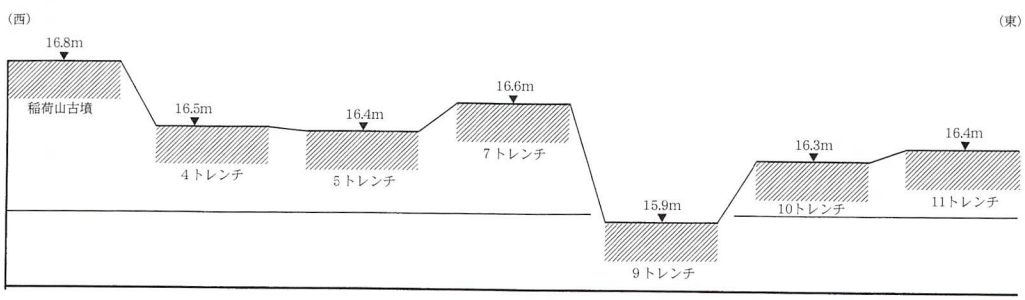
丸墓山古墳の西側の調査では、堆積した土層の検討を行った結果、低湿地または長期間低地化していたことが分かった。丸墓山古墳築造当時は存在したと考えられる西側と北側の周堀は、旧忍川の形成過程における氾濫等により開削されたものではないかと考えられる。旧忍川は、古墳時代にはここに流路を形成していなかったものと考えられ、旧忍川北側にある白山古墳群と埼玉古墳を同一とする考え方もあるが、地山の標高を比較した第17図を見れば、埼玉古墳群の台地は南側から旧忍川に向かって地形が下がっていることが分かる。このことから両古墳間には地形の変換点があり区別できると考える。しかし、稲荷山古墳の北西に見える小円墳跡と白山古墳側の台地は、ローム台地が連続していた可能性があり、明確に両古墳間に谷地形が存在したとは言い切れない(4)。

なお、稲荷山古墳東側のソイルマークで確認される小古墳から将軍山古墳北側にかけては、古墳時代の遺構・遺物は検出していないことから、埼玉古墳群の北東への広がりは若王子古墳まではないものと考えられる。一方将軍山古墳東側での内堀・中堤・外堀の検出は、予想された範囲で検出できたことは大きな成果である。

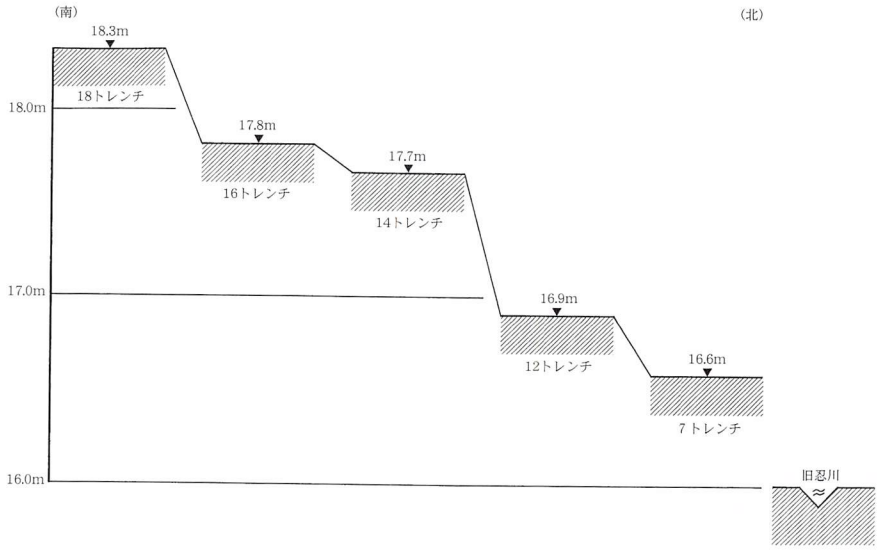
二子山古墳東側では、「シャングリ山」が古墳跡とされていたが、今回の調査で古墳の可能性が低いと判断され、さらに16・17トレンチにおいても古墳に関連する遺構・遺物が検出されなかったことから、二子山古墳から東側へは埼玉古墳群が拡大しないと考えられる。

奥の山古墳の南に設定したトレンチでも、古墳時代の遺構は検出されていない、このことは当古墳群の南端を考える上で、重要な意味を持つ。

埼玉古墳群の北から東側を回り南側を試掘調査したが、古墳時代の遺構・遺物は検出できなかった。このように、埼玉古墳群周辺の地形についてはだいぶ明確になってきた。



第16図　東西地形断面図



第17図　南北地形断面図

今回調査を行った古墳群東側について検出したローム層の面を比較したところ、東西では稲荷山古墳から東側にかけて低くなる傾向があり、途中の９・10トレンチの間には埋没谷があることが分かった。

南北では、奥の山古墳側が最も高く将軍山古墳の中堤検出面との比高差は、1.4mとなりさらに旧忍川に向かって傾斜している。旧表土下でのローム面の比較ではないので、正確な地形比較にはならないが西から東へと南から北側の旧忍川方向へ地形の変化があることが考えられる(5)。今後、これらのことを総合して埼玉古墳群の指定範囲拡大の基礎資料としたい。

今回調査を行うにあたっては、行田市世界遺産推進担当小巻政史氏、行田市教育委員会中島洋一氏、田島裕介氏の全面的な協力をいただき、作業には当館職員井上尚明・西口正純・石坂俊郎があたった。また、14トレンチ出土の瓦については(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団木戸春夫氏に御教示をいただいた。

《註》

(1)　平成15年度に確認面とされた面に相当する。

(2)　㈱パレオラボの観察によれば、長期間湿地的な環境にあったことが考えられるとする見解を口頭で得ている。

(3)　調査の成果については、行田市教育委員会中島洋一氏の知見による。

(4)　白山古墳群の中で最も旧忍川に近い白山愛宕山古墳まで、ローム層が確認されている。行田市教育委員会中島洋一氏の教示による。

(5)　丸墓山古墳の旧忍川を挟んだ対岸を、平成21年11月に行田市教育委員会が行った試掘調査によれば、白山古墳群側（北側）から旧忍川（南側）へ緩やかな傾斜が確認されている。行田市教育委員会篠田泰輔氏の教示による。

《参考文献》

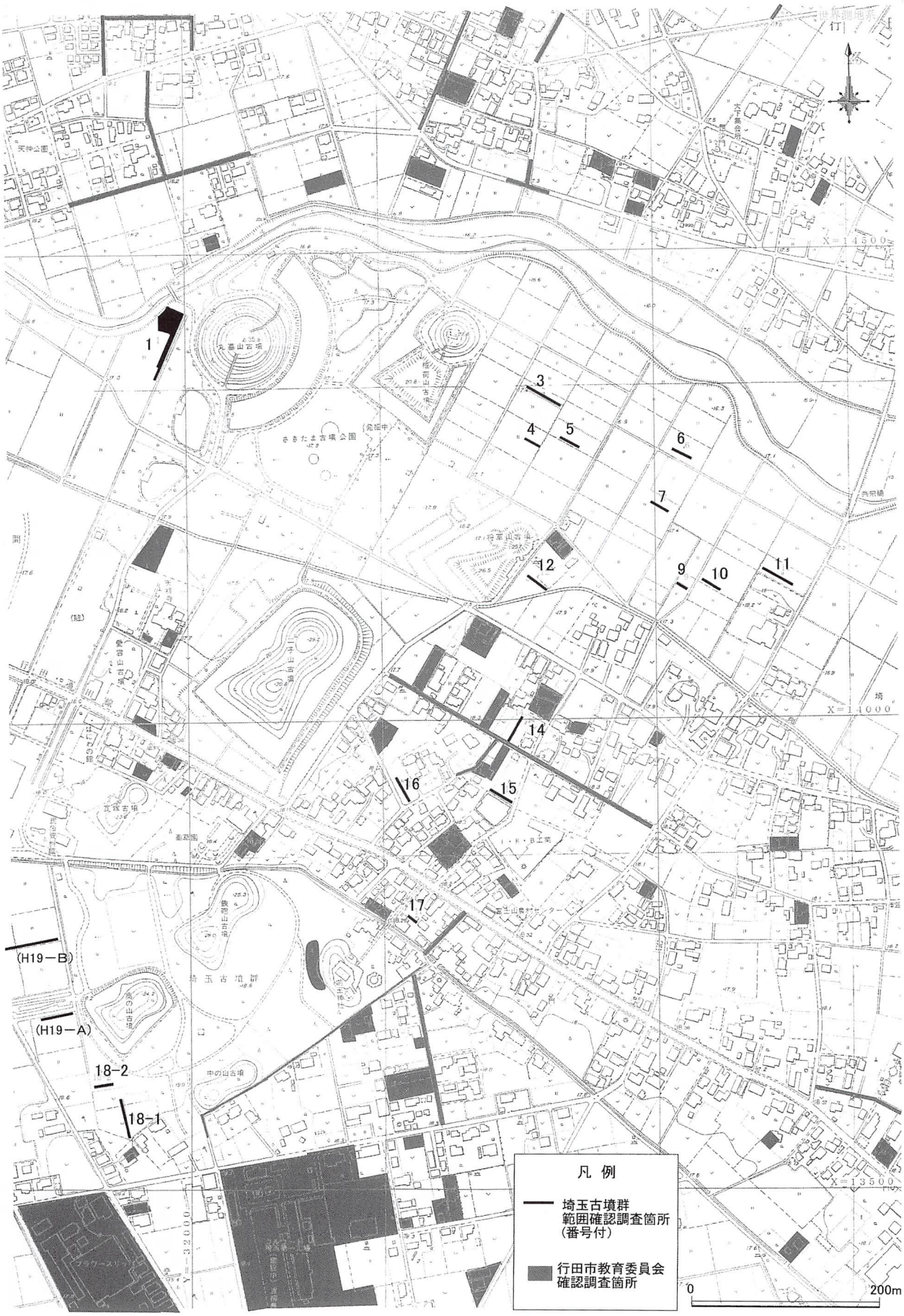
教育普及・調査研究担当　2005　『丸墓山古墳西方隣接地区試掘調査報告』埼玉県立さきたま資料館

埼玉県教育委員会　1994　『埼玉県古墳詳細分布調査報告書』

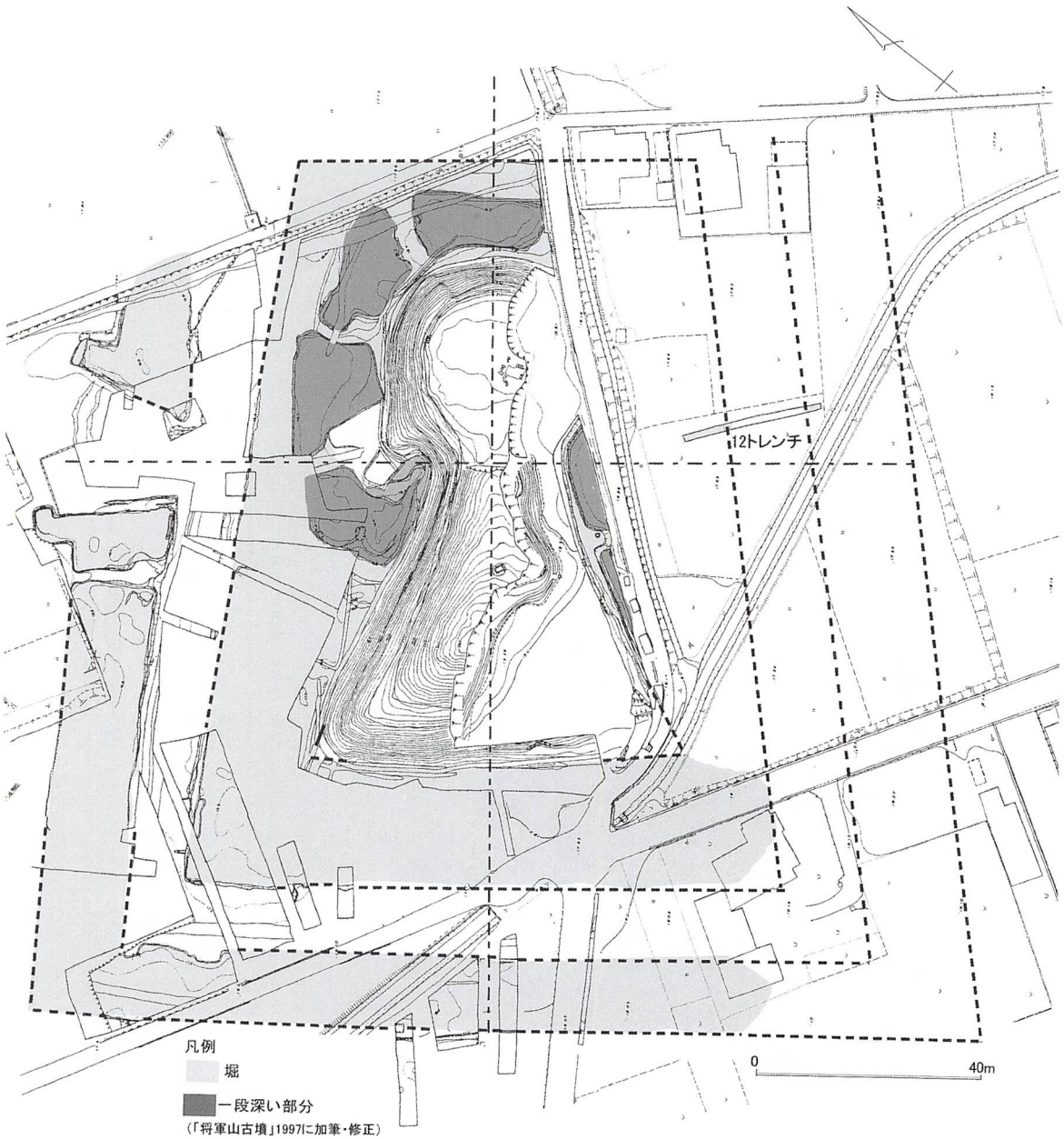
高木豊三郎　1936　『史蹟埼玉』埼玉村教育会

斎藤国夫・門脇伸一　1999　「鎌田氏館跡」『行田市文化財年報―平成８・９年度事業報告―』行田市教育委員会

西口　正純　2009　「埼玉古墳群周辺の範囲確認調査」『紀要』第３号　埼玉県立史跡の博物館



第18図　平成20年度埼玉古墳群範囲確認調査トレンチ配置図



第19図　将軍山古墳周堀復原図

奥の山古墳の地中レーダー探査実験について

佐藤源之*・渡邉　学**・井上尚明

*東北大学東北アジア研究センター長
**東北大学東北アジア研究センター

はじめに

これまで、埼玉古墳群の中で主体部の調査が実施された古墳は、稲荷山古墳と将軍山古墳の２古墳だけである。稲荷山古墳は、さきたま風土記の丘整備事業開始に伴い、将軍山古墳については、主体部を含む墳丘東側が崩落の危機に直面していたため、主体部の調査を実施している。稲荷山古墳には、金錯銘鉄剣など国宝が出土した礫槨と粘土槨の屋外展示模型が設置され、将軍山古墳の後円部東側にはカプセルを被せたような展示館が造られ、古墳の内部を見学できるような施設となっている。これ以外の古墳については、鉄砲山古墳が横穴式石室であろうなどの議論はされているが、確認されてはいない。

発掘調査を伴わない地下遺構確認方法の一つとして、レーダー探査などがある。埼玉古墳群におけるレーダーや電気探査については、昭和57年７月に稲荷山古墳と丸墓山古墳を、平成10年５月には稲荷山古墳の墳頂部を実施している。これらは何れも試験的なデモンストレーションであり、事業化し予算を伴ったものではない。その結果についても簡単な報告として、内部資料的な扱いとして残されているだけであり、客観的に内容の評価・分析を行ってはいない。当館では、平成18年度に『史跡埼玉古墳群保存整備基本計画』を策定し、各古墳の主体部の確認などを調査計画に挙げている。この計画に基づき新たな整備事業を開始して以来、毎年レーダー探査などの予算要求をしてきたが、実現するには至っていない。今回の探査実験も、館の独自事業として実施したものではなく、東北大学東北アジア研究センターの全面的な協力で、「史跡埼玉古墳群の地中レーダー探査実験に関する共同研究」という形で実現できたものである。

なお、レーダーなどの地中探査については、「遺跡探査実態調査」（奈良国立文化財研究所2000）によれば埼玉県内では20ヶ所ほどが記載されている。この他にも鹿島古墳群や先にあげた丸墓山古墳で実施されており、20ヶ所中古墳が５ヶ所６回となっている。

１　奥の山古墳の現状

奥の山古墳は、埼玉古墳群では２番目に小さな前方後円墳で、『史跡埼玉古墳群保存整備基本計画』に基づき、新たな史跡整備に伴う最初の調査・整備の対象となった古墳である。その大きな理由は、周堀が水堀となっており、水位の上下によって汀線部分が抉られ崩落の危険があったことと、何よりも見学者への安全対策のためである。墳丘崩落防止工事と安全柵設置に先立ち遺構の保存状

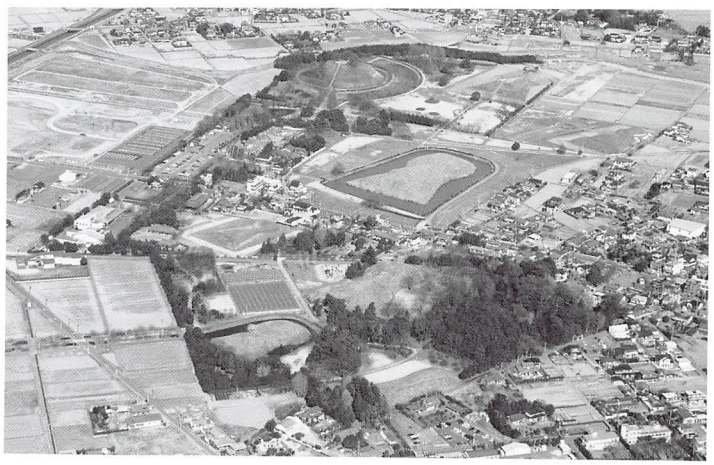


図１　埼玉古墳群全景（南から：写真中央左下が奥の山古墳）

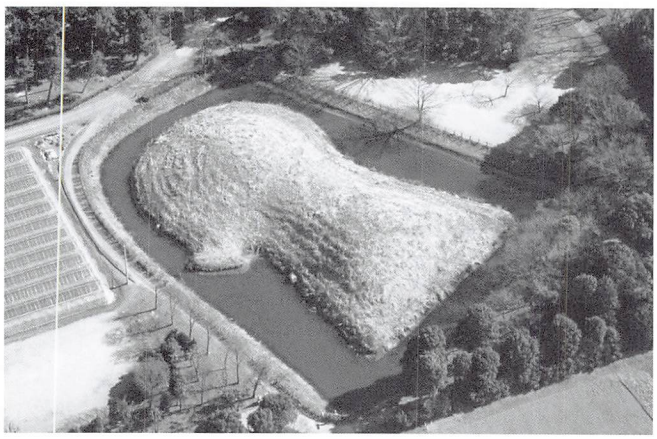


図２　奥の山古墳全景（南西から）

態を確認するため、平成19年度から発掘調査を開始したところ、新たに外堀が発見され、二重周堀の前方後円墳であることが確認できた。

奥の山古墳は、昭和43年に３本のトレンチ調査を実施し、44年度には周堀の整備を行っており、埼玉古墳群のなかでは唯一、一重で盾形の周堀を持つ前方後円墳として復原されている。現在公表されているデータは、墳丘の全長70m、後円部径30m、後円部高3.4m、前方部幅30m、前方部高3.3mで、時期は６世紀中頃と考えられている。二子山古墳と同様に水堀にする目的で堀を掘削してしまったため（小川他2003）、堀には雨水と自然水位の上昇などで冬季の一時期を除き滞水している状態である。平成19年度からの発掘調査で、中堤を挟んで外堀を有する平面形も台形に近い長方形系統であることが判明し、珪藻分析などで常時滞水していないことなども確認された。これらの成果に基づき、21年度からは内堀を水堀から空堀へと修正し、外堀・中堤の復原整備を開始する計画で、整備の実施設計を行っている。21年９月、時期の確定や墳丘規模確認のため造出しや墳丘裾部の調査を実施しているが、これまでの認識と異なる情報も得られており、調査の進展を見つつ墳丘の整備についても検討していきたい。

埼玉古墳群では、二子山古墳のように後円部墳頂にクレーター状の大きな盗掘坑があったり、丸墓山古墳のように墳頂部が平坦に削平されているなど、主体部の保存状態が危ぶまれる古墳が少なくない。奥の山古墳の北側にある鉄砲山古墳、東側の中の山古墳なども、後円部を中心に盗掘坑が確認できるのに対して、奥の山古墳は後円部だけではなく前方部にも大きな歪みはなく、大規模に

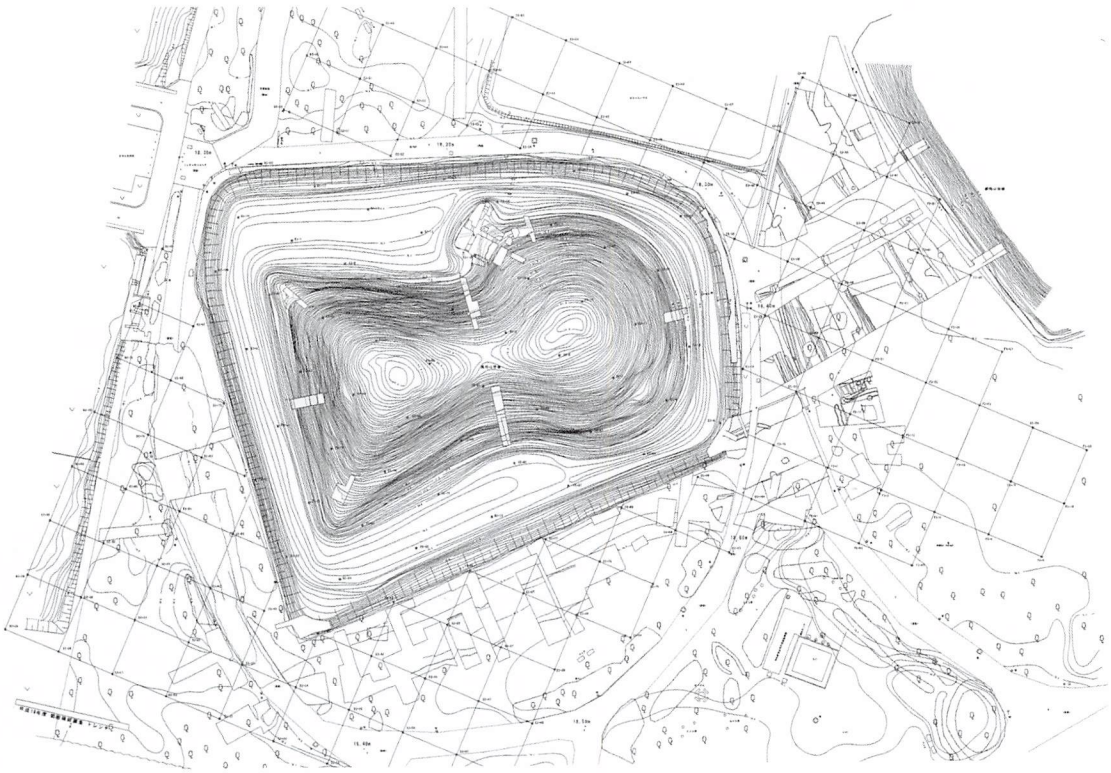


図３　奥の山古墳実測図

盗掘を受けていない可能性が高い古墳である。奥の山古墳を今回のレーダー探査の対象として選定したのは、①発掘調査中であった　②樹木などの障害物がない　③目立った盗掘坑がなく、主体部が存在する可能性が高い　などの理由によるものである。なお、稲荷山古墳や将軍山古墳の例から後円部を対象としたもので、前方部に主体部が存在する可能性を否定しているものではない。

2　地中レーダー（GPR）探査の経過

地中レーダー（Ground Penetrating Radar：GPR）探査は非開削で地下の様子を探る事が可能なため、我が国においても遺跡探査で使用される事例が増えている。しかし、従来のGPRシステムを使った場合、埋設物の有無は判定できても、やや鮮明でない画像のためレーダー画像から対象物の形を推定することが難しい場合がみられた。GPR画像が鮮明でない原因のひとつは電波を送受信するアンテナの位置が不安定であることが挙げられる。従来の方法では、測定対象領域に数cm～数十cmおきに平行な測線を巻き尺などで設定し、その上をアンテナを移動させながらデータを取得していた。しかしこの方法では地表面に起伏がある場合などにアンテナ移動位置に誤差が生じることに加え、測定時間が長くなっていた。また、古墳の頂上部のような高低差のある地形では測線の設定そのものが難しく、測定例は限られていた。

我々の研究グループはマイアミ大学Grasmueck博士らと共同で、3次元地中レーダーシステム（3DGPR）の応用研究を進めてきた。3DGPRは、従来のレーダー探査システムにレーザーを用いた位置計測システムを用いることで、アンテナの位置を数mmの精度で得る事を可能にし、これにより位置精度が格段に向上するため起伏がある地表面でも鮮明なレーダー画像を得る事に成功している。今回は3DGPRシステムを奥の山古墳頂上部で利用することを試みた。

3　GPR計測と結果

図4に計測を行った奥の山古墳頂上部を示す。計測範囲での高低差は1m程度であり、通常の測線の設定では大きな位置誤差が予想される。奥の山古墳では、5m×9mの範囲で500MHz，250MHz，100MHzの中心周波数をもつアンテナを用いた3回のGPR計測を行った。一般に、低い周波数を使用すると深い深度の物体を計測できるのに対し、画像の分解能[1]はやや低下する。高い周波数では画像分解能は高まるが深い位置の計測が難しい。そのために、今回は3種類の周波数のアンテナを利用して、計測結果を比較することとした。また、初めて計測を行う場所では、土壌の電気的特性が未知であるため、いくつかの周波数を利用した計測を行い、最適の周波数を選択することが、非常に大切である。

図4　奥の山古墳頂上部での計測の状況

3DGPR実験を行った場所と座標の定義を図5に示す。アンテナを走査した方向をY、それと直角方向をXと定義する。また奥の山古墳の測定の様子を図6に示す。図中で三脚に取り付けられている装置が、GPRアンテナ位置を正確に計測するためのレーザー送信器で、探査範囲を見渡せる位置に2台設置してある。また、操

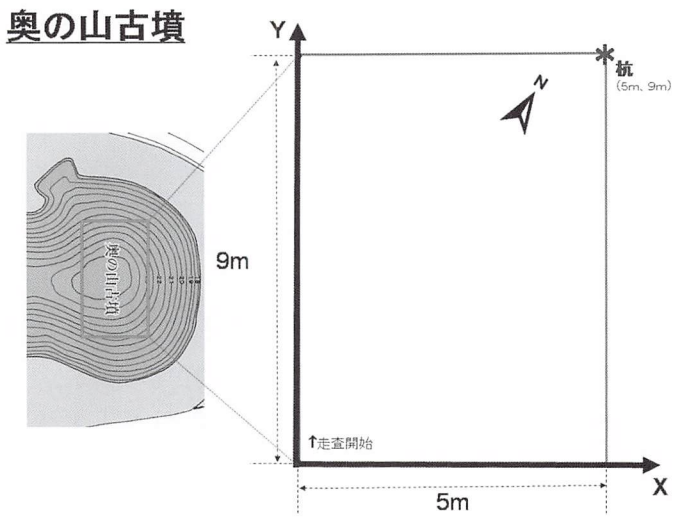


図 5　奥の山古墳平面図面

図 6　3DGRP 用レーザー送信機と
GPR アンテナ（100MHz）

図 7　3DGPR 用受信器を装着した
GPR 受信アンテナ（250MHz）

作者が牽引している装置が100MHz の GPR アンテナで、この上にレーザー受信装置が取り付けられている。レーザーの送受信で得られた位置情報とレーダーで取得されたデータは、無線 LAN 経由で離れた場所に固定して設置したパソコンに送られ、アンテナの位置と GPR データが記録される。

4　探査結果の評価

(1)　GPR のデータ解釈にはいくつか注意すべき点がある。電波は光に比べてより回折効果[2] が強いため、地中物体の形状を明確に映し出すことはできない。そのため、画像には常に実際の形状より広がりがある。一方、GPR で捉えられた物体の材質や状態をレーダーのデータだけから正確に推定することは難しい。更に、土壌には水分が不均質に含まれるが、電波はこうした水分が不均質に分布する境界からも反射を受けるため、埋設物が実際には無い位置に虚像が現れることもある。

しかし、一般的には古墳のような人工的に土が盛られた比較的均質な土壌の場合、レーダーで捉えられる画像は土壌とは異なる天然の玉石、人工的に埋設された石材、木材、あるいは陶磁器などである可能性が高い。

100MHz, 250MHz, 500MHz の周波数のアンテナを用いて得られた GPR データを処理した画像（GPR プロファイル）を図 8 —10に示す。GPR のデータはアンテナを地表面で 2 次元的に走査しながら、それぞれの位置で垂直方向に地下の様子を捉えている。従って、取得したデータを統合する

と地下の３次元情報が得られる。そのうえで、3DGPR では選択した任意の深度のデータを平面図として表示できる。この図は特定深度の地下水平断面図とみることができる。ただし土中の電波速度0.075m/nsec を仮定して深度を算定したが、実際には土壌水分率によって電波の速度は変化するため、図に示した深度は10―20％程度の誤差を含んでいる。

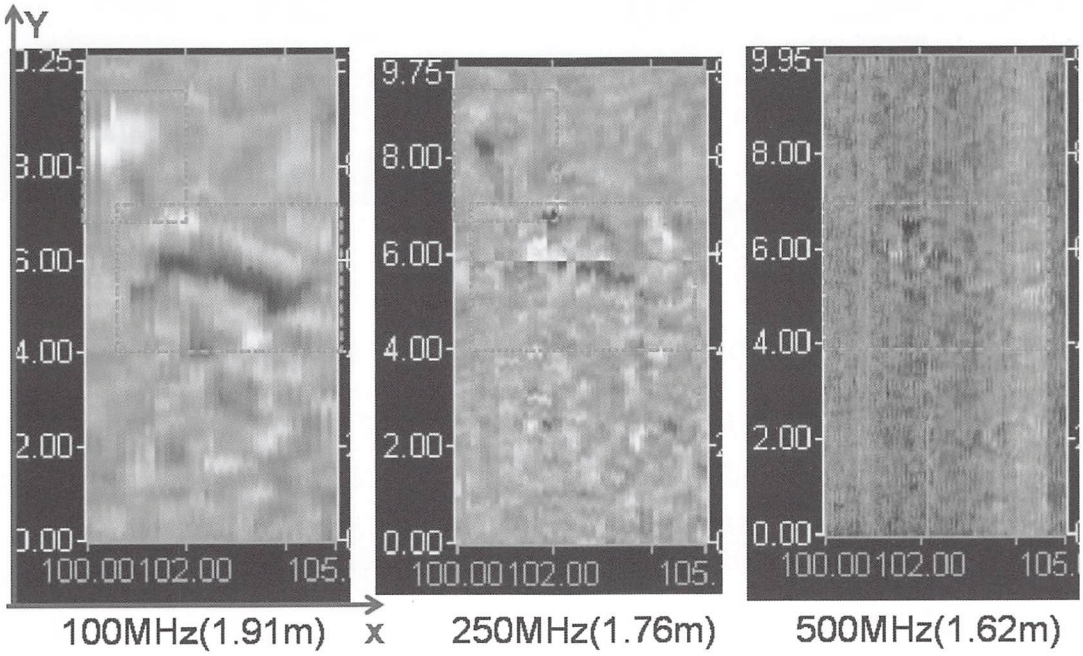
図８では深度1.6―1.9m付近の水平断面図を示している。横向きに広がる幅50cm（Ｙ方向）、長さ２ｍ（Ｘ方向）ほどの長方形の物体が100MHz のデータ（Ｘ＝103，Ｙ＝６）に表れており、250MHz，500MHz でも同一地点に影が見える。長方形の長軸はほぼ東西に沿っており、奥の山古墳全体の長軸からはやや傾いている。この物体は深度方向に50cm程度の広がりを持っている。GPR 波形から、この物体の材質や性状を正確に推定することは難しいが、形状や大きさから、築山に含まれる土壌ではなく、何らかの構造物があると考える方が自然である。ただし、これが石室であるとか、内部が空洞か土に埋もれているかなどの推定については、今回測定した情報からだけでは判断は難しい。

またそのやや上方（Ｘ＝101，Ｙ＝８）に、孤立した点のような異常体が見られる。これは、玉石のような孤立した、直径30cm程度の物体からの反射波であると推定する。

図９は深度２ｍ付近の水平断面図であるが、３つの周波数に共通した位置（Ｘ＝102，Ｙ＝７）に点状の異常物が見える。この物体は、やはり玉石のような円い形状をしているが、やや大きく、直径50cm程度かもしれない。材質は天然の石か、人為的に埋設された何らかの物体であるかの識別はこのままでは難しい。

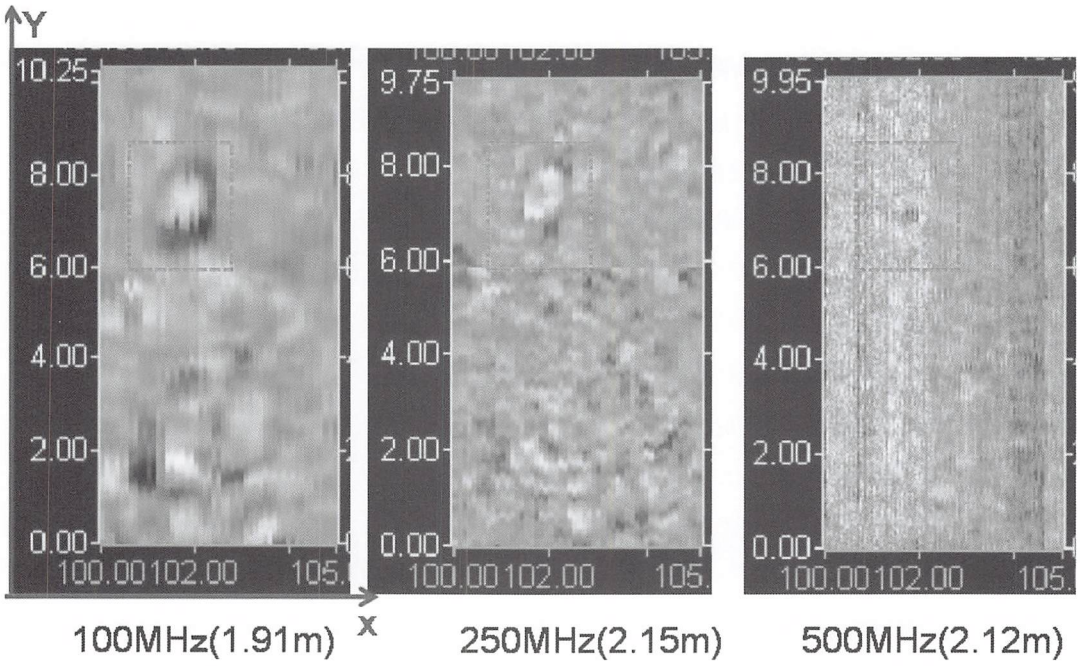
更に図10に深度３ｍ程度の水平図を示すが、500MHz を除き、横向きに広がる幅50cm、長さ２ｍほどの異常体が（Ｘ＝102，Ｙ＝２）確認できる。この物体も長方形であり、深度2.5mから３ｍ付近に存在している。この物体は奥の山古墳全体の長軸にほぼ沿って存在している。

(2)　これまで見てきたように、探査の結果いくつかの物体の反応が現れており、現状でこれらを考古学的にどのように解釈可能かについて触れてみたい。仮に、図８の直径30cm程度の物体をＡ、同図の幅50cm、長さ２ｍの長方形の物体をＢ、図９の直径50cmほどのものをＣ、図10の幅50cm、長さ



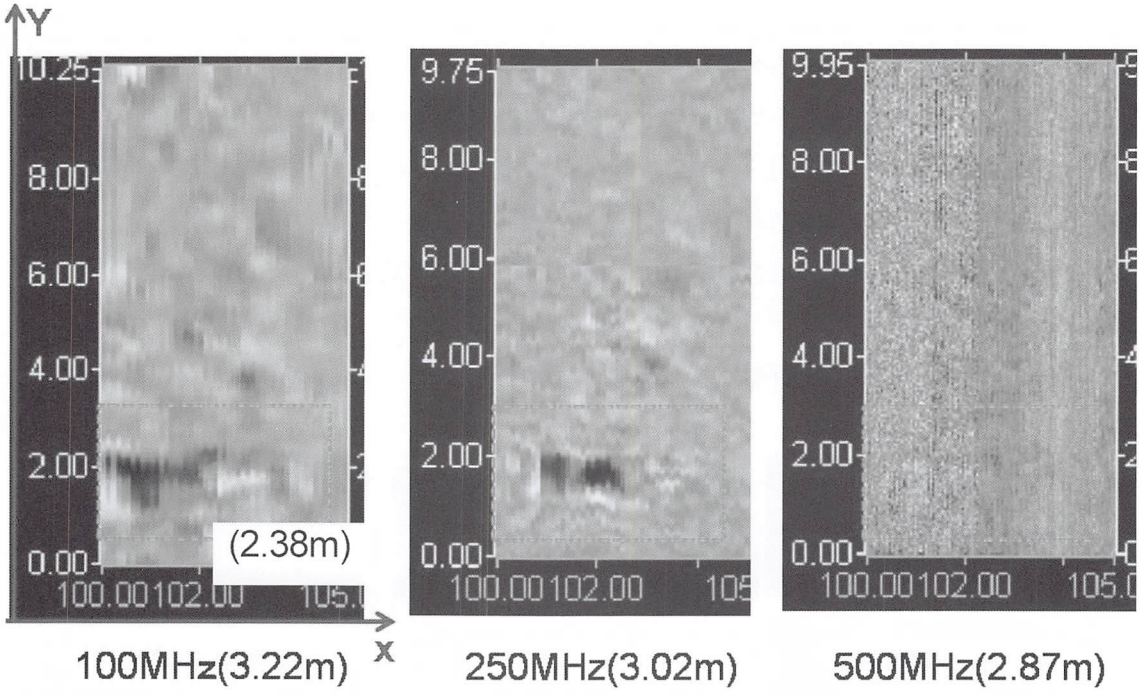
(a)100MHz　　(b)250MHz　　(c)500MHz

図８　奥の山古墳水平スライスイメージ（深さ～1.8m）



(a)100MHz　(b)250MHz　(c)500MHz

図９　奥の山古墳水平スライスイメージ（深さ～２ｍ）



(a)100MHz　(b)250MHz　(c)500MHz

図10　奥の山古墳水平スライスイメージ（深さ～３ｍ）

２ｍ程の長方形の物体をＤとしておく。ＡとＣについては、両者とも玉石状の円形の形状であるが、遺物であるかを含め石かどうかの識別はできない。これに対して、ＢとＤは幅50cm・長さ２ｍと同程度の規模で、Ｂについては深度方向の広がりも50cm程度と判明している。つまり、長さ２ｍで幅と高さが50cmの箱状の物体であることが想定されるのである。Ｂは後円部墳丘中央部から1.6―1.9ｍの深さであり、古墳主軸ラインの北西で長軸は東西に近い方向を示している。これに対してＤは、深さ2.5―３ｍとやや深い位置にあり、ほぼ古墳主軸と平行する墳丘頂部南東側で確認されている。両者は位置・深度・主軸ともに異なっているが、墳丘主軸線上でないことは共通している。

これら４点の物体について、ＡとＣに関してはいくつかの想定は可能であるが、推測に推測を重ねる結果になるので、ここではＢとＤについて類例と比較してみたい。ＢとＤの映像を見た時、最も規模・構造ともに近い遺構として、周囲にこれを取り巻く反応もないことから、石室内部に安置されるタイプではない箱式石棺ではないかと考えた。行田市内では小見真観寺古墳・小針鎧塚古墳・大日塚古墳で箱式石棺が発見あるいは存在が想定されているが、小見真観寺古墳の第１主体部は複室構造の横穴式石室で、玄室床面に４本の溝があることから、箱式石棺を安置したと想定している。第２主体部については、横口式石槨か横穴式石室の特異な一形態と考えられていたが、緑泥片岩を組合せた箱式石棺とされ、長さ2.8m×幅1.76m×高さ1.12mである。小針鎧塚古墳では、６世紀中ころの胴張りのある横穴式石室内に石棺が安置されていた。大日塚古墳は、埼玉古墳群の西に隣接する佐間古墳群にあり、内径22mの円墳で２基の粘土槨とその下方30cmで１基の箱式石棺が発見された。長さ1.8m×最大幅50cmで厚さ５～７cmの緑泥片岩を使用している。報告書（斎藤1978）では時期的には６世紀前半としている。現深谷市の小前田古墳群では、５基の箱式石棺が調査されているが、明確な墳丘を伴うものはなく、同様な構造の埴輪棺も発見されている。古墳の周堀であるなら、２基の箱式石棺を主体とするであろう周堀状遺構も検出されているが、可能性として止めている（瀧瀬1986）。石棺のプランは楕円形と長方形、石材は河原石や砂利・片岩を使用し、規模も棺部の最大が長さ1.96m×幅0.42mの５号石棺から、長さ0.9m×幅0.38mの２号石棺まで多様である。

これらの他に、現本庄市生野山将軍塚古墳では、墳裾に長さ1.65m×幅0.25mの緑泥片岩の石棺が発見されており、５世紀中葉とされている。また、滑川町糟沢古墳では、開墾時に墳丘のない部分で長さ1.8m×幅0.4mの規模の箱式石棺が確認されている。川島町大塚古墳の箱式石棺は、現在は町指定文化財となって川島中学に保管されているが、江戸時代に墳丘が削平された際に発見されたもので、長さ2.32m×幅0.8m×高さ0.55mで、蓋石も一枚石である。６世紀中ころとされている。滑川町屋田７号墳・同寺前２号墳・秩父市原谷村古墳・騎西町小沼耕地１号墳などでも箱式石棺の可能性を指摘されているが、石材片の存在からの間接的な指摘である。滑川町の松原古墳もその一つであるが、他の多くの古墳が緑泥片岩を使用している中で、凝灰岩による組合せ石棺という特徴がある（塩野2004）。

以上、今回の探査実験結果と考古学的知見の２層をレイヤーしてみた時、奥の山古墳の後円部には２基の箱式石棺が存在する可能性がある。これまで見てきた他の箱式石棺の規模・構造・時期とも齟齬は見られず、稲荷山古墳の粘土槨や礫槨と将軍山古墳の横穴式石室とも異なる主体部構造が奥の山古墳にはあったのではないか。誤差を想定すれば木棺直葬や粘土槨・礫槨あるいは舟形石棺等も考えられるが、現段階での考古学的評価として上げておく。前方後円墳との組合せの問題などは、報告書で考察したい。

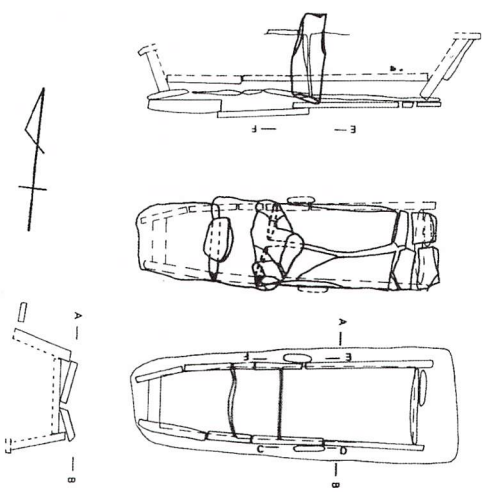


図11　大日塚古墳

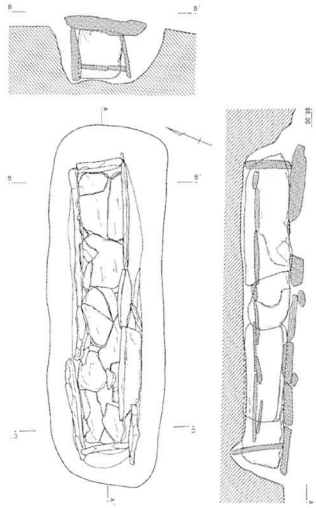


図12　小前田古墳群５号石棺

なお、奥の山古墳は整備途中であり、ここでは位置図の掲載などは控えておきたい。

おわりに

今回の探査実験について、「史跡埼玉古墳群保存整備協議会」で報告したところ、委員から主体部探査も重要であるが、レーダー探査の結果と発掘調査の結果を比較検討できる地点を選定したらどうかとの意見があった。主体部発掘調査の可能性については、これまでの文化庁との調整や現状の財政状況からは厳しいと言わざるを得ない。今回の実験結果を、すぐに発掘調査によって検証することは難しいのが現実である。東北大学東北アジア研究センターとの打ち合わせでは、今回のような探査実験は継続して実施することで合意しており、今後の探査地点選定については協議会での意見も反映しながら、両者で協議して決定していこうと考えている。埼玉古墳群の発掘調査と整備は長期的な継続事業であり、マクロとミクロ両面からの視野と計画の中で、共同研究に相応しい有効な方法で実験を継続していきたい。

なお、今回行った実験では、奥の山古墳の他に稲荷山古墳後円部墳頂も対象とした。稲荷山古墳後円部では、礫槨と粘土槨の2基の主体部が確認されているが、第3の主体部の存在については、これまでにも何度か指摘されており（増田1999・大塚他2001・小川他2003・若松2007）、埼玉古墳群の解明ばかりでなく、日本古代史・東アジア古代史においても重要な問題として注目されている。特に小川は、前述した2回のレーダー探査の情報を初めて紹介し、5つの埋葬施設が存在する可能性を示唆している。残念ながら、今回の実験では時間的な制約や機器の調整、あるいは多くの見学者が通過するたびに作業を休止しなければならないなど、条件が整わず充分な探査ができなかった。500MHzのみの実験であったが、人工物と思われる物体からの反射を確認しており、今後も実験対象として俎上に上げたいと考えている。

最後になったが、探査機材の運搬や機器の牽引は重労働である。3月とはいえ日差しの強い3日間にわたり、重い機材を担いで墳丘や階段を何度も往復し、日影のない中での作業となった。感謝するとともに、佐藤教授をはじめとするセンターのメンバーのご苦労に報いるよう、実験成果を活用していきたい。また、差し入れなどをして頂いた地域の方々にも併せてお礼を述べたい。

謝辞

本研究の一部はJST戦略的国際科学技術協力推進事業「地中レーダー（GPR）による高精度地下3次元可視化」によるものである。

《註》

(1) 画像分解能：レーダー画像は回折効果でピントがぼやけたようになる。画像の上で2つの物体を識別できる最小の大きさを画像分解能と定義する。

(2) 回折効果：電波の波長が物体の大きさより長い場合、反射した電波が直進せず折れ曲がる効果。

《引用・参考文献》

大塚初重他　2001　『稲荷山古墳の鉄剣を見直す』学生社
小川良祐他　2003　『ワカタケル大王とその時代』山川出版社
斎藤国夫他　1978　『大日種子板石塔婆および古墳の調査』行田市教育委員会
塩野　　博　2004　『埼玉の古墳』さきたま出版会
瀧瀬　芳之　1986　『小前田古墳群』(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団
奈良国立文化財研究所　2000　『埋蔵文化財ニュース98―遺跡探査実態調査―』
増田　逸朗　1999　「辛亥銘鉄剣と武蔵国造」『国学院大学考古学資料館紀要15』
若松良一他　2007　『武蔵埼玉　稲荷山古墳』埼玉県教育委員会

日誌抄

1　期　　間　平成21年３月17日～19日

2　メンバー　東北大学東北アジア研究センター：

佐藤源之・渡邉　学・趙　維俊・劉　　海・村谷直紀

埼玉県立さきたま史跡の博物館：

井上尚明

3　日　　程　３月17日（午後）：奥の山古墳の現状確認と打合せ

３月18日（終日）：奥の山古墳後円部墳頂のレーダー探査実験

３月19日（午前）：稲荷山古墳後円部墳頂のレーダー探査実験

機材の準備・点検

墳丘での機器セッティング状況

準備完了・探査開始

メジャーに沿って装置を移動していく

稲荷山古墳後円部での探査実験風景

パソコンなどの機器を背負い装置を牽引する

コラム「さきたま思い出写真館」③

堀内紀明

写真は、主に昭和40年代後半から50年代前半のものである。この時期の写真には、子供のころの遠足、家族での小旅行等、人々ともに歩んだ埼玉古墳群の思い出が残されていた。

写真３　「埼玉古墳群に到着」（昭和44年頃）
バスが到着し、見学者が降り立ったところであろう。正面奥に見えるのが丸墓山古墳である。

写真４　「収穫時期の丸墓山古墳」（昭和44年頃）
中央左側の墳丘が丸墓山古墳、右側が稲荷山古墳である。

写真５　「埼玉古墳群への遠足」（昭和46年頃）
国指定史跡・古墳公園として整備が進む中で、埼玉古墳群は、県内外の小中学生の社会科見学の場として活用されるようになる。

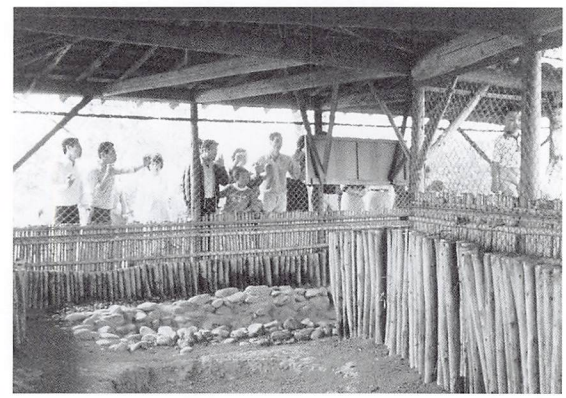


写真６　「稲荷山古墳礫槨」（昭和53年頃）
金錯銘が発見された頃の稲荷山古墳見学者の様子である。当時、後円部主体部は覆屋で保護されていた。

史跡整備と考古学Ⅰ

── 埼玉古墳群の整備が目指すもの ──

井上尚明

はじめに

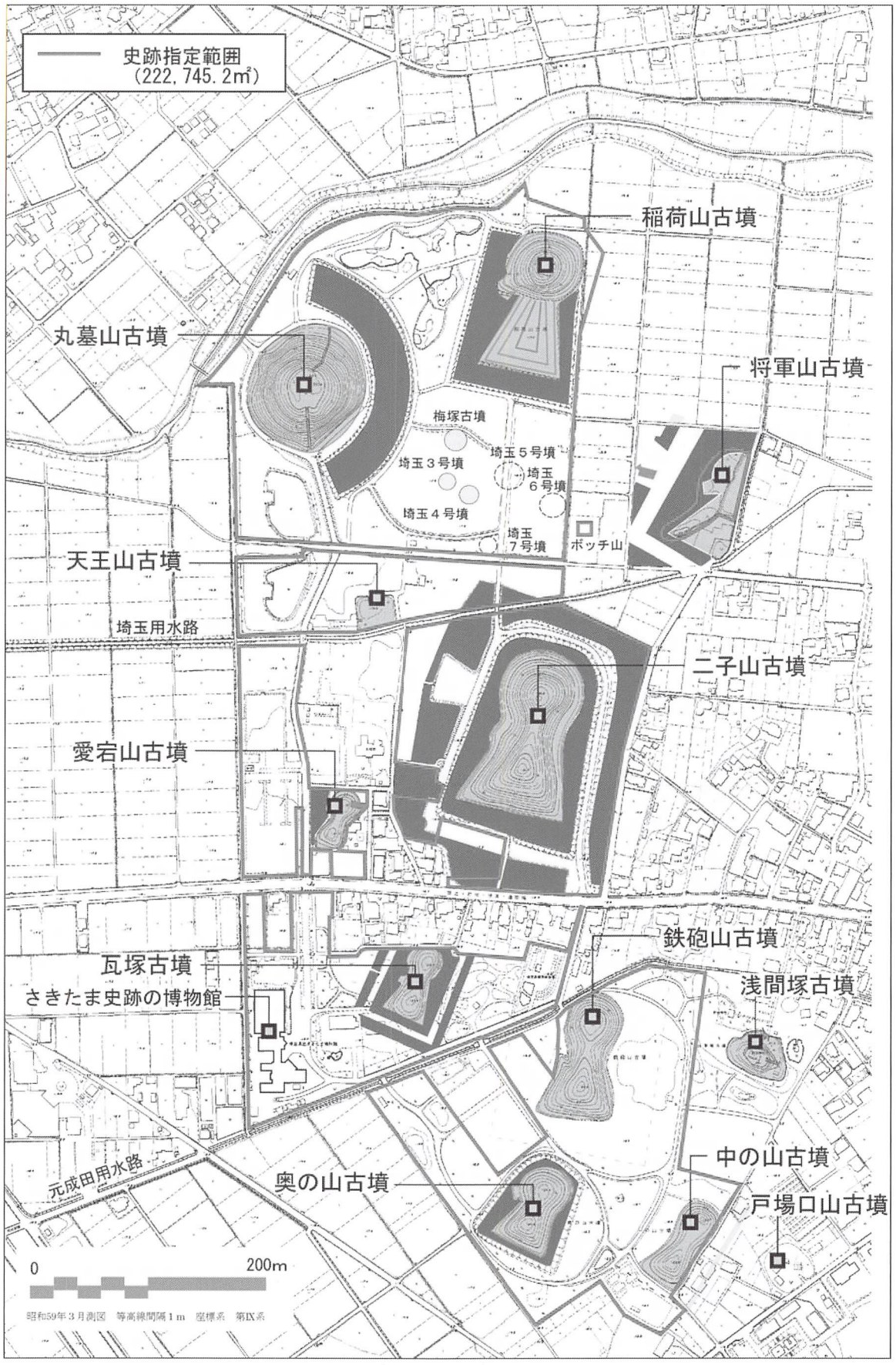
現在、史跡整備を担当している大部分の自治体職員は、大学で考古学を専攻し埋蔵文化財を専門とする職員ではなかろうか。史跡整備を専攻できる学科なども散見できるようになったが、まだまだその数は限られており、少なくとも埼玉県には整備を専攻した職員は配置されていない。しかし、遺跡の発掘調査数の減少に影響されることなく、整備を必要とする史跡等は存在し、歴史的遺産や環境への関心の高まりとも相俟って、史跡整備への期待と必要性はさらに大きくなることが考えられる。

自治体では、考古学を専攻した史跡整備担当職員が中心であるのに対して、文化庁では整備部門の職員は造園や庭園などを専門とする技術系職員である。今後も多くの自治体では埋蔵文化財担当職員達が史跡整備も担っていくことになろうが、史跡を保存し整備を進めるためには、我々も専門の欄に「史跡整備」と記入できるような努力も必要である。そのための研修機会として、全国的には「奈良文化財研究所研修」や「遺跡環境整備会議」が、埼玉県では当館が主催する「史跡整備研修会」などがあり、史跡整備に関する知識や技術の研鑽の場となっている。公園担当部局職員を中心とした「歴史公園ネットワーク研究会」なども、視点は若干異なるが参考になる研究会である。史跡整備の計画立案から発掘調査と整備そして活用に至るまで、保存整備の流れに連続的に携わっていくため、我々がすべきことは少なくない。

当館は、県内では唯一史跡整備担当を持つ機関の役割として、埼玉古墳群以外でも積極的に史跡の保存や整備に対して関わっていく必要があり、平成18年度に策定した「史跡埼玉古墳群保存整備基本計画」にも史跡活用センター的な機能を明記してある。本稿は基本計画の策定や、埼玉古墳群の調査・整備によって得られた情報を整理し、史跡整備への道程を考古学的な視点で整理しようと意図したものである。埼玉古墳群に関して書かれた文献は、扱っている内容の多寡を問わなければ、相当数にのぼる。現在当館では、これら埼玉古墳群に関する文献の収集・整理を行っており、機会を見て順次公表していこうと考えている。また、インターネットで埼玉古墳群を検索すると、10万件を超える数がヒットするように、埼玉古墳群に関する情報は膨大な数である。このことは、取りも直さず埼玉古墳群の認知度と関心の高さを示しており、であるからこそ我々は正確な情報を公開し提供していかなければならない。これまで、多くの場を借りて埼玉古墳群の保存・整備・活用に関して紹介・発表・執筆をしてきたが（井上2006～2009等）、今回は最新の情報を含めた総括的なまとめとして記したい。

1　埼玉古墳群の現状

現在、埼玉古墳群の指定面積は平成元年の追加指定以来約22haであるが、この数字は本来古墳群の保存に必要なエリアの６割にも満たない(1)。現在、この史跡指定範囲を取り囲むように約97haの都市計画決定された範囲が廻り、うち、約32haが「さきたま古墳公園」として供用開始されている。



第１図　史跡埼玉古墳群指定範囲図

また、史跡指定地や都市計画決定されている範囲でありながら公有化されていない土地もあり、さらに古墳群内であり公有化されているにも関わらず、史跡となっていない部分もあるなど、埼玉古墳群を取り巻く行政的なラインは錯綜している状態にある。最大の問題点は、図のように大型古墳の兆域全てが指定地内に収まる古墳が１基もないという点である。そこで、後述するように「保存整備基本計画」に基づき、古墳群の保存に必要な範囲を確定するべく、各種調査を実施してきた。これまでにも、埼玉古墳群の範囲については多くの先学たちがいくつもの案を提示してきている。例えば、すでに消滅した若王子古墳を含めるべきとか、大人（うし）塚古墳も入るのではないか、あるいは白山古墳群も埼玉古墳群の一群であろうなどである。加えて、地籍図や伝承などから、古墳跡の存在も指摘されている。これまでこの問題に関しては、踏査などの地道な努力をしてきた職員がいる反面、一部は県有地であるにも関わらず、考古学的な調査に全く着手してこなかったという怠慢もあり、机上の議論に止まってしまっていた。平成19年度から開始した古墳群範囲確認調査の成果は当館紀要３号と今号に掲載しているが、今年度から実施する周辺遺跡確認調査についても順次公表し、埼玉古墳群の広がりや周辺遺跡との関連について当館の考え方を提示していきたい。

現在、埼玉古墳群の調査・研究と整備及び管理は、さきたま史跡の博物館が担っている。これまで、古墳公園の整備・管理は公園担当部局が実施していたが、平成18年度からは博物館が直営で管理を行っている。同年度にはさきたま資料館から史跡の博物館へと組織が変更され、館内に史跡整備担当も設置された。古墳の調査及びこれに関わる園路・解説板などを史跡整備担当が、公園全体の施設・植栽などを公園管理担当が分担し、両輪となって埼玉古墳群・公園の整備とメンテナンスを行っている。指定地外の都市計画決定部分の新規の公園造成は公園担当部局が行い、完成すると博物館が管理するシステムになっているため、順次管理面積は増加することになる。また、昭和40年代に風土記の丘として、そして都市公園として造園されてきたため、植栽した苗木が成長・繁茂し古墳景観や眺望の大きな阻害になってきている。さらに、兆域内に植栽された樹木により、古墳の保存への影響も危惧しているところである。これらの樹木については、後述するが伐採・整理を前提に考えていきたい。同様に、周堀に滞水している古墳についても、本来滞水していたのかという科学的な証明と、見学者の安全面を考え、再整備の必要性を強調しておきたい。水堀の問題点と周堀整備との問題については、（井上2009ａ．ｂ）に詳しいので参照いただきたい。

以上のように、埼玉古墳群の現状は課題ばかりが山積している。特に、県道が古墳群中央を分断し、さらに大小の用水路が縦横に走り、人家や耕作地などが墳丘間近まで迫っている。大型古墳に関してのオーセンティシティは良好な状態であるが、インテグリティの面では用地と同様にようやく半分と言ったところであろうか。しかし、史跡整備担当・公園管理担当が設置され、徐々にではあるが解決に向けて進み始めている。奥の山古墳は11月末に内堀が水堀から空堀に復原整備され、公園内の樹木も遺構の保存に影響のあるものを中心に伐採が進んでいる。古墳群内にある人家や畑あるいは用水路など、すぐには解決できない問題もあるが、埼玉古墳群の考古学的解明という研究課題も含め、着実に歩を進めることが当館の使命であろう。

2　これまでの調査と整備の流れ

埼玉古墳群が史跡指定されてから、これまでの主な調査・整備歴と主要な出来事は、表１のとおりである。特に風土記の丘整備開始以来、資料館（現博物館）や将軍山古墳展示館の建設、稲荷山

第１表　史跡埼玉古墳群の主な発掘調査と整備の流れ

年	月	発掘調査と整備の流れ	備　　考
昭和13年	８月	埼玉古墳群　国指定史跡となる	
昭和32年	７月	埼玉村古墳群から現指定名称に変更	
昭和41年	５月		用地買収開始
昭和42年度		さきたま風土記の丘　整備開始	
昭和42年	３月		都市計画事業認可
昭和42年	４月	さきたま風土記の丘建設事業費予算化（42～43年継続事業） ・環境整備・復原整備・園路造成・園地工事 ・資料館建設 ・用地買収	
昭和42年	10月	園路造成工事開始	
昭和43年	３月	二子山、奥の山古墳周堀確認調査	
昭和43年	８月	稲荷山古墳主体部発掘調査	
昭和43年	11月	二子山古墳周堀復原	
昭和44年	10月	さきたま資料館開館	
昭和45年	３月	奥の山古墳周堀復原	
昭和48年			民俗資料収蔵庫・講堂増築
昭和48年	11月	丸墓山古墳周堀確認調査	
昭和48年	11月	稲荷山古墳周堀確認調査	
昭和48年		丸墓山古墳周堀復原	
昭和49年	11月	天王山・梅塚古墳他周堀調査	
昭和49年	11月	二子山古墳外堀確認調査	
昭和50年	４月		古墳公園第１期供用開始（県道南側9.3ha）
昭和51年	11月	稲荷山古墳内堀復原	
昭和53年	９月		古墳公園第２期供用開始（県道北側13.9ha）
昭和53年	９月	稲荷山古墳出土鉄剣金象嵌銘発見・公表	
昭和54年	２月	稲荷山古墳出土鉄剣金象嵌銘概報　公刊	
昭和54年	11月	瓦塚古墳前方部南側周堀発掘調査	
昭和54年		鉄砲山古墳前方部西側周堀発掘調査	
昭和55年		埼玉古墳群・同出土品対策協議会の設置	埼玉県中期計画として ・さきたま資料館収蔵展示棟の増築 ・さきたま風土記の丘環境整備促進 ・古墳群保存管理の充実 ・発掘調査の実施 ・鉄剣保存対策の推進
昭和55年		二子山古墳後円部北方外堀発掘調査	
昭和56年	３月		稲荷山古墳保存整備協議会発足
昭和56年		愛宕山古墳周堀確認調査	稲荷山古墳出土鉄剣　重要文化財指定
昭和57年	12月	瓦塚古墳墳丘西側周堀発掘調査	
昭和58年	６月		稲荷山古墳礫槨出土品一括国宝に指定
昭和58年		鉄砲山古墳後円部東側周堀確認調査	
昭和59年	３月	稲荷山古墳礫槨復原	
昭和59年		将軍山古墳前方部西方地区発掘調査	
昭和59年		二子山古墳前方部南方外堀発掘調査	
昭和60年	３月	稲荷山古墳保存整備事業終了（昭和57～59年度事業）	
昭和60年		瓦塚古墳墳丘北側民有地発掘調査	
昭和60年		丸墓山古墳東側周堀発掘調査	
昭和62年		中の山古墳周堀確認発掘調査	
昭和63年	３月	丸墓山古墳保存整備事業終了（昭和60～62年度事業）	丸墓山古墳墳丘南崩壊部分発掘調査
平成元年	９月	追加指定　文部省告示第137号	二子山古墳周堀確認調査
平成３年	６月	稲荷山古墳礫槨彩色等改修工事竣工	
平成４年	３月	瓦塚古墳保存整備事業終了 （昭和63～平成３年度事業）	
平成７年	３月		彩の国さきたまの公園づくり基本構想策定調査報告書を埼玉県が刊行
平成９年		将軍山古墳遺構範囲確認調査（平成３～９年度事業）	
平成９年	３月	将軍山古墳保存整備事業終了（平成４～８年度事業）	
平成９年	４月	将軍山古墳展示館開館	
平成９年度		稲荷山古墳発掘調査・整備開始	稲荷山古墳後円部墳丘・周堀発掘調査
平成10年度		〃	稲荷山古墳前方部発掘調査
平成11年度		〃	稲荷山古墳前方部・造出部発掘調査
平成12年度		稲荷山古墳前方部復原工事開始	～平成18年度まで
平成17年度			史跡埼玉古墳群保存整備基本計画（基礎資料調査及び現状分析）刊行

年　　月		発掘調査と整備の流れ	備　　考
平成18年	4月		さきたま史跡の博物館へ名称変更
平成18年	4月		古墳公園の管理が教育局へ移管
平成18年度		稲荷山古墳発掘調査・整備報告書刊行	
平成18年度		新解説板・誘導板設置開始～20年度（計12基）	
平成19年	3月	稲荷山古墳前方部復原整備終了	史跡埼玉古墳群保存整備基本計画策定
平成19年度		奥の山古墳発掘調査開始。外堀が発見される	新たな整備事業を開始する
平成19年	9月		世界遺産暫定一覧表記載資産候補提案書を埼玉県と行田市で共同提案
平成20年	3月	二子山古墳内堀護岸整備	
平成20年	3月	埼玉古墳群範囲確認調査開始	県有地を行田市の予算で実施
平成20年	4月	公園拡張区域の管理博物館へ移管	供用開始公園面積約32haとなる
平成20年度		奥の山古墳～鉄砲山古墳発掘調査	奥の山古墳の周堀形態が盾形ではなく長方形の二重堀であることを確認
平成20年度		奥の山古墳整備実施設計	
平成21年	2月	埼玉古墳群範囲確認調査実施	周辺の民地及び丸墓山古墳西側などを埋蔵文化財の補助事業として実施
平成21年	3月	奥の山古墳・稲荷山古墳主体部３Ｄレーダー探査実験	東北大学との共同研究
平成21年	7月	奥の山古墳造出し発掘調査	墳丘規模と造出しの構造を確認
平成21年	11月	奥の山古墳内堀復原整備	内堀を空堀に整備
平成22年	2月	周辺確認調査開始（５ケ年計画）	奥の山古墳西側低地

古墳前方部復原などの整備と、何よりも稲荷山古墳礫槨出土の金錯銘鉄剣を始めとした出土遺物が国宝に指定されるなど、大きな成果があった。二子山古墳や瓦塚古墳・奥の山古墳などの調査と整備、園路や便益施設の設置など、史跡としても都市公園としても整備が継続されてきた。現在も奥の山古墳の整備と公園拡張区の整備が実施されており、現在進行形で整備されている公園でもある。また、昭和56年３月に発足した稲荷山古墳整備協議会は、現在では埼玉古墳群保存整備協議会として継続し、調査方針や整備の方策は、年数回開催される保存整備協議会に諮られている。

昭和40年代からの用地買収と史跡・公園整備によって、約40年かけて現在の埼玉古墳群・古墳公園の姿が出来上がったのであるが、史跡整備と公園造成の狭間で、常に両者が協調し補完できたわけではないことは、現在の古墳公園の姿が如実に表している。限られた面積の中で、多くの樹木に囲まれ池のある公園と、広大な兆域を有する巨大古墳群を両立させるのは困難である。現在では、保存を前提とした史跡としての整備であり、一般の都市公園造成や森林公園の建設ではないという大前提で整備を進めていることは当然であるが、ここに至るまでは紆余曲折を経て長い道のりがあった。特に、当時は各種の困難を伴ったと思うが、充分な発掘調査と考古学的な検証を経ないまま、池や便益施設の造成と植栽などを行ったことは大きな反省点である。また、これまでの風土記の丘建設に伴う発掘調査や整備に対しては、痛烈な批判も受けている（渡辺1978・1981）。しかし、当事者としてこういった批判に真摯に答えることもなかったため、誤解を招いた部分も少なくな

写真１　調査中の奥の山古墳

写真２　調査後内堀を復原整備した状況

かった。渡辺氏は、不十分な調査で「造園工事」された稲荷山古墳・二子山古墳と奥の山古墳の周堀を、「昭和の周濠」とし、さらに奥の山古墳の造出しを「後円部の奇妙な造出し」と批判された。最近の発掘調査によって、「後円部の奇妙な造出し」などは氏の指摘どおりであったことが判明し、遅ればせながら新たな調査成果に基づき再整備を実施している。写真１では、滞水している内堀に浮かぶような造出しの出っ張りが分かるが、写真２では本来の内堀の堀底から、50cmの保護層を盛った標高18mラインには造出しと呼べる部分は見られない(2)。奥の山古墳では、古墳築造時の旧表土の標高は約19mであることが確認されており、少なくともこれまでの構造・規模の造出しは存在し得ない。渡辺氏の指摘から長い時間が経過してしまったが、当時の適切な批判に感謝し、これからの整備に反映していければと考えている。昭和56年以降の調査と整備に関しては、保存整備協議会などでの検討と検証を経て進めており、今後はこれらの反省を踏まえ、最新の調査・研究成果の検証・分析を行いながら、調査と整備を継続していきたい。

なお、埼玉古墳群に関しては前述のように多くの文献が刊行されているが、整備全般に関しては柳田（柳田1983他）が、指定の経緯を含めた研究史に関しては塩野（塩野2004）が、さきたま風土記の丘開始時の状況は栗原（栗原1969他）が述べているので、参照いただきたい。また、風土記の丘整備スタートの逸話は坪井の話が詳しい（坪井2007）。

3　保存整備基本計画の策定

埼玉古墳群は、昭和13年８月に国指定史跡となり、昭和32年７月31日に現在の指定名称となって、平成元年９月22日にはこれまで墳丘のみの指定であったものが、周堀なども含めた約22.3haが指定となり現在に至っている。しかし、前述したように大型古墳で兆域を含めた全体が指定範囲に収まるものは１基もない。さらに、浅間塚古墳や破壊されているとはいえ埼玉古墳群最終末期となる方墳戸場口山は、第１図のように指定範囲から完全に分離してしまっている。つまり、現状では古墳全体を復原整備可能な大型古墳が１基も存在しないのである。この他前章まで見てきたように、埼玉古墳群の調査と整備には多くの成果とともに、課題や問題点も多く、これらの課題を整理し解決への道筋を示していくためのマニュアルと、埼玉古墳群保存整備のビジョンを示したのが「史跡埼玉古墳群保存整備基本計画」である。これまで、個々の古墳の整備に関しては基本計画を作ってきたが、古墳群全体の整備目標やゾーニング、各施設や植栽をどのように配置するかといったマスタープランと呼べる設計図がなかった。そこで、平成16年度に基本計画策定のため県単独事業として県文化財保護課が予算要求をし、翌年から２ヶ年計画で基本計画を策定することになった。当初は２ヶ年をかけて１冊の計画書を刊行する予定であったが、年度毎に成果が必要とのことで、平成17年度には「保存整備基本計画（基礎資料調査及び現状分析）」を生涯学習文化財課が作成し、18年度に本編といえる「保存整備基本計画」をさきたま史跡の博物館が刊行することになった。結果的に、埼玉古墳群の現状や行政的な位置付けの確認と利用形態を調査した前者と、それらの資料を基礎に策定した後者と棲み分けができ、テキストとして使用する側には利用し易い分冊となった。既に40年余りの公有化・整備歴があるため、「保存管理計画」や「保存整備基本構想」を省略して、より具体的な保存整備マニュアルとしての基本計画策定を行ったものであるが、年度毎に刊行したことで、従来の管理計画・基本構想・基本計画とは異なった策定形式が採用できたのではないかと考えている。

本計画では、古墳群の恒久的保存を基本とし、指定範囲の拡大やユニバーサルデザインの採用な

ども盛り込んである。整備手法や環境整備の方針の他に、中核施設・活用・管理運営及び発掘調査に関する計画、特に史跡整備に関してばかりではなく、古墳群と両輪で存在する博物館施設の将来像についても触れている。現博物館は昭和44年に開館し、以後追加工事や改修工事の繰り返しで現状の規模として成り立っているが、施設の老朽化や劣化ばかりでなく、規模・構造全てにわたって現代の展示・収蔵・管理・活用・研究等に耐えうる施設ではない。さらに博物館が史跡指定地内に存在していることも問題であり、公園担当部局等との議論を積み重ねながら、指定地外の県有地への移転を明記している。活用計画では、周辺の文化財との連携を自動車利用・自転車利用・徒歩の3パターンに分類して、3つのネットワーク構築を提案している。調査計画策定に関しては、最初に古墳群全体をカバーするグリッドの設定と配置図の掲載を行った。これまで、古墳毎に基準点測量を実施していたが、基本計画では世界測地系に沿った100m四方の大グリッドと10m四方の小グリッドを配置し、実際の調査時には要所要所にマンホール状の3級基準点を埋設している。将来は全域をカバーできる基準点網を完成させたい。また、範囲確認調査のように私有地内の調査では、杭を設置しないGPSによる測量を行っている。さらに、調査計画では古墳群の諸調査ばかりではなく、周辺遺跡の確認、特に居館発見のため、目的的・計画的な調査が必要性である一文を記してあり、既に調査を開始している。

本編策定に当たっては、通常年2回の保存整備協議会を、都市計画・造園などを専門とする委員を追加して委嘱し、4回開催して検討を重ねた。また、これと並行して、文化庁をはじめとし行田市・行田市教育委員会及び県公園課・行田県土整備事務所、県生涯学習文化財課との調整を定期・不定期に繰り返し、最終的には定例県教育委員会を経て刊行したものである。基本計画の骨子については、「概要版」も印刷して地域住民などに配布し、説明会なども開催した。残念ながら全ての地域住民に理解された訳ではないであろうが、その後の調査や整備に対する市民の反応は決して悪いものではない。基本計画の内容については多岐に渡るので、当館や図書館などで閲覧いただければ幸いである。

4　基本計画策定以後の整備と展望

基本計画を策定した翌年の19年度から、県の事業名「史跡埼玉古墳群保存活用事業」として計画に基づく新たな整備を開始した。これまでにも基本計画以後を「新たな整備」と繰り返し呼んでいるが、事業名の違いや組織の違いだけではなく、整備の目標を定め職員の意識や地域との関わりも大きく変化したからである。水堀化による墳丘崩落の危険性と見学者の安全面から、奥の山古墳を最初の調査・整備対象に選定したことは、これまでにも何度か述べているとおりである。

調査に当たって、正確な地形図・実測図の作成だけではなく、将来を見通した研究や普及事業に対応可能な技術として、測量方法に関しては3Dレーザースキャナーを採用することとした。最初に使用したのは稲荷山古墳前方部復原が終了し、出来高測量を実施する際、経年変化の記録に最適と考え試験的に実施してみたものである。これまで稲荷山古墳の容量については、何度かの試算が試みられていたが、測量データの入力により整備GLから31,080㎥という数字が出た。旧表土の標高から測定を行えば、より正確な容量計算が可能であり、古墳の容量と周堀の容量との比較などが可能になる。前述した埋設基準点との組み合わせで、正確な測量図の作成と有効で広範な活用を進めていきたい。例えば、測量データをもとに古墳群模型の製作や、実際に古墳に登れない方達のため

にCGによるバーチャル映像作製も可能になり、活用範囲は大きく広がっていく。

植栽に関しては、基本計画策定時には緑地空間としての効果と、景観阻害の両面から簡単な検討を加え、伐採・移植・新規植栽などについて記載している。特に、新規植栽の導入種は、古墳時代の植生を反映したもの、あるいは現存する地域種とした。しかし、現状の項で触れたように、発掘調査や整備の進行とともに、既存の植栽が古墳に対する景観阻害だけではなく、遺構保存にも大きな影響を与えていることが判明し、基本的に倒木の危険があるものや不必要な樹木は整理する方向で考えている。樹木の伐採や整理ばかりでなく、奥の山古墳・鉄砲山古墳の調査に伴う花粉分析によって、古墳時代の植生が判明しつつあり、市民団体である行田ナチュラリストネットワークの協力で、古墳時代の植生が再現可能か検討を進めているところでもある。将来、地域を定め古墳時代の森や花壇が再現できればと考えている。古墳という古代の人工物だけではなく、当時の植生景観を背景とした史跡整備も埼玉古墳群整備の特徴となり、多くの見学者に古墳時代を体感してもらいたい。また、全ての古墳を芝生の小山にするのではなく、登って眺望を楽しめる古墳や下から見上げて大きさを実感できる古墳、そして里山景観を残す古墳など、保存に影響のない範囲で古墳の見せ方にもバラエティーを持たせたい。

基本計画とその後の整備で得られた展望の一部などを概観してきたが、発掘調査によって奥の山古墳から外堀が発見されるなど、既に事業計画の変更を余儀なくされ、事業期間の軌道修正を早くも迫られている。また、新たな発見は隣接する古墳との位置・園路などとの関係から、調査・整備の順番にも大きな影響を与えている。第1期整備・第2期整備は各5ヶ年として、現在の指定範囲を対象としている。第3期整備については、新博物館建設と公有化の進展を見ての整備としている。しかし、前述のように古墳の規模や構造にこれまでと大きく異なる情報が加わり、第1期整備期間である平成23年度までには、これまでの調査成果や整備状況あるいは公有地の現状など総合的に判断して、第2期整備へ向けての展望を提示してかなければならない。見通しの甘さを反省するとともに、これまでの発掘調査や整備の再検証の必要性を痛感している。

平成19年度には、埼玉県と行田市との共同提案で「世界遺産暫定一覧表記載資産候補」の提案書を作成し、文化庁へ提出した。全国の自治体からも多くの提案書が提出されており、審議結果はカテゴリーIIと厳しい状況にある。「顕著な普遍的価値」の学術的証明という大きな命題については、埼玉古墳群とその周辺の調査によって、保存整備が進捗するだけではなく、古墳群の解明にも繋がると考え、調査研究を進めていくことが必要となっている。また、先に述べたインテグリティの問題も命題の一つであり、これは範囲確認調査などの成果をどう活用し実行していくかといった、大きな行政的な課題である。

おわりに　―これからの史跡整備と学芸員―

これまで、史跡としての埼玉古墳群について述べてきたが、博物館としての「さきたま」についても若干触れておきたい。古墳群を野外博物館として、「さきたま」と一体となった総合史跡博物館を目指すには、施設は勿論のことであるが、調査や整備と資料を保管・管理・展示そして活用する学芸員の技術や知識は大前提である。各博物館の動向や研究、学芸員のレベルの指標ともいえる各館の紀要を比較すると、これまでの「さきたま」の現状と問題が見えてくる。当館の紀要(3)と県立歴史と民俗の博物館（以下県博とする）や嵐山史跡の博物館（以下嵐山とする）の紀要と比較する

と、展示や資料保存に関する論考や特別展・企画展の分析が極端に少ないという傾向を見ることができる。特に県博では、展示方法や保存技術から入館者の分析まで多くの内容を見ることができるし、嵐山でも歴史系学芸員の異動があるため、展示理論に関する論考を始め、資料保存の分析も掲載されている。当館ではシンポジウムや企画展の記録などが散見できる程度であったが、18年度には当館と嵐山が「史跡の博物館」として紀要も統一され、内容も豊富になった。前号の紀要第3号には、ようやく企画展示室の改修やテーマ展の総括が載ったが、県博などの客観的な分析に比べると、アンケート分析もない主観的で内部資料的な内容に終始している。このような当館の伝統ともいえる傾向は、考古系の博物館であるということも起因しているのであろう。県博のような歴史資料を中心にした総合的な館では、各時代・各分野の資料展示・取り扱いが可能であり、各分野の学芸員がいて得意分野だけではなく相互協力も可能である。再編整備で各館は専門館化してしまったが（沼野2007）、学芸員としての基本的な知識・技術や、素養を身に付けるには、総合館的機能を有した施設で基礎訓練を受けることが必要ではなかろうか。残念ながら、埼玉県立館では、数年の調査研究期間を経て特別展を開催すると言ったことが非常に少なくなってきているが、小規模ながら新たな切り口のテーマで企画展を開催している館もある。県立博物館施設では学芸員の資質向上のため、「学芸員研修体系 WG」を立ち上げて対応しているが、得意分野の協力や補完をし合いながら、相互のレベル向上を目指す方法もあるだろう。

当館は多くの博物館・美術館と異なり、史跡という不動産を伴い史跡のガイダンス機能を担った博物館である。現在も展示コーナーは、埼玉古墳群出土資料を中心に展示している「国宝展示室」と、年数回企画展を開催する「企画展示室」の2室立てである。一般の博物館の常設展示室と特別展示室に対比することも可能であるが、国宝展示室の資料は入館者が博物館へのアクセス途中で見てきた古墳から出土したものであり、展示と遺跡が直結しているのである。また、発掘調査や史跡整備の現場そのものを屋外展示と捉え、展示コースや解説コースに組み込むことも可能である。現在は、危険な個所もあり特定の日時に現地説明会・見学会という形式で一般に公開している。平成19～21年度までに、行田さくらロータリークラブ・行田ロータリークラブ・行田ライオンズクラブなどの支援を受けて4回の説明会等を開催しており、2,000人近い見学者が訪れている。今後もこのような催しは継続する必要があるだろうし、発掘調査の速報展示なども史跡の博物館が得意とする手法ではなかろうか。何れにしろ、埼玉古墳群という屋外博物館を生かした展示技術や活用プログラムの開発は、考古・史跡系学芸員の役割や可能性を拡大できる分野であり、古墳景観と一体となった内容の博物館を目指したい。

「史跡整備と考古学II」以降では、史跡整備に伴う発掘調査手法・整備技術や史跡の活用・管理などについて考えてみたい。

《註》

(1) 平成19・20年度に、行田市と地域住民の協力を得て埼玉古墳群の範囲確認調査を実施し、古墳群が立地する地形や、これまで古墳と考えられていた地点がそうではなかったことなどが確認できた。調査報告は本紀要に掲載している。21年度からは、周辺遺跡の確認調査を実施している。

(2) 昭和44年の整備時から平成21年11月末まで、後円部の西南端に存在した造出しは、覆土や確認面からも古墳時代のものではないことは明らかである。しかし、その上面にある段築下部には須恵器と埴輪が多く出土する緩斜面が存在し、この部分をどのように解釈するか、今後出土遺物や測量図などの検討・分析を進めて行かな

ければならない。

(3) 平成17年度までは「さきたま資料館調査研究報告」として19号まで刊行されている。平成18年度からは嵐山史跡の博物館と合わせて「史跡の博物館紀要」として刊行している。

《引用・参考文献》

青木　豊　2006「地域博物館・野外博物館としての史跡整備」『史跡整備と博物館』雄山閣

青木　豊　2008「史跡の活用とは何か」『國學院大學考古学資料館紀要第24輯』

井上　尚明　2006「遺跡の保存と活用４　埼玉古墳群」『考古学ジャーナル548』ニューサイエンス社

井上　尚明　2007「史跡埼玉古墳群の保存と整備」『埼玉の文化財48号』埼玉県文化財保護協会

井上　尚明　2008「史跡整備研修会の開催について」『紀要第２号』埼玉県立史跡の博物館

井上　尚明　2009ａ「二子山古墳内堀護岸整備について」『紀要第３号』埼玉県立史跡の博物館

井上　尚明　2009ｂ「埼玉古墳群と東国の古墳」『遺跡学研究第６号』日本遺跡学会

小笠原好彦他　1998「考古学サロン―古墳と史跡整備」『考古学研究179』考古学研究会

金原　正明　2007「遺跡整備における植生環境の復元」『遺跡学研究第４号』日本遺跡学会

栗原　文蔵　1969「さきたま風土記の丘」『考古学ジャーナル39』ニューサイエンス社

栗原　文蔵　1975「さきたま古墳群の問題点」『考古学ジャーナル112』ニューサイエンス社

黒崎　直　1987「遺跡の保存と活用」『考古学研究132』考古学研究会

小久保　徹「さきたま古墳群の概況」『さきたま古墳群』埼玉新聞社編

今野　農　2006「史跡整備と環境」『史跡整備と博物館』雄山閣

埼　玉　県　2006『史跡埼玉古墳群保存整備基本計画（基礎資料調査及び現状分析）』

埼玉県教育委員会　2007『史跡埼玉古墳群保存整備基本計画』

佐藤　涼子　2008「観光考古学から考える遺跡の活用」『國學院大學考古学資料館紀要第24輯』

塩野　博　2004『埼玉の古墳―北埼玉・南埼玉・北葛飾―』さきたま出版会　p45-100

島田　敏男　2006「史跡で、できること、できないこと」『遺跡学研究第３号』日本遺跡学会

杉山　正司　2007「地域博物館の視点～県立館における“地域”と取組～」『博物館学紀要31輯』國學院大學博物館学研究室

高橋　一夫　2005『鉄剣銘一一五文字の謎に迫る』新泉社

田中　琢　1996「文化財保護の国際化」『銀行倶楽部№409』（社）東京銀行協会

辻　誠一郎　2000『考古学と植物学』同成社

坪井　清足　2007「風土記の丘のはじまった頃」『日本遺跡学会会報第９号』日本遺跡学会

寺村　祐史　2009「古墳のデジタル測量と空間データ処理」『考古学研究223』考古学研究会

沼野　勉　2007「県立博物館施設再編整備の成果と課題」『関東の博物館第31号』関東地区博物館協会

広瀬　和雄　2005「日本の遺跡活用と観光」『観光考古学』国際航業株式会社文化事業部

藤井　淳弘　2004「史跡整備事業における古墳整備の変遷」『Archaeo-Clio 第５号』東京学芸大学考古学研究室

文化庁文化財部記念物課　2005『史跡整備のてびき』

北郷　泰道　2009「大地が謳う歴史の物語を聞くところ―西都原古墳群―」『考古学研究56―２』考古学研究会

村松　洋介　2003「古墳の保存整備・活用と博物館」『博物館学紀要28』國學院大學博物館学研究室

宗田　好史　2009「古墳とまちづくり―21世紀の史跡整備の課題」『遺跡学研究第６号』日本遺跡学会

茂木　雅博　1990『天皇陵の研究』同成社

柳田　敏司　1983「辛亥銘鉄剣の発見」『辛亥銘鉄剣と金石文』埼玉県

柳田　敏司　1998「現況報告」『ここまでわかった！稲荷山古墳』埼玉県立さきたま資料館

柳田　敏司　2007「風土記の丘造成余話」『武蔵埼玉　稲荷山古墳』埼玉県教育委員会

渡邉　定夫　2006「遺跡保存整備の限界」『遺跡学研究第３号』日本遺跡学会

渡辺　貞幸　1978「辛亥銘鉄剣を出土した稲荷山古墳をめぐって」『考古学研究99』考古学研究会

渡辺　貞幸　1981「新刊紹介　埼玉県教育委員会『埼玉稲荷山古墳』」『考古学雑誌67―１』日本考古学会

和田　晴吾　2009「古墳の理解と保存整備」『遺跡学研究第６号』日本遺跡学会

財貨としての「儀礼的交換用石斧」

── ニューギニア島ダニ族の Je Stones について ──

栗島義明

はじめに

埼玉県鶴ヶ島市に日本屈指のニューギニア民族資料のコレクションが収蔵されていることを知る人は、そもそも博物館関係者の間でも極めて少数に留まっていたに違いない。欧米諸国の美術関係者の間では、ニューギニアを含めたオセアニア民族美術のその表現力、斬新性、多様性などは以前より極めて高く評価されているが、日本ではまとまった資料展示が殆ど無いことからもその評価は低いと言わざるを得ない。恐らく多くの人がオセアニア民族資料の存在については、大阪にある国立民族学博物館以外にそれを思い浮かべることは無いに違いないが、実は首都圏及び周辺地域にも極めて学術的価値の高いニューギニアコレクションが展示、収蔵されていたのであった。新潟県塩沢町の町立今泉博物館と埼玉県鶴ヶ島市の資料である。資料紹介に先立って何故、希有なニューギニアの民族資料が鶴ヶ島市に収蔵されることになったか、その経緯について触れておこう。

1995年と翌96年にかけて埼玉県鶴ヶ島市は、故今泉隆平氏によって収集されたパプアニューギニアを中心としたオセアニア地域の膨大な民族資料の寄贈を受ける。その数は1,725点にも及んでいた。新潟県塩沢町出身の今泉氏は、公職（石内村長）を退かれた後に手に入れた土地が高度成長期の中で高騰し、たちまちのうちに大資産家になった人物である。昭和30年代の首都圏域では決して珍しい話ではなかったと考えられるが、今泉氏の場合は有り余る資産を国内外の美術品収集に惜しげもなく注ぎ込んでいった点で他と大きな違いがある(1)。古美術品や絵画に加えて今泉氏が目を付けたのがパプアニューギニアを中心とした民族美術品であり、東京神田にあった「パシフィックアーツ」という民族造形品の輸入会社（大橋昭夫氏）を介して積極的な資料収集を進められた。お二方の運命的とも言える出会いはまるで小説の一節を読む感があるが、何よりも「故郷のために博物館を作りたい」という今泉氏の夢と、身の危険と仕事としてのリスクを承知しながらも、民族資料の収集を「天職と思って仕事」をしていたという大橋氏との思いの交叉無くしては、この世界的にも貴重な当該資料の収集は成し得なかったに違いない。

そもそも報道カメラマンであった大橋氏は、独立後のパプアニューギニア政府の要請もあり民族（造形）美術品の輸入取り扱い業者として転職されたという変わった経歴を持つ人物であった。氏はニューギニアのセピック地域を中心として資料収集活動を行い、5～6年かけて約3,000点の資料を収集した。これが今泉氏の目に止まった資料であったが、それらは系統だったものではなく博物館資料とするには見劣りのするものであった。そこで二人は、相談のうえ現地での収集に加えて欧米の市場にある資料やコレクターの持つものをターゲットに、以後5年に及ぶ資料の補充・充実が計られてゆくこととなった。この間高橋氏は、オーストラリアの専門のコレクターに加えて海外の有名オークションにも積極的に参加し、氏の言葉を借りれば「第三国の美術市場からの収集活動は、今泉さんという後ろ盾もあって、まさに飛ぶ鳥を落とす勢い……世界中の市場にあったものの中で、これは必要だと思うものはほとんど手に入れた」という。特にこうした個人コレクションやオークションがらみの資料は、パプアニューギニア独立以前に海外流出した貴重な資料が多く含まれてい

た点は注目しておかなくてはならない。今泉氏の資金力と高橋氏の審美眼・鑑定力がまさに一体となり結実した資料がこの5年間に収集されたのである。初年度から2年次までの資料が塩沢町に収蔵されたが、それに続く3～5年間に収集された最も貴重な資料群の落ち着き先が今泉氏の死後、長らく決まらずにいた。こうした状況を憂いた鶴ヶ島市在住の今泉氏の実弟が、それら資料の寄贈を市側に申し出たことにより、この全国的にも珍しい、否、世界的にも貴重なパプアニューギニアを中心とした民族美術品が鶴ヶ島市に所蔵されることとなったのである(2)。

鶴ヶ島市に所蔵されている資料を見学したのは、確か2006年の秋であったと思う。民族造形美術に関する知識が皆無な著者でも、各種通過儀礼に用いられた仮面や精霊が表現された彫像、戦闘時に用いられた盾の他、各種生活用具（楽器、石臼、腰掛け、枕、絵画、土器、石器、装身具）などに強い感動を覚えたことを鮮明に思い出す。特に見学の目的であった「財貨」のフルセットを眼にした時の驚きと感動は久々に味わう類のものであった。何とかこれを図化して概要紹介だけでもしたいとの思いがあったが、生来より怠慢であるが故に延び延びとなってしまっていた。そうした中で新聞報道にて当該資料が鶴ヶ島市から天理大学へと移管されるとの記事を眼にするに及び、市教の斉藤氏と天理大の吉田氏のご配慮により移管間際の状況のなか、何とか「財貨」の撮影と図化が叶った。先ずもって両氏に感謝申し上げたい。

ダニ族の生活と社会

ここで紹介する資料は「儀礼的交換用石のセット」として『ニューギニア　神と精霊のかたち』に掲載されているものである。資料は本多勝一氏の名著『ニューギニア高地人』(朝日新聞社1981年)でつとに有名であるダニ族が使用していたもので、石器自体もさることながらその装飾や社会的な価値・機能など、ニューギニア高地人の生活にとって極めて貴重なものである。石器並びに財貨としての特徴について触れる前に、ニューギニアのダニ族についての概略を紹介しておこう。

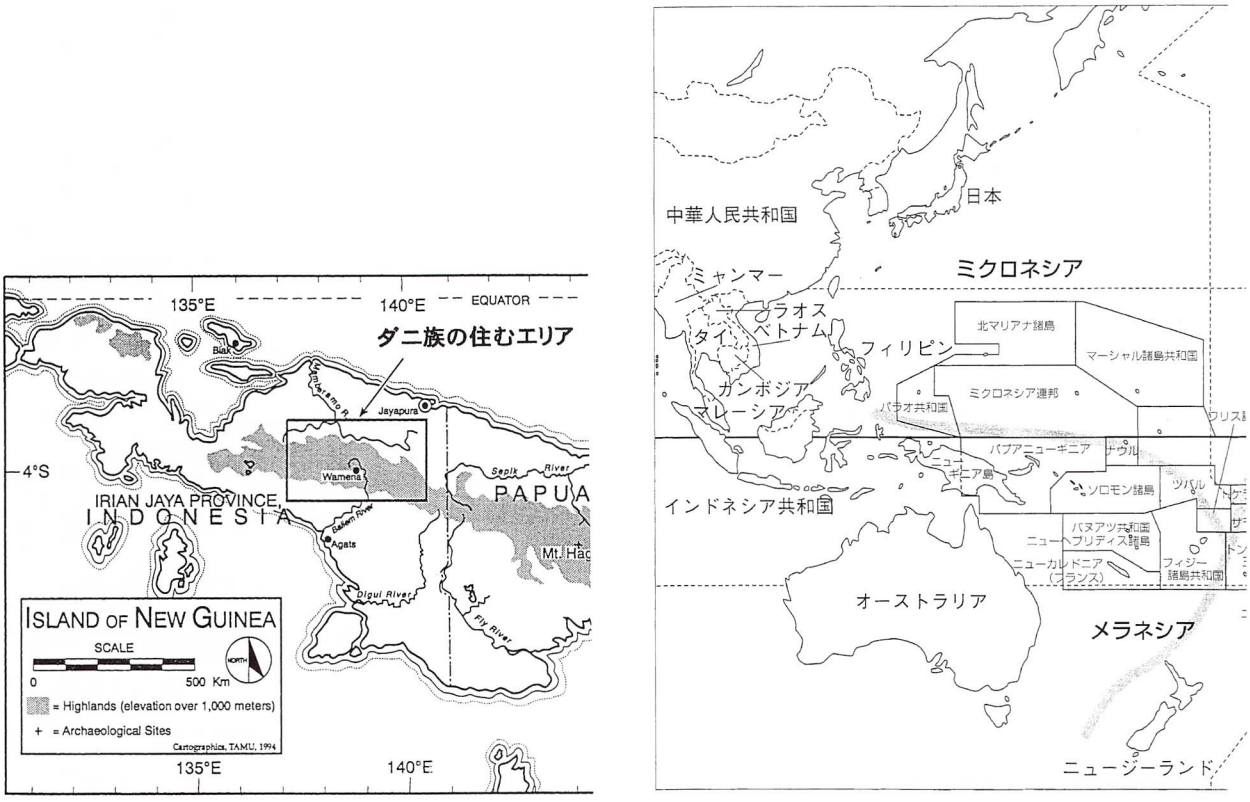
そもそもダニ族とは世界第二の島であるニューギニア島の西半分、インドネシア領の中央高原のイリアンジャン州に住む三つの部族を総称したものである。1981年に実施された調査では総人口は約22万人であり、約30もの氏族に分かれていると言われているが、大きくはワナメを中心としたバリエム川流域に居住する人口7万5千人のグランド・バレー・ダニ族（Grand Valley Dani)、東方山岳地帯に住む人口約3万5千人のヤリ族(Yali)、イラガを中心とした山岳地帯に住む人口約10万人のウェスタン・ダニ族（Western Dani）に分けることができる。これらの部族がダニ族と総称される理由は、最初にこの地を訪れた白人がグランド・バレー・ダニ族の姓を民族名と解釈してしまったことに原因があるらしい。各部族がその居住環境を違えるように各部族が使用する言語にも方言が存在するが、生業や生活習俗での大きな違いを見出すことはできない(3)。我々が写真で目にしたり、文献で知るダニ族のイメージはグランド・バレー・ダニ族のそれである場合が多い。

グランド・バレー・ダニ族はニューギニア島の中央部、3,000m級の山々を擁するジャヤウイジャヤ山脈に囲まれた長さ約60km、幅15kmほどの盆地に住んでおり、標高約1,600mの高地に在るこの場所は特に主食であるサツマイモを始めとした根菜類の栽培に適している。何よりもこの寒暖差の大きい高地にはマラリア蚊がおらず、この為にダニ族の棲むこの盆地は熱帯雨林が広がる低地部などに比べ驚く程に人口密度が高いのである(4)。

ダニ族は焼畑によるサツマイモ栽培を生業の中心に狩猟や漁労・採集活動も行う。家畜としては

豚を飼育しており、この豚は婚礼・葬式等々の様々な儀式で人々に供されるばかりでなく、婚姻や交易用の結納・支払いの為の財産としても利用される、ダニ族にとって極めて重要なものである。村には男性が住む丸い形の家と女性や子供達が一緒に暮らす長方形の長屋が存在しており、男女ばかりか夫婦でさえも別々の棟に分かれて生活している。特に男性は村にある「男の家」で共同生活を送ることが通例で、これはダニ族の社会が父系社会であることと一夫多妻の習俗が大きく関わっていると考えられている。

ダニ族社会では男女が別れて暮らしていることにも関連して、男女間の分業が明確となっている。男性の主な仕事は道具を作ることと戦争にあった。金属器を知らないダニ族にあって、道具といえば竹製ナイフ（豚などの解体に使用）、槍、弓・弓矢（戦争などに使用）、そして石斧ぐらいである。一方の女性は農耕と豚の飼育を主な仕事としている。また交易用の塩の精製も女性に負わされた重要な仕事の一つであった[5]。一見すると原始的な生活を営むダニ族だが、彼らの畑は立派な灌漑施設を持ち整然と畝が並んでおり、手入れが行き届いた畑は垣根でその周囲を囲まれている。畑では主食であるサツマイモを始めとしてタロイモ、サトウキビ、トウモロコシ、ヒョウタンなどが栽培されている。女性達の仕事は耕作、種まき、栽培、収穫などの畑仕事だけでなく、豚の飼育という重要な役割が存在する。豚はダニ族にとっては単なる家畜ではなく貴重な財産であったことから、どれだけ多くの豚を所有しているか、豚は財産でありその数こそが男性威信の高低を示すメルクマールともなっていた。この為に妻達は我が子と共に豚を長屋で同居させ、自らの乳を与えて大切に育てているのである。経済力のある村の実力者は沢山の妻を持ち、従って生活が豊かであることから沢山の豚を所有することが可能となるのである。



第１図　ニューギニア島の位置
（鶴ヶ島市版　2005, Hampton　1999より）

さて、ダニ族の棲む中部高地にある盆地はマラリア蚊がおらず、土地が肥沃なことから原始的な農耕社会としては驚く程に人口密度が高い[6]。為に農地や豚、女性などを巡って村落間でのいざこざが絶えなかった。その結果として男達は戦闘的とならざるを得ず、その主な仕事が部族間の縄張り争いとなったのである。男性が血縁関係にあるもの同士で同じ家に住むのも、戦闘に備えての同胞意識を高め維持することが目的として存在していたのであろう。嘗て土地や豚、女性を巡る村落間の戦闘で命を落とした者も多かったようで、手の指が第二関節から失われている女性が多いのは、病死に加えて村落間での戦闘により身内が失われるケースが多かったからである。ダニ族の女性は身内に不幸があった場合、喪に服すという意味で自分の指を切るという習慣が存在し、本多氏が滞在したウギンバラ村の成人女性では、平均3本の指が切られていたという。

ダニ族の社会は先に述べたように一夫多妻であり、男性は妻を何人持っているかということと豚を何頭所有しているかによって社会内での地位が決まる。そうした男性が身に付ける装飾品には、艶やかな鳥の羽で飾り立てたヘッドバンド、腕輪、鼻飾り、そして胸飾りなどがある。特に地位の高い男性がその富と力を誇示する装飾品が子安貝でできた幅広のネクタイ状の首飾りであり、この子安貝は内陸部に暮らすダニ族にとっては非常に価値の高い、物々交換に際して彼らが最も渇望するまさに宝物であった。為に子安貝を多数繋ぎあわせて作ったネクタイは、男性にとっては彼の財力と勢力をこれ見よがしに示すまたとない威信財となり得たのである[7]。

男性達の主な仕事は戦闘とその準備にあると述べたが、例外的な仕事として彼らはヨカールという女性用の腰飾りを編み上げる。ダニ族の女性が身に付ける衣装としては、背中を隠す（腰回りと共に背中は人に見せるのが憚れる部位とされている）ノーケンと腰回りを隠すサリーとヨカールとがある。すだれ状の腰蓑であるサリーは草で編まれたもので、これは彼女が未婚であることを示す。ヨカールは細い紐を何重にも巻いた腰飾りであり、男性が数ヶ月もの月日を費やして花嫁に送る結納品で、同時にこのヨカールを腰に巻いた女性は既婚であることを示している。

ヨカールは植物繊維を撚りあげて作った紐を芯として、その外側に木の皮やランの茎を巻いた組紐のようなもので、染色はされていないものの黄金色のランの茎は美しい文様を生み出している。一人分のヨカールを作るには大凡200mの長さの紐が必要とされ、材料の入手や製作には膨大な労力が必要とされる。仕上げるまでに少なくとも3か月はかかると言われており、この一種の結納品であるヨカールを作ることは男性にとって人生最大の大仕事とされていた。

鶴ヶ島市所蔵の財貨

本例は鶴ヶ島市に収蔵されていた財貨数点のうち、最も保存状態がよくフルセットとして残っている、しかもその来歴が明確なものである。『ニューギニア　神と精霊の世界』P88-89に所収されているもので、市教委報告では「財貨」（RITUAL PROPERTY）と記入されている。

資料収集カードに記載されているデータによれば、収集者は今泉隆平氏であり現地での入手は1990年の2月に㈱パシフィックアーツ（大橋昭夫）、採集者はアメリカ人デイーラのトッド・バーリン（TODD BARLIN）。採集場所はインドネシア共和国のイリアンジャン州中央高地のクランド渓谷（GRAND VALLEY）、北バリム川（NORTH BALIM RIVER）サルガカ村（SALKAGU VILLAGE）で、ダニ族によって使用されたものと明記されている。このフルセットについては、簡潔ながら極めて要領を得た適切な解説が『ニューギニア　神と精霊のかたち』のなかに見られる。

少々、長くなるが以下に紹介しておこう。

「儀礼的交換用石のセット（ジェ・ストーン）は結婚式や葬式のときに交換される贈物であり、儀礼的交換用宝物である。

写真のジェ・ストーンは完全なフルセットで、網袋（ノッケン）に入れられ、ダビーという名の首長の家の奥に隠されていたもので、村人たちは普段は見ることも禁じられていた。このセットは、1990年２月、サルカグ村のクルルスという人の葬儀のときに『かたみの包み』として披露されたものである。使われている石は、「ダニ」の居住地から北西に150kmも離れたジェリム川で採られた長く平らな黒色の石で、石刀の形によく磨かれている。これらの石は交易によって手に入れたもので、ランの黄色い茎で作られたバンドを巻き、クスクスの毛皮などを飾り付けている。また、それぞれの石のバンドには、極彩色のオウムの羽毛をそっくり１羽ずつ差し込んである。セットをひとくくりにする帯にはコヤスガイ（財貨）が縫い付けられている」

さて、本例の特徴は、

１）薄く大型に仕上げられた石斧状の石器とそれに付帯する各種装飾品

２）網の上に財貨３本が並べられ、その上にタカラ貝を縫い付けた帯（シェルバンド）が添えられるという披露時の状態

の二つにあると言えよう。著者の興味はあくまで石器を中心とした「財貨」そのものにあり、その機能や社会的意義の詳細について詳細に論じることは不可能である。ここでは著者の関心事のみ

写真１　「儀礼的交換用石斧」のフルセット（鶴ヶ島市教育委員会　2000）

に留めて紹介せざるを得ない点をまずは了承願いたい。また、本例については文献等では「Display-Exchange Stones」と紹介されている場合が多いが、その社会的機能や形態的な特徴を加味したうえ、ここでは「儀礼的交換用石斧」と仮称しておくことにしたい。石器の観察を通じても形態的には無論のこと、仕上げや刃部（相当箇所）の位置などを勘案しても本例は石刀ではなく、あくまで彼ら（ダニ族）の最も普遍的な生活資材である石斧をイメージして製作されている点は間違いないと考えられるからである。以下、フルセットとされる「儀礼的交換用石斧」のそれぞれについて概観してみよう。

「儀礼的交換用石斧」の特徴（写真１）

№１（第２図）は長さ50.1cm、幅12.8cm、厚さは最大で1.6cm、平均的には１cm程しかない非常に薄く仕上げられた、概形が略長方形の石斧である。重量は1,680ｇ。器体中央部には黄褐色の組み紐を巻き付け、その上に若干下方にずらして植物を巻き付けた簾状のスカートを二重に巡らせており、更にその上には皮付きの毛皮片を複数結びつけた紐を巻いている[8]。これに加えて20cm×３cm、厚さ５mm程の舟形の板に、色鮮やかなオウムの羽根を貼り付けたものを石と紐の間に挟み込んでいる。このように属性の違う三種の紐で大型石斧の胴部を結わえ、オウム羽根を貼り込んだ「飾り板」とでも言うべき装飾品で飾り立てる点は、これから紹介する資料も含めた三点に共通する特徴である。

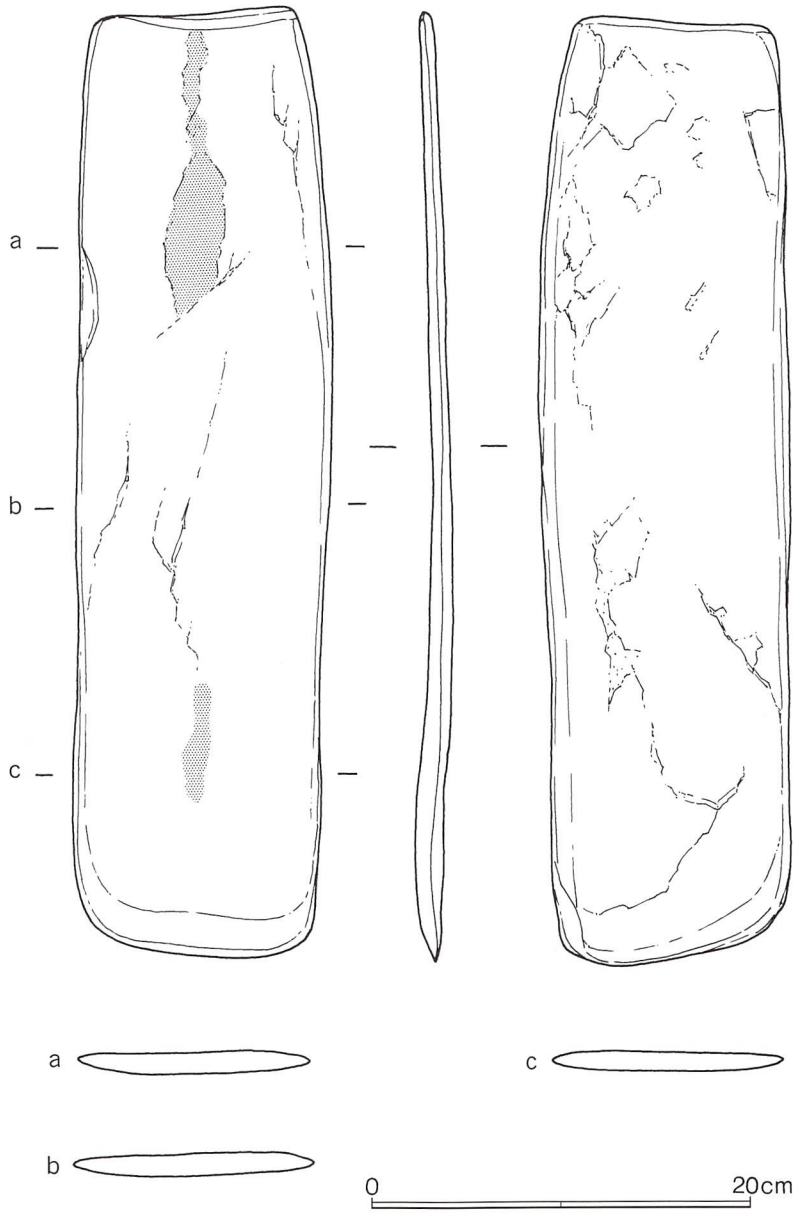
石斧はその形態から直接岩体から採取したか、大型の河川礫を板状に分割したかのいずれかであり、薄い板状素材の形状整形を行ったうえで全面を丁寧に磨き上げている。石材はその表面が暗緑色を呈する黒色粘板岩と考えられ、裏面には節理面で分割された痕跡を明瞭に留めている。片岩系の特徴を生かして節理面で割り込んだうえで周辺調整を行い、長方形状の石斧形態に仕上げたのであろう。形態形成時の剝離痕跡は表裏面にそれぞれ１～２箇所の痕跡として残存し、片岩系石材に特徴的な階段状剝離痕を明瞭に留めている。何れにしても表裏面の研磨は入念になされている。頭部（上位）側の端部側縁には擦り切り痕跡が観察され、表裏側から擦り切りを行った後に分断した跡が残る。本例で注視される点は表面の中心軸部、特にその上半部位に赤褐色の彩色痕が残っている点である（網状スクリントーンで表示）。この部位は丁度、オウム羽根で飾った板の真下部分に相当している。

№２（第３図）は長さ64.2cm、幅12.8cm、厚さ1.7cm、重量が2,645ｇ。直線的な側縁と緩やかに湾曲した側縁を持つ石刀状の大型石斧で、三点の中でも特に入念にその全面が研磨されている。刃部相当部分は縦断面がＶ字状に研磨されており、本例がやはり石斧を基本形としていることを雄弁に物語っている。石材は同じく粘板岩と思われるが、黒色と暗緑色が縞状となって美しい。表面の一部に形態作出時の剝離痕跡を留めているが、他には全く見られないことから、とりわけ本例の研磨程度が高かったことを明示している。表面側の下半部には黄鉄鉱が観察される。本例にも器体上半部に黄褐色の組み紐が巻かれ、下方には植物を巻き付けたスカート状の紐、そして毛皮片付きの紐が観察される。オウムの羽根を貼り込んだ飾り板がスカート状の紐の下位に差し込まれている。

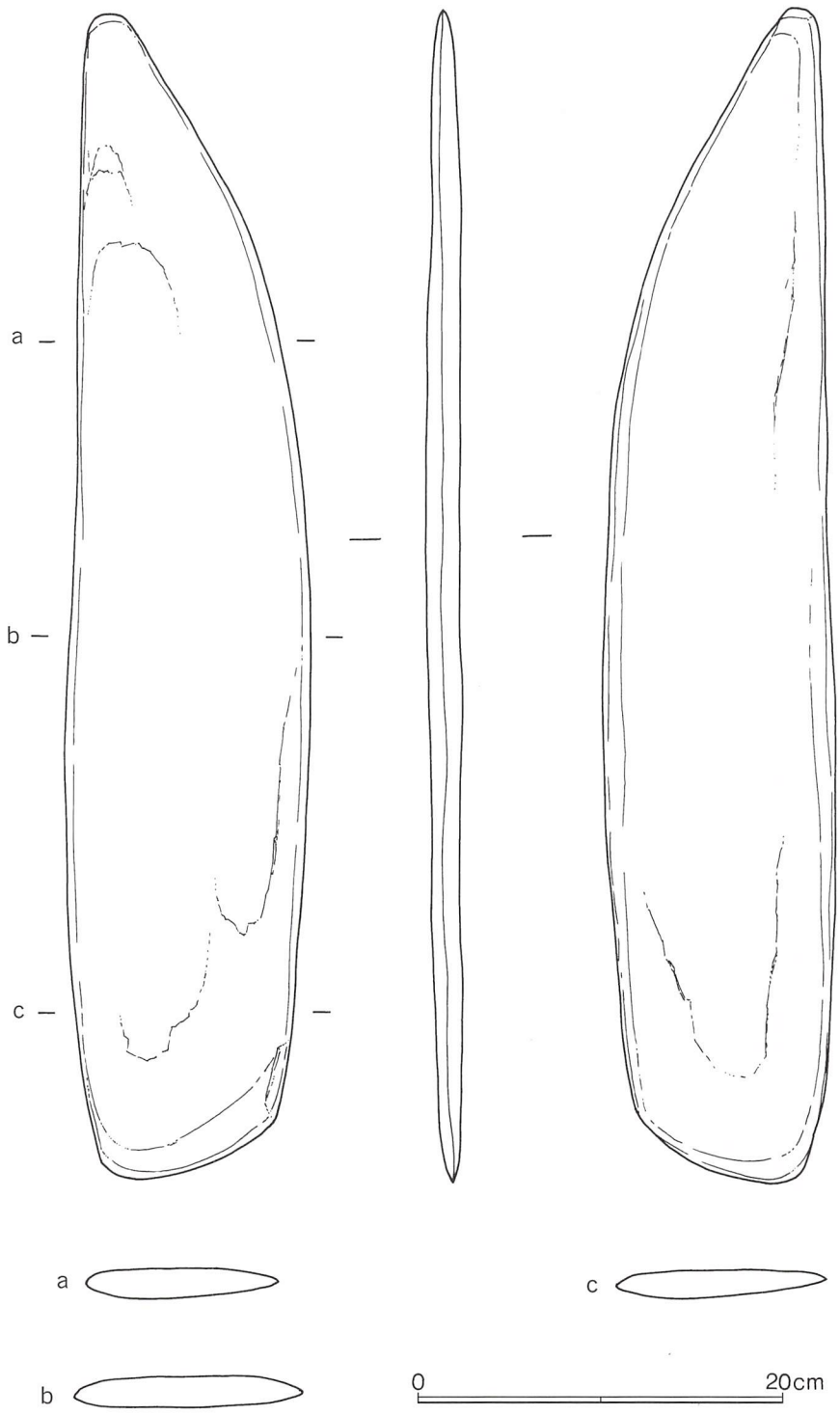
№３（第４図）は長さ64.3cm、幅9.2cm、厚さ1.5cm、重量は1,780ｇ。直線的な側縁と緩やかに湾曲した側縁を持つ石刀状の大型石斧であるが、№２よりさらに石刀状に近似した形態を有する。本例の直線的側縁は擦り切り技法によって形成されたもので、側縁部には表裏両面側からＶ字状の溝が形成された痕跡を明瞭に留めている。最終的には薄くなった箇所を折ったものと考えられ、その

やや突出した箇所（分断部分）を改めて研磨した跡が残っている（線状スクリントーンで表示）。また裏面側には長軸方向に併行した線状痕が数条観察されるが、これが擦り切り時のものか、研磨時のものかは不明である。刃部は研磨によって断面V字状の片刃に仕上げられており、やはり本例も石刀のようなものではなくて石斧であることを裏付けている。擦り切り後の整形・研磨は殆ど観察されず、元来、本例は大型石斧を擦り切り技法により半分割したものであった蓋然性が高い。

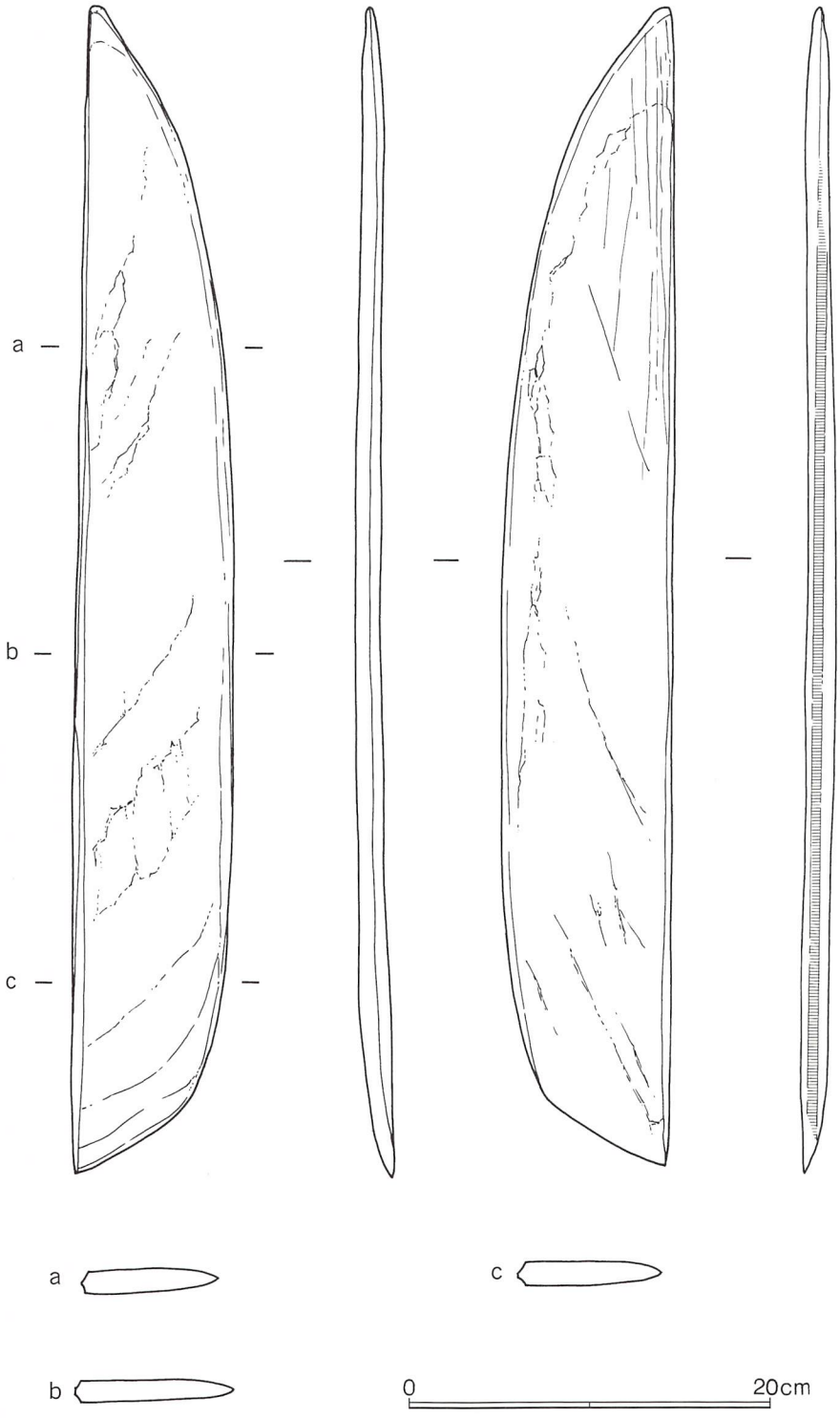
ところで、これらフルセットの「儀礼的交換用石斧」以外にも市教委収蔵品の中には3点のセットが存在するが、これが本来的なフルセットであるのかどうかは明確ではない。しかし資料カードによればそれも同一のディーラーから購入したものであり、採集地もグランド渓谷（GRAND VALLEY）のサルガグ村（SALKAGU VILLAGE）で、ダニ族によって使用されたものと記入されている。ここでは仮に上記をAセット、以下をBセットとして記載の簡略化を心がけておこう。



第2図 「儀礼的交換用石斧」（No. 1）



第3図 「儀礼的交換用石斧」(No. 2)



第４図 「儀礼的交換用石斧」（No. 3）

次にBセットの3点の石斧資料についての概略を紹介する（写真2）。

№1は概形が長楕円形で片側が広がる石斧状を呈する例で、長さ50.3cm、幅15.5cm、厚さは最大で2.2cm、重量は2,860g。器体中央部の横断面は凸レンズ状に近い形態を示し、他の例に比べてやや厚い印象を抱かせる。片面に整形時の剝離面を僅かに残存させるが、他は非常に入念な研磨が行き届いており、河原の転石の様である。

№2は長さ64.5cm、幅8.2cm、厚さ1.6cm、重量が1,490gの石刀状の石斧である。中央部よりやや上に黄褐色の紐、繊維を結んだスカート状の紐、そして毛皮片付きの紐が一回りしている。本資料の特徴はその半月形の形態からも伺われるように、AセットNo.2と同じく擦り切り技法によって分割されたことが明らかな点にある。中央部には分割に先だって目安として引かれたのか、小さな溝状に残る分割線らしきものが認められる。刃部相当箇所には剝離面が存在するが、これらは分割以前のものであることが研磨面との切り合いから判読可能である。従って、本資料も完成品である斧形の形態を縦方向に等分割したものであることが明らかである。

№3は長さ66.2cm、幅15.3cm、厚さは1.4cm、重量が2,375g。長楕円形の平面形態を打ち所蔵資料中でもっとも大きな例である。表裏面に片岩特有の節理面を残存させており、若干の凹凸面が観察される。剝がれやすい節理面にクサビ状の石片を挿入してか、或いは直接敲打を加えることで母岩から剝離したのであろうか。器面は緑色の縞が見られて美しく、黄鉄鉱の結晶も見られる。非常に薄く仕上げられた例である。本例にはまず黄褐色の組み紐が巻かれ、その上に植物の繊維を巻き付けたスカート状と毛糸が結わえられた紐がそれぞれ一回りし、そこに動物の毛と毛皮片付きの紐が巻き付けられている。毛糸は赤、黒、黄色、青、ピンクの5色を認めることができる。

これら3点については1点が中型で他の2点が大型となる組成、1点が分割痕跡を明瞭に留めた石刀状の形態を有すること、オウムの羽根を貼り込んだ飾り板は見られないものの、2点には黄褐色の紐、繊維を結んだスカート状の紐、そして毛皮片付きの紐などが観察されることから先のフルセットと共通点が多い。加えてこれらにもタカラガイを縫い付けたベルトが付随していることから、本来的にはフルセットとしての関係を成立させていた資料と考えて良いだろう。

石斧の産地と製作

さて、「儀礼的交換用石斧」については本多氏がその著書のなかで、使用されている石斧の石材が付近に産出しないことから交易品として流通したものであることが記されている。これは先に紹介した「ダニの居住地から150kmも離れたジェリム川で採られ……交易によって手に入れた」という記載とも合致する。Hamptonによればイリアンジャン地域には4箇所の石材産地（Yeineri, Tagime, Sela, Langda）が存在し、部族毎ではなくて言語集団を単位とした交易網が形成されていたことが指摘されている。ここで紹介したダニ族の「儀礼的交換用石斧」は、YeineriとTagimeという二つの採石場所から供給されたものであり、特にダニ族、西ダニ族にあっては二つの石器原産地のうちで前者が最も主要な産地であったらしい。本多氏も西イリアン地域に複数の石材産地の存在することを紹介したうえで、1962年にオーストラリアの登山家（H・ハーラー）がダニ族ポーターと共にイェリメ（上記Yeineriのことであろう）の石切り場を訪れ、母岩から石斧用の素材を採取するという点と、その際に火を焚いて母岩から素材を剝がしとっていたという興味深い事例を紹介している[9]。

この加熱処理による石材獲得についてはHamptonによる一層詳しい報告があるが、そこでは河

写真２　「儀礼的交換用石斧」のフルセット（Ｂセット）
（左からNo.１、No.２、No.３）

写真３　露頭面を加熱して石斧素材を得る
（Hampton　1999より）

原の巨大転石だけでなく露頭からも加熱処理によって板状の石斧素材を獲得している様子が詳しく紹介されている。河原石の場合は石の上で火を焚いて、頃合いを見計らって火をどけて人頭大のハンマーストーン（河原石：円礫）を叩きつけて石片を獲得する方法である。一方、露頭の岸壁から石材を得る方法は興味深い。まずは岩陰のようにオーバーハングした露頭下に数人の男性が地上１m程の高さに木製の平棚を設け、その上で火を焚いて炎が岩肌にあたるようにする。30～40分程すると水などで冷却することなく岸壁から岩片が音をたてて剝がれ落ちてゆく。この剝落した石材をしばらく自然に放置して冷却した後、ハンマーストーンなどを用いて加工するのだという（写真３）。

さて、ダニ族の石器は玄武岩、角閃石片岩、粘板岩などから製作されていると述べられているが、ここで紹介した鶴ヶ島市に所蔵されていた「儀礼的交換用石斧」は黒色粘板岩製のものによって占められている。大型石斧の中にも黒色だけでなく緑色を交えた色調の石材が認められることと共に、その石斧の表面に黄鉄鉱の結晶が見られる例を Hampton も紹介しているが、これはA・B両セットの資料中にも観察されていることは先述したとおりである。「儀礼的交換用石斧」が限られた特定石材産地で製作されたことを明示していると言えよう。そしてそれは『Culture of Stone』を参照する限り、石材の色調や含まれる鉱物などから Yeineri の産地であった蓋然性はたかい。

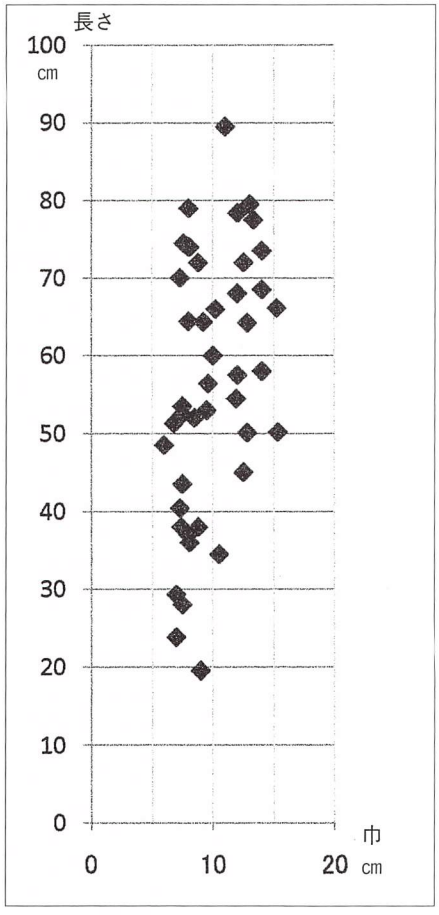
石器製作工程の詳細を復原することは今回の資料からは不可能であるが、少なくともこれらの資料を観察する限りでは、素材が河原石（転石）を加工したものとは考えられず、恐らく上記したような岸壁や露頭などの岩体の表面から直接、加熱処理によって獲得したものであったのだろう。その主たる根拠は表裏面に形態作出の為の剝離、その後の研磨によって素材時の状況を留めてはいないものの、そもそも大型であることと薄く仕上げることを目的としているこの種の石器の場合、板状に素材を剝離することが製作の大前提となっている筈である。その為には河原に点在する礫（巨礫も含め）などにではなく、巨大な岩体の節理面に加撃等を加えて板状に素材を剝離するか、或いは前出のように熱処理を行って直接岩体から剝落されるのが最も適した素材獲得工程となる。長大で狭小な当該石器の属性を念頭に置くならば、裏面側に多少なりとも凹凸が生じる剝離ではなく、熱処理による獲得の方がその後の形態作出を容易に進められたに違いない。

これらの素材はハンマーストーンによる敲打により形態が作出された後、全面に及ぶ研磨作業が丁寧に進められてようやく「儀礼的交換用石斧」となる。鶴ヶ島市例に見られたようにこれらの石斧はその全面にわたって入念な研磨が施されており、素材の剝離・剝落面などを一切留めていない。この研磨作業には手持ち、或いは固定（河原等に存在する巨礫）の砥石が用いられるが、Yeineri 地域には堅く良質の砥石が存在するという。通常の磨製石斧に比べて研磨面積が大きいこの研磨作業では、我々が想像する以上に多大な労力と時間を要するものであったらしい。Hampton は現地のイ

ンフォーマントを介した話として、25-40cmクラスのものでさえ「最短で８ヶ月、長いと１年半から３年もの期間」を要し、また60cmほどの「儀礼的交換用石斧」を所有者である男性は「１年半以上もの時間をかけて磨き続けたもの」と述べたという。こうした研磨作業は無論、毎日ではなく断続的なものであったと考えられが、長時間をかけて磨きあげるという時間・労力の投下は「儀礼的交換用石斧」の大きさに比例するものであることを考えると、その社会的価値（交換価値）の増大の一端をこの研磨作業が負っていたと判断することもできよう。

今回紹介した「儀礼的交換用石斧」について Hampton は「Display Exchange Stones」と称しているが、そもそもダニ族の間では Je と呼ばれている。このジェ（Je）は結婚式や葬式等と言った儀礼時の交換用に製作されるもので、少なくとも他に10種を超える呼び名があるらしい。Hampton は著書のなかで38点の計測結果を紹介しているが、そこには長さが最小で19.5cm、最大で89.5cm、幅は14cmから９cm、厚さは0.9cmから２cmまでのバラエティが認められ、それぞれ平均値は長さが56.4cm、幅が9.6cm、厚さ1.5cmである。これらの数値から判断すると鶴ヶ島例は大型の部類に属していると言うことができよう。また鶴ヶ島例で特に注視される点は「儀礼的交換用石斧」の中に明らかな分割事例が見出された点にあり、６点中２点に明確な擦り切り技法による石斧分割例が確認されたところである。また、Hampton の著書『Culture of Stone』の中にも同様な半月形に近い分割例（P113、Fig. 3. 9）を認めることが可能であり、この「儀礼的交換用石斧」では分割という行為が決して例外的なものではなくて、何らかの意味を有していたことを伺わせている。

ところで「儀礼的交換用石斧」については原産地での原型（Pre-from）形成は間違いないであろ



第５図　Jen の法量
（Hampton　1999より作成）

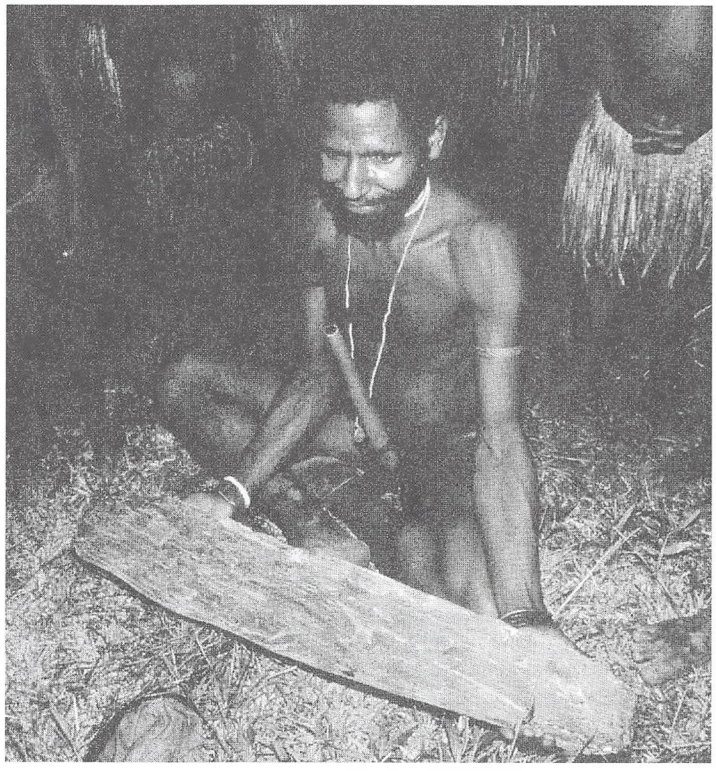


写真４　交易用の石斧素材
（Hampton　1999）

うが、数ヶ月から1年以上にも及ぶ研磨作業までもが全て原産地であるYeineri等の石材原産地周辺で進められていたとは考え難い。本多氏の報告の中にもこのYeineriに棲みそこをテリトリーとするワノ族が、石斧については完成品だけでなく未製品状態で交易品として外部へと出ていたことが記されているが、Hamptonの著書でも交易用に貯蔵されているという完全に研磨作業が終わった7点の石斧と3点の「儀礼的交換用石斧」の素材（原型）が紹介されている。この3点はほぼ形態的な調整が済んでいる様子であり、こうした状態で対外的な交易品として石斧が流通していたことを伺わせており、各部族や集落ではこれを入手した後に多大な時間をかけて研磨作業を進めて製品に仕上げていたのであろう。

この種の石器の価値は第1にその大きさにあり、大きいほどに価値は高い。また、薄さもさることながら幅が狭いことも大きな価値判断の基準とされている。大きくて幅の狭い「儀礼的交換用石斧」ほどその価値があるとみなされるのだが、その他にも素材となった石材の色調（明るい緑、暗緑色、青や黒などの色調を持つYeineri産が最も好まれた）や研磨度も価値評価の要素となっており、全面に及ぶ丁寧な研磨作業（価値の付与・増大）は交換の途中で付加されていった可能性も否定できまい。或いは擦り切りによる分割も、それが原産地でなされたとはとても考えられないことから、入手した集団で何らかの意図をもって再加工（分割）されたものであったのだろう。本稿で紹介した二例の分割資料のいずれもが、分割後に形態の修正や研磨など何ら加工が施されていないことは、分割が単に長くて幅狭くすることだけが目的ではなく、1本の石斧を2本にすることに何らかの社会的意味なり価値が存在したことを物語っていよう[10]。

装飾とその意味

「儀礼的交換用石斧」はそのままで披露されたり交換されたりするのではなく、個々の紹介時に記載したように或いは写真でも判別されるように装飾品が付加されている場合が多い。黄色の紐はランの茎を編んだもので、これを石器中央部からやや上半部にかけて8～12巻ほど互いが重ならないように巻き付けている。このランの茎製の紐は結婚式用のスカートであるジョガル（Jogal）と同じものと考えて良いのだろう。

これに対してその上にはアシの茎を平に伸ばし、それを文字通りスカートのように垂れ下げたサリー(Saliga)で覆っている。このサリーは下のジョガルが見え隠れするような位置に巻かれている点も注視されて良いだろう。前者のジョガルがwedding skirtを、一方、後者のサリーはdrop skirtをそれぞれ表すものとされている。これらミニチュアスカートはある意味で女性表現のモチーフと言えようが、しかしダニの人々への聞き取りからは「儀礼的交換用石斧」には男性や女性などの性差はなく、ただの石なのであるという。

さらにこの鶴ヶ島市の資料にはこれら二つのスカートの上に、各種動物の毛皮片（報告によればそれは木ネズミや豚、袋ネズミ、木カンガルーなどとされている）、オウムなどの鳥の羽、更には恐らく交易で入手したり旅行者などが持ち込んだであろう毛糸片などを付けた植物繊維で編んだ紐が巻かれている。他の事例ではこの上に豚の尾や、Cocoons（ミノムシの一種？）、湾曲した見事なイノシシの牙が複数装着される場合など多様であった。本例で特に看過できない点は何れの資料にもオウムの羽根を貼り込んだ飾り板が差し込まれていることにある[11]。このオウムの羽根付きの飾り板が差し込まれた部位は、『ニューギニア　神と精霊のかたち』に掲載された写真では№1が石斧

本体とジョガルとの間、№2．3がジョガルとサリーの間というように違った部位に差し込まれているが、どちらが本来的な姿なのか(採集後に外れてしまい正確な部位に戻されずに収蔵されたのか)、或いは何れの部位でも構わないのか、など類例が見られなかっただけに断定できず残念である。この飾り板はその形態と羽根の配色からインコを表現していると考えて良いだろう。

「儀礼的交換用石斧」自体に見られる装飾は以上のとおりであるが、しかし、当該資料はこれに加えてセットを括る帯1点とそれを収納する網袋が2点存在する。この帯は一般的にJerakto と呼ばれるもので、長さ約340cm、幅4cmで両端には毛皮片2片が縫い付けられており、帯自体にも大凡70cm間隔で毛皮片が縫い付けられているのが観察される。この帯で注目されるのは帯の中心軸に沿って殻頂部が除去されたタカラガイが2cm間隔で編み込まれている点であり、総計で81点を数える。タカラガイは白色や乳白色のもので、光沢が美しい。因みにこれら81点の貝を計測したところ平均して長さが2.02cm、幅が1.52cmであった。この帯は植物繊維を編んだものであることは確かであるが、それが何であるかは不明である。タカラガイが編み込まれた間には横方向に赤い顔料が塗られている。また、帯の両端には白い粒貝のようなものが見られるが、これはイネ科の数珠玉である。秋に実がなり、数珠のようにして遊ばれることからこの名前があるが、これは東南アジア原産であることからいつの段階かにニューギニアにも伝播したのであろう。この数珠玉の長軸方向に穴をあけたうえで紐を通している。タカラガイと同様に美しく白い光沢が見られる。

この帯はBセットにも付随しており、それにもタカラガイが縫い付けられている。長さは約270cm、幅4cmで端部に毛皮とCocoons[12]と呼ばれる昆虫の巣が縫い付けられている。本来は両端に存在したのであろうが、現在は片側にしか見られない。帯の中途にも毛皮が縫い付けられていたと考えられるが、その痕跡は1箇所にのみ残るだけで不明であるが、本来はAセットの帯と同じく一定の間隔を置いて存在していたのであろう。本例にもタカラガイがその中心軸に沿って縫い付けられている。総数は102点と帯の長さを勘案すると数が多いが、これは間隔をあまり空けずに編み込まれた結果である。タカラガイ102点の平均値は長さが1.92cm、幅が1.41cmとAセットのものと比べるとやや小型であり、しかも粒がそろっていない印象を与えている。両端部の数珠玉の装飾は見られない。また、タカラガイとタカラガイとの間には赤彩ではなく植物の茎(恐らくジョガルと同じランの茎)が編み込まれてアクセントを与えている。

次にフルセットとなった「儀礼的交換用石斧」を入れる網袋であるが、これは鶴ヶ島報告ではノッケンとされていることは前述したとおりである。同じ網袋については本多氏の『ニューギニア高地人』にもしばしば登場するが、本多氏はこれをオンボとして紹介している。このオンボは同書の写真から判断すると首や額に紐をかけて背負うもの（P：56-57、77、180）と帽子のように頭に被るもの（16、77、96、125、201)、そして両者を兼ね備えたもの（56、106、192、192）の三種が見受けられる。これらが明確に使用方法を異にするか否か断言はできないが、同じ植物繊維で製作した網を多用しているとの理解が妥当であろう。

改めて本網袋を眺めてみると、網自体は二重となっており、袋とすると当然ある筈の口が見あたらない。本多氏の著書（P106）に掲載された写真がこの網袋の使用方法を良く表していると考えられ、そこには袋の中にモノが収納されている様子が伺われることから何らかの収納方法があったと考えられる。二つの長方形状の網の片側は三角形状のフード形を呈しており、これを利用して荷物を入れた網を頭に被るようにして運搬していた可能性は高い。この網袋について本多氏はクワ科の

写真５　オウムの羽根の飾板

写真６　網袋（1）

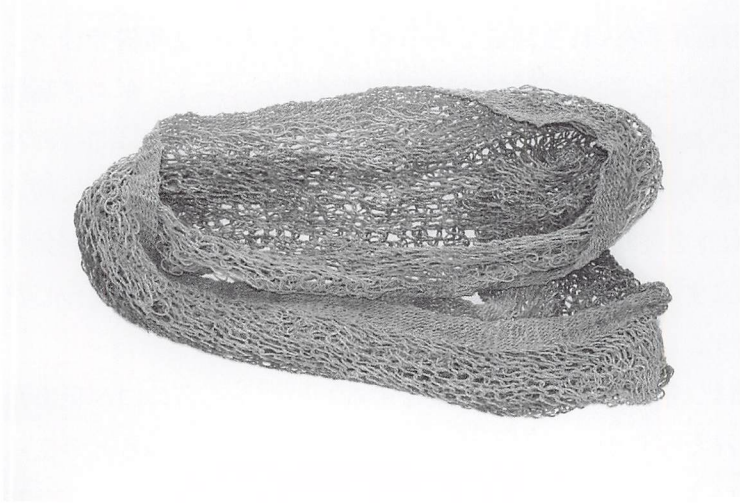


写真７　網袋（2）

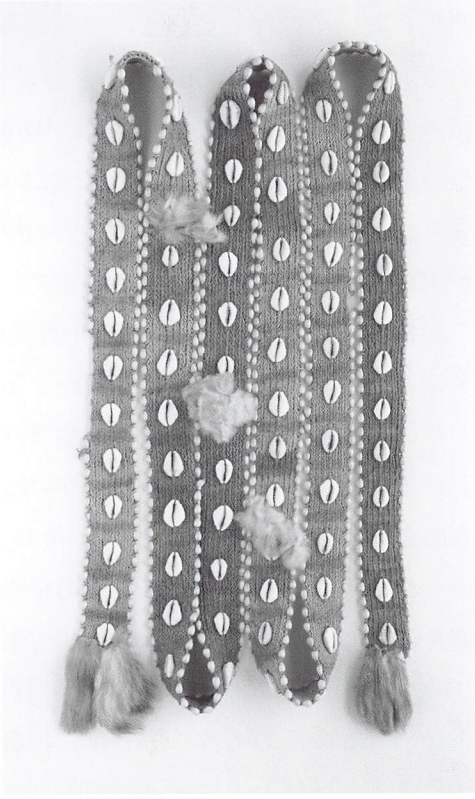


写真８　シェル・バンド

木の皮の繊維で作った紐を編んで作られていることを紹介しており、加えてその編み方についても図示されている。当該資料もまったく同じ編み方で製作されている事が確認された。

「儀礼的交換用石斧」3点と共にセット関係を成立させている網袋は2点存在する。これがどのように使用されたのか、つまり二つの網があるからには二度包むという行為がなされたのか否か、現状では不明と言わざるを得ない。1）石斧を網に入れてタカラガイを編み込んだ帯で縛ったうえで更に網で包む、2）石斧をタカラガイ付きの帯で縛り、網袋で二重に包む、などと言った方法も考えられるが、「儀礼的交換用石斧」、タカラガイを縫い付けた帯、そして網の3点がセットとして始めて交換価値を有していた可能性も否定できない。

「儀礼的交換用石斧」の社会的価値

「儀礼的交換用石斧」はJe以外にもJao、Sie、Siengga などと言った幾つかの違った名前があるが、それらが一様に婚姻や葬儀などの公共儀礼や交易、交換の際に使用された財であった点は疑いの余地がない。当該石器の基本文献である『Culture of Stone』のなかでHamptonは、これらの石器がまた豚などを購入する際の通貨として長らく使用されていたことを紹介し、大凡「大型の石器＝大きな豚、中型の石器＝中型の豚、小型の石器＝小型の豚」という価値の対応関係を指摘している。ただし、その価値は既に若干指摘したように大きさだけでなかった点は興味深い。

大きさに加えてその色調、淡緑色とか光沢とかも価値を推し量る要素であったが、何よりも大きな点はそれがどこから選ばれたものか、その出所や来歴などが大きく関わっていたことは間違いない。例えば或る部族によって保管されていた「Gutelus Stone」という名の石斧は、その長さが121㎝もある長大なもので、そこには祖先の霊や超自然の力が宿っており畏敬の対象として聖なる家に保管されていた。大きさだけでなくその色調や光沢来歴、由緒のある交換用石斧は特別に名前が付けられ、一般の人々の目に触れない特別な場所に保管されていたことが通例であったらしい。今回紹介したフルセットの3点も村人は普段目にすることはなかった資料であったが、中には聖なる石として男性の監視下にある「聖なる家」で管理されていたということから、もはや大きく美しく、由緒のある石斧は、財ではなく目に見えない霊や超自然の力を持った畏敬、或いは恐れ多い存在にまで昇華していたと考えることができる。

Hamptonも著書の中でこのJeが神聖なものとして、人々の畏敬の対象となっており普段、人々の目に触れることがなかったと述べている。彼はインフォーマントを通じて何度もJeの性別や役割、意味、装飾について聞き出そうとするが、彼らは首を振るばかりで何も答えなかったという[13]。

こうした事例を確認してゆくと、マリノフスキーによる名著『西太平洋の遠洋航海者』で記された内容との類似性に気付く。マリノフスキーはクラ交換でやり取りされる「第一級の腕輪と耳飾りは、どれも固有の名前とそれ自体の歴史を持っており」、それは傍目には「数個のきたならしい、油ぎった、みすぼらしい……装身具」でしかない。しかし彼らには「伝統や慣習の社会的力によって意味を与えられており」、彼らが財宝と判断するヴァイグアを所有することは「うれしいこと、心の安まること、ほっとすること」で、眺めたり触ったりするだけでそこにある様々な力が伝わる、つまり彼らにとっては至上の喜びを得ることができるのである。それは生者のみならず死者でも同様であり「ヴァイグアは、霊に与えられる最も効果的な供物」とされている。その為に死者は親族が持ち寄ったヴァイグアや貴重品で取り囲まれる。それは「ヴァイグアは最高の安息であって、人の

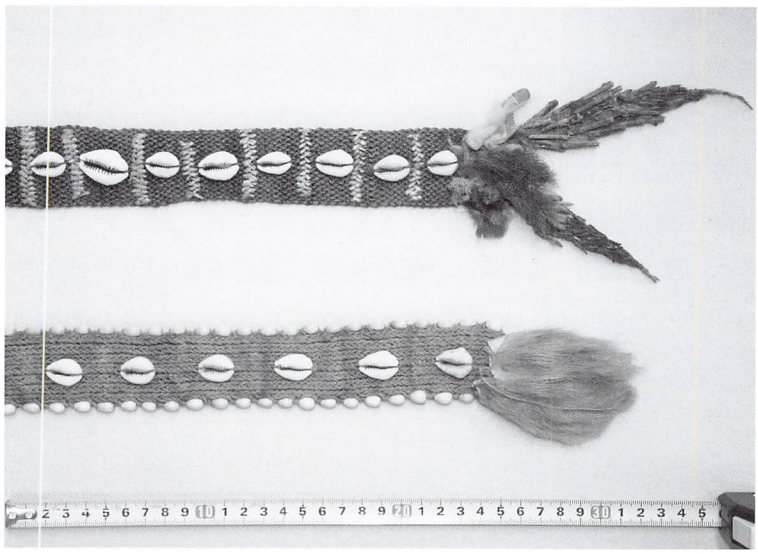


写真9　シェル・ベルト端部の飾り

写真10　ジョガルとサリー

最も忌むべき瞬間でさえ、ヴァイグアで取り囲むと……悪の度合いがうすまる」と認識されているからである。次いでながら有名な部族間に広範に行われる交換形式としてのクラ交換（常に時計回りに移動するソウラヴァと呼ばれる赤色の貝の首飾りと、その逆に回るムワリと呼ばれる白い腕輪の交換）は、様々な交換形態や物資を重層的に含んでいるが、その中にはドガという湾曲したイノシシの牙と共に、ベクと呼ばれる巨大であるが非常に薄く研磨された石斧が流通していた。このベクは勿論実用品ではなく「富のしるしとして、また誇示の品としての機能を果たす」ものであったと記されているが、これは儀礼的交換用石斧と同様なものと考えてよいのかも知れない。

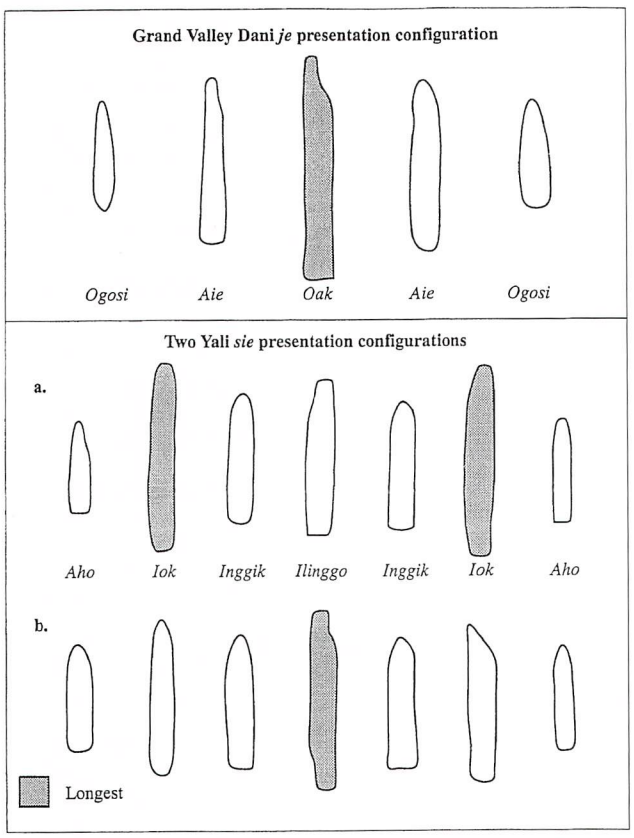
さて「儀礼的交換用石斧」がダニ族社会において普遍的な価値を有していたことは理解されてきたが、最も興味深い点はそれが結婚式や交易の場だけでなく葬式においても利用されていたという点である。しかし、これは石斧が有する価値からすれば当然のことであったようだ。例えば、或る人物の葬儀に際して村人が数匹の豚を持参した場合にはそれに見合う１～２個の交換用石斧を受け取るのが通例であったらしい。葬儀の間は、そうした一種の香典返しとも言い得る「儀礼的交換用石斧」は、女性用のスカートを模した装飾等が施されたうえで３点から７点が儀式用の網袋の上に並べられ、その上にタカラガイの付いた豪華なベルト（シェルベルト）が乗せられていた。そうしたフルセットの包みは下に草やバナナの葉を敷いた上に注意深く且つうやうやしく置かれていたという。こうした情景が本稿で紹介したフルセットの本来の姿であったものと推察されるのである。

ダニ族の社会は明らかな階層社会であり、その財力（豚の数）に対応するように妻の数も多い[14]。東部ダニ族のなかには一人で40～50人もの妻を持つ実力者もいたらしい。そのような人物はBig Manと呼ばれ、集落内だけでなく周辺の村を含めた広範な人々からの人望を得ていた人物である。そうしたBig Manの葬儀に関する記録が残されているが、その際には400点もの「儀礼的交換用石斧」が並べられたと言う。葬儀の際の石斧を含むセットの数は、無くなった人物の社会的な地位によって異なり、１つの場合やゼロの場合もある一方で、このような数百本にも及ぶ膨大な石斧が展示される場合もあった。当然の帰結として葬儀では当事者の側から豚を持参した者には石斧を、石斧を持参した者には豚をというような返礼の義務が生じる訳であり、財力の裏付けがない限りは石

斧の展示もあり得なかったに違いない[15]。

さて、「儀礼的交換用石斧」のもう一つの重要な役割として忘れてならないのが、それが戦争時の賠償に充てられたということである。特に戦争では多数の Je の支払いがなくては収拾がつかなかった、とさえ言われている。考えてみれば戦争は様々な社会的儀礼を伴わざるを得ないものであることを知る。豚や女性を巡る村落単位の戦争では必ず勝者と敗者とに分けられる。勝者は儀式を執り行って勝利を祝う一方で、敗者は戦死者の為の葬儀が行われる。後者の葬儀では上記したように豚や「儀礼的交換用石斧」が提供されるのは無論のこと、前者の勝利の側にあっても祝宴では豚の消費や「儀礼的交換用石斧」が、後者でもその葬儀に豚と「儀礼的交換用石斧」が必要とされる。こうした村内での儀礼的な財の消費に加えて、村単位の財の移転も存在した訳であり、本多氏の著書の中では豚１頭が盗まれた代償として「タカラガイ12個と塩包み２個」が村落間で遣り取りされたことが紹介されている。交易以外にもこうした戦争の代償として村落間で「儀礼的交換用石斧」の移転が行われていた事実は極めて興味深いと言えよう[16]。

ダニ族を始めとしたニューギニア高地人の間では男女間の分業が明確であり、特に男性の仕事は戦争や交易、そして威信獲得（資産・財産の形成）に多くの時間が割かれることとなっていた。生活の基本とも言える食糧生産では女性労働に大きく依拠した社会構造下では、男性の主な活動が集団内外での威信獲得活動へと傾斜してゆくことは必然であったのかも知れない。そもそも一夫多妻という婚姻システムも、豚を始めとしたタカラガイやここで扱った「儀礼的交換用石斧」の蓄財と深く関係したものであったと看做すことが可能であろう。女性を多く娶ることは社会的財産である豚を増やすことの大切な用件であり、豚が増えれば他を蓄財する道が開けてくるに違いないし、更



第６図　石斧の配置と名称
（Hampton　1999）

写真11　Gutelm 村で最も強大な精霊が宿る Je
（Hampton　1999）

に多数の女性を娶ることにも通じてゆくというスパイラル的な連動が見えてくる。ダニ族の社会では人生の様々な場面を通じて財のやり取りが行われているが、最後にその象徴的な財の遣り取り—男性・女性それぞれの親族間で財の贈与—を以下に紹介しておきたい。豚と共に本論で紹介した「儀礼的交換用石斧」が等価の価値を持つことが明らかであると同時に、通過儀礼を含めた様々な儀式に於いて財の交換が親族間でさえも頻繁に行われていたことが伺い知れる。こうした財の贈与・交換関係を通じて親族集団が強固な結び付きを保持し続けていたのであろう。

	花婿の親族	花嫁の親族
結婚	ブタ4頭	経済的援助
祝宴	ジェ6個＋シェルバンド	ブタ3頭他
子供の誕生	ブタ1頭	ジェ＋シェルバンド
息子の通過儀礼	ブタ2頭	ジェ＋シェルバンド
娘の結婚	ブタ2頭	ジェ＋シェルバンド
子供の死	———	ジェ＋シェルバンド

(Brian Schwimmer 1997「Dani Marriage Patterns」より一部改変)

第1表　ジェ（「儀礼的交換用石斧」）の贈与機会とその価値

おわりに

鶴ヶ島市教育委員会に所蔵されていた「儀礼的交換用石斧」のフルセットについて、長々とした説明を行ってきた。はじめに書いたように著者の関心は大型石斧製作の技術的な特徴と機能にあったが、意外にも調べはじめるとその社会的機能等々に関する派生事項について実に興味深いものがあり、とても衝動的に始めた浅はかな勉強で太刀打ちできる対象ではないことを痛感した。とりわけ興味深かったのが、当該石器が財貨としてだけでなく威信財として明確な社会的機能を有していたことであり、本稿の執筆に併せてマリノフスキーの名著「西太平洋の遠洋航海者」を改めて熟読する機会も得ることができた。威信獲得という社会的側面が経済活動をも包括している未開社会への理解が、考古学研究に必須であることを再認識することができたことは大きな成果であった。威信財そのものしか残っていない考古学研究において、威信財に対する人々の意識やその社会的機能が記録化されている民族資料は極めて貴重なものと言えよう。僅かに数点の資料であったが、資料移管前に自らの目で十分に観察する機会があったことは幸運であったと思う。移管前の慌ただしい時期に資料観察の為の借用、観察、分析の機会を許可くださった鶴ヶ島市教育委員会の斉藤　稔氏、並びに天理参考館の吉田裕彦氏に改めてお礼申し上げたい。

また他の原稿執筆との兼ね合いのなかで、年末の慌ただしい期間内で撮影、実測から本文の執筆まで一気に仕上げてしまったが、対象資料の重要性を鑑みれば稚拙な内容であることは否めず、機

会を改めて、再度、本資料を取り上げて検討してみたいと考えている。その折りには是非、著者が興味を抱いている縄文時代の前期以後に出現する巨大化した威信財との比較研究を視野に入れた研究を行ってみたいと考えている。儀礼や威信などといったキーワード一辺倒で説明されることの多い考古遺物について、何らかの解決の糸口を与えてくれる可能性があると期待している。

最後に当該資料の分析に関する基本文献である『Culture of Stone: Sacred and Profane Uses of Stone among the Dani』1999年 O. W. "Bud" Hampton については、国内に在庫がなく本の入手に時間を要してしまったことから、ネット上で事前にその内容をブックレビューにてチェックしたものの、内容の詳細を知るには到底及ばなかった。原本が手元に届いたのは原稿執筆も終了した校正段階であり、一応はその内容に目を通したものの内容に関する十分な理解に至っていない点を白状せざるを得ない。しかしながら執筆段階にて Je の性格やその役割、機能などについては同書の他にも幾つかのネット検索で確認をとることが可能であり、特に Pete Bostrom Collection のギャラリーページではここで紹介したフルセットと全く同一な装飾を持つ「儀礼的交換用石斧」が多数紹介（販売）されており、そこでは随所で Hampton の著書からの引用や概要紹介がなされており、大変に参考になった。またネット上での検索で見つけた Brian Schwimmer による「Dani Economic Organization」、「Dani Marriage Patterns」は、Je が社会内で財貨として活発な動きと機能を負っていることを見事に描き出しており、これも本文執筆に際して多いに役立ったことを付記しておきたい。（2009.12.18脱稿、2010.02.18校了）

《註》

(1) 今泉氏は石内村（塩沢町）に生まれ、その後も地元の役場に勤務されていた。その後に埼玉県朝霞に転居されて養鶏業を営んでいたが、故郷の石内村と塩沢村の合併問題が浮上し請われてその大役を引き受けたという。律儀な人柄に加えて調整能力にも秀でた方だったとの記録がある。美術品収集のきっかけとして伝えられている話として、ビルマの政治家バー・モーとの出会いがあった。バー・モーはインドから独立したビルマの初代首相であり、太平洋戦争終了後に対日協力政権の首席であった彼は日本に亡命をする。約１年の亡命期間中、彼は新潟県塩沢町の寺に滞在して GHQ の追求を逃れていたが、この時にバー・モーを匿ったのが他ならぬ今泉氏であった。今泉氏は世界的にも屈指の宝石産地であるビルマからバー・モーが持ち込んだ数々の装身具や宝石を目の当りにして深く感動したという。

(2) 大橋氏が多大な努力を払って収集した資料もさることながら、今泉氏の意向を汲んでからの収集はより系統的、学問的な方向へとシフトしていったものと考えられる。博物館における収蔵・展示という目標を据えたことにより、以後の収集は明確な方向性を得ていったことが明らかである。大橋氏はロンドンやニューヨークのサザビーズやクルスティーズなどの国際的なものからオセアニアのローカルなオークションに至るまで、殆どのカタログに眼を通して資料収集に当たられたことを述懐されている（大橋2005）。

(3) 世界第二の島であるニューギニア島は本州島の3.4倍、約77万平方キロメートルの面積を有する。人口は周辺の島嶼部も含めても約650万人程であるが、使用されている言語は1,000近くにも及ぶとされている。言語学者によれば一つの言語の話者数が数百人程度の例も珍しくなく、そうした例は平地部に多くて自然環境が厳しい高地の方が１言語あたりの話者数が多いという。

(4) 低地や平地に住む人々との最大の相違は生業にあると言えよう。低地の集落に暮らす人びとはサゴヤシから得たデンプンが主食となる。サゴヤシの木を切り倒し、その幹部分に含まれるデンプンを取り出す為に繊維が細かくなるまで幹を敲いてつぶす。そこに水を加えて溶け出したデンプンを網で漉して容器に入れ、しばらくしてデンプンを沈殿させ、そのデンプンを焼いたり熱湯で溶かして食べる。サゴヤシの他にタロイモやヤムイモ、バナナなども食する。

平地ではヤムイモやタロイモが主食となるが、特にこの地域ではヤムイモが社会的な儀礼・交換などと結びつくことから重要なものとされている。ヤムイモを主食とする地域では収穫時にはヤムイモを村の中央広場に展示して、周囲の村々から人々を招待する。イモは美しく積み上げられ、或るものには装飾を施して見栄えを争う。このヤムイモは招待した他村の男性に贈与というかたちで贈られるが、別の機会には逆に彼から収穫儀礼の誘いを受け、今度はイモをもらう番となる。彼らの最大の関心事は、大きくて長いヤムイモの収穫を村内外に知らしめ、彼らから評価されることにより名声と威信を獲得することにある。豊田氏によって紹介されている東セピック州の事例（食料の交換も贈与という形態をまとっている事実）は、有名なマリノフスキーの報告と全く同一であり興味深い事例と言えよう（豊田2005）。

またこうした人々の威信獲得ついて、大橋氏も興味深い指摘をされている。氏によればニューギニアに棲む人々は自己主張が強く、常に自らの威信を高めることを考えているという。食料だけでなく木彫りの仮面や精霊などの製作も「個人の威信を高める為の手段」であり、村人に賞賛され感動を与える作品を作る為に、男性達は日夜努力しているのだという(大橋2005)。未開社会に於けるたゆまない威信獲得の姿は、縄文時代に限らず先史社会研究に際して多くの示唆を与えてくれるに違いない。

(5) ニューギニアの内陸部では塩は貴重な交易品であった。ダニ族が棲む中部高地ケマブー川流域のホメヨには塩泉があり塩造りが古くからされてきたらしい。塩泉のわき出る場所を囲って池を作り、その中に植物の葉や茎を浸して塩水を浸透させる。1日後にはそれを取り出して燃やして灰にした後、その灰を集めて穴に入れて突き堅めて塩灰を作り木の葉で包んだ包みに仕上げる。この塩灰の包み約5kgで豚1頭と交換されたという。この塩灰は石器やタカラガイ、などと並んで中部高地に棲む人々の貴重な交易品であったことが知られている。

(6) ニューギニア島における世界遺産登録として1999年のロレンツ国立公園（自然遺産）に続き、初期農耕の遺跡であるクック遺跡が登録されたことは意外に思われる人も多いに違いない。2008年に世界遺産登録（登録名称「クックの初期農業遺跡」）されたこの遺跡は、7000年以上も遡る農業遺跡（タロイモやヤムイモ、バナナの栽培に関わる灌漑用遺構や各種石器類）としての価値が認められたもので、1970年以後にフリンダーズ大学のテイム・デナム（Tim Denham）の継続的調査によってその全貌が明らかとされた。我が国では以下の文献で比較的早い段階で、ニューギニアに初期農耕文化の存在したことを知った研究者も多いに違いない。

マーク・ハドソン1997年「パプアニューギニアクック遺跡」『考古学研究』第44-3（通巻175号）

(7) タカラガイが貨幣としての社会的扱いを受けるのは世界共通であるが、ダニ族の間では特にそうした傾向が顕著であった。本多氏の報告には興味深い事実が述べられている。ダニ族の間ではタカラガイの価値はその種類や大きさではなく、むしろ古さや美しさが基準となっており古く光沢のある年代モノこそが価値の高いものとみなされ、それを基準として①から⑦までの等級に区分されている。最も価値の高い①インドは4個で豚1頭、②のインドラグパでは5個、③のホンドでは10個でようやく豚1頭の価値があると判断されるという。これら価値の高いインドやインドラクパなどのタカラガイは、父親が亡くなった時に真っ先に長男に相続される財産でもあったという。

(8) このような儀礼的交換用石斧に見られる異なった二つのスタイルのスカート、①ランの茎を編んで石に短く巻いた結婚用のスカート（Jogal）と②アシの茎を平に伸ばした（通常若い女性によって編まれた）（Sali）はそれぞれ、日常的に女性が被服していたものであった。本多氏の著書にもそれぞれの写真が掲載されている（Jogal：p192、Sali：p91）。本論の交換用の石斧に付随したものと比べてみるとおもしろい。

(9) №1の石器表面には階段状剝離に近い未磨製箇所が存在するが、これは加撃による剝離面というより熱処理や被熱によるそれに類似している。加撃による通常の凹面形成とは考えられず、また石器表面も僅かに変色している印象がある。当該大型石斧製作に於ける熱加工処理については、今後の検討課題としたい。

(10) このように財を分割する事例は、縄文時代の硬玉・琥珀製の大珠にも確認されている（栗島2007）。当時において最も高位に位置づけられている威信財を分割する社会的意義については不明な部分が多いものの、そうした行為が硬玉や琥珀の原産地から離れた地域においてのみ顕在化している事実は見逃せない。物理的には分割するという行為により威信財は半分となるが、社会的にはそれは価値を二分することとなり、二つの集団が等しく価値を共有することにつながる。原産地から離れて威信財の価値が増大することで、財を渇望する集落・集団が互いの親和的関係を構築したり確認する場合にこうした財の分割が行われた可能性がある。大型石斧の

場合はどのような可能性が考えられるのか、興味深い課題と言えよう。

(11) 飾り板（仮称）には色とりどりのオウムの羽根が貼り付けられている。この板は長さが20cm、幅が4cm、厚さが0.7cm程のもので舟形に近い形状を持ち、その一端が先鋭に作られてスカート部分への差し込み部位となっている。恐らくオウムの形態を模倣した骨格であったのだろう。色とりどりの羽根の配置をみると3点共に差し込み部側から順次、赤、紺(黒も混じる)、赤、緑、黄色、紺、緑＋黄色という共通した配列に仕上げられている。インコの羽根を1羽分使用するという報告と、木製の骨格がインコに類似していることから図鑑で検索すると、ニューギニアに生息するインコのうち頭部から同じ配色の羽根を持つインコのいることを知った。オナガパプアインコ（Charmosyna papou）とコウゴウインコ（Charmosyna josefinae）である。この飾り板としたものは、恐らくその形態だけでなく羽根の色の配置から判断してもインコを表示していると考えるべきであろう。

詳細には触れていないものの、Hamptonは各種のスカートは女性表現であり、こうしたオウムの羽や毛皮、豚の牙や尾などは男性を表現すると紹介している。だが、そうした各種の品々によって飾られた「展示交換用石斧」はいずれの性別をも示すことはないらしい。

(12) 昆虫が作った繭を意味するものであろうが、感覚的にはミノムシの繭に類似している。このcocoonsを彼らは死者や祖先の精霊を示すものとして位置づけており、他の品物にも縫い付けられている場合がある。ネットで検索したところ下記のアドレスに同様なものを見つけることができた。Bセットのシェル・ベルトに縫い付けられてものは、全くの自然の昆虫の繭であった。

http://www.qm.qld.gov.au/inquiry/factsheets/case-moths-20080709.pdf

(13) これらのセットの保管状況については不明であるが、葬式などの時にはBig Manがそれらを恭しく並べるが、そこでは新鮮なバナナの葉などの上に網をたたんでJeを置き、その上にタカラガイを縫い込んだ帯を乗せるらしい。フルセットの写真は石斧の上に帯が乗せられるのが本来の姿であるのかも知れない。

また、注目されるのは衆目に触れる場合にはセットの配置も明確となっており、しかもその個々に対して名称が与えられていたということである。その場合に最も重要な判断基準となったのは大きさ（長さ）であったらしく、その大きさに従って与えられた名称は展示される時の位置関係を示すものでもあった。結婚を控えての支払いなどの場合は3点の石斧を含むセット（石斧、網、帯）が一般的であるが、Big Manの葬式などに際しては5点の石斧がセットとなる場合もあったという。そのような数の違いを超えて、展示される時には最も長い石斧を中心や両側に配置するというルールが存在した（第6図参照）。

(14) ダニ族間での結婚費用（男性が女性の親族へ支払う代価：婚資）は1970年代には高騰し、若者達がもはや結婚できないとする訴えを裁判所に起こすという事態にまで至ったという。裁判官が下した最終判断は以下の通りの興味深いものであった（Marcus1978）。

1　新たに結婚する場合には、5頭の豚、一羽のヒクイドリ、300オーストラリアドル。

2　既に一度結婚したことのある場合、その価値は下がり、豚2頭、一羽のヒクイドリ、37.5オーストラリアドル。

3　もし女性が数度の結婚を経験していれば、特に何かを支払う価値はない。

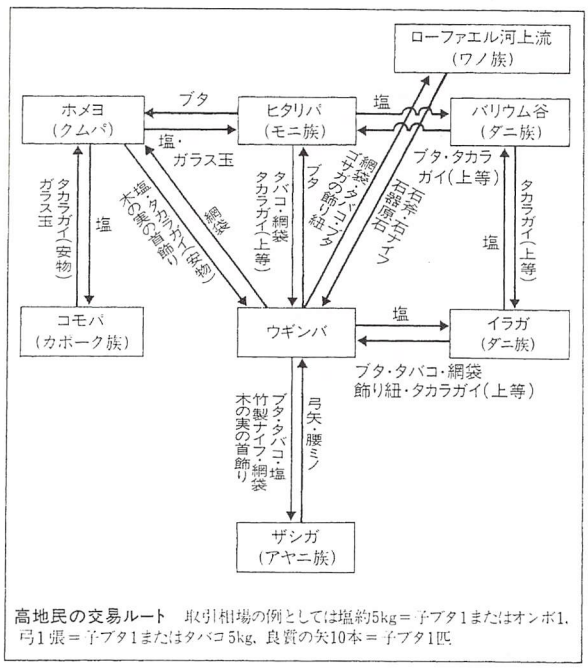
1970年代に至っても婚資として豚が通用していたことと共に、現金であるオーストラリアドルでの支払いも併記されている点は変動する社会の移行を示しており興味深い。

Rebecca B. Marcus　1978　『Survivors of the stone age —nine primitive tribes today—』New York

(15) 確かに豚は彼らダニ族の唯一無二の財産であり、交易や婚資においてなどとして普遍的な価値を有するものである。しかし、時を選ばない葬儀などの場合に提供（贈与）すべき豚が妊娠中であったり、病気であったり、まだ子供であったりすることもあったであろう。これに対して「儀礼的交換用石斧」は無機物であるが故に時も場所も選ばない、即ち有機物としての豚に対して無機物の「儀礼的交換用石斧」は価値ある状態を留め置くことが可能という特質が指摘できるのである。豚だけでなくこうした非実用的な無機質である大型石斧を価値体系の中に組み込んだところにダニ族の知恵を見る思いがする。

(16) 本多氏の著書P117には、高地人の交易ルート並びに交易品が明記されており、極めて興味深い内容を読み取ることができる。本多氏達が滞在したダニ族の村（ウギンバ）の特産品としては網袋（オンボ）があり、豚や

タバコなどと共にその網袋を他村との交易品として提示する一方で、石器類や塩、タカラガイを他から入手している。彼らは入手した塩を同じダニ族の他村との取引で商品として使用する、言わば中継ぎ的な交易を行っている事実が浮かび上がってくるのである。或いは150kmもの遠距離地に産する石材を用いて製作されている「儀礼的交換用石斧」なども、ダニ族の村落間で特定の集落・集団が入手の主導権を握り、他村への分配に際して有利なレートを設定していた可能性も考えられる。



高地民の交易ルート　取引相場の例としては塩約5kg＝子ブタ1またはオンボ1，弓1張＝子ブタ1またはタバコ5kg，良質の矢10本＝子ブタ1匹

交換ルート（本多1981による）

《引用参考文献》

石川榮吉編　1978　『民族の世界史14　―オセアニア世界の伝統と変貌―』㈱山川出版

印東　道子　2002　『オセアニア　―暮らしの考古学―』朝日新聞社

大塚柳太郎　2005　「生活史からみるニューギニア」『オセアニア美術にみる「知流」を超えるもの』㈱里文出版

大橋　昭夫　2005　「現代文明への警鐘　―鶴ヶ島市「オセアニア・コレクションの意義」『オセアニア美術にみる「知流」を超えるもの』㈱里文出版

栗島　義明　2007　「硬玉製大珠の社会的意義　―威信財としての再評価―」『縄紋時代の社会考古学』同成社

鶴ヶ島市教育委員会編　2000　『ニューギニア　神と精霊のかたち』㈱里文出版

鶴ヶ島市教育委員会編　2005　『オセアニア美術にみる「知流」を超えるもの』㈱里文出版

豊田由貴夫　2005　「セピック川流域の住民と造形美術品」『オセアニア美術にみる「知流」を超えるもの』㈱里文出版

福本　繁樹　1994　『精霊と土と炎　―南太平洋の土器―』東京美術

本多　勝一　1981　『ニューギニア高地人』朝日新聞社

マリノフスキー　1967　「西太平洋の遠洋航海者」寺田和夫・増田義郎訳『世界の名著』中央公論社

O.W. Hampton　1999　『Culture of Stone』Sacred and Profane Uses of Stone amng the Dani』Texas University Press

《参考とした主なホームページ》

http://www.lithiccastinglab.com/gallery-pages/2004februaryjestonespage1.htm

http://www.umanitoba.ca/faculties/arts/anthropology/tutor/case-studies/dani/index.html

http://www.everyculture.com/Oceania/Dani-Economy.html

出土板碑からみた製作工程の復元

加藤光男

はじめに

本稿は、平成20年度（2008年12月６日～2009年２月22日）に開催した企画展「板碑が語る中世―造立とその背景―」を企画・運営した際に得られた知見の一端を報告するものである。

板碑に関する考察は、江戸時代から脈々と行われており、本書で総括することは叶わないが、その研究視点は、①信仰の関心から刻まれた主尊や造立趣旨の解読による板碑造立の目的、②歴史学の関心から板碑造立数の推移と地域の動向の関係、③考古学の関心から板碑の形式、④石材の種別による板碑の分布から政治的・経済的な地域のつながりについての考察など多岐に及んでいる。

また、近年の成果として、①板碑用の石材が採集されたことから板碑石材採石地の確定、②主尊種子の形状などの比較検討による地域ごとの固有様式の存在が言及されている。

埼玉県域に造立された板碑は緑泥石片岩製であり、県内では秩父郡長瀞町野上下郷と比企郡小川町下里に岩脈が露頭し、現在でも一部の地域で庭石の石材として切り出していることから、これまでは板碑の石材もこの地域から採石していたものと推定しているにすぎなかった。しかし、磯野氏・伊藤氏により、小川町下里割谷で板碑の未成品（＝中間加工品：筆者補記）が採集[1]され、採石地として実証されたとともに、板碑用の石材が採石地においてある程度成形（詳細は以下に述べる）されていたことが確認された。

一方、刻まれた主尊の種子や蓮座の様式を分析した結果、同じ緑泥石片岩製の板碑であっても地域ごとに固有の様式で刻まれているという研究成果[2]が示された。このことから、個別の流儀を認めざるを得ず、造立依頼者の嗜好の地域性、もしくは地域ごとの個別石工集団の存在を想定しなければならなくなってきている。

このような、近年の動向を受け、本稿では出土板碑にのこされた加工痕から、板碑の製作工程について私見を述べることにより先の研究成果が今後もたらす意味を位置づけていくことにしたい。

なお、板碑の製作に関する先行研究は、先にあげた他の視点による研究に比べて少なく、『小川町の歴史』[3]、松原典明氏の板碑の背面の製作技法についての論考[4]、三宅宗議氏の論考[5]、池上　悟氏の報告[6]、磯野治司氏の研究会における報告[7]などを認めるだけである。

『小川町の歴史』において、板碑の製作は、「①採石」、「②成形加工」、「③調整加工」、「④彫刻」、「⑤装飾」の５段階に分けることができるとしている。本報告もこの考え方に準じていくが、「①採石」および「⑤装飾」については、前掲書に付け加えることがないので本稿では省略し、「②成形加工」から「④彫刻」までの工程について言及することにする。

最初に本稿における各工程の定義を示しておこう。「①採石」とは、岩盤を割って石を取り出し、板状に石を分割するまでのことをいう。「②成形加工」とは、板状に割り取った石材の側辺（側面）を割り欠くことにより山形の頭部、長方形の体部、突起のある基部をつくり大まかに全体像をととのえること。「③調整加工」とは、頭部の山形など外形を整形するとともに、正面［＝表面（おもてめん）・以下同じ］を研磨して仕上げ、板碑の外形を完成させる。また、必要に応じて、二条線や枠

線を刻むことであり、これ以外の彫刻のない状態を想定している。「④彫刻」とは、正面に主尊の図像または種子、紀年銘や造立趣旨などの文字、天蓋や三具足などの装飾を彫ること。「⑤装飾」とは、金泥や朱、墨で彩色させることをいう。

1．KEY STONE 1（小川町採集の板碑未成品）　採石場における加工段階について

小川町下里割谷は、古くから緑泥石片岩の採石地として知られ、採石が行われていた場所である。この採石地は、武蔵型板碑の石材が緑泥石片岩であったため、これまでは武蔵型板碑石材の採石地のひとつといわれてきた。しかし、考古学的な現地調査・研究はほとんど行われず、武蔵型板碑の石材採石地と断定するための裏付け作業はなされていなかった。

しかし、磯野・伊藤の両氏[1]および小川町教育委員会[8]が採石地内で石材を廃棄した屑（ズリ）跡から採集した石片に、人為的な加工痕があり、板碑の外形を有していたことから、小川町下里割谷の採石場が武蔵型板碑の採石地のひとつであることが実証されたのである。

磯野氏・伊藤氏が採集した石片を板碑の未成品であると結論づけた理由は、以下の通りである。①採石の後に板状加工、平面分割、外形成形、面調整という一連の工程（＝「②成形加工」：筆者補記）を想定する資料であった。②形態のみならず、外形を形成するための敲打技法および外形成形の目安となるケガキ線の存在が認められたことによる。

現在のところ採集された石材は、板碑の全体を形成しているものもあるが、頭部または基部のどちらか一方しかない破片が多い。このことから、採集された板碑未成品は、①ズリ跡から発見されたこと、②予定していた外形成形にならなかった、または「②成形加工」段階で体部の部分で破損してしまったなどの理由から、商品として出荷されずに破棄されたものと考えられよう。

磯野氏・伊藤氏は、板碑の未成品として17点について報告している[1]。両氏に認定された石片の一例（展示資料№60）（図１参照）をあげ、観察結果を両氏の論文から引用しよう。

> 全長36.9cm、最大幅17.2cm、厚さ3.1cmで、向かって（以下、左右は向かった方向を指す）［正面（図１左）の：筆者補記］頭部の左斜辺と、下半部を欠損する。［山形があることからこの石片が板碑上部の破片であると判断する。：筆者追記］正面は左右両辺にケガキ線［図１の矢印の延長線上にある刻みの痕跡：筆者補記］が認められ、左辺は端部から８㎜の余地を残して断続的に13.3cm、右辺も同様に27.0cm引かれている。外形成形のための基準線であろう。また、正面全体には刃幅11㎜の平ノミを用い、横位または斜位の押し削りが施されている。面の平滑化を図るための調整と理解できる。こうした面調整は、敲打による破損のリスクを考えれば外形成形後に行われたものと思われるが、本資料では押し削り上にケガキ線が引かれている。背面［図１右：筆者補記］は図の右上を打点として板状に剝離された後、正面側から敲打により外形が成形され、その剝離状況から左辺では上方から下方へ、右辺では下方から上方へ連続的に敲打されたことがうかがえる。

［小　括］

小川町下里割谷の採石場で採集された石片は、板碑固有の山形の頭部、長方形の体部、突起のある基部の外形を持ち、ケガキ線の痕跡があることから、板状に切り出した石材を板碑用の石材にするため意図的に成形したもの（＝板碑未成品）であることを筆者も追認する。また、「①採石」段階で割り採った面において、平ノミを用いて面調整の作業が正面・背面・側面ともになされていた。

この時、両面に残るノミ痕から判断して、採石地にて正面と背面が決められたと筆者は判断する。判断根拠は、一面が割り採った面の凹凸を整える程度のノミ痕であるのに対し、その逆面は数多くのノミ痕があり、より平滑化にしようとする意図が認められ、両面に同様の調整作業がなされていないことによる。ノミ痕の多い方が正面、少ない方が背面であると考える。詳細は別に譲るが、現存する完成した板碑の背面の形状と、板碑未成品の正面の形状は異なるのに対し、板碑未成品の背面が同様の形状であることを根拠とする。

一方、現在のところ、板碑採石地で採集された加工石材には、面調整のためのノミ痕は認められるものの、種子や文字等の彫刻はもちろん、石材の正面を研磨加工した石材も確認されていない。このことから、現状では、石材採石地における加工は、板状に割取った石材を板碑の石材となるように粗加工（＝「②成形加工」段階）するまでであったと考えられる。木材でたとえるならば、丸太をナタで板状に割った後、ノミで天地をおおまかな形に成形した程度で、カンナがけをしていないレベルのものといえる。なお、これまでに採集された板碑未成品には年号などの記載や彫刻がないことから、製作年代を断定することができない。しかし、磯野氏・伊藤氏は、その規格（全長70～80cm程度、最大幅20～30cm程度、厚さが１～２cm程度：筆者補記）から推定して、14世紀後半～16世紀中葉（＝南北朝以降：筆者補記）ではないかとしている[1]。

2－1．KEY STONE 2（東松山市に造立された板碑）　石材の調達方法について１

東松山市域は、最古の紀年銘を刻む板碑の遺る熊谷市地域とともに、初期の板碑が数多く遺されている地域である。企画展では、嘉禄三年（1227）銘をもつ最古の板碑（展示資料№13）とともに、東松山市正代の御霊神社崖下の祠（同№14）、および岩殿に所在する正法寺（同№15）に遺る初期の図像板碑を展示した。これらは、全長１m以上の大型板碑であり、厚さが５cmを越える肉厚であることのほか、最古の板碑の背面、御霊神社崖下の祠の寛喜元年（1229）銘とされる阿弥陀一尊図像板碑の背面、岩殿正法寺の年不詳阿弥陀一尊図像板碑の正面（図２）にすり鉢状の穴があるなどの共通点が見られる。このすり鉢状の穴は、ポットホールと呼称されている。ポットホールとは、水の流れでくぼみにはまった小石が回転して、その力によって削られたすり鉢状の穴（＝おう穴）である。河原を観察すると、河床の岩の表面などで痕跡を見つけることができる。このことから、先にあげた板碑は、山石を切り出したものではなく、河床から採集した石材を元に造られた板碑であり、板碑の石材が山石だけでないことを認識させた。

一方、東松山市宮鼻に所在する青蓮寺に遺る板碑には正面背面の両面にポットホール状の穴があり、また行田市資料館に保管されている板碑の台石には一面に数多くのポットホール状の穴のある事例が知られる。

戦勝祈願や病気平癒のため墓石を削り、その石粉をお守りとして身につける、飲みこむなどの風習が太平洋戦争時まであった。このことから、板碑にのこる穴は人為的なものも含まれ、全てがポットホールであるといえない可能性があると筆者は考えている。河床にのこるポットホールと板碑にのこる穴を比較し、自然的なものか人為的なものか個別に再検討する必要があろう。

2－2．KEY STONE 3（朝霞市東圓寺に遺る板碑）　石材の調達方法について２

朝霞市岡に所在する東圓寺には、文永五年（1268）銘の阿弥陀一尊種子板碑（展示資料№55）［現存長194.3cm、最大幅55.2cm、最大厚8.7cm］が遺されている。この板碑は、伊藤氏・磯野氏により

古墳石棺材を転用していることが確認されている[9]。両氏が、石棺材の転用であると結論づけた根拠は、板碑の基部に板碑の造立に無関係の溝が刻まれており（図３）、その溝状の刻み方が古墳の組合式箱形石棺の底石または蓋石に刻まれたものと同様（図４・５）であったことによる。

以下、石棺材と判断した根拠について、両氏の論文から主要部分を引用しておこう。

> 最も特徴的な加工痕は基部下端から上部６cmの位置に、これと平行して走る溝状の痕跡である。上幅7.5cm、底幅6.0cm、深さ1.5cmほどの規模で、左方へ行くに従って幅を収束させる傾向にある。欠損のため全容は窺い知れないが、後述する鎧塚古墳や玉敷神社例の底石のように、ほどなく収束する可能性があろう。（中略）注意したいのは溝の上部斜面が向かって右側面へ約22cmにわたって連続している点である。あたかも右側縁を斜位に面取りしたようであるが、やはりツキ彫りの後に右上から斜位に平ノミの調整がなされており、基部の溝が直角に伸びていたことが窺える。このことから、石棺の転用部材は側石や小口石ではなく、底石か蓋石のいずれかと想定されるのである。

東圓寺が所在する朝霞市岡には、現在は失われてしまったが一夜塚古墳をはじめとする古墳群が形成されていた。埼玉県内において緑泥石片岩を用いた古墳は珍しいものではなく、比企郡川島町大塚古墳では石棺材として（展示資料（写真）№58）（図５）、比企郡嵐山町稲荷塚古墳では石室材として（展示資料（写真）№59）認められる。千葉県下の古墳でも緑泥石片岩を石材として使用されていることが報告されている。

文永五年（1268）銘をもつ東圓寺の阿弥陀一尊種子板碑の造立において、古墳石材を転用したことを裏付ける文献資料はない。しかしこの板碑の石材は、採石地から切り出したものではなく、石棺材の転用であり、板碑に遺された痕跡の分析による伊藤氏・磯野氏の判断に異論の余地はない。

［小　括］

板碑の石材は、全て山石を切り出したものではなかった。板碑にのこる痕跡から、河床からの採石、古墳石棺の転用などにより製作されたことが確認されている。今回取り上げた板碑のほかにも、行田市河原神社に遺る建長二年（1250）銘の主尊不詳板碑が古墳石棺材の側石を転用していると認定される[9・10]。確認された資料のサンプル数が少数であるため、決定的なことはいえないが、今のところポットホールのある板碑や石棺材を転用した板碑は、南北朝期以前の大型板碑に限定される。

３．KEY STONE ４（おしゃもじ山出土の板碑）　板碑造立地における加工とその方法

比企郡鳩山町赤沼に立地する通称「おしゃもじ山」は、旧鎌倉街道上道沿いにあり、街道に面する側（街道からのぞむことができる面）が西に開けた斜面であり、西方浄土を具現するに格好の場所である。さらに、おしゃもじ山は鎌倉街道上道の交通の要衝であった今宿の宿場に隣接していた。以上のような、仏教教義の上から、歴史的環境から、永仁五年(1297)銘を上限とし弘治三年(1557)銘を下限とする数多くの板碑がこの山の西側斜面と南側斜面から出土している[11]。この地から出土した板碑片をとおして、板碑造立地における加工方法とその工程について言及してみたい。

今回取り上げる板碑片（展示資料№63）（図６）は、大徳子龍編「今宿板碑表」（私家版・1930年）に収録される図37に「未製品」として紹介[12]されており（図７）、現在当館に収蔵（資料番号SHI1978-044-085）し、一般利用できる管理状況にある。このように、情報公開されていたにもかかわらず、この板碑片から板碑の製作工程を論じることは今までなかった。

この板碑片は、頭部を遺す板碑の上部片［現存長24.0cm・最大幅18.4cm・厚1.2cm］である。この板碑片は頭部山形の整形途上で体部で折れてしまい、その結果廃棄されたものと推察する。この板碑にのこされた痕跡から製作過程における二つの加工手法を認めることができる。

ひとつは、正面の面調整の方法と手順である。正面は、刃幅11mmの平ノミを垂直に立て、軽く小刻みに石を叩きながら、凹凸を少なくして平らにした作業を忍ばせる痕跡（図６）がある。さらに、刻んだノミ痕の角が鋭くないことから、先の作業の後に研磨したものと推察する。ただし、ノミ痕を完全に消すまで研磨されてはいない。

１で示したように、採石地で採集した板碑未成品の正面（図１）には、粗加工が施され凹凸を補正するためのノミ痕のみが認められたのに対し、造立地から出土した板碑石材（図６）の正面には、平ノミの痕跡はのこるものの研磨し平滑化したことが認められたのである。当館には、このような加工痕ののこる板碑がほかにもある。この板碑石材は頭部から基部まであり完形であるが、主尊や紀年銘などの彫刻はない。研磨材は不詳であるが、緑泥石片岩をすり合わせた可能性も想定される。

なお、『小川町の歴史』[3]には、研磨加工が行われ、紀年銘などを刻む完成された板碑にもかかわらず、平ノミの痕跡を認める弘安六年（1283）銘を刻む板碑があり（収録資料21-7-3）、完成した板碑においても正面が均一になるまで研磨していない事例があることを指摘しておく。

もうひとつは、頭部の山形の最終整形の方法である。採石地で成形された外郭より内側に、先ノミによる溝が刻まれている。この事例では、整形するための基準線となるケガキ線の痕跡が認められる（図６の矢印の延長線上にある刻みの痕跡）。

右端では、線を境にして一部が欠損していることから、先ノミにより外形となる基準が彫られた後にその線を境にして削り取る手法で整形したことが推察される。

なお、この石片が採集された場所が工房跡であるのか検証する手がかりは残されていない。

［小　括］

造立地において、種子や文字が刻まれる以前に廃棄された板碑に、正面が研磨されていたことが認められた。このことから、「④彫刻」作業以前に、「③調整加工」がなされていたことが証明された。また、外形を成形する方法として、溝を刻んだ後に削り取っていたことが認められた。

さらに、採石地において面調整が行われた後に外形成形が行われたのと同様に、造立地において面調整が行われた後に外形成形が行われていたことを確認することができた。

４-１．KEY STONE ５（青鳥城跡出土板碑）　主尊の種子のみが刻まれた板碑１

東松山市石橋に遺る青鳥城跡は、比企丘陵の南部、東松山台地上にある平城跡である。この城跡からは、かわらけ、すり鉢片、大皿片の生活雑器のほか、正中三年（1326）銘を上限とし文明十八年（1486）銘を下限とする板碑や紀年銘のない板碑が出土している[13]。このなかで欠損のない完形［全長60.5cm、最大幅21.5cm、厚さ4.0cm］で、正面が研磨加工されており、体部の上方には主尊として阿弥陀如来（異体）一尊の種子が刻まれているものの、種子の下に紀年銘や造立者・造立趣旨など文字情報が刻まれていない板碑が確認されている（展示資料№64）（当館収蔵資料番号SHI1990-001-05）（図８）。このことから、「④彫刻」の工程において、主尊を刻む工程と紀年銘などを刻む工程の間に時間差があった可能性がでてきた。

4－2．KEY STONE 6（長龍寺出土板碑）　主尊の種子のみが刻まれた板碑２

先に紹介した板碑以外に、埼玉県内において久喜市（旧南埼玉郡菖蒲町）に所在する長龍寺から、文永五年（1268）銘を上限とし正和三年（1314）銘を下限とする板碑や紀年銘のない板碑が出土している。このなかに、主尊の種子や蓮座は刻まれているものの紀年銘などの彫刻のない板碑(図９）９基、整形され二条線や枠線も刻まれているものの、主尊や紀年銘などの彫刻のない板碑（図10）１基、が確認[14]でき、注目される。刻まれた主尊の種子は、大日如来が６基、釈迦如来が１基、阿閦如来が１基、上部欠損のため確認不能のものが１基である。これに対し、主尊の種子のほか紀年銘なども刻まれた板碑は、大日如来が８基、阿弥陀如来が４基出土している。

主尊の種子のみが刻まれた板碑は、長野県や山梨県下からも確認されている。このことから、主尊の種子のみが刻まれた板碑が広範域に存在していたことがうかがえる。

さて、前掲書[14]では、主尊の種子のみが刻まれた板碑を以下のように評している。

> 表面は整形されていて、無種子のものを除けば、種子や蓮座の彫りも深いので、未製品であるとは考えにくい。また刻されていた紀年銘などを後に削り取ったというような形跡も見つけることができない。従って、造立当初から種子のみを刻するのが目的だったのではないかと考えられる。板石塔婆造立の本来の趣旨（追善供養・逆修等）からは逸脱するが、主尊の種子を板石塔婆の面に刻して礼拝するという行為そのものに功徳を求めたのではないか。すなわち、現世利益追求の目的で、作られた板石塔婆と推定できる。

このように主尊と蓮座のみを刻んだ板碑を完成した板碑と判断している。

板碑が盛んに造立された鎌倉から南北朝時代には、主尊を図像ではなく種子で描いた仏画が多数製作されている。一例として南北朝時代と推定される阿字曼荼羅図（展示資料№32）（図11）をあげておこう。この作品と主尊の種子のみの板碑を比較すると、板碑に刻まれた種子の位置は上部に偏りすぎている。

また、同じ場所で発掘された紀年銘を刻んだ板碑（図12）と比較検討すると、主尊種子の下の空白は紀年銘などを刻むために空けられた空間であったと判断するのが自然である。主尊のみの板碑は、完成品ではなく、後に紀年銘や造立者名を刻むために空けておいた未完成品と判断する。

たとえれば、主尊の種子のみ、または主尊と蓮座のみが刻まれた板碑は既製品の服で、紀年銘などは名入れの刺繍に相当するとはいえないだろうか。

１基ではなく複数基発見されていることから、主尊の彫刻と紀年銘の彫刻が一連の作業として行われていた途中で埋没したとは考えにくい。これらの板碑は、長龍寺内の墓地の改葬工事中に偶発的に発見されたもので、目撃証言によれば、紀年銘などが刻まれていない板碑はすべて立った状態で埋まっていたという[14]。また、枠線からはみ出して紀年銘が刻まれた事例もある(図12右端)。この板碑の場合、枠線が刻まれた後に紀年銘が刻まれたことが確実であり、同様な事例が他にもみられる。

［小　括］

中世城跡や寺院境内などの板碑造立地において、主尊の種子のみが刻まれた板碑が確認されている。主尊の種子下の余白は、後に造立依頼者の要望に従い紀年銘や造立趣旨などを刻むためのものであり、未完成の板碑であると判断した。

なお、主尊の種子の彫刻の工程を知る手がかりとして、二つの事例をあげることができる。

ひとつは、種子の輪郭が先ノミで線刻した状態で放棄された板碑の未完成品が川島町で確認[15]されていることから、輪郭を刻んだ後に彫り込んでいったことが想定される。

また、小川町に遺る板碑（『小川町の歴史　資料編３』収録資料№13－５－１）の種子には、刃幅５㎜前後の平ノミで深く削り、その後に刃幅２㎜前後の先ノミで削った痕跡がみとめられる。

まとめにかえて

各資料についての考証は、各小括で記したので繰り返さない。ここでは、確認されるサンプル数が少なく、時代も地域も異なる今回取り上げた資料から、どこような仮説が立てられるのか私見を述べ、板碑研究の課題を提供することにしたい。

本稿から導き出される仮説は、以下のとおりである。板碑の採石地では「②成形加工」までが行われた。造立地では「③調整加工」以降の工程がなされた。「④彫刻」においては、主尊の種子があらかじめ彫刻され、後に造立依頼者の要望に応じて紀年銘などが彫刻された。

1　採石地で採集した板碑未成品から、採石地における「②成形加工」の実態を再検証した。

さらに、本稿では、正面における研磨などの「③調整加工」までは行われていなかったことを指摘した。この「②成形加工」された資料から、採石地において切り出した石材の一部が板碑の石材とするために加工がなされていたこと、つまり板碑石材としての発注が採石場になされていたことを指摘できる。また、正面と背面の面調整の違いから、採石場から出荷する段階で正面と背面の区別がなされていたことを今回提示した。採石場において、面の区別をした理由は、根拠となる物証が得られていないが、理由の一つとして輸送時の問題を想定している。当時の道具で石材の面を平滑化するには多くの労力を必要とする。一方、面に凹凸があれば、輸送時の振動によりズレが生じやすく運搬に不向きである。双方の課題を克服する方法として、片面だけを整形して、整形した面どうしを合わせることによって解消したとは考えられないだろうか。

板碑が造立されている場所で、建立の補助材として台石を用いる場合があり、台石のなかには板碑の外形をもつ事例がある。線刻がのこり明らかに板碑の転用が認められる資料もあるが、採石地で板碑石材の外形が形成されていることから、板碑の外形をもつ台石の再検証は必要であろう。

2　河床採石といわれる石材を使用した板碑、古墳の石棺材を転用した板碑は、南北朝以前の１ｍを越える板碑であった。古墳の石材に使用された石材が山からの切石なのか河床から採石されたものか今のところ不明である。一方、小川町下里割谷の採石地から採集された板碑未成品は、磯野氏・伊藤氏によれば、14世紀後半以降と比定されている。板碑造立の変遷を、石材採集地の視点と流通の視点と関係で洗い直す必要があろう。

板碑石材の流通は主に河川を使用したといわれている。石材の調達において、河床石から山石へと転換があったのか、または並行して採石されていたのか、地域的な特色がみられるのか、洗い直す必要がある。

3　板碑造立地であるおしゃもじ山から出土した板碑から、造立地における「③調整加工」の実態を今回明らかにした。採石地では研磨加工の痕跡を認める資料は今のところ発見されていないことから、正面の研磨加工は造立地で行われたとの推論を立てることができよう。「②成形加

工」は採石地で、「③調整加工」は造立地でとする分業体制であった可能性がでてきたのである。

4　「④彫刻」工程のなかで、主尊の種子の彫刻と、紀年銘の彫刻との間に時間差があることを推察した。勿論、主尊と紀年銘等の彫刻が一連作業で行われたことを完全否定するものではない。しかし、今回とりあげた板碑は、小型なもので、南北朝期に大量に造られた時期の板碑の規格に近い。大量需要に合わせて、あらかじめ主尊の種子を刻んだ既製品が作られていたと仮定すると興味深い。今後、推論を証明または否定するため、洗い直しを行っていきたい。

また、今回は本論で扱うことができなかったが、「④彫刻」の工程に関して、以下の関心がある。主尊の種子が欠損していないにもかかわらず判読できない板碑、つまり主尊が擬刻である板碑が入間市内で確認されている。また、当館に所蔵している板碑の中にも紀年銘などの文字が稚拙である事例が散見される。板碑に刻む主尊の種子や紀年銘などの文字の素材が、僧侶や板碑製作石工など特定の集団の手によるものか、造立依頼者が自ら記したものなのか、彫刻以前の文字の作成の主体者が誰であるのか検証はなされていない。この問題は、板碑造立の経緯を示す裏付け資料が別に見つかっていないことから、板碑にのこされた情報から読み解くしかないが、稚拙な文字を刻む板碑が時期限定できるものなのか、地域限定できるかなどの視点から再度検証することは必要であろう。

さらに、板碑の種子や蓮座があらかじめ刻まれていた商品があったとなると、はじめにで述べた板碑の種子や蓮座の地域的な特色は、造立依頼者の嗜好ではなく、石工集団の相違で生じたものと考えることが可能であるが、研究が新しいために十分な検証がなされていないのが現状である。このように、板碑の製作工程を視点にした検討課題は多い。

最後になりましたが、本稿を作成するにあたり、坂詰秀一氏、磯野治司氏、伊藤宏之氏、松原典明氏、高橋好信氏、諸岡 勝氏から御教示・御協力をいただきました。厚く御礼申し上げます。

《註》

(1)　磯野治司・伊藤宏之「小川町割谷採集の板碑未成品」（埼玉考古学会『埼玉考古』第42号・2007年）

(2)　一例として、「（フォーラム発表資料集）平成20年度地域史フォーラム・地域の歴史を求めて　板碑と中世びと」（葛飾区郷土と天文の博物館・2008年）

(3)　『小川町の歴史　資料編３』（小川町・1997年）における　三宅宗議「板碑の製作法」

(4)　「板碑石材と製作技法」（『東大和市史資料編６　中世～近世からの伝言』・1997年）

(5)　「板碑石材原産地周辺における調査」（『大正大学文学部論叢』第114号・2001年）

(6)　「小川町で採集した青石の加工石材」（埼玉県郷土文化会『埼玉史談』第47巻第４号・2001年）

(7)　「板碑製作に関する基礎的検討」（土曜考古学研究会発表レジュメ・2006年）

(8)　高橋好信「（シンポジウム資料集）新発見の板碑石材採石遺跡（小川町下里割谷）」（「板碑が語る中世」シンポジウム実行委員会『板碑が語る中世　―造立とその背景―』・2009年）

(9)　伊藤宏之・磯野治司「朝霞市東圓寺の石棺材転用の板碑」（『朝霞市博物館研究紀要』第11号・2008年）

(10)　諸岡　勝「武蔵武士と板碑」（峰岸純夫監修『東国武士と中世寺院』高志書院・2008年所収）

(11)　『鳩山町史編さん調査報告書第５集　鳩山の中世石造物』（鳩山町・2003年）

(12)　栗原文蔵「鳩山町今宿出土の板碑」（埼玉県立歴史資料館『研究紀要』第11号・1989年）のなかで復刻されている。

(13)　『埼玉県遺跡発掘調査報告書　第六集　青鳥城跡』（埼玉県教育委員会・1974年）

(14)　今泉泰之・針谷浩一・渡　政和「中世石造遺物調査（5）　菖蒲町長龍寺出土の板石塔婆について」（埼玉県立歴史資料館『研究紀要』第13号・1991年）

(15)　井上直光・門間　勇「比企地方の「多数造立板碑」の考察」（中世文化財を活用した地域連携実行委員会『中世考古学セミナー資料集』・2010年）

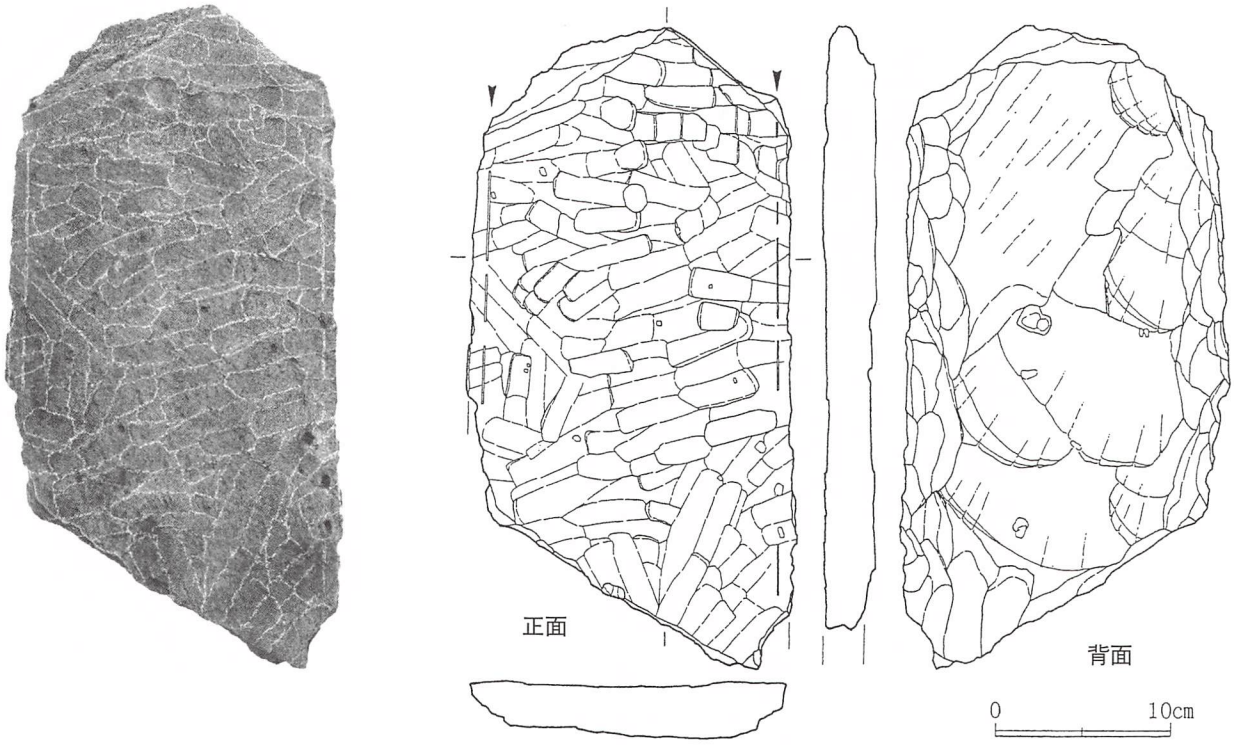


図１　板碑未成品（比企郡小川町下里割谷採集）
（「小川町割谷採集の板碑未成品」より引用掲載）

図２　年不詳板碑（正法寺蔵）の基部にあるポットホール

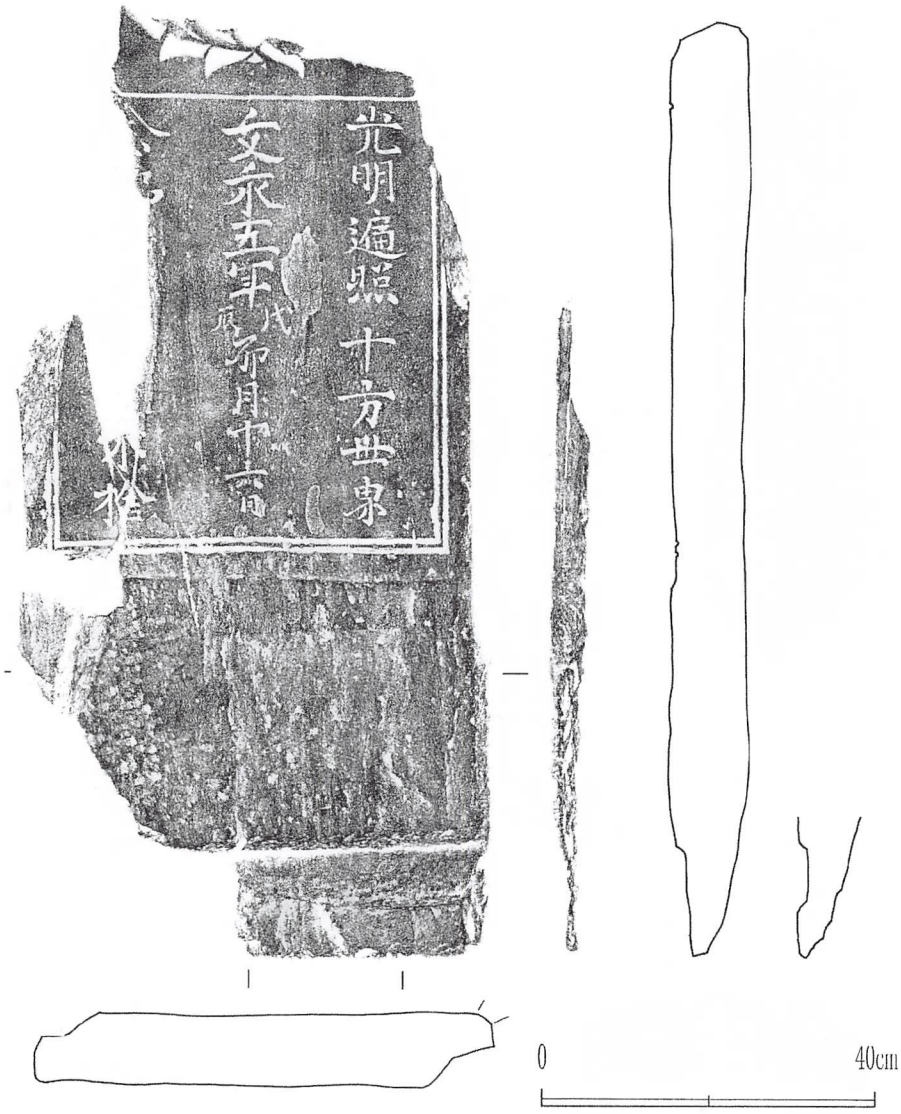


図3　文永五年（1268）銘板碑（東圓寺蔵）の基部に刻まれる溝（磯野治司氏提供）

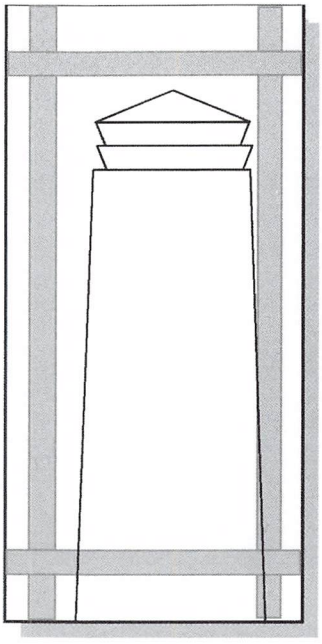


図4　古墳石棺の底石・蓋石の板碑への転用例（「朝霞市東圓寺の石棺材転用の板碑」より引用掲載）

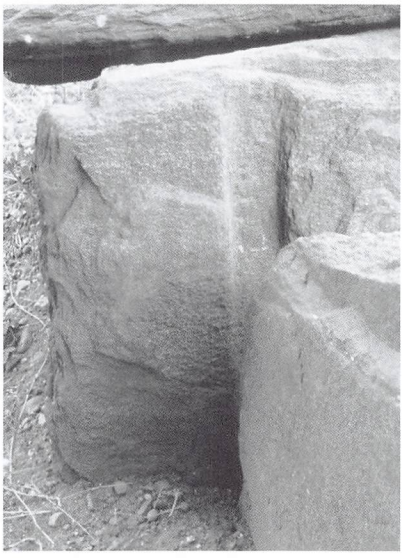
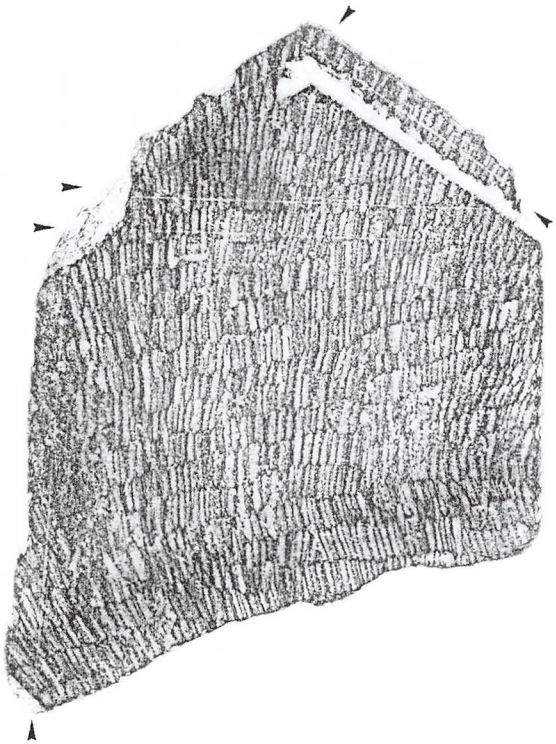
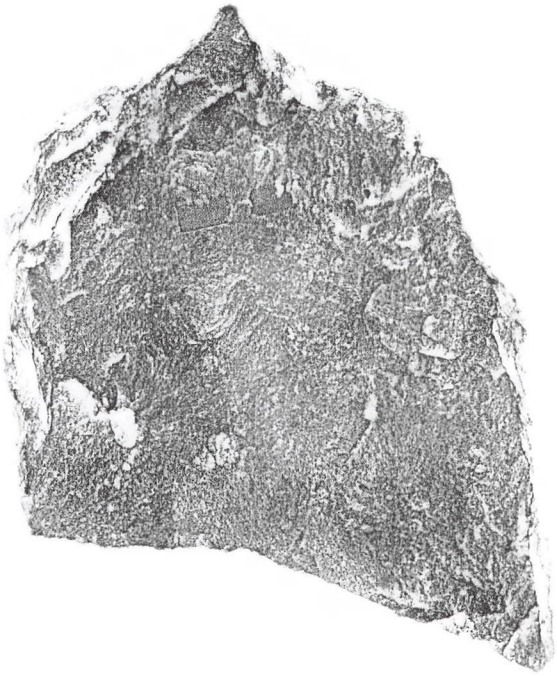


図5　大塚古墳の石棺における石材の組み合わせ部分の溝



正面



背面

図 6　頭部山形の整形や正面の面加工が施された板碑石材片

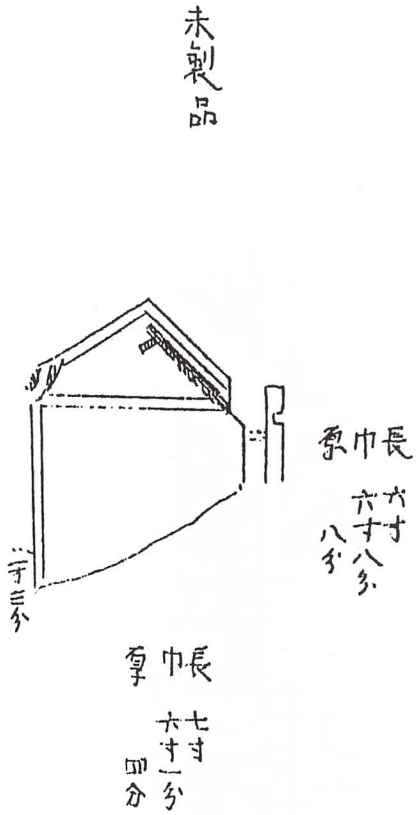


図 7　「今宿板碑表」に掲載される図 6 の板碑石材片の記述

図８　青鳥城跡から出土した主尊の種子のみを刻む板碑

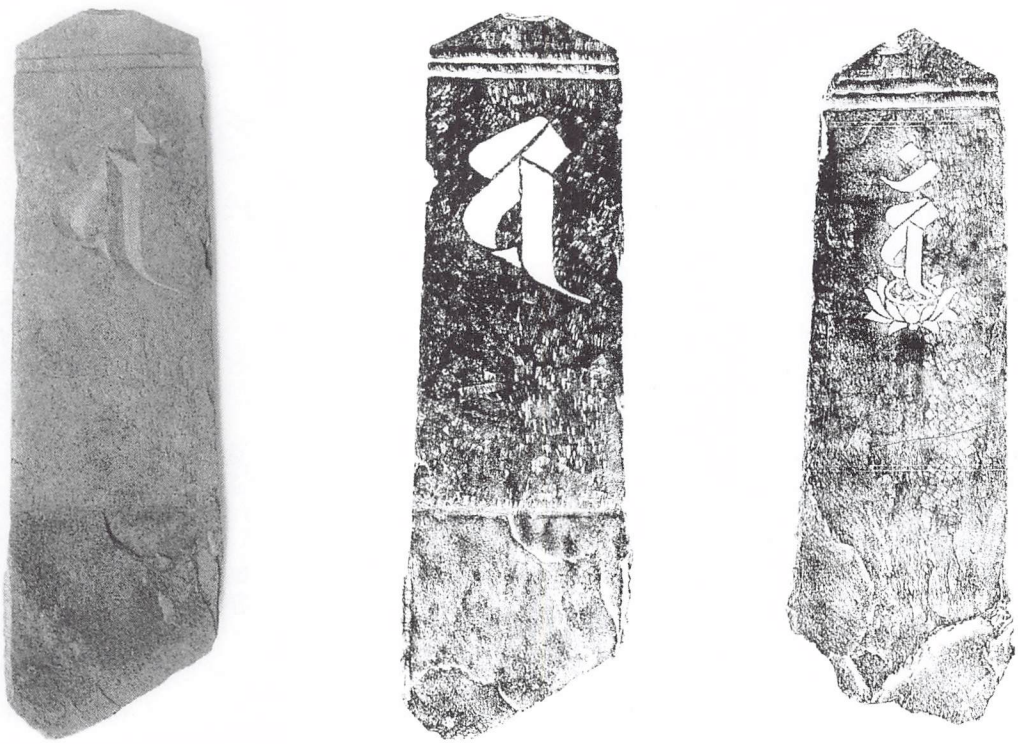


図９　長龍寺から出土した主尊の種子のみを刻む板碑

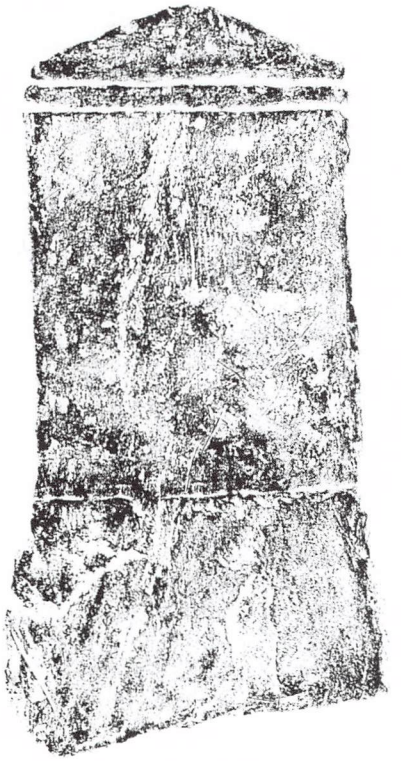


図10　長龍寺から出土した主尊や文字の刻みのない板碑

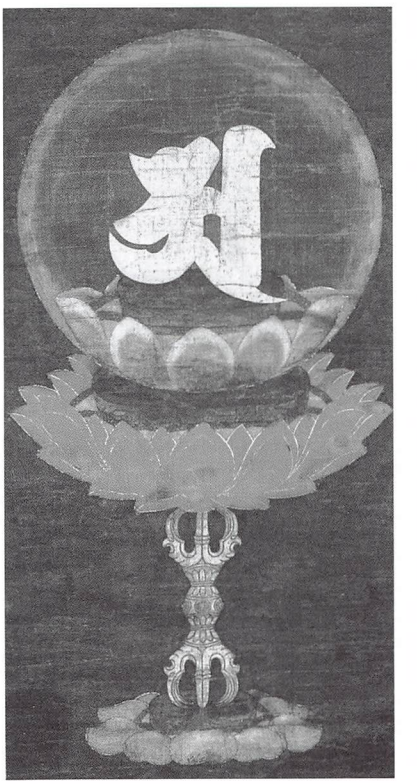


図11　主尊を種子で描いた仏画

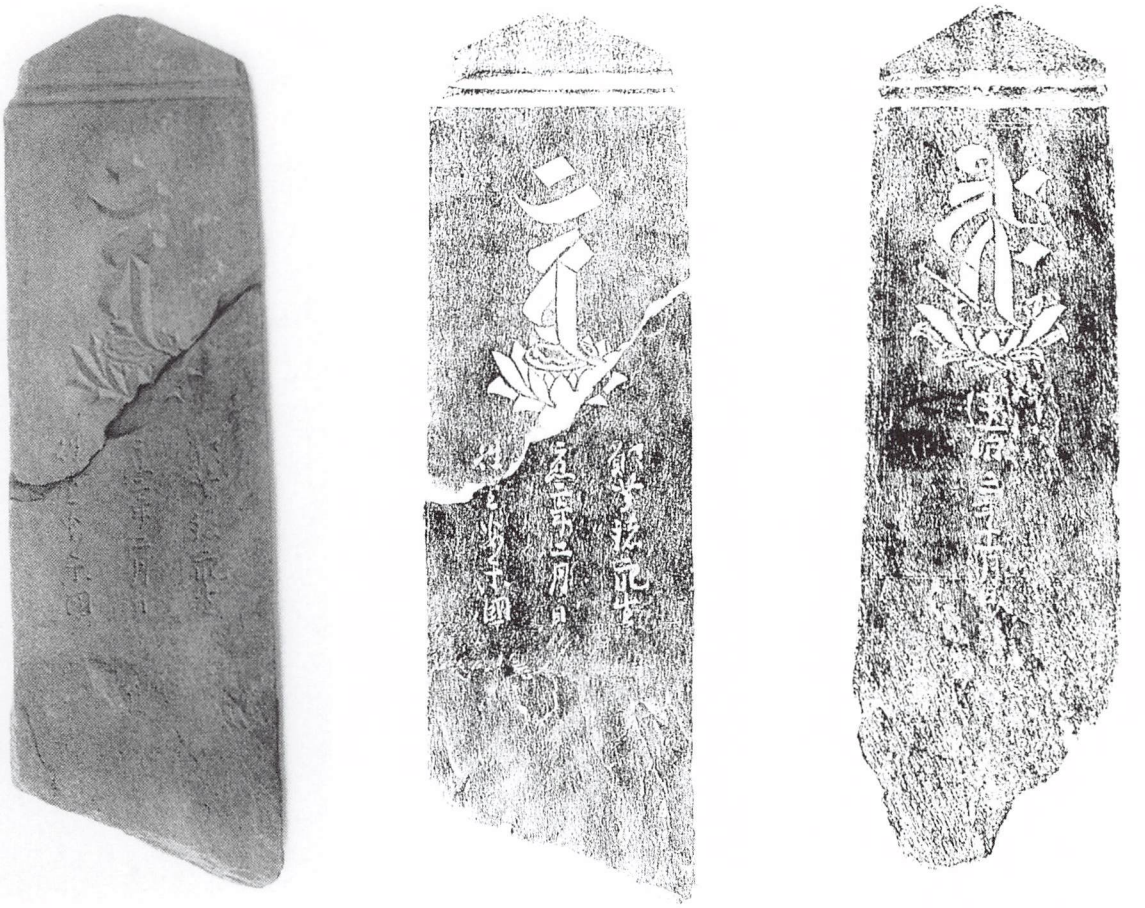


図12　長龍寺から出土した紀年銘などを刻む板碑

参考１　小川町下里割谷の石材採石場の屑（ズリ）斜面の石材堆積状況

参考２　小川町下里割谷の石材採石場の屑（ズリ）平場表面の石材分布状況

埼玉県内おける宝篋印塔・五輪塔の特徴と分布域

栗岡眞理子

はじめに

埼玉県内では２万基を超える板碑、２千基を超える宝篋印塔、５千基を超える五輪塔など、併せて３万基近い中世石塔の所在が確認されている。その中で、県内産の石材を使った中世石塔としては板碑と凝灰岩製の五輪塔があるのみで、その他の中世石塔の石材産地は県内では確認されていない。これらはすべて、近隣の地域から搬入された石材を使っており、そのため石塔の意匠や構成要素にも他地域の影響が反映されている可能性が想定された。

そこで、本稿では宝篋印塔・五輪塔の石材とそれぞれに見られる特徴的な形態の分析から、その関連性について考察を加え、埼玉県内における中世の宝篋印塔･五輪塔の特徴について検討したい。

１　石材別の宝篋印塔・五輪塔の分布について（第１図）

第１図には、県内に所在する宝篋印塔・五輪塔の内、石材がわかっているものについて、その分布を示した。群馬県産と考えられる多孔質黒色安山岩・灰色安山岩製のものは秩父郡をのぞくほぼ全域に所在し、中心的な石材として流通していたことがわかる。利根川の転石利用が考えられるやはり群馬県産の多孔質角閃石安山岩製のものは利根川流域のうち深谷市に多く所在し、分布としては県北部に多く所在する。また、群馬県（藤岡市周辺）産の牛伏砂岩は関東管領山内上杉氏との関わりが説かれており（秋池1998）、埼玉県では県北西部に分布が偏る。東京都（青梅市周辺）産の伊奈石と呼ばれる砂岩製のものは県南部の限られた地域での所在が確認されており、偏った分布を示している。

２　県内で確認された石材の代表的な資料と形態について（第２・３図）

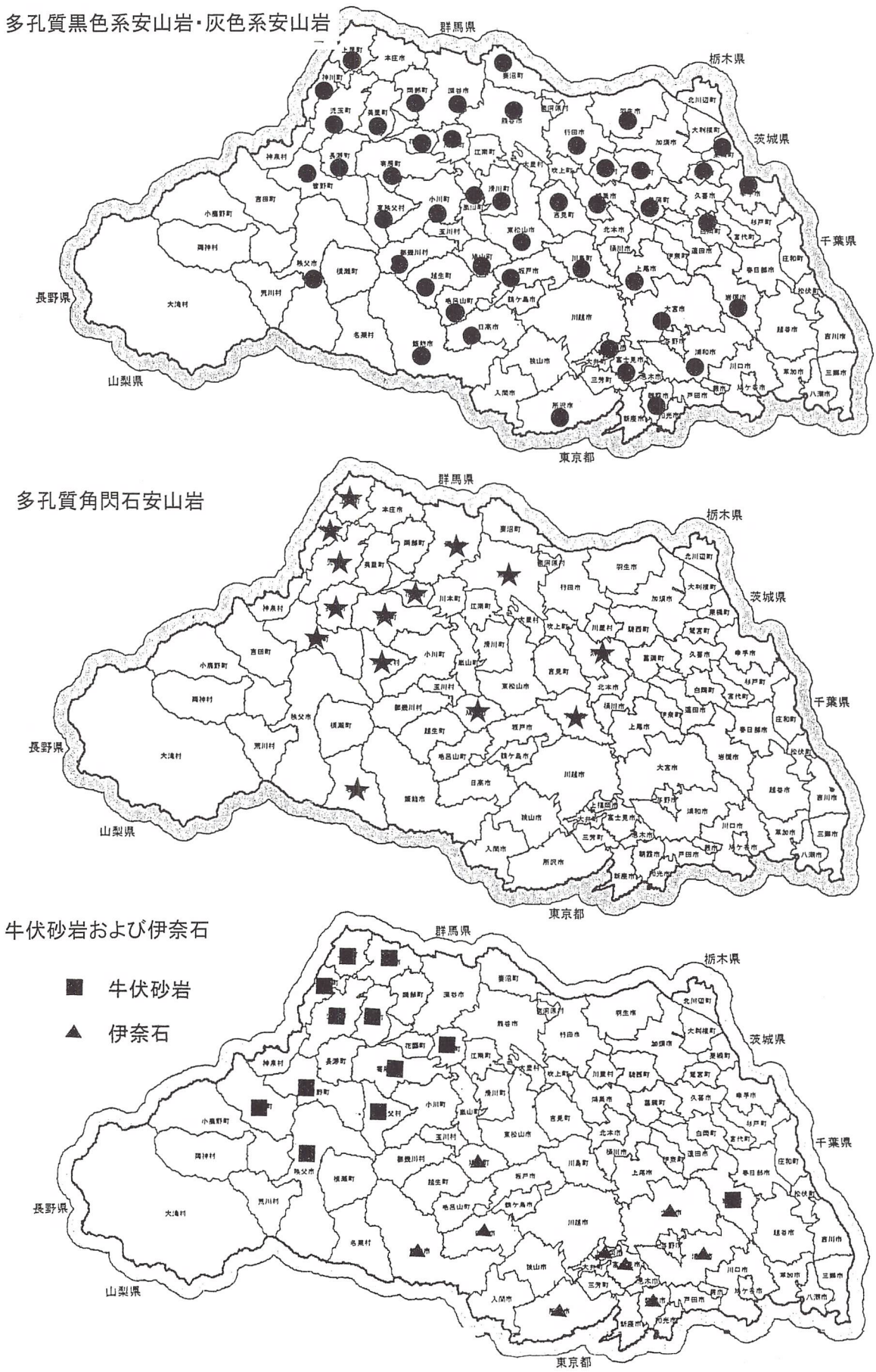
⑴ 安山岩製（第２図）

１は川口市善光寺に所在する宝篋印塔で、元亨２年（1322）銘、県内最古の紀年銘宝篋印塔である。相輪を欠くものの、遺存状態のよい石塔で群馬県産の灰色安山岩製とされる。２は久喜市甘棠院に所在する五輪塔で、伝足利政氏墓である。享禄４年（1531）銘、灰色安山岩製である。３は所沢市妙善院に所在する嘉暦４年（1329）銘五輪塔で、県内最古の紀年銘五輪塔である。群馬県産の多孔質黒色安山岩製である。４は飯能市長念寺所在の至徳４年（1387）銘宝篋印塔である。基礎が２つ重なるが、どちらの紀年銘も同年であり、この寺院には至徳４年、３年銘を刻む基礎が10基以上所在しており、集団による造立が考えられる興味深い資料である。石材は灰色安山岩。

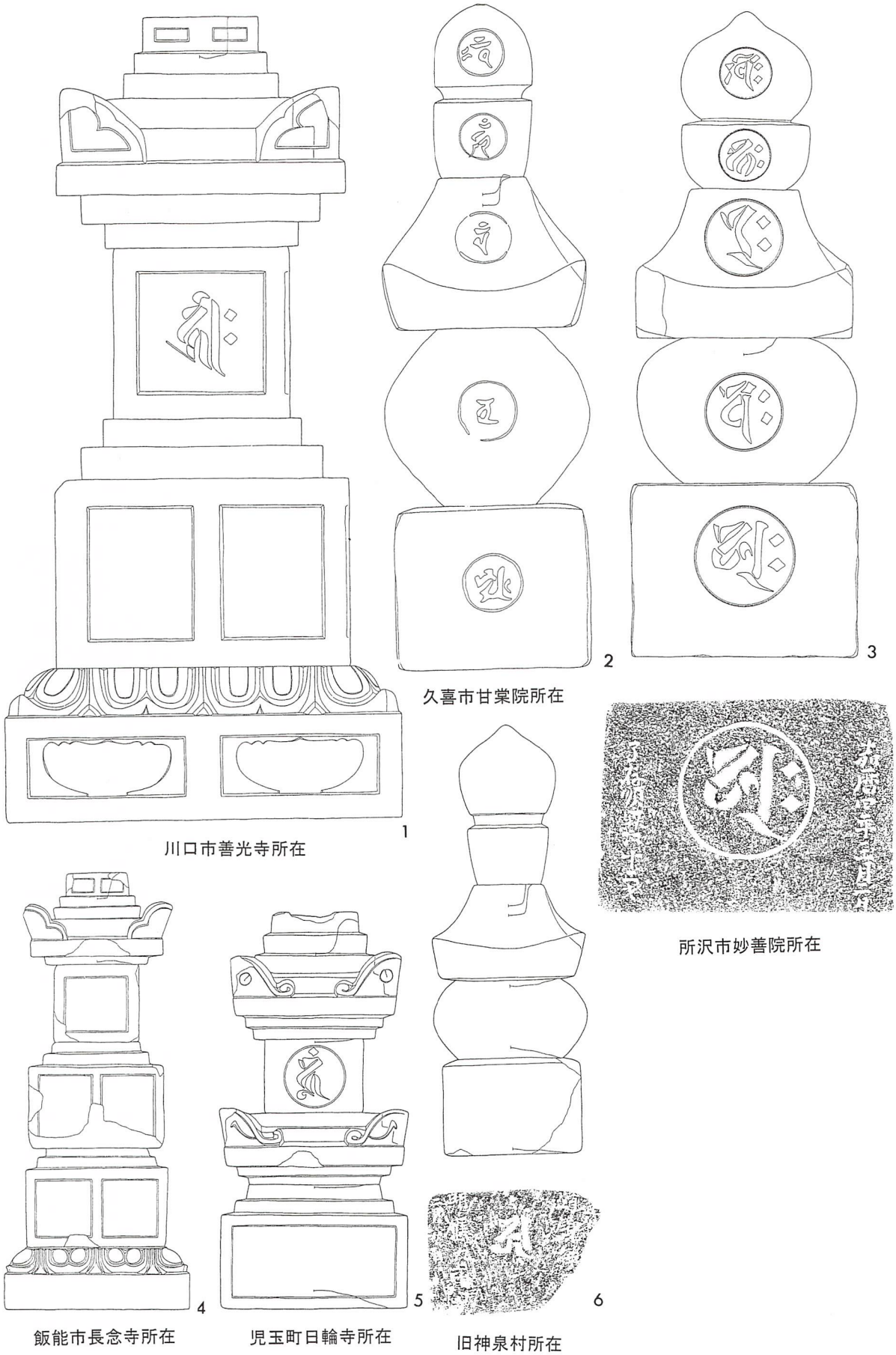
安山岩製の宝篋印塔笠は、川口市の資料は２ａ・上部５段、飯能市の資料は２ａ′・上部４段である。五輪塔の空風輪は久喜市の資料がｅ類、所沢市の資料が古式の形態のａ類である。

⑵ 角閃石安山岩製（第２図）

５は児玉町日輪寺所在の宝篋印塔であり、嘉吉３年（1443）銘を刻む。中台（笠に似た形状で、上部段形が１段しかないもの）があることから、多重式の宝篋印塔になると考えられる。６は旧神



第１図　埼玉県内の石材別宝篋印塔・五輪塔分布図（秋池2005より作成）



第2図　安山岩系・多孔質角閃石安山岩製の主な石塔

伊奈石製

1

2

所沢市所在

所沢市所在

牛伏砂岩製

3

4

岩槻市芳林寺所在

児玉町千手院跡所在

神奈川県の遺跡出土資料

5

6

鎌倉市弁ケ谷東やぐら群（鈴木他　2000）

7

鎌倉市間口またやぐら群

（宍戸他　2004）

8

小田原市伝肇寺西第Ⅰ地点

（山口他　2004）

群馬県の遺跡出土資料

9

下仁田町杣瀬Ⅲ遺跡（大賀他　1994）

10

11

12

13

群馬町井出地区遺跡群（清水他　1999）

宝篋印塔・笠の隅飾突起の分類（栗岡　2002）

2a

2a'

2a''

1b

2b

1c

2c

五輪塔・空風輪の分類（栗岡　2001）

a

b

c

d

e

f

第３図　県内の主な砂岩製石塔、他地域の出土資料、宝篋印塔笠・五輪塔空風輪の分類

泉村所在の五輪塔で明応9年（1500）銘である。

角閃石安山岩製の宝篋印塔笠は１ｂ・上部４段であり、五輪塔の空風輪はｃ類である。

⑶ 砂岩製五輪塔（第３図）

１が所沢市所在の石塔で、宝篋印塔と五輪塔が混在して建てられており、宝篋印塔の部材は相輪・笠・反花座である。伊奈石製である。２は所沢市所在の五輪塔で、文明３年（1471）銘が刻まれる。空風輪以外の部材が全て伊奈石製である。３は旧岩槻市芳林寺所在の伝太田氏資墓である。永禄11年(1568)銘を刻むもので、牛伏砂岩製である。４は児玉町千住院跡所在の五輪塔で、天正５年(1577)銘を刻む。牛伏砂岩製である。

牛伏砂岩製の宝篋印塔笠は戦国期型であり、五輪塔の空風輪はｃ類である。伊奈石製の宝篋印塔笠は２ａ・上部５段である。

3　宝篋印塔の笠に見られる特徴と石材について

⑴ 隅飾突起と上部段形の分布傾向（グラフ１・２　第３図）

隅飾突起を３つに分類し(第３図参照)、県内の各郡市の造立基数を示したものがグラフ１である。２弧輪郭型（２ａ）は北足立郡、入間郡で非常に多く見られ、県南部・県東部に分布の偏りをみせる。蕨手形（１ｂ、２ｂ）とパルメット形は、比企郡、秩父郡、児玉郡、大里郡に多く所在し、県央部から北部にかけて分布の偏りをみせる。

グラフ２は上部段形の分布について示したものである。県内では４段もしくは５段になるものが主体であり、地域により以下のような偏りが見られる。上部段形が４段以下のものは比企郡、秩父郡、児玉郡、大里郡、北埼玉郡に多く所在し、県央部から北部にかけて分布が偏る。５段以上のものは、北足立郡、入間郡が突出しており、県南部に多く分布する傾向がつかめる。

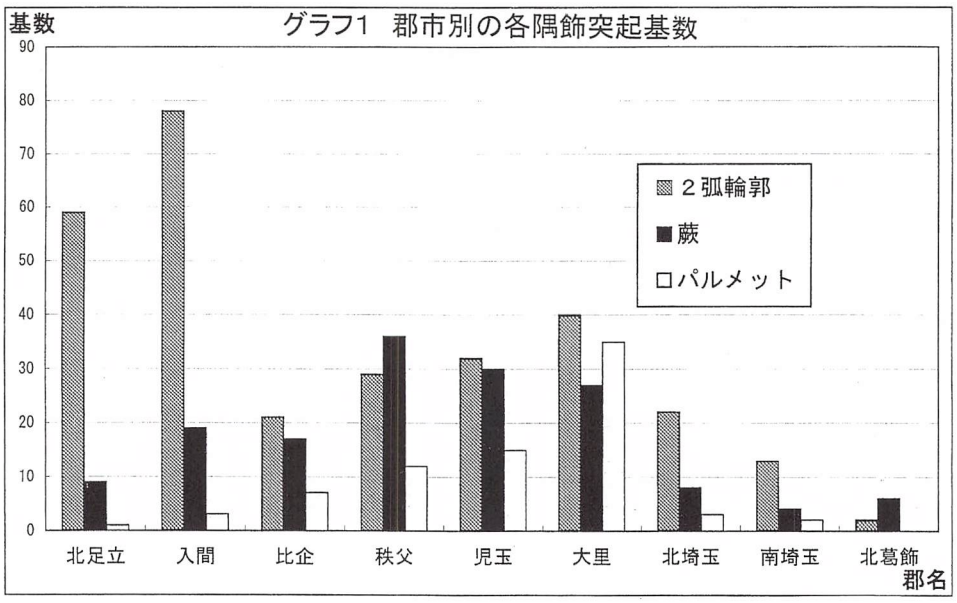
このように、隅飾突起の分布と上部段形は共通する傾向を示し、隅飾突起が２弧輪郭型の笠の場合上部段形が５段以上になり、それは県南部から東部にかけて分布する。また、隅飾突起が蕨手形もしくはパルメット形となる場合は上部段形が４段以下となり、県央部から北部にかけて分布する傾向がつかめる。

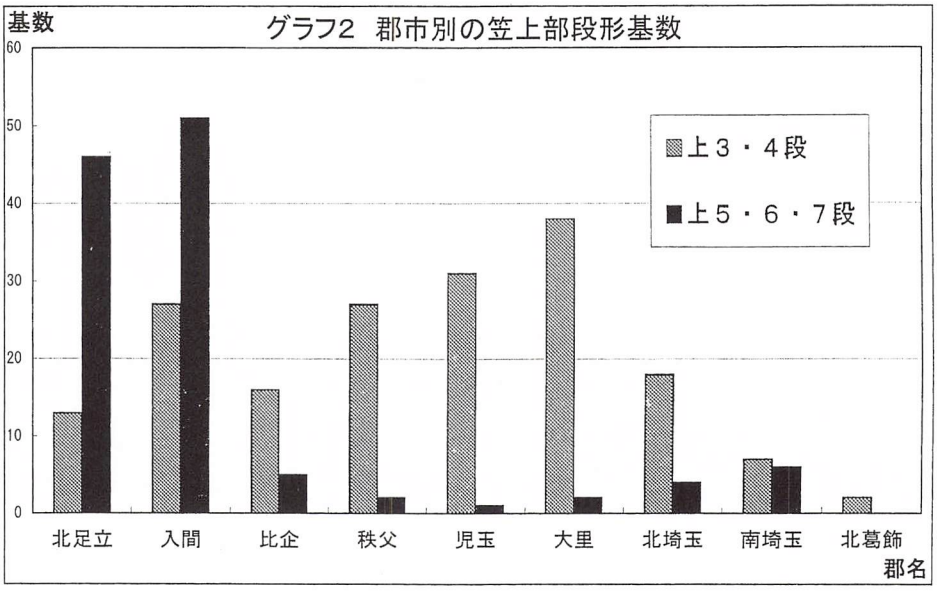
⑵ 隅飾突起・上部段形と使用石材に見られる分布傾向（グラフ３・４・５・６・７）

次に先述した隅飾突起と上部段形を使用される石材との関連性を検討したい。

２弧輪郭形・上部４段（グラフ３）及び蕨手形・上部４段（グラフ５）及び１弧パルメット形（グラフ６）の笠は、安山岩製のものが多く、その傾向は県内全域で確認できる。また、２弧輪郭形・上部段形５段（グラフ４）の笠は北足立郡・入間郡に偏って分布するとともに、砂岩製のものが多い。戦国期型とされる（グラフ７）様々な装飾が施されたパルメット形の隅飾突起を持つ笠は大里郡、秩父郡など県北部に偏って分布し、砂岩製のものが多い。

このように、上部段形が４段の笠は隅飾突起の形態に関わらず、安山岩を石材として使用する傾向がつかめる。２弧輪郭形・上部５段の笠の分布は第１図の伊那石製石塔の分布と重なり、興味深い。また、戦国期型の笠の分布は第１図の牛伏砂岩製石塔の分布と重なり、伊那石の場合と同様の傾向を示す。

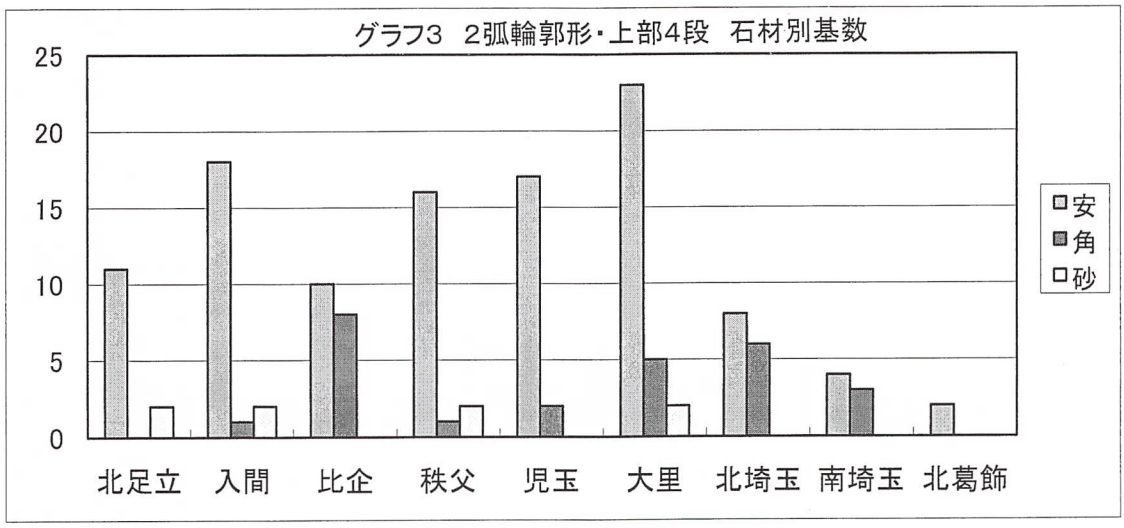


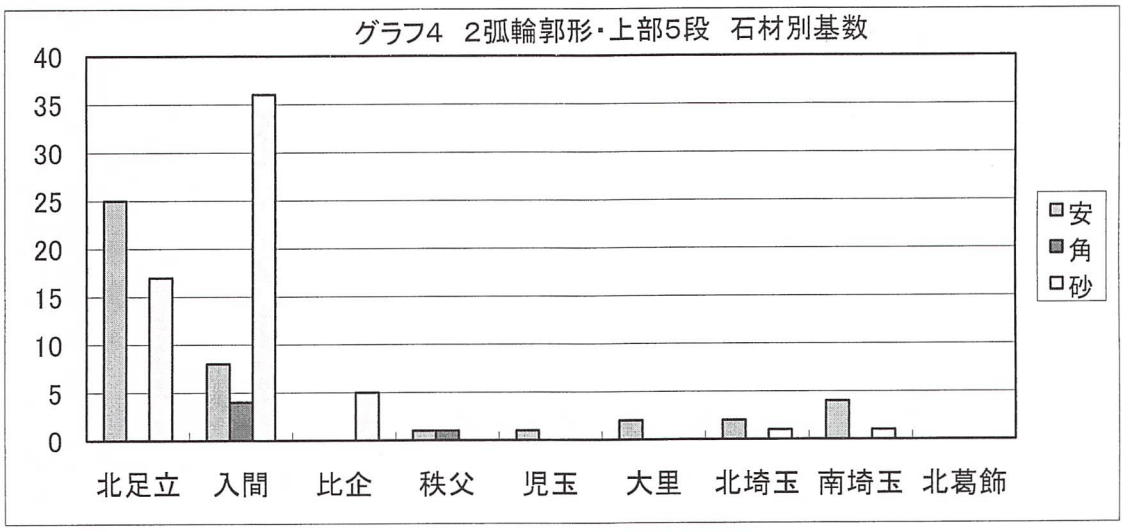


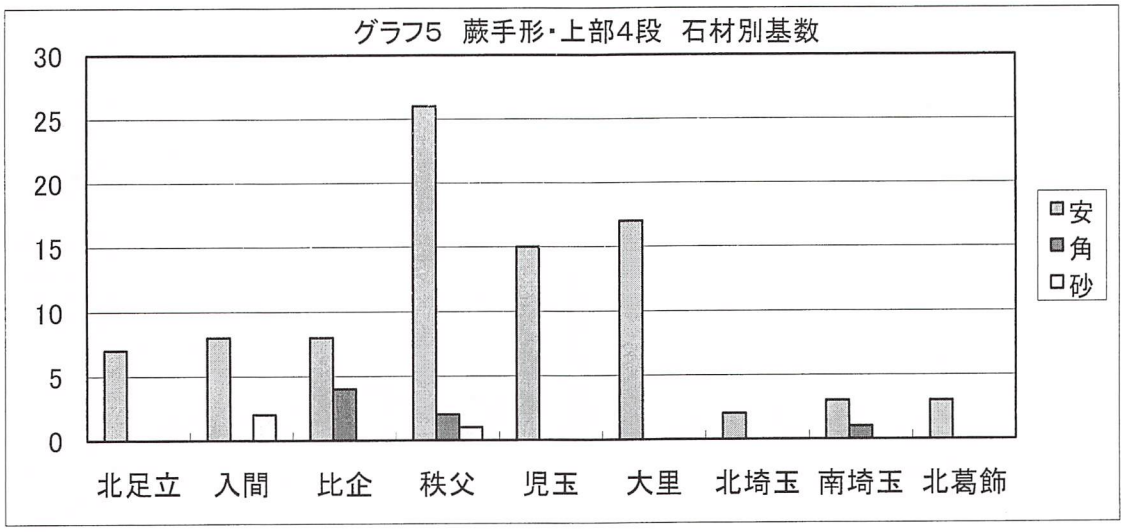
埼玉県　各郡市位置図

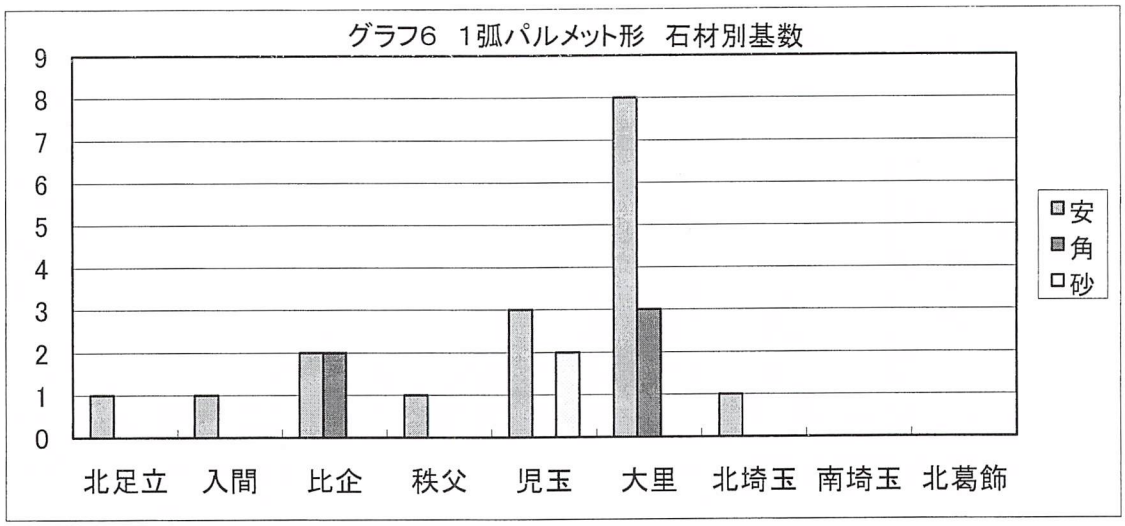
表Ⅰ　郡市別宝篋印塔部位基数

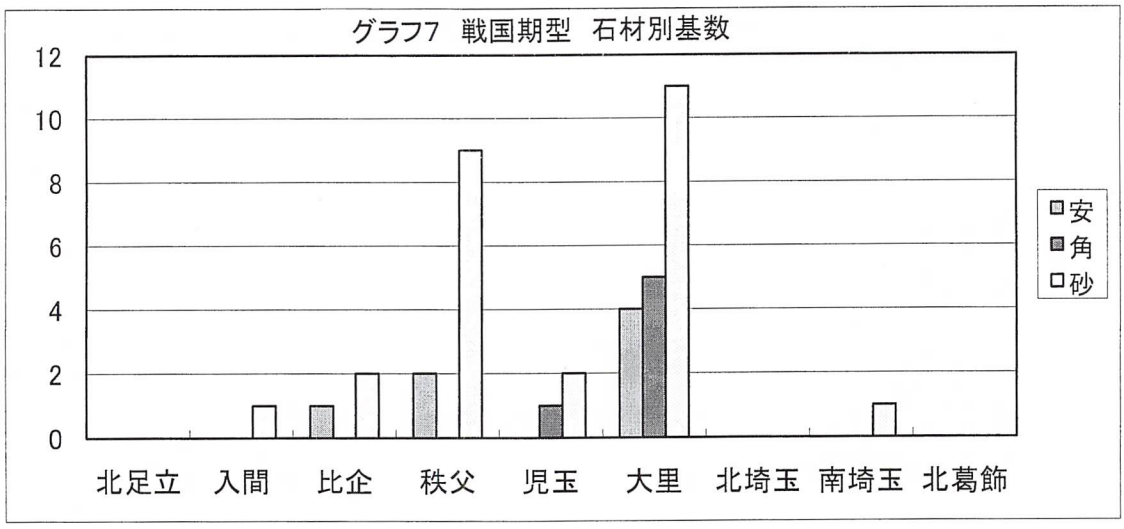
郡市＼部位	相　輪	笠	塔　身	基　礎	反花座	合　計
北足立	42	119	19	106	49	335
入　間	107	147	65	134	80	533
比　企	52	87	32	74	31	276
秩　父	181	130	81	93	1	486
児　玉	110	138	76	96	5	425
大　里	107	163	68	110	29	477
北埼玉	28	56	21	70	40	215
南埼玉	10	33	13	44	22	122
北葛飾	8	13	6	7	2	36
合　計	645	886	381	734	259	2905

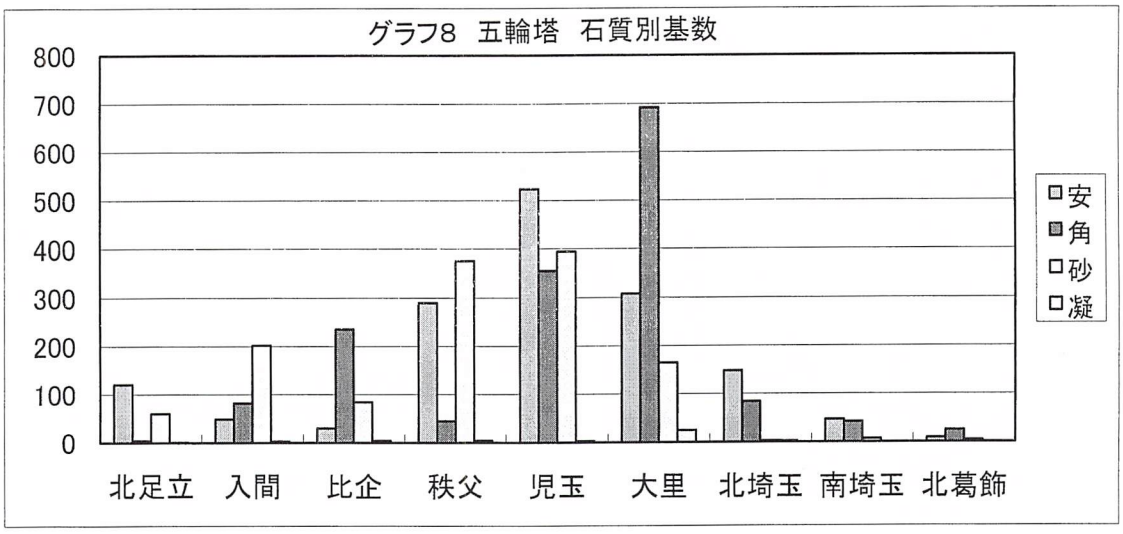

グラフ3　2弧輪郭形・上部4段　石材別基数
25
20
15
10
5
0
安
角
砂
北足立
入間
比企
秩父
児玉
大里
北埼玉
南埼玉
北葛飾


グラフ4　2弧輪郭形・上部5段　石材別基数
40
35
30
25
20
15
10
5
0
安
角
砂
北足立
入間
比企
秩父
児玉
大里
北埼玉
南埼玉
北葛飾


グラフ5　蕨手形・上部4段　石材別基数
30
25
20
15
10
5
0
安
角
砂
北足立
入間
比企
秩父
児玉
大里
北埼玉
南埼玉
北葛飾


グラフ6　1弧パルメット形　石材別基数
9
8
7
6
5
4
3
2
1
0
安
角
砂
北足立
入間
比企
秩父
児玉
大里
北埼玉
南埼玉
北葛飾


グラフ7　戦国期型　石材別基数
12
10
8
6
4
2
0
安
角
砂
北足立
入間
比企
秩父
児玉
大里
北埼玉
南埼玉
北葛飾


グラフ8　五輪塔　石質別基数
800
700
600
500
400
300
200
100
0
安
角
砂
凝
北足立
入間
比企
秩父
児玉
大里
北埼玉
南埼玉
北葛飾

4　五輪塔の石材について（グラフ８）

⑴ 石材の分布傾向

五輪塔は無銘資料が９割を超えるものの、板碑に次ぐ基数が造立されており、県北部の児玉郡・大里郡にその造立基数は大きく偏る。県内の五輪塔に使用される石材は概ね４種類であり、多孔質安山岩や灰色安山岩などで造られたもの＝安山岩製、角閃石安山岩製、砂岩製、凝灰岩製に分けることができる。

安山岩製の五輪塔は県内全域に分布し最も一般的な石材である。これは第１図に示した群馬県を産地とする安山岩製石塔の分布とも重なる。角閃石安山岩製のものは、大里郡の分布が突出しており、利根川の転石利用と関連する結果と考えられる（秋池1998）。砂岩製のものは入間郡、秩父郡、児玉郡で多く確認され、宝篋印塔と同様に牛伏砂岩製及び伊奈石製の石塔と分布が重なる。凝灰岩製の五輪塔は古式の形態を示すものに使われており、造立基数は40基程度である。極めて数が少ないことから、分布による傾向をつかむことは難しいが、その多くは群馬県産の凝灰岩である。

五輪塔に使用される石材は数量的な面から見ると、角閃石安山岩が最も多く、分布は大里郡についで、児玉郡・比企郡などの県北部に偏っている。また、この石材が宝篋印塔に使われることはあまりなく、宝篋印塔への使用例も大里郡に集中する傾向を示しており、流通範囲が限られた石材である。県内全域で確認される安山岩とは異なる分布傾向を示している。

⑵ 空風輪の形態と石材について

五輪塔の空風輪については、五輪塔の変遷を考える一つの指標になると考え、６つに分類した（第３図　栗岡2001）。ａ類は古式の五輪塔に見られる形態で凝灰岩製が多く、主として14世紀代に位置づけた。ｂ類、ｃ類としたものは、14世紀末頃から見られるようになり中世全般にわたり県内では確認できた。また、この形は県内では最も多く所在する形態であり、角閃石安山岩製、安山岩製、砂岩製と石材を選ばない。ｄ類、ｅ類も県内各地に所在する資料であるが、その出現はｂ類・ｃ類よりやや遅れると考えた。安山岩製もしくは砂岩製が多い。ｆ類は中世末期に出現する形態と考え、砂岩製もしくは安山岩製の資料が多い。

5　北関東と南関東の影響（第３図）

第３図５～８は埼玉県以南でよく見られる形態として神奈川県鎌倉市、小田原市の遺跡出土の資料を、第３図９～13には埼玉以北でよく見られる資料として群馬県の遺跡出土の資料を掲載した。

第３図５は隅飾突起２弧輪郭形の隅飾突起・上部５段、６は２弧無文の隅飾突起・上部５段で、ともに安山岩製である。第２図１や第３図１の笠のように２弧輪郭形・上部５段の特徴をもつ。７の空風輪はａ類、８はｆ類で、ともに安山岩製である。管見の限りではあるが、蕨手文もしくはパルメット形の隅飾突起を持つ宝篋印塔笠や、ｂ類・ｃ類の五輪塔空風輪は神奈川県内の遺跡出土資料の中には確認できず、宝篋印塔笠の上部段形は５段となるものが殆どである。

第３図９笠は隅飾突起２弧パルメット形・上部４段で砂岩製、10は２弧蕨手形・上部４段安山岩製である。11～13の空風輪はｂ類とｃ類であり、角閃石安山岩製である。管見の限りではあるが、群馬県内の遺跡出土資料ではｂ類、ｃ類は最も多く確認できる空風輪の形態であり、宝篋印塔笠の上部段形は４段となるものが殆どである。

南関東の宝篋印塔笠に見られる特徴は埼玉県内では県南部・県東部に見られる特徴と共通してお

り、石材の分布と重ねると伊那石製石塔の分布との重なるところがある。また、北関東の宝篋印塔笠に見られる特徴は埼玉県内では、県北部地域に見られる特徴と共通している。さらに、第１表にあるように、宝篋印塔の部材のうち秩父郡、児玉郡、大里郡など県北部では反花座の所在基数が著しく少なく、関東形式とされる宝篋印塔の要素を満たさない状況である（川勝1981）。群馬県の遺跡調査報告書等を見る限りでも反花座の出土例は殆どなく、神奈川県など南関東とは異なる出土状況を示している。

このように宝篋印塔を構成する部材の有無にも地域性があると考えると、隅飾突起上部段形等の石塔の意匠のみでなく構成要素（組み合わせる部材の選択）についても、埼玉県に所在する石塔は北からの影響を受けていることが伺われる。また、群馬県産の安山岩製石塔が県内全域に分布することと、空風輪ｂ類・ｃ類が石材を選ばずに県内全域に分布することを考えると、埼玉県内の中世石塔は五輪塔・宝篋印塔ともに、北からの強い影響を受けて造立されたと考えられる。そのような中、南からの影響と思われる２弧輪郭形の隅飾突起や伊奈石の流通など、県南部地域では南関東の影響を受けた石塔も造られている。今回は石材の細分ができなかったが、県南部の安山岩製石塔の中には、箱根地方の安山岩も含まれる可能性が考えられ、石材流通と石塔の意匠の分布範囲には関連性があることが考えられる。

おわりに

筆者は過去に県内の中世石造遺物調査を行った際に、県南部と県北部に所在する宝篋印塔笠の隅飾突起の意匠や上部段形が異なることなどについて、他地域の影響があるのではないかと感じていた。今回の検討により、南の影響と北の影響が見られる境界を大まかにとらえると、北足立郡南部―入間郡（入間川）付近に境界をとらえることができるのではないかと考えている。今後さらに検討を深めたい。

《参考文献》

秋池　　武　1998　「利根川流域中世石造物石材の流通と変遷」『群馬県立歴史博物館紀要』第19号

秋池　　武　1998　「関東管領山内上杉氏と牛伏砂岩・多孔質角閃石安山岩について」『群馬県の考古学』

秋池　　武　2005　『中世石材の流通』高志書院

大賀　健他　1994　『杣瀬Ⅰ遺跡・杣瀬Ⅱ遺跡・杣瀬Ⅲ遺跡』下仁田町教育委員会

川勝政太朗　1981　『新版石造美術』

栗岡眞理子　2001　「埼玉県の中世五輪塔編年案」『研究紀要』第23号　埼玉県立歴史資料館

栗岡眞理子　2002　「埼玉県の中世宝篋印塔の変遷について」『研究紀要』第24号　埼玉県立歴史資料館

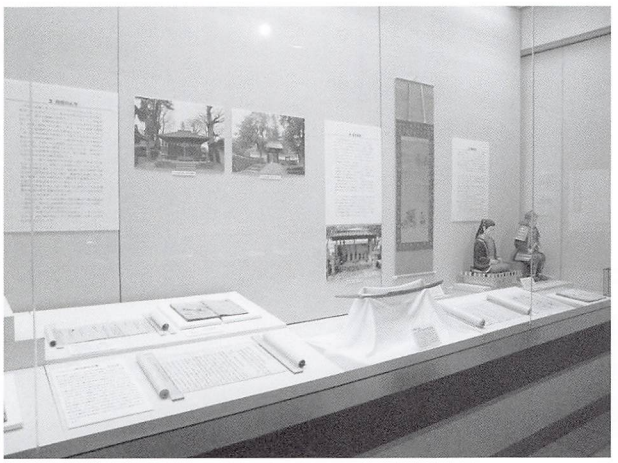
埼玉県教育委員会　1998　『埼玉県中世石造遺物調査報告書』埼玉県立歴史資料館

宍戸信悟他　2004　『間口またやぐら群』かながわ考古財団調査報告172　財団法人かながわ考古財団

清水　豊他　1999　『井出地区遺跡群』群馬町埋蔵文化財調査報告書第25集　群馬町教育委員会

鈴木庸一郎他　2000　『弁ヶ谷東やぐら群』かながわ考古財団調査報告94　財団法人かながわ考古財団

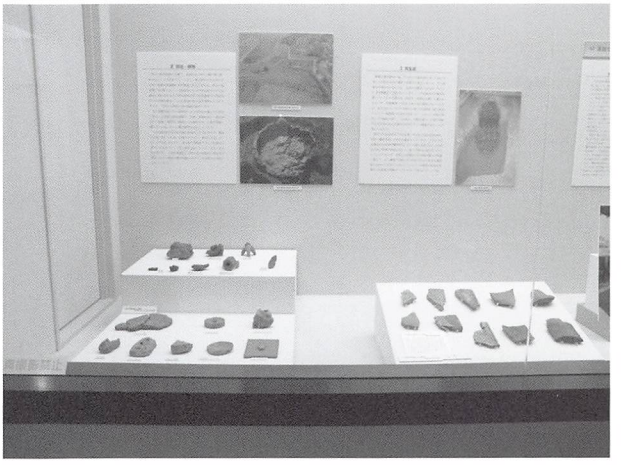
山口剛志他　2004　『平成13年度小田原市緊急発掘調査報告書３　小田原城総構　伝肇寺西第Ⅰ地点』小田原市文化財調査報告書第118集　小田原市教育委員会



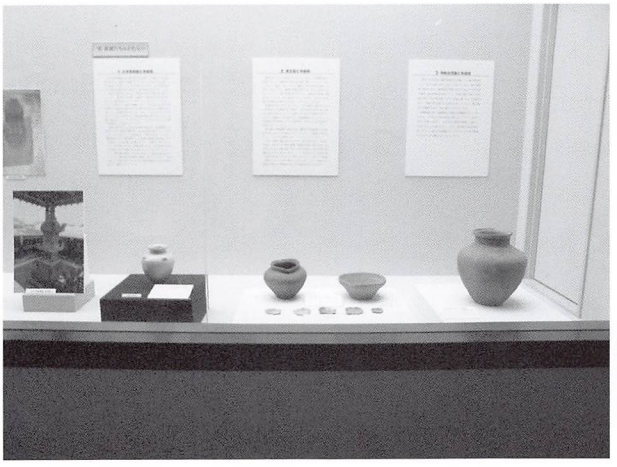
7　第３章「重忠ゆかりの人々」後半

8　第４章「秩父平氏の居館と寺院」

9　第５章「武蔵武士の生産遺跡」
第１節（馬匹生産）



10　第５章「武蔵武士の生産遺跡」
第２・３節（鍛冶鋳物・瓦生産）

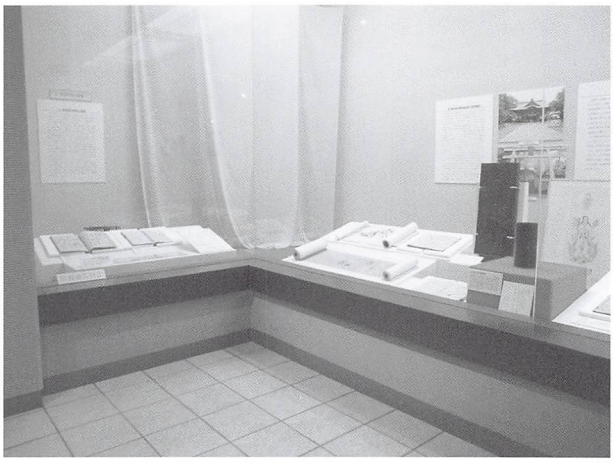


11　第６章「英雄たちのとむらい」（骨蔵器）

12　第６章「英雄たちのとむらい」（石塔）

写真２　展示施工（2）

1　展示室入り口の重忠ロボット



2　第１章「秩父平氏の登場」

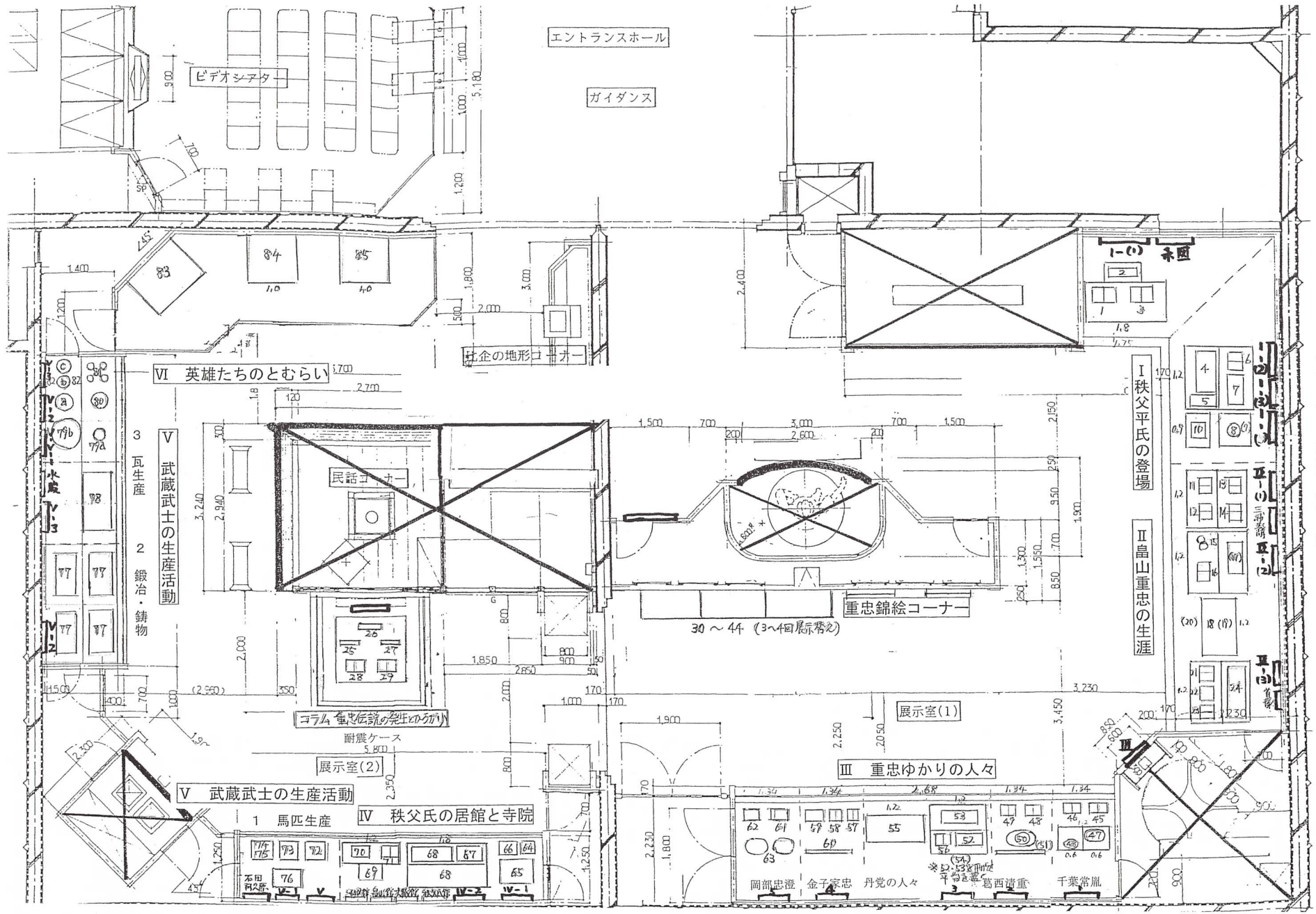
3　第２章「畠山重忠の生涯」

4　重忠錦絵コーナー

5　コラム「重忠伝説の発生とひろがり」

6　第３章「重忠ゆかりの人々」前半

写真１　展示施工（1）


エントランスホール
ガイダンス
ビデオシアター
Ⅵ 英雄たちのとむらい
Ⅴ 武蔵武士の生産活動
3 瓦生産
2 鍛冶・鋳物
民話コーナー
コラム 重忠伝説の発生とひろがり
耐震ケース
展示室(2)
Ⅴ 武蔵武士の生産活動
1 馬匹生産
Ⅳ 秩父氏の居館と寺院
重忠錦絵コーナー
30 ～ 44 (3～4回展示替え)
Ⅰ 秩父平氏の登場
Ⅱ 畠山重忠の生涯
展示室(1)
Ⅲ 重忠ゆかりの人々
岡部忠澄
金子家忠
丹党の人々
葛西清重
千葉常胤

第1図 展示レイアウト

後期には実物の宝寿丸の出品が決定している。御物太刀に関しては銘文の歴史性の高さ、宝寿丸については重忠の奉納刀という来歴の貴重性が際立っている。このたび、刀剣の指導者として金子・宇佐美の両先生を御迎えし、本格的な取扱いが可能となったことも当館にとって幸せなことである。

考古資料については秩父氏の居館のうち、河越館の資料の豊富さが浮彫りとなったが、大蔵館跡から近年出土し始めた十三世紀代の遺物は今後の調査の進展が期待できるものである。また、平沢寺は秩父重綱が経筒を奉納し、吾妻鏡に院主職の補任が鎌倉幕府から行われていることから、秩父氏の氏寺と目される寺院であり、東国最大級の阿弥陀堂跡も検出されているので、秩父氏の信仰の拠点が今後の調査研究で明らかにされることが期待される。

「鎌倉武士の生産遺跡」で取上げた馬匹生産では、残念ながら古代の焼印が展示主体となってしまい、あらためて中世の秩父牧の解明が課題であることを実感した。鍛冶・鋳物では県内の中世に属する調査例が蓄積されてきているので、今後、その企画展を打つことも十分可能となろう。

「英雄たちのとむらい」では石塔が埋葬から相当後に立てられる事実のあることを示し、鎌倉時代前半期までの特徴と推定したが、この仮説が正しいかどうかは今後の研究課題となる。

最後に、畠山重忠は歴史資料、伝説資料、考古資料の三位一体で研究を進めることが必要であることを確認しておきたい。その方法や目的にも多様性が想定されるが、重忠だけを取上げるのではなく、秩父氏という枠で研究を進めることが肝要であり、その場合、考古学においては大蔵館より遡る秩父氏の居館跡と生産遺跡の調査解明が待たれる。また、菅谷館については現存する姿は戦国期に拡張整備されたものであり、重忠の時期の館跡がどこに重複しているのか、あるいはそうではないのか発掘調査によって検証するしか術がないので、早期に史跡整備を前提とした調査計画に着手することが不可欠である。

千葉氏と共通することが明らかとなった妙見信仰と将門崇拝については、秩父郡とその周辺に分布する妙見を祀る神社と秩父氏や重忠を開基とする寺院の徹底的な調査が必要であり、悉皆調査を行えば、予想以上の成果があるのではないかと思われるので、具体的な取組みを始めたい。

重忠伝説については村松篤氏の全国的な研究成果があり、今後、もっとも進展の期待される分野である。これまた、伝説の採集調査と構造的な分析研究が求められるものである。この分野では大和絵本や物語本の研究も新たな素材として研究を進めていく必要があろう。

これらの課題を担当学芸員の興味対象とするのではなく、衆議によって博物館の具体的な研究課題として設定することが求められるのであり、さらに地域の歴史、考古、信仰、伝説研究者と共有することができれば、研究は大幅に進展することが可能となるであろう。

まとめ

今回の企画展は当館が先学の研究論文や発掘調査の成果をもとに、短期間の準備で行った畠山重忠研究の具体化の一例であり、展示資料において不十分な点や研究成果の吸収不足もあろうかと思う。

今後も、畠山重忠と秩父平氏の研究を当館の主たる研究課題に掲げ、職員が協力・努力し、その成果を逐次講座や論文として公表し、一歩進んだ企画展示を打つ機会が得られるよう祈念して筆を置くことにしたい。

最後になりましたが、貴重な資料を御貸与下さった全ての資料所蔵者様、有益な御助言を頂いた諸先生方に、心より御礼申し上げます。

3　瓦生産

重忠が幕府の祈願寺である永福寺の奉行人に任命されており、美里町の水殿瓦窯跡から瓦が供給されている事実を踏まえ、重忠の求めによって在地領主の児玉党の武士が経営を行ったことを示す。

展示資料　水殿瓦窯跡出土瓦・水殿瓦窯跡写真

VI　英雄たちのとむらい

1　大串重親墓と骨蔵器

吉見町大串には重忠の烏帽子子である大串重親の墓と伝えられる宝篋印塔があり、発掘調査によって出土した骨蔵器の年代や品質から重親の墓である可能性が高いことを示す。

展示資料　伝大串重親墓出土白磁四耳壺と外容器の渥美焼大甕・宝篋印塔写真

2　畠山重忠墓と骨蔵器

深谷市畠山にある畠山重忠墓の発掘調査成果を紹介し、重忠の五輪塔下の骨蔵器が抜き取られていたことと、隣接する3号墓の骨蔵器が十三世紀後半から十四世紀前半に属する在地産の粗末なものであったことを示す。また、畠山館跡内から十三世紀前半代の火葬施設が検出されていることにも触れる。

展示資料　畠山重忠墓五輪塔レプリカ・第三号墓出土骨蔵器・火葬施設出土かわらけ

3　岡部忠澄墓と骨蔵器

深谷市普済寺にある岡部忠澄墓を紹介し、大正時代に改葬されて、骨蔵器の位置が移動してしまっていることと骨蔵器の時期がいずれも十三世紀後半以降のものであり、忠澄の骨蔵器としてふさわしいものが未発見であることを示す。

展示資料　岡部六弥太墓五輪塔レプリカ・骨蔵器常滑焼壺

三　企画展の成果と今後の課題

今回の企画展では、準備に入る前から重忠の直接資料が極めて乏しく、工夫を要する困難な企画であることを周囲から耳に入れられていた。しかし、畠山重忠の本格的な企画展示は重忠の館と伝えられる地に建つ当館にとって、なさねばならぬ根本事業であり、これを契機として常設展示の改良や研究課題の設定が可能となるという期待は大きかった。

幸い、重忠にはその事績や人間像を詳細に語る『吾妻鏡』や『平家物語』などの二次資料がふんだんにあった。また、重忠伝説も豊富である。しかし、これらの文献資料をすべて提示するだけでは展示が平坦となり、魅力的な構成とはならない。このため、重忠の前史となる第Ⅰ章では秩父氏の妙見信仰を取上げ、関連資料の調査を行った結果、千葉氏との信仰の共通性を発見することができた。また、重忠を浮かび上がらせるためには重忠ゆかりの人々を取上げて、彼らの人間像を示し、さらに重忠の人脈形成の意味を探ろうとした。この第Ⅲ章の取組みは、坐像や画像を揃えることによって一つの山場を形成し、功を奏することができたのではないかと思う。とくに大河原神冶太郎光興像と岡部忠澄夫妻像は初出品であり、ご理解を頂いた所蔵寺院に深く感謝の意を表するものである。同様に信仰の対象であり、門外不出の位牌の展示を御許し下さった寺院や妙見神札を初出品下さった秩父神社に対しても心よりの御礼を申し上げたい。いずれも魂の篭もった存在感ある展示物であり、観覧者の胸を打つものがあろうと期待している。

刀剣資料についても御物太刀と宝寿丸の写しを展示させて頂いたが、

ことなど、重忠の対極にある経歴を示す。

展示資料　葛西清重坐像複製・葛西清重夫妻画像模本・桓武平氏諸流系図写真

3　丹党の人々

ねらい　秩父を本拠として児玉郡や入間郡にも広がった武蔵七党中の大勢力丹党諸氏は秩父氏の支持母体であり、治承・寿永の合戦では重忠の直属軍であったことを示すとともに、重忠没後も、秩父妙見宮の維持や祭祀を継承したこと、東秩父出身で播磨の地頭となって西遷した大河原氏が秩父神社に神宝太刀を奉納したことを示し、秩父郡の丹党野上氏が重忠を開基として総持寺を建立したことなどにも触れる。

展示資料　平家物語・秩父神社文書・御物太刀写し・大河原神冶太郎光興坐像・丹党島田氏系図

4　金子家忠

ねらい　重忠の姉妹を妻とした村山党の有力武士金子家忠は義兄であり、衣笠城攻めでは重忠に属し、獅子奮迅の大活躍をしたが、元久二年には重忠征討軍に加わったことを示す。

展示資料　金子大系図・美君家忠賛並序・源平盛衰記・北条義時袖判書下

5　岡部忠澄

ねらい　重忠の姉妹を妻とした猪俣党の有力武士岡部忠澄は一ノ谷の合戦で平家の大将平忠度を討取るという軍功で知られ、奥州合戦に従軍し、二度の上洛に隋兵を勤めたことを示す。

展示資料　武蔵七党系図・平家物語・岡部忠澄夫妻坐像

Ⅳ　秩父平氏の居館と寺院

ねらい　発掘調査資料と写真パネルによって秩父平氏の居館のうち、秩父氏館跡、畠山館跡、大蔵館跡、菅谷館跡、河越館跡、堂地遺跡、平沢寺、同阿弥陀堂跡を取上げ、秩父氏の暮らし振りと信仰のあり方を示す。

主な展示資料　山王遺跡出土かわらけ・平沢寺阿弥陀堂跡出土土器、大蔵館跡出土土器と陶磁器・行司免遺跡土壙墓出土和鏡と鋏・河越館跡出土木製品と土器陶磁器・堂地遺跡出土武器武具類

Ⅴ　武蔵武士の生産遺跡

武士の生業は武芸をもって官仕し所領の経営を行うほかに、秩父氏の場合、馬匹生産、金属の生産加工、瓦生産に深く関与したことが知られている。

1　馬匹生産

ねらい　秩父氏は別当を名乗り秩父牧の責任者として丹党諸氏とともにその経営に当たり、産出馬を都に貢納するとともに、騎馬軍団の備えとし、さらに余剰の売却益があったことを示す。また、武蔵が鐙の名産地であったことにも触れる。

展示資料　「有」字焼印・「中」字焼印・「令」字「石」字焼印・舌長鐙

2　鍛冶・鋳物

ねらい　秩父氏関係の遺跡が未確認のため、十三世紀中葉から十四世紀の大規模な鋳造遺跡である坂戸市金井遺跡を取上げ、児玉党浅羽氏が仏像仏具だけでなく、農耕具も生産していたことを示す。

展示資料　各種鋳型・三叉状土製品・鋳造用工具・鉄滓・銅滓・ふいご羽口・滑石製軍配紋スタンプ

たことなどから人間としての重忠の苦悩を示し、文治二年に静御前が舞を舞った際に、銅拍子を打ったことにも重忠の人間性と芸術性が窺えることを示す。

主な展示資料　吾妻鏡・源頼朝加判平盛時奉書複製・太刀宝寿丸・赤糸縅大鎧写真・銅拍子復原品

3　重忠の最期

ねらい　頼朝の死後、北条氏の専横振りが著しくなると、重忠待望論が生れるとともに、北条氏に警戒され、牧の方の讒言により、ついに元久二年六月二十二日に誅殺されてしまったが、この事件は北条義時が武蔵国を入手し、さらに父を追放して執権に付くためのクーデターであったことを示す。

主な展示資料　明月記・吾妻鏡・島津家文書平某書状案・男衾三郎絵詞

重忠錦絵コーナー

ねらい　同時代資料ではないが、重忠の活躍をビジュアルに再現する素材として錦絵を別置し、観覧者の目を楽しませる。

主な展示資料　宇治川大合戦圖・粟津原合戦畠山重忠勇婦巴女・鎌倉大評定・和漢準源氏桐つぼ秩父庄司重忠一の谷鵯越勇猛・観音霊験記秩父巡礼・芳年武者无類畠山重忠

コラム　重忠伝説の発生とひろがり

ねらい　畠山重忠の墓と伝わる場所が県内に複数あり、位牌を祭祀する寺も埼玉県内には多い。このことは重忠の一族や重忠を慕う多くの領民が重忠の冥福を祈ったことの反映であり、同時に数々の伝説が生れたことを示す。また、重忠の末子重慶と重忠の子孫と伝わる彦久保家についても触れる。

主な展示資料　満福寺重忠位牌・金剛院重忠位牌・小久保家重慶位牌・吾妻鏡・秩父家系・小川町士峯山重忠墓写真・飯能市第六天重忠墓写真

III　重忠ゆかりの人々～重忠の人脈形成～

秩父氏は坂東平氏の三浦氏や千葉氏などの大規模武士団と婚姻関係を結ぶとともに、武蔵七党に属する丹党・児玉党とは軍事的な主従関係を有し、その他の中小武士団のうちで有力な者とも個別的な婚姻関係を結ぶことによって勢力の増大を図っていた。このような重忠と密接な関係の有した人物のうち、資料に恵まれ、とくに画像や立体像を残した人物を中心に選定した。

なお、重忠の股肱の臣である本田近常、榛沢成清そして義兄であった足立遠元については資料不足のため、展示ができなかった。

1　千葉常胤

ねらい　鎌倉幕府創業の大功労者で元老として力を振るった常胤は重忠の大伯父であり、秩父氏と近い坂東八平氏の代表的な氏族であること、秩父氏と共通する妙見信仰を持っていたことを示し、沼田御厨事件の際にも千葉胤正に預けられ、自殺を図ったために頼朝に許しを求めてくれたことにも触れる。

主な展示資料　千葉常胤坐像複製・千葉大系図・吾妻鏡・東氏妙見菩薩立像複製

2　葛西清重

ねらい　秩父氏諸流出身の葛西清重は頼朝蜂起の際に、いち早く頼朝に付き、重忠とは異なる対応を取ったこと、奥州合戦で重忠を抜駆けして、先陣の手柄をたてたため、奥州に広い所領を与えられ、奥州奉行に任じられたこと、元久二年の二俣川の闘いでは重忠征討軍の先陣を勤め

えられた可能性を提示した上で重忠墓と六弥太墓を扱うことにした。ただし、重忠墓では骨蔵器が失われていること、六弥太墓では年代の降るものしか出土していない現状をきちんと伝えることとした。

⑦　嵐山町金平遺跡出土の弘安四年銘鋳型については平沢寺への供給が推定されているが、重忠の没後なので、その経営者が秩父氏であるのか否かが不分明なため今回は展示候補としないことを決めた。また、神川町愛染遺跡については鍛冶関係の遺物が十世紀後半から十一世紀にわたる土器を伴って出土しているが、遺構が住居址であり、鍛冶遺構が不明瞭なため、今回は見送り、今後の検証を課題とした。

⑧　シンポジウム指導者の菊池紳一氏からは畠山庄司の呼称から重能が畠山庄の農業経営者とした旨の解説パネル原案について、庄官が官職である可能性をご教示頂き、訂正を加えた。

（二）展示構成の決定

前記した職員による企画展検討会議を経て、原案が整理、修正され、最終的には次の通りに決定した。

I　秩父平氏の登場

1　秩父氏の出自と経歴

ねらい　秩父氏が桓武天皇の子孫である平良文の末裔であり、玄祖父秩父武綱が後三年合戦で源義家に従い、先陣の大将軍を勤めた家柄であることを示す。

主な展示資料　尊卑分脉・桓武平氏諸流系図写真・今昔物語集・後三年合戦絵巻摸本・源平闘諍録

2　秩父氏の妙見信仰と将門崇拝

ねらい　秩父平氏が一族の守護神として千葉氏と共通する妙見菩薩を信仰し、さらに平将門を崇拝していたことを示す。

主な展示資料　秩父神社妙見神札版木・千葉妙見大縁起絵巻複製・城峯神社写真

3　大蔵合戦

ねらい　平沢寺出土の経筒によって十二世紀中頃には秩父重綱が嵐山町付近に移住したことを示し、その頃、二男重隆に家督を譲って大蔵館に住まわせたが、養子に迎えた源義賢が源義朝と覇を競おうとしたため、その子義平と家督奪還を目指す重綱の嫡孫畠山重能が手を結んで、重隆と義賢を急襲して殺すという大蔵合戦が勃発したが、秩父家の内部分裂がその一因であったことを示す。

主な展示資料　鋳銅経筒・平治物語

II　畠山重忠の生涯

1　重忠の初陣と源平合戦の軍功

ねらい　重忠は父が平家に属していたため、治承四年の頼朝蜂起の際に、十七歳で初陣して小坪で敗戦を喫し、雪辱戦で三浦氏の立て篭もる衣笠城を攻めて、外祖父の義明を討ったこと、頼朝軍の鎌倉入りに先陣を承ったこと、そして源平合戦では宇治川合戦の先陣を勤め、一の谷でも鵯越えの伝説を残したことを示す。

主な展示資料　吾妻鏡・平家物語・源平盛衰記・三浦義明坐像写真

2　人間重忠とその苦悩

ねらい　文治五年の奥州合戦で先陣の大将を命じられながら、葛西清重らに抜駆けをされたこと、文治三年に所領沼田御厨で代官が起こした乱妨のために囚人となり、自殺を図ろうとした後に、武蔵の館に引篭もっ

九九・二〇〇〇

※なお、市町村史と考古学発掘調査報告書の一部については紙幅の関係で割愛させて頂いた。

二　展示構成の決定

（一）検討会及びシンポジウム指導者による助言

企画展は四月段階で基本構想を定めて資料調査を開始し、資料の大部分が決定した九月段階で基本計画に昇格させ、さらに借用交渉が終わった十月段階で開催要項を定めた。こうした過程で、職員（学芸員四名・管理職二名・総務職員一名）全員によって九月から検討会が四回持たれた。また、シンポジウム指導者会議の席上で、企画展の進捗状況を報告し、資料の選択と解説パネルの原稿について指導・助言を仰いだ。その結果、決定された事項を箇条書きで記す。

① 歴史資料及び美術資料と発掘調査資料を同一ケース内に展示しないこと。これは考古資料が泥物であり、種類の異なる資料を汚染する可能性があるという事実によるだけでなく、一般的な作法ともなっていることによる。当館の場合、ウォールケースのため、考古展示は完全に切り分けることを意味している。実際は考古資料の説明資料として歴史資料を添える必要があるが、その場合は写真パネルを置くこととした。

② 歴史展示は同時代資料かその写本・模本を用いること。当初、II章畠山重忠の生涯の展示箇所に、歴史資料に混じて錦絵を置き、重忠の宇治川や一ノ谷の合戦での活躍をビジュアルに伝えるという原案であったが、この方針によって、錦絵コーナーを設けて、覗きケース三台を充てることとした。

③ 借用候補資料が超過し、飾りきれない可能性があるので、精選し、精密なレイアウト図を作成すること。担当学芸員には必ずといっていいほど、賑やかに沢山の資料を飾ろうとする傾向があるので、借り過ぎが起こることが多い。レイアウト図を作成した結果、一〇〇件の資料を八五件に減じることに決定した。このため、赤糸縅大鎧複製の展示は取り止め、プロローグの重忠像原型複製二点とミニュチュア、エピローグの平家物語語り本と琵琶の展示も割愛することとなった。

④ 「重忠伝説の発生とひろがり」は当初案では第II章「重忠の生涯」に続く一つの章としていたが、歴史展示とは異質なものであることから、コラムとして切り放し、ウォールケースではなく独立した免震ケースを充てることとした。

⑤ 展示資料については、当初は重忠没年までの資料に限るべきとの意見があったが、そこまで限定してしまうと「重忠ゆかりの人々」の中で鎌倉時代末期の秩父神社文書や御物太刀が対象外となり、「武蔵武士の生産遺跡」においても十三世紀中葉以降の金井遺跡や永福寺第二期瓦しか出土していない水殿遺跡を扱うことが困難となり、展示そのものが縮小してしまうため、鎌倉時代いっぱいまでの幅を持たせ、重忠とほぼ同時代に活躍した武蔵武士の動向を扱うことにした。

⑥ 畠山重忠墓と岡部六弥太墓については五輪塔自体が鎌倉時代後期から南北朝時代に属すると推定されるという研究情勢から、展示の可否が議論されたが、伝大串次郎重親墓の骨蔵器が石塔の時代をはるかに遡り、重親にふさわしいという事実に鑑みて、鎌倉時代前半期までの墓については当初は石塔を伴わず、数十年の後に石塔が加

九輯　妙見信仰特集　山村民俗の会　一九九六
五八　千嶋　壽「妙見の七つ井戸」秩父神社報『柞の杜』第一六号　秩父神社　一九九七
五九　丸井敬司・二本松文雄『相馬地方の妙見信仰―千葉氏から相馬氏へ―』図録　野馬追の里原町市立博物館・千葉市立郷土博物館　二〇〇三
六〇　丸井敬司『妙見信仰と羽衣伝承』平成一九年度特別展図録　千葉市立郷土博物館　二〇〇七
六一　甲田豊治「夜祭の神　妙見さまのお姿」秩父神社報『柞の杜』第三八号　秩父神社　二〇〇八

《牧・馬具》

六二　小松大秀編『日本馬具大鑑』第三巻　中世　日本中央競馬会　一九九〇
六三　町田有弘「牧別当に関する一考察」『河越氏の研究』名著出版　二〇〇三
六四　田中広明「古代の地域開発と牛馬の管理」『牧と考古学―馬をめぐる諸問題―』研究集会資料集　山梨県考古学会　二〇〇五

《考古学関係》

六五　小泉　功・峰岸純夫「河越館址の調査と保存の経過について」一九七二（『鎌倉幕府と東国』に再録）
六六　柳田敏司・小野義信『菅谷館跡』埼玉県埋蔵文化財調査報告第六集　埼玉県教育委員会　一九七七
六七　金子真土・浅野春樹ほか『畠山重忠墓』川本町教育委員会　一九八四
六八　千々和實『板碑源流考』一九八七
六九　丸山陽一『国指定史跡　水殿瓦窯試掘調査報告』埼玉県美里町教育委員会　一九九〇
七〇　中藤榮祥『常寂山智観寺誌』一九九六
七一　村松　篤『畠山館跡』五次調査の報告　川本町教育委員会　一九九九
七二　鈴木邦照・岡田賢治ほか『河越氏と河越館』第一六回企画展図録川越市立博物館　二〇〇〇
七三　鎌倉考古学研究所『浄土庭園と寺院』永福寺創建八〇〇年記年シンポジウム記録集　一九九七
七四　福田　誠ほか『永福寺跡』鎌倉市教育委員会　二〇〇二
七五　赤熊浩一『金井遺跡B地区』埼玉県埋蔵文化財調査事業団発掘調査報告書第二四八集　二〇〇〇
七六　赤熊浩一「武蔵国における古代から中世の製鉄・鋳造遺跡―金井遺跡の梵鐘鋳物師を探る―」『武蔵野』第八二巻第二号　特集　古代中世の武蔵野の鉄生産　武蔵野文化協会　二〇〇六
七七　深澤靖幸「武蔵惣社六所宮の中世永福寺式瓦」『府中市郷土の森博物館紀要』第二〇号　二〇〇七
七八　水口由紀子『誕生　武蔵武士』特別展図録　埼玉県立歴史と民俗の博物館　二〇〇九
七九　深澤靖幸『歴史の道を歩く　武蔵府中と鎌倉街道』ブックレット一二　府中市郷土の森博物館　二〇〇九
八〇　若松良一『堂地遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団発掘調査報告書第二六六集　二〇〇〇

《基本資料》

保元・平治物語『日本古典文学大系』三一　岩波書店　一九六一
平家物語『日本古典文学大系』三二　岩波書店一九五九・一九六〇
吾妻鏡『全譯吾妻鏡』新人物往来社　一九七六
源平闘諍録『源平闘諍録―坂東で生れた平家物語―』講談社学術文庫　一九

三一　小松茂美編『男衾三郎絵詞・伊勢新名所絵歌合』続日本の絵巻一二　中央公論社　一九九二
三二　松原　茂・池田　宏「伝世の品々」『皇室の名宝―美と伝統の精華―』御即位一〇年記念特別展図録　東京国立博物館・宮内庁・NHK　一九九九

《畠山重忠関係》

三三　貫　達人『畠山重忠』人物叢書　吉川弘文館　一九六二
三四　林　宏一「畠山満福寺の仏像」『武蔵野』第五四巻第二号　武蔵野文化協会　一九七六
三五　清水　寿『鋳師・鍛冶師の統領と思われる畠山重忠について』一九九四
三六　御嶽神社『御嶽神社の祭り』百水社　二〇〇三
三七　村松　篤『畠山重忠辞典』川本町教育委員会　二〇〇四
三八　八幡義信「畠山重忠と北条氏」『武蔵野』第八一巻第二号　特集　畠山重忠と鎌倉武士―畠山重忠没後八〇〇年―武蔵野文化協会　二〇〇五
三九　赤羽洋輔「元久二年〝畠山重忠の乱〟についての一考察―北条時政失脚の原因をめぐって―」『武蔵野』第四十七巻第二・三号　一九六八（『武蔵野』第八一巻第二号に加筆再録）
四〇　岡田清一「重忠没後の武蔵国留守所について」『武蔵野』第八一巻第二号　武蔵野文化協会　二〇〇五
四一　彦吉三枝子「足利氏と畠山氏―岩松畠山氏の成立―」『武蔵野』第八一巻第二号　武蔵野文化協会　二〇〇五
四二　加藤　功「足立遠元と畠山重忠」『武蔵野』第八一巻第二号　二〇〇五
四三　渡　政和「畠山重忠の滅亡と秩父平氏一族の動向」『武蔵野』第八一巻第二号　武蔵野文化協会　二〇〇五
四四　芦田正次郎「源平闘諍録にみる畠山重忠―武蔵国豊島郡滝野川で頼朝に参陣―」『武蔵野』第八一巻第二号　二〇〇五
四五　村松　篤「武蔵武士畠山重忠ゆかりの地」『武蔵野』第八一巻第二号　武蔵野文化協会　二〇〇五
四六　御嶽神社『御嶽神社宝物集』武蔵御嶽神社

《武蔵七党関係》

四七　小野文雄・福島正義「秩父神社文書」『埼玉県文化財報告書』第一一集　埼玉県教育委員会　一九七六
四八　川又辰次編『軍記　武蔵七党』一九八五
四九　井上　要『補訂版　秩父丹党考』埼玉新聞社　一九九三
五〇　大多和晃紀ほか『新金子十郎家忠物語』同刊行会　一九九三
五一　海津一朗「東国における郡鎮守と郡内在地領主群―鎌倉末期秩父地方の郷々地頭一揆状況―」『河越氏の研究』名著出版　二〇〇三
五二　菊池紳一「金子文書の柏木郷について」別冊『歴史読本』地名を歩く　新人物往来社　二〇〇九

《妙見信仰関係》

五三　埼玉県神社庁神社調査団「秩父神社」『埼玉の神社』入間・北埼玉・秩父　埼玉県神社庁
五四　丸井敬司「千葉氏の武士団形成に関する一考察」『研究紀要』第一号　千葉市立郷土博物館　一九九五
五五　丸井敬司・宮原さつき『千葉妙見大縁起絵巻』千葉市立郷土博物館　一九九五
五六　井上勝海「奥武蔵妙見考―我野神社・北川神社と秩父妙見―」『あしなか』第二四九輯　妙見信仰特集　山村民俗の会　一九九六
五七　沖本　博「妙見信仰序説―千葉妙見とその源流―」『あしなか』第二四

しておきたい。

文献調査は前年度の秋口から約一年間にわたって、博物館図書室、県立図書館、自家蔵書を利用し、コピーを撮らず、大学ノート三冊に抜書きと論点のメモを残した。この作業はほとんど在宅作業となった。

《通史・総論》

一　渡辺世祐・八代國治『武蔵武士』埼玉学生誘掖會　博文社　一九一三

二　豊田　武『中世の武士団』豊田武著作集第六巻　吉川弘文館　一九八二

三　野口　実『坂東武士団の成立と発展』弘生書林　一九八二

四　石井　進『鎌倉武士の実像』石井進著作集第五巻　岩波書店　二〇〇五

五　河内祥輔『頼朝の時代　一一八〇年代内乱史』平凡社　一九九〇

六　安田元久『源平の争乱』新人物往来社　一九八七

七　福島正義『武蔵武士』さきたま出版会　一九九〇

八　岡田清一『北条得宗家の興亡』新人物往来社　二〇〇一

九　奥富敬之『鎌倉北条氏の興亡』吉川弘文館　二〇〇三

一〇　永井　晋『鎌倉幕府の転換点「吾妻鏡」を読みなおす』NHKブックス　二〇〇〇

一一　元木泰雄『保元・平治の乱を読みなおす』NHKブックス　二〇〇四

一二　岡田清一『鎌倉幕府と東国』続群書類従完成会　二〇〇六

一三　五味文彦『武士と文士の中世史』東京大学出版会　一九九二

一四　五味文彦『日本史の中世を歩く―遺跡を訪ね、史料を読む―』岩波新書　二〇〇九

《秩父氏関係》

一五　青葉伊左吉『吉田城趾』おたまじゃくしの会　一九五六

一六　赤城宗徳『平将門』角川選書三二　角川書店　一九七〇

一七　峰岸純夫「鎌倉悪源太と大蔵合戦」『三浦古文化』四三号　一九八八

一八　木村重光「大蔵合戦と秩父一族・源平内乱期武蔵国の政治情勢―」『河越氏の研究』名著出版　二〇〇三

一九　野口　實「中世成立期における武蔵国の武士について―秩父平氏を中心に―」『河越氏の研究』名著出版　二〇〇三

二〇　長塚　孝「秩父平氏二題」『河越氏の研究』名著出版　二〇〇三

二一　岡田清一「武蔵国留守所惣検校職に就いて―北条執権政治体制成立史の一齣―」『河越氏の研究』名著出版　二〇〇三

二二　岡田清一「河越氏研究の成果と課題」『河越氏の研究』名著出版　二〇〇三

二三　落合義明「武蔵国河越荘について」『河越氏の研究』名著出版　二〇〇三

二四　落合義明「武蔵国河越館について」『河越氏の研究』名著出版　二〇〇三

二五　杉山　博編『豊嶋氏の研究』関東武士研究叢書語5　名著出版　一九七五

二六　萩原龍夫編『江戸氏の研究』関東武士研究叢書語1　名著出版　一九七七

二七　葛飾区郷土と天文の博物館『葛西氏とその時代』崙書房　一九九七

二八　谷口　榮『源頼朝と葛西氏』開館一〇周年記年特別展図録　葛飾区郷土と天文の博物館　二〇〇一

二九　谷口　榮「鎌倉御家人葛西清重の軌跡」『物質文化史学論聚』加藤晋平先生喜寿記念論文集　二〇〇九

《美術史関係》

三〇　小松茂美編『後三年合戦絵詞』日本の絵巻一四　中央公論社　一九八八

焼印）

八月二十八日　埼玉県立歴史と民俗の博物館（重忠墓レプリカ・後三年合戦絵巻・平家琵琶）

九月二日　飯能市吾野我野神社（妙見宮額）・智観寺（仁治三年銘加治家季供養板石塔婆）・中山氏館跡・加治神社（丹生社社殿）

九月九日　横須賀市満昌寺（三浦義明坐像）・衣笠城跡・鎌倉市由比ガ浜稲瀬川・鶴ヶ丘八幡宮・畠山重忠邸石碑・永福寺跡

九月十日　秩父神社（妙見神札）・深谷市畠山満福寺（重忠位牌・茶釜・太刀）

九月十六日　埼玉県埋蔵文化財収蔵庫（坂戸市金井遺跡出土鋳造遺物・寄居町北坂遺跡出土焼印・上里町中堀遺跡出土焼印）

※写真撮影とも

九月三十日　東京都青梅市武蔵御嶽神社（宝寿丸及び黒漆鞘）

十月十六日　川島町中山正福寺（舌長鐙調査及び搬入）・五輪塔

②　加藤担当分

八月二十八日　国立公文書館（尊卑分脉・千葉大系図・今昔物語集・平治物語・明月記・源平闘諍録・吾妻鏡・畠山しけ体）

十一月十二日　熊谷市立図書館（重忠関係錦絵）・県立熊谷図書館（源平盛衰記）

一月十三日　国立公文書館当該資料の写真撮影依頼

③　栗岡担当分

八月四日　嵐山町教育委員会七郷文化財整理室（平沢寺出土渥美焼骨蔵器・平沢寺阿弥陀堂跡出土遺物・金平遺跡出土鋳型・山王遺跡出土かわらけ）

九月二十八日　川越市教育委員会文化財整理室（河越館跡出土遺物）

資料借用交渉

資料調査の際に、展示に適すると判断されるものについては、その場で貸出の内諾を得たものもあるが、検討を要するものは持ち帰って、最終判断を下すことにした。また、一部に交渉人を立てて折衝を行った資料がある。

なお、最終的には東光禅寺の馬具、永福寺跡出土資料、府中市郷土の森博物館所蔵資料（国司館跡出土品・武蔵国留守所文書複製など）、大国魂神社所蔵資料、神川町教育委員会所蔵資料（愛染遺跡・阿保氏館跡出土品）、慈光寺出土瓦、智観寺所蔵仁治三年銘板碑などは諸般の事情で今回の出品を見送った。

（四）文献調査

企画展示は畠山重忠に関する歴史研究の成果に立脚するべきことは当然のこととして、重忠の生きた歴史的背景として平安時代末から鎌倉時代初期のいわゆる治承寿永の争乱についての歴史的な位置付けを把握しておく必要があった。また、重忠の先祖である秩父氏嫡流についての研究は未だ集大成が行われてはいないものの、関係論文を当たっておくことが求められた。幸い、秩父氏については河越氏、江戸氏、豊島氏、葛西氏の研究成果が纏められているので、これを参考とした。

付け加えるに、秩父氏の家中抗争として展示では欠かせない大蔵合戦に付いては保元平治の乱の前哨戦との評価もあるので、こうした研究動向も承知しておく必要があった。また、秩父氏の妙見信仰に関しては地元秩父での研究成果とともに千葉氏の妙見信仰に関する充実した研究成果を参照することが必須と考えられた。このほか、展示資料に関する個別的な歴史、美術、民俗、考古の各分野における参考文献についてもすべてを列挙することは困難であるが、参考文献目録を掲げて、明らかに

具体的な調査地は重忠の奉納資料のある青梅御嶽神社、秩父地方の寺社などであり、約十日を割いた。

正式な資料調査は週中のノー残業デイに指定されている水曜日を軸に、週一日を割り当てたが、主催行事の準備などの関係で、予定通りにいかなかったため、八月後半頃からは週二回に増やした。しかし、これには無理があって出張中に山積する他業務を片づけるのに支障を来たし、資料調査報告をその都度、行うこともできなくなってしまった。

資料調査の起案時点では約二十日、合計四〇箇所を計画したが、途中で変更があり、最終的に調査を完了したのは次の通りである。

① 若松担当分

四月八日　横浜市旭区二俣川（首塚・六つ塚・吾妻鏡畠山重忠終焉の地・駕籠塚・清来寺（重忠に関する歌絵巻「夏野の露」）・鎌倉市（伝畠山重保墓塔）

四月三十日　深谷市教育委員会（共催依頼・借用折衝）・同岡部文化財整理室（岡部六弥太墓出土骨蔵器）

五月七日　埼玉県立文書館（史料の所在調査と畠山重忠に関する展示資料見学）

五月十四日　埼玉県立浦和図書館（錦絵「篠津原の戦い　畠山重忠と巴女」・平家物語）

五月二十一日　府中市郷土の森博物館（企画展「歴史の道を歩く　武蔵府中と鎌倉街道」出品資料）・大国魂神社（宝物庫展示資料）・葛飾区郷土と天文の博物館（共同展示内容打合せ）

六月四日　横浜市金沢区釜利谷（東光禅寺の伝重忠奉納馬具・重忠位牌）・金沢文庫（展示）・称名寺

六月十一日　秩父神社（秩父神社文書）・秩父市下吉田彦久保基正家（秩父家系・阿熊村彦久保系図）・秩父市下吉田金剛院（畠山重忠位牌・秩父武綱位牌）

六月十八日　小川町上古寺小久保芳夫家（畠山重慶位牌）・東秩父村御堂浄蓮寺（開基大河原神治太郎光興坐像）・小川町上古寺土峯山の伝畠山重忠墓

六月二十五日　埼玉県立熊谷図書館（源平盛衰記）

七月二日　神川町教育委員会文化財整理室（愛染遺跡出土遺物・安保氏館跡ＳＴ五出土遺物所在調査）・阿久原牧比定地・有氏神社・丹生神社

七月九日　美里町教育委員会（水殿瓦窯跡出土資料）

七月十五日　長瀞町本野上総持寺（丹党島田氏系図・塩谷正治氏所蔵重忠錦絵）・神川町教育委員会文化財収蔵庫（愛染遺跡・安保氏館出土遺物の熟覧と写真撮影）

七月二十九日　長瀞町本野上総持寺（塩谷正治氏所蔵重忠錦絵続き）・秩父市上蒔田椋神社・丹生神社・中蒔田椋神社

七月三十一日　千葉市立郷土博物館（千葉妙見大縁起絵巻・東氏妙見菩薩立像・千葉常胤坐像・赤糸縅大鎧・平将門射的図　※いずれも複製）

八月五日　入間市博物館（金子大系図・北条義時袖判書下・美君家忠賛並序）

八月七日　吉見町文化財センター（伝大串次郎重親骨蔵器）・吉見町大串大串次郎重親塔

八月十九日　熊谷市立図書館（重忠関係錦絵）

八月二十日　東秩父村御堂浄蓮寺（大河原神治太郎光興坐像借用折衝）

八月二十七日　熊谷市教育委員会江南文化財センター（円山遺跡出土

氏を改めて秩父平氏とした。葛飾区郷土と天文の博物館は創立以来、郷土の生んだ鎌倉武士である葛西清重を最優先の研究・展示テーマとしており、すでに企画展示とフォーラムを打っているので、一日の長があり、大いに啓発されるとともに準備過程でも数々の教示を受けることができたのは幸いであった。

ちなみに「その時代」をタイトルに付したのは、重忠と云う人物だけを対象とするのではなく、重忠を浮かび上がらせるためには時代背景を明らかにしていくという姿勢を示すとともに、重忠の直接資料でなくても、重忠の生きた時代を端的に示す資料であれば展示することができるというメリットによっている。

（二）企画展の構想

いかにして畠山重忠の一次資料の寡少性を克復するかが最大の課題となった。その手段として最初に考えたプランは次の通りである。

① 重忠の前史として秩父氏嫡流を展示する必要上、秩父氏発祥の地である秩父郡内の資料調査を進めて、新規資料を開拓すること。

② 二次史料としての『吾妻鏡』・『平治物語』・『平家物語』・『源平盛衰記』・『源平闘諍録』などの事前調査を行って、最適な写本・版本を借用すること。

③ 二次史料としての系図を重視し、最適なものを選び、借用または写真展示すること。

④ 展示に華やかさを加えるために絵画資料として最適なものを選び資料調査と借用交渉を行うこと。

⑤ 重忠が奉納したとされる寺宝・社宝を資料調査し、展示に適したものについて借用交渉すること。

⑥ 展示素材として考古資料を重視し、従来から知られていた重忠墓と出土骨蔵器を展示予定資料とするのは当然として、さらに重忠の生活を偲ぶために、「秩父氏の城館と寺院」の出土資料を展示候補資料とし、重忠の経済基盤としての「馬匹生産」、「鍛冶・鋳物」などの金属生産、永福寺建立の奉行人であった経緯から「瓦生産」を加えること。

⑦ 重忠だけでは資料が不足するので、重忠ゆかりの人物で関係資料が充実している人物を選び、展示することによって重忠の実像をさらに鮮明にするために役立てること。

（三）資料調査と借用交渉

嵐山史跡の博物館はかつて学芸部を置いて、歴史・考古・民俗・資料保存の四室に分け、学芸員定数が一二であったが、博物館施設の再編成によって大幅な定数減となり、学芸員の定数が常勤三名、非常勤（再雇用枠）一名となったため、学芸担当一本となり、すべての学芸員が展示・調査研究・普及事業・広報などの兼務をこなしている。また、土日には常勤学芸員が一名となるため、すべての学芸業務をカバーせざるを得ない状況にある。このため、企画展専従の学芸員を置くことは不可能であり、準備期間も前年度からとすることは困難な状況にある。したがって、実質的な資料調査は当該年度にこなさなければならず、本格的には年度当初の繁忙期が過ぎた五月の連休明けから九月末までのタイトな日程となっている。

こうした時間不足をカバーするために予算要求が終わり企画展の仮題目が決定した秋口から、指定休暇日に予備調査を行うこととし、新年度の五月にまで及んだ。もちろん公式な折衝はできないので、重忠に関する遺跡や展示公開されている資料の下見に限られるが、前者については展示用の写真パネルの材料を相当数得ることができた。

平成二十一年度企画展

「秩父平氏　畠山重忠とその時代」の試みについて

若松良一

はじめに

本稿は埼玉県立嵐山史跡の博物館で平成二十一年十二月五日から開催している企画展「秩父平氏　畠山重忠とその時代」の構想と準備過程、そして完成に至る全工程の記録と若干の新しい成果を展示担当者として報告し、さらに今回果たせなかったことを踏まえて、今後の課題を明らかにすることを目的として執筆するものである。執筆している現在は、開幕直後であり、入館者数は元より、各方面からの反響・批判について触れることは不可能なので、いわゆる実績報告とは異なるものであることを最初にお断りしておきたい。

一　展示構想と準備

（一）企画展に至る経緯

畠山重忠は鎌倉武士の代表的な存在であり、埼玉県の歴史上の人物として必ず取上げられる人物である。くわえて、埼玉県立嵐山史跡の博物館がその最後の居住地といわれる国指定史跡　比企の中世城館跡群　菅谷館内に所在することから、博物館にとっては避けては通れない研究テーマであり、当然、展示においても必要不可欠なテーマである。

博物館では平成九年のリニューアルオープン、そして平成十八年度の県立博物館施設の再編成を経て、名称を歴史資料館から嵐山史跡の博物館に変更し、展示内容も比企地方を中心とする原始古代から現在に至る考古・歴史・民俗から埼玉県の中世に特化し、考古・歴史系博物館に生まれ変わった。このため、展示室の冒頭である第一ケースを鎌倉武士のコーナーとし、畠山重忠を取上げて、その一部に重忠の活躍を示すための日本地図の大パネルを掲出し、展示資料として平沢寺所蔵の埼玉県指定文化財鋳造経筒、東京大学資料編纂所所蔵の源頼朝加判平盛時奉書複製、同平某書状案複製、銅拍子復原品、重忠が力石を担ぐ絵馬の複製などを展示してきた。

また、平成十五年度には時期を限って重忠のコーナー展示を開催し、常設展示資料に加えて埼玉県立博物館（当時の呼称）が所蔵する宝寿丸写しや赤糸縅大鎧複製に加えて、資料調査過程で撮影した重忠ゆかりの地の写真をパネルに仕立てて多数展示し、オールカラー一四頁の『畠山重忠』を発行して畠山重忠の普及に現在まで大きな役割を果たしてきた。

しかしながら、館所蔵の重忠関係資料はあまりに少なく、資料収集や基本資料の複製化も進んでいないので、現在までのところ、本格的に重忠を取上げるためには外部にある資料を借用展示する企画展しか道は残されていなかった。ところが、畠山重忠は四十二歳で北条氏に謀殺され、断絶したために、いわゆる家資料がなく、他家に伝存する一次資料も寡少なため、独立して重忠をテーマとするのは難題中の難題であった。

このため、河越氏や豊島氏などを含めた秩父氏という範疇で展示構成することを検討していた昨年度後半期に、葛飾区郷土と天文の博物館より秩父平氏で共同展示を立ち上げられないかという誘いがあり、資料の相互交換、広報の共有化、普及事業の相互乗り入れなどメリットが大きいので、職員会議で諮った上で、これを受諾し、展示名称を共同企画展「坂東平氏　畠山重忠とその時代」（仮称）とすることを決定した。葛飾では「坂東平氏　葛西清重とその時代」（仮称）としたが、のちに坂東平

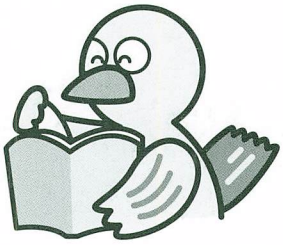
埼玉県立史跡の博物館紀要
第 4 号

平成22年３月10日　発行

発行　埼玉県立さきたま史跡の博物館
〒361-0025　埼玉県行田市大字埼玉4834
TEL048-559-1111

埼玉県立嵐山史跡の博物館
〒355-0221　埼玉県比企郡嵐山町大字菅谷757
TEL0493-62-5652

印刷　朝日印刷工業株式会社
〒371-0846　群馬県前橋市元総社町67



埼玉県のマスコット
コバトン